

SD

9907

Monthly Journal of Art and Architecture

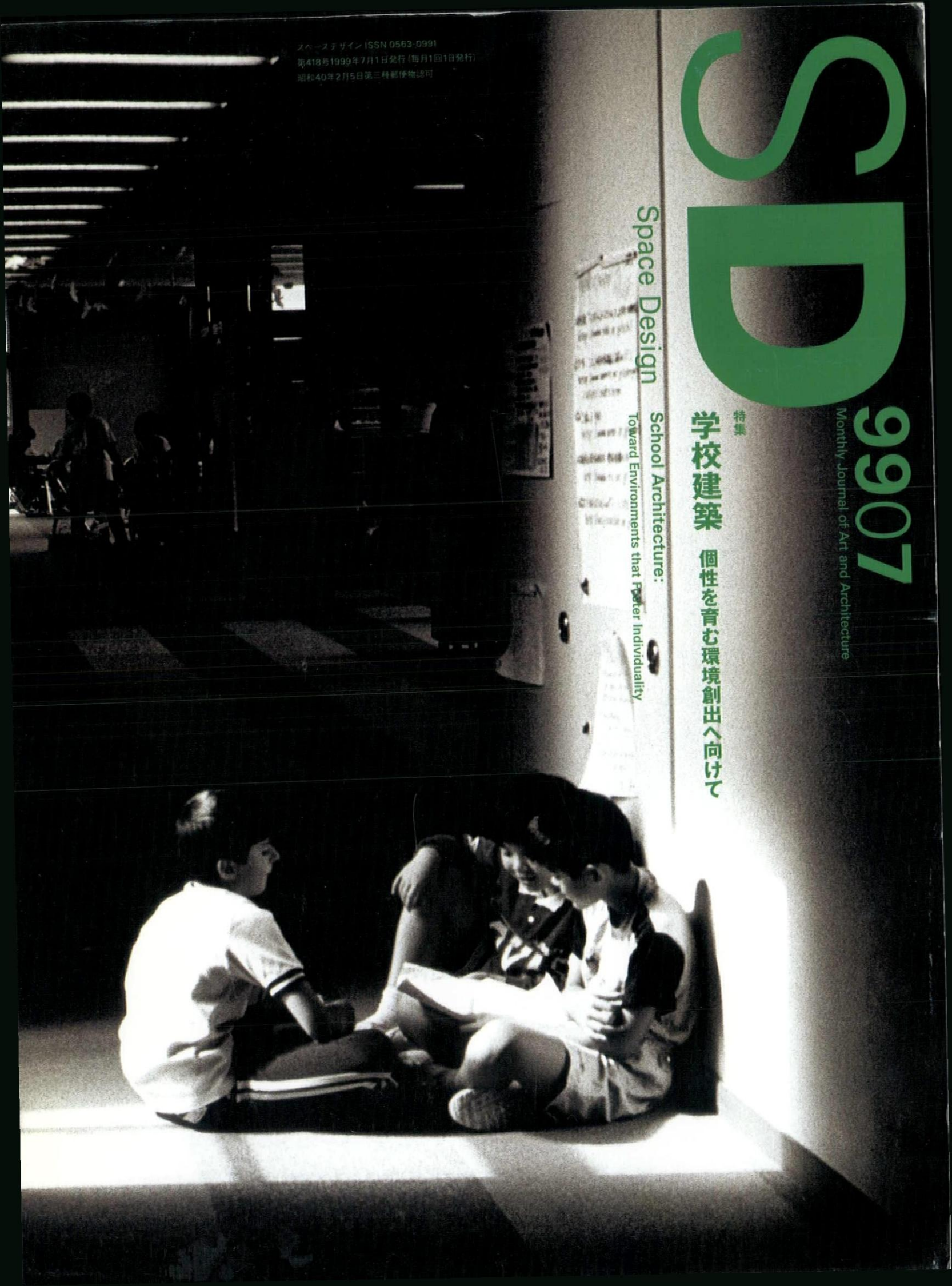
特集

学校建築 個性を育む環境創出へ向けて

Space Design

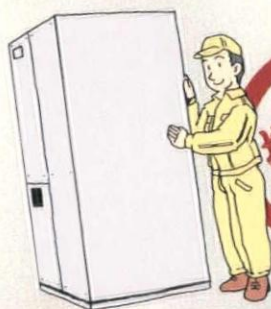
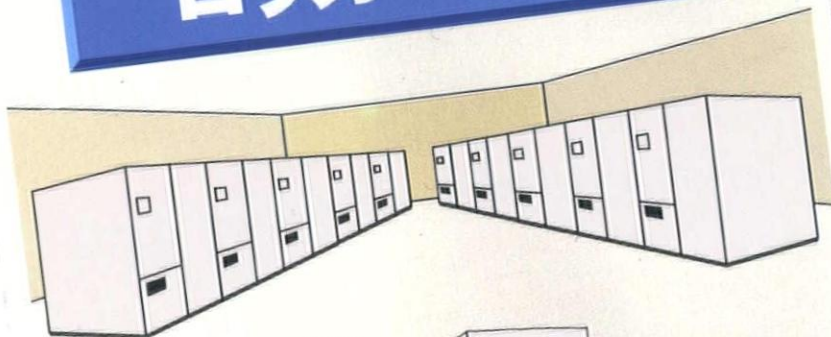
School Architecture:
Toward Environments that Foster Individuality

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第418号1999年7月1日発行(毎月1回1日発行)
昭和40年2月5日第三種郵便物認可





スーパーアロエースの ロッカー設置



ビル空調機リニューアル
合理化委員会の評決です。



YAZAKIの吸収冷温水機スーパーアロエースは、コンパクトなユニット設置タイプです。場所を取らず、ロッカーのように整然と並べて設置できます。エレベーターや階段から容易に搬入でき、工期の大幅な短縮が可能。ビル空調機のリニューアルに最適です。

ユニット形冷温水機のパイオニア

ロッカー設置に最適な スーパーアロエース

矢崎総業株式会社

札幌支社 011 (852) 2914
名古屋支社 052 (833) 8415
中国支社 082 (923) 2115

仙台支社 022 (284) 9115
北陸支社 0764 (41) 6516
四国支社 087 (833) 3336

東京支社 03 (3298) 3140
大阪支社 06 (6458) 4825
九州支社 092 (411) 4835

Y-CITYワールドヘッドquarters: 〒410-1194 静岡県裾野市御宿1500 TEL0559(65)3002
空調機器事業部: 〒435-8575 静岡県浜松市子安町1370 TEL053(461)5112



都市の顔をつくる仕事。

都市の詩情をスクリーンのように映し出すカーテンウォール。
その多彩な表情のひとつひとつに私たちの技術が活かされています。
不二サッシは、都市景観を彩る、新しい建築文化
コミュニケーションスペースを創造してまいります。

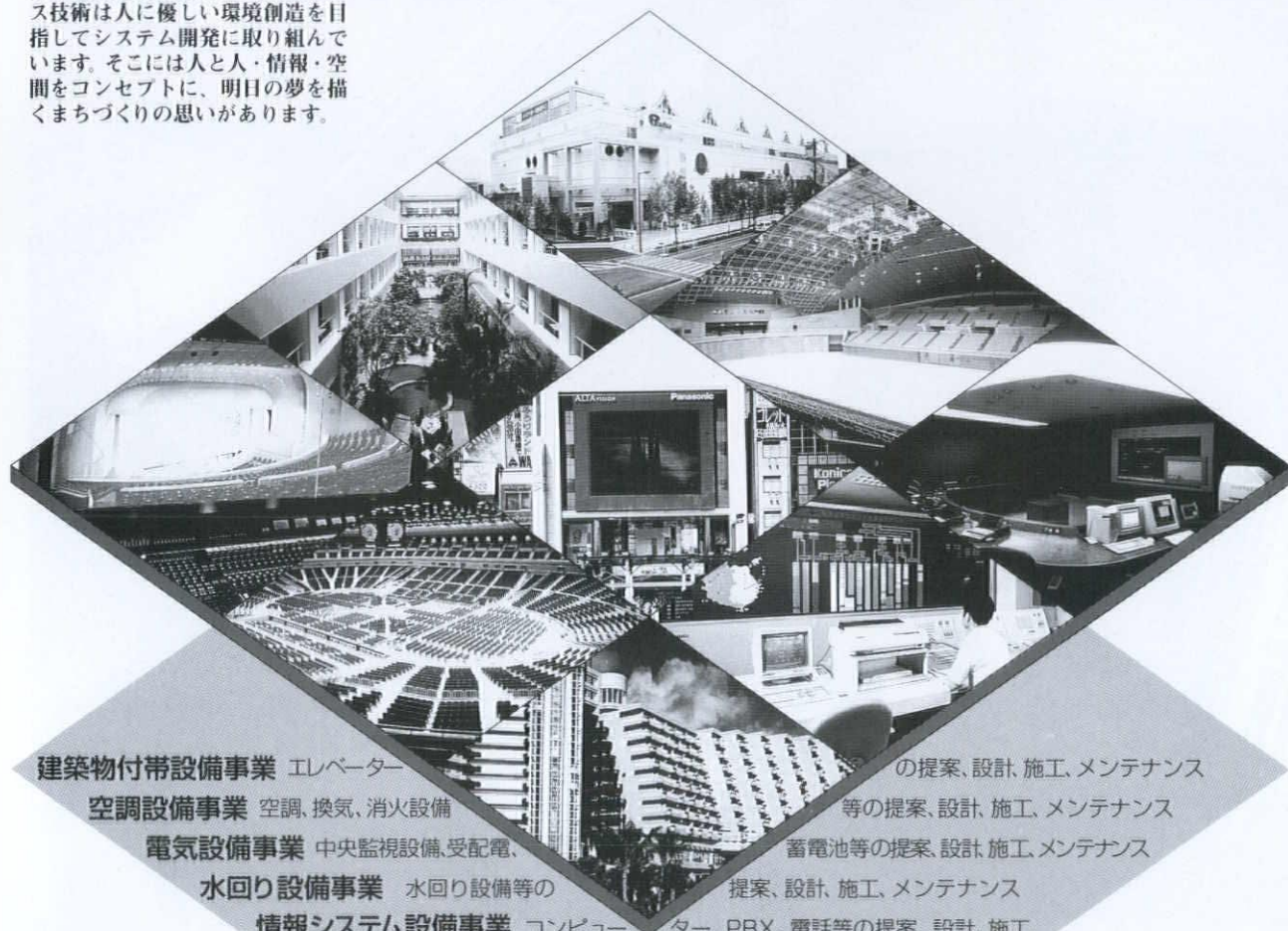


本社 〒211-0012 川崎市中原区中丸子135 TEL.044-422-1111
東京本部 〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町9-8 TEL.03-5458-7024

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター

空調設備事業 空調、換気、消火設備

電気設備事業 中央監視設備、受配電、

水回り設備事業 水回り設備等の

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。



松下電器産業株式会社

建設システム営業本部 ☎03-5460-2931

北海道支店 ☎011-207-7722

東北支店 ☎022-711-3551

新潟支店 ☎025-246-1031

関東支店 ☎0286-37-2241

神奈川支店 ☎045-651-5051

建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010

長野支店 ☎0262-26-3990

北陸支店 ☎0762-23-1121

静岡支店 ☎054-247-5155

建設システム営業本部関西支店 ☎06-6949-2111

中国支店 ☎082-247-5272

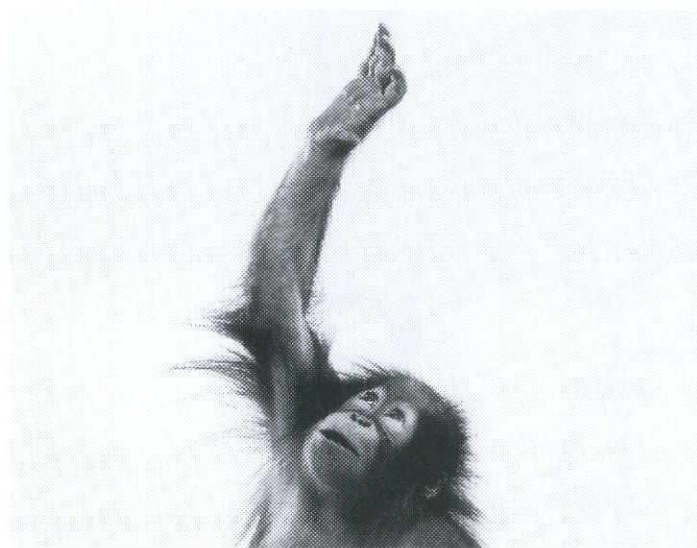
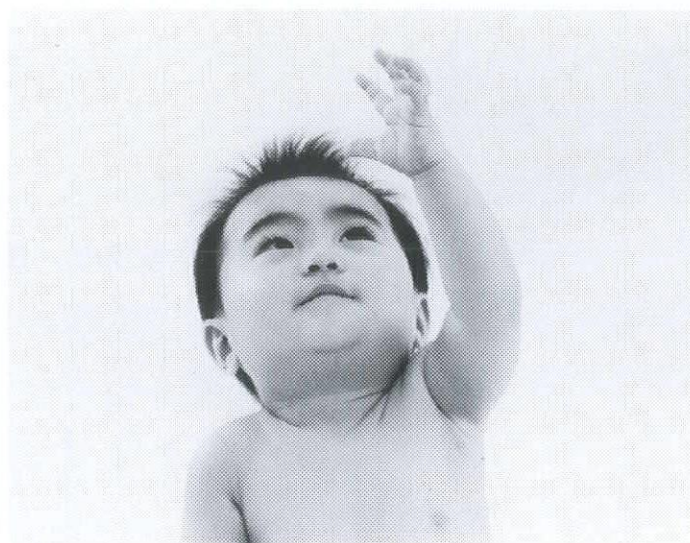
四国支店 ☎0878-26-1711

九州支店 ☎092-431-1100

沖縄支店 ☎098-869-2926

AV & CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM



大切なのは、 何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TNet 03(4431)2111

雨は完封しますが、風はシャットアウトしません。



ドームと呼ぶべきか、傘と呼ぶべきか、はたまたパラソルか…。

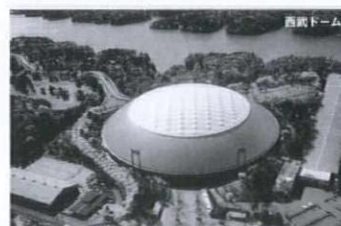
野球ファンには馴染みの西武ドーム(旧西武球場)に2年がかりで「屋根」を架ける工事が、予定通り終了しました。1年目にドーナツ状の外構、2年目にドーム型の膜屋根。シーズンオフだけを使って無事完成に至り、一同ホッと胸をなで下ろしています。

名前こそ東京や福岡と同じく「ドーム」と付いていますが、西武ドームはこれまでのドームとは全く違うつくりです。まず屋根全体が浮いています。まわりに壁がありません。外構をV字柱で持ち上げたその姿は、ドームというより「球場が傘をさしている」といったおもむきです。

そこには狭山丘陵の爽やかな風がそのまま吹き抜けます。だからそこには空調設備がありません。よく光を通す膜材を使っているので、昼間は照明も要りません。ドームの中が世界で初めて「屋外」になったのです。

また、既存の球場を生かしたことで、本当の意味で周りの環境との共生が実現できたとも感じています。なぜですって?そりゃあ何てったって資源もエネルギーも、建設コストまでも「セーブ」できたんですから…。

知恵を絞ってつくった晴れの舞台。選手の皆様、ここで一日も早く、一日も長く活躍してください。そして観客の皆様、ここで一日でも多く、いい時間を過ごしてください。…以上、わたしたち鹿島の仕事の一部を、ここにご報告いたします。



西武ドーム
屋根をV字柱で支え自然風を取り入れる「自然環境共生ドーム」
膜材の透光性を最大限に生かし昼間は照明不要の明るい空間を実現

100年をつくる会社

in 鹿島

東京都港区元赤坂1-2-7 〒107-8388
<http://www.kajima.co.jp/>

四季会宴

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢
ホテル 鹿島ノ森

ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:

ホテル 鹿島ノ森 予約係

☎ 03(3478)6220

現地 ☎ 0267(42)3535(代)

FAX: 0267(42)5335



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000〜 ツイン¥25,000〜) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル

HOTEL
East
21
T O K Y O

地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅〜ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

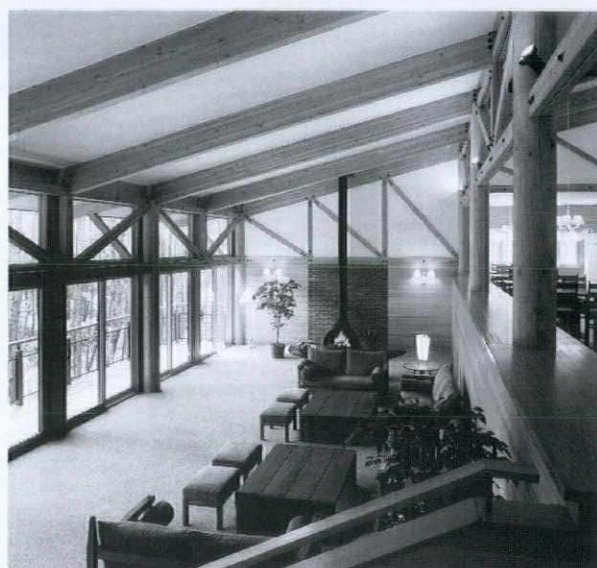
ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775



大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興夢科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

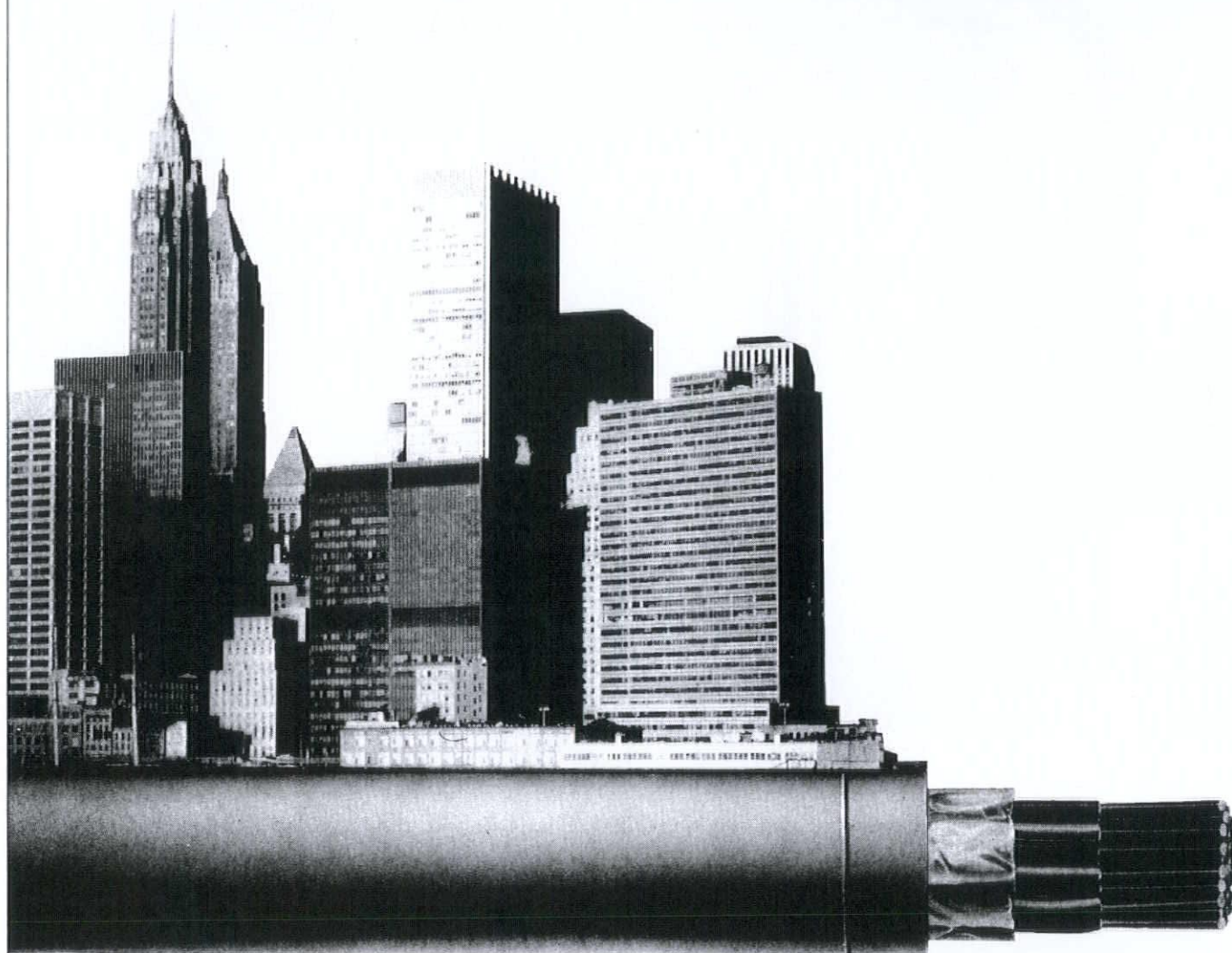
本 社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本 社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06)6762-5661 FAX(06)6762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

ビルにも神経があります。



古いビルも最新のビルも確実な電気工事で支えています

ビルにとって電気系統の働きは、人体にはりめぐらされた神経の働きに似ています。外部の情報を収集したり、整理して送るなど、まさにコントローラーの役目をもっているからです。とくにこれからの高層ビルは、複雑な建築技術が必要なだけに、ビルの中枢神経といわれる電気系統の安全性、合理性、経済性などは、ビルがより良く機能するうえで欠かすことのできない条件です。私ども弘電社は1本の配線にも、細心の注意を払って確実な設計、施工を行なっています。

電気工事のパイオニア



株式会社 弘電社

東京都中央区銀座5-11-10
TEL.03(3542)5111

より快適な
水環境を
めざして。



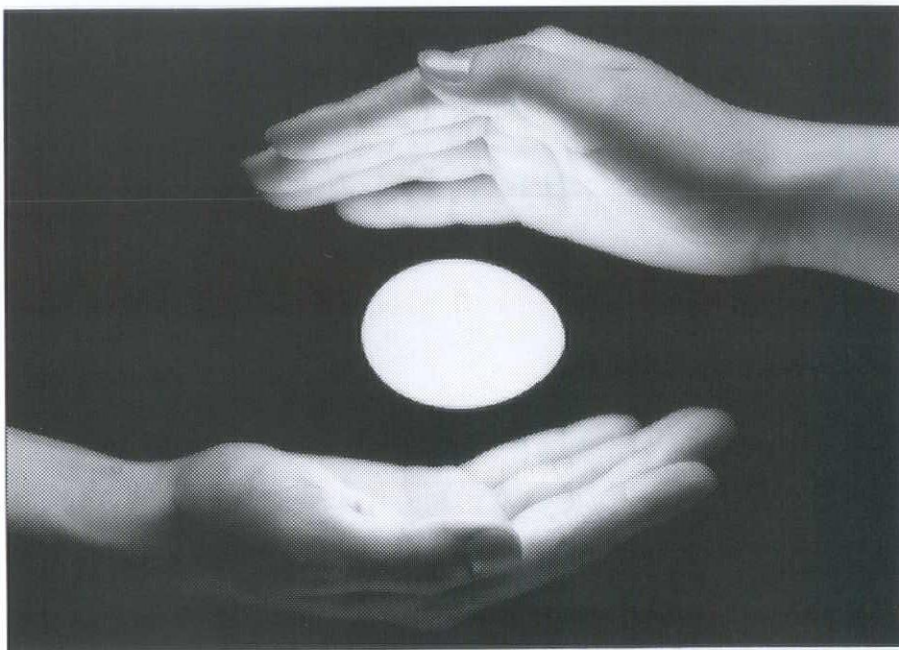
文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋 事業内容/給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

設備は手にとって選べません。 だから……



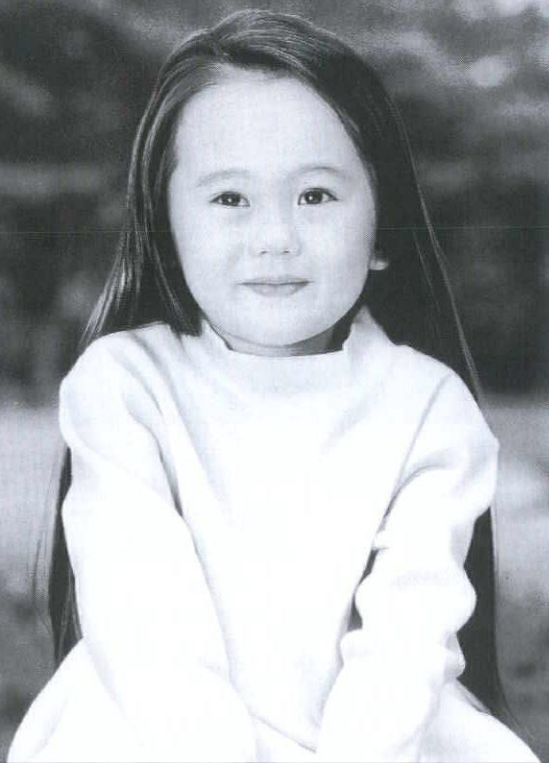
大切なのは、技術の信頼性。
豊富な実績と、
そのなかで培われた
確かなノウハウです。
私たち三建設備工業は、
求められる環境を
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

三建設備工業株式会社

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-35-8 TEL.03-3667-3431

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

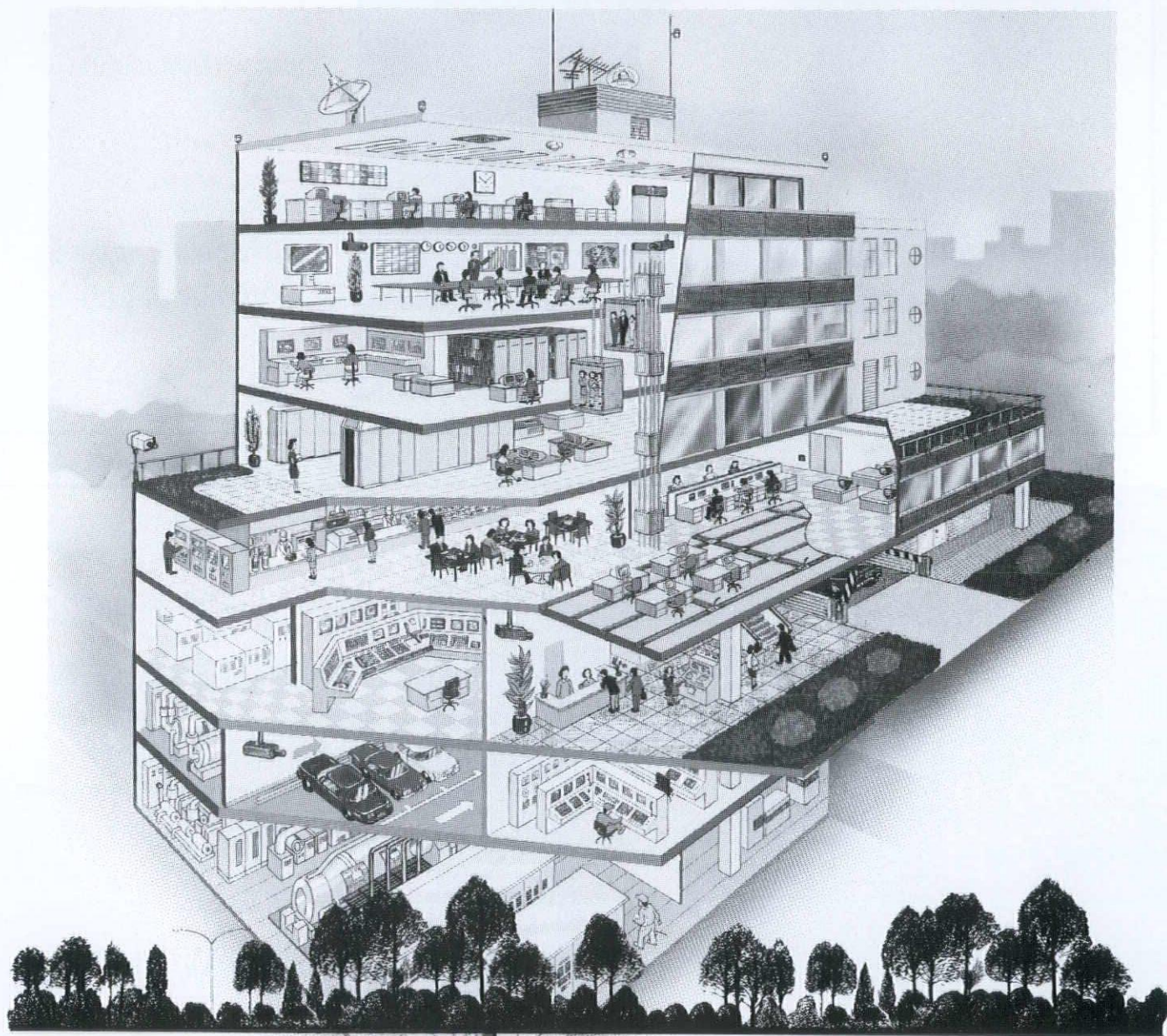
Always With You.





快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、 豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事 ■ 外線工事

東光電気工事株式会社

本社 〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5 TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13

電話：03-5561-2550

振替：00160-2-180883

Home Page Address：

http://www.kajima-publishing.co.jp/group/publish/index.htm

年間定期購読料

26,000円（特別定価号+消費税、送料込み）

SD
Space Design

SDバックナンバー常備店

東京

八重洲ブックセンター 03-8231-8203

三省堂本店（神田） 03-3233-3314

書泉ブックマート 03-3294-0011

紀伊国屋本店 03-3354-0131

大盛堂書店 03-3463-0511

大阪

旭屋書店本店 99-999-9999

柳々堂 06-443-0167

札幌／旭屋書店 011-241-3007

横浜／有隣堂本店 045-261-1231

京都／大福堂書店 075-231-3036

大学生協内書店

東北工業大学 東京工業大学

法政大学工学部 早稲田大学理工学部

関東学院大学

9708 R.ヴェンチュリ+D.スコット・ブラウン 2400円
日本での処女作〈メルバルク日光霧降〉を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他。[岐阜県営北方住宅プロジェクト] 該＝磯崎新

9709 駅空間の新曲線 2000円
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文＝宮林敬幸、齋庭孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司
写真＝大野繁

9710 ガラス建築 3000円
光学的、構造的な特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川憲英、他

9711 隈研吾 2800円
ポストモダン以降の建築における言説を続ける隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。彫雪公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝横文彦×隈研吾

9712 SDレビュー1997 2000円
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重一事務所+佐久間達也+横爪宏直+重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤雅、他。[光と色が彩る空間——チェコのガラスアーティストたち] 写真＝鈴木豊

9801 SDレビューの15年 2800円
これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出版作、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文＝横文彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会＝元倉真琴+鈴木了二+栗生明+小嶋一浩

9802 都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築 2200円
スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島純代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝篠原一男×ヘルツォーク&ド・ムロン

9803 表層革命再考：チェコ・キュビズム建築 2000円
現存するブラハのキュビズム建築を掘り下ろし写真により紹介する。撮影＝鈴木豊。[香山壽夫のドローイングと空間] 文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木俊、青木淳

9804 次世代のマルチ・アーキテクトたち 2000円
30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンショナル・リズ、みかんぐみ、他。[デスクトップ・コミュニティ]

9805 空間演出の最前線 2000円
建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村純平、新宮智、他。[カーとリベラの家] ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン

9806 風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦 3000円
風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木康二、ブレイスメディア、三谷 徹、登坂 誠、他。



9807 シーラカンス
彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品＝吉備高原小学校、大阪市水上消防署、(仮称)外ヶ岡交流拠点施設、他。論文＝原広司、土居義兵、インタビュー＝山本理顕
2600円



9808 光のデザイン・ヴォキャブラリー：LPAの仕事1990-1998
LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。文＝磯崎新、面出眞
2500円



9809 ディーターが創る風景：細部に宿る美と技巧
建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩/Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。
2300円



9810 オフィス環境の近未来
最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文＝仲隆介、他。
[京町屋再生の手法——時を超えて生きる空間を求めて]
2000円



9811 「白」と「透明」の詩：モダンデザインの傑作135
白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートルード・ヴェースガルト、柳宗理、他。
3000円



9812 SDレビュー1998
第17回SDレビュー誌上発表
小特集4題：[シャルロット・ベリアン] [「ハブニング」展] [アールの空間構成] [メタルシート・ストラクチャーによる連続歩道の近作]
2000円



9901 環境共生の現在
プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。エムシャーパーク、東京ガス(アースポート)、世田谷区環境共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。
2700円



9902 ダッチ・モデル：建築・都市・ランドスケープ
オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって探る。OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼン、メカノ、ケース・クリスティアーンズ、他。
2000円



9903 木の空間
木素材による快適建築
次世代スタンダードを示唆する木の使われ方を紹介する。趙海光、インテンショナル・リズ、河西立雄、葛西潔、みかんぐみ、H DESIGN、他。
2000円



9904 ガウディの夢 21世紀のジュジョールの夢
ジュジョールの通した作品を、写真とオリジナル・ドローイングで紹介する。撮影＝鈴木久雄、文＝丹下敬明、他。[ドナルド・ジャッド：空間と認識のコンシステンシー]
2000円



9905 模索するマテリアリティ：素材の進化とデザインの可能性
国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」、「技術」を分析する。素材史年表、素材地図1999、他。
2500円



9906 小川晋一
Transbody / Super traffic
小川晋一の13年間の仕事を、実作、計画案、展覧会への出品作品を通して紹介する。作品＝キュビストの家、ミニマリストの家、他。文＝嶋沢隆、岡河青、小川晋一、他。
2000円

SDレビュー1999

第18回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Space Design Review 1999

募集要項

〔提出物〕

プレゼンテーション:

1. 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等特に制約はなく、各自選択すること。表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査に当たっての主要な評価の対象とはされない。

2. プロジェクト名、建築用途、施主名(事業主体名)、工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、建築面積、延床面積。

3. 400字以内の設計趣旨文(省略してもよい)

以上をA3判用紙(420×297mm)4枚以内にまとめたもの。

の。パネル化は不可(クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します)。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。2、3は添付書類に含めず1と共にA3判用紙に記述することに注意。

添付書類:

プロジェクト名、応募者(=設計者)名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所(以上、組織の場合は、その担当者について明記)、応募者への連絡先(自宅か勤務先か明記のうえ、郵便番号、住所、電話、FAX番号)、共同設計者名、設計者略歴(入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします)。

以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

〔応募の受付〕

・開始 1999年6月22日(火)

・締切 6月30日(水)

郵送または持参のこと。(持参の場合は平日の午前11時から午後5時まで。郵送は当日消印有効)受付後、受領通知を送付いたします。7月6日までに通知が届かない時はSD編集部へお問い合わせ下さい。

〔提出先〕

〒107-8345 東京都港区赤坂6-5-13

鹿島出版会SD編集部 SDレビュー係

TEL 03-5561-2555 FAX 03-5561-2565

(地下鉄千代田線赤坂駅より徒歩5分鹿島建設赤坂別館4F)

〔結果通知〕

審査員により15点前後が選抜された後、入選者のみに7月下旬までに書類にて通知する。

〔提出物の返却〕

提出物(図面、添付書類等)は、1999年8月17日(火)から9月24日(金)までの平日午前11時から正午まで、午後1時から午後5時までの間に、鹿島出版会SD編集部まで直接受取りに来られた場合に限り、返却します。

但し、梱包材、クリアファイルなどはお返しできません。

締切
間近!

SD編集部アルバイト募集

建築・都市・芸術の
新鮮な情報を送り続ける、
月刊誌SDの
アルバイトを募集いたします。
編集業務に情熱を持っている方歓迎。

〔職種〕

SD誌に関わる業務

(年齢、男女を問いませんが、経験者なお可)

〔待遇〕

経験、年齢などを考慮の上、面談にて決定

〔応募方法〕

履歴書(写真貼付)に必要事項を明記の上、下記へ郵送ください。
追って面接日をご連絡いたします。

なお、応募書類は一切返却いたしません。

〔送付先〕

〒107-8345 東京都港区赤坂6-5-13

鹿島出版会SD編集部宛

tel: 03-5561-2555

SD
Space Design

株式会社 鹿島出版会

SD

Space Design

編集長：相川幸二
副編集長：高木伸哉
編集スタッフ：
寺田真理子 大野由美
飯塚りえ 松口 龍
川嶋 勝
制作協力：久世 健
株式会社シンクス
発行人：平田輪郎
編集人：長谷川愛子
発行所：鹿島出版会
107-8345
東京都港区赤坂6丁目5番13号

電話：
03-5561-2551 営業
03-5561-2555 編集
FAX：
03-5561-2561 営業
03-5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
URL：
http://www.kajima-publishing.co.jp

005

特集

学校建築

個性を育む環境創出へ向けて

監修：上野 淳十 東京都立大学上野研究室（倉斗綾子、力安 拓）

006

新しい世紀の新しい学校像を求めて
上野 淳

086

稲城市立若葉台小学校

090

東京都立
晴海総合高等学校

008

21世紀の学校のための17章

094

浪合村立浪合小・中学校

100

三春町立桜中学校

1. 「教える学校」から「学ぶ環境としての学校」へ
2. コンピュータ学習環境の充実
3. ラーニングセンターとしての学校
4. 生活環境としての学校
5. 子供のスケールと学校空間
6. 空間の連続性 イギリスの学校 1
7. エコスクール＝地球・地域環境と共生する学校
8. 小規模学校の空間構成 イギリスの学校 2
9. 実習スペースの再編成
10. 町の文教センターとしての学校 イギリスの学校 3
11. 学校複合化とコミュニティスクールへの道
12. 高齢者と児童・生徒が共生する学校
13. Schools within a School アメリカの学校 1
14. ハウス制の学校 アメリカの学校 2
15. 教科教室型編成の中学校計画
16. 総合化高校の計画
17. ユニットプランの編成 アメリカの学校 3

041

写真構成
学校10選

058

岩出山町立
岩出山中学校

064

育英学院サレジオ
小・中学校

070

台東区立上野小学校

074

吉備高原小学校

078

新宿区立落合中学校

082

つくば市立東小学校

105

座談会：学校が変わる、建築が変わる
司会＝上野 淳
瀧 昭代×佐藤 学×船越 徹×小嶋一浩

113

小学校の一日

121

デザイン・マニュアル
学校の単位空間の規模・寸法の求め方

129

デザイン・ヒント集

アプローチ／小さな昇降口／小空間・アルコーブ／
テラス・ベランダ・ウッドデッキ／階段・段差／
中庭／吹き抜け／ロフト／
水廻り／図書コーナー／メディア／
コンピュータ／教師コーナー

137

連載：エントロピーの森 都市のインフラストラクチャー
写真＝ハイナー・シリグ 文＝山形浩生

146

連載 カルチャー・カフェ：
今月の舞踏 英国ロイヤルバレエ団「マノン」 多木浩二

148

連載 カルチャー・カフェ：
今月の演劇 プレヒト「セツアンの善人」 原 研哉

150

ニュース：アレッシィの商品開発セオリー
川上典子

151

ニュース：市民参加型デザインの実験

153

書評

154

新刊紹介

155

お知らせ

印刷・製本：凸版印刷株式会社
174-0056 東京都板橋区志村1丁目11番1号
電話：03-3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・大坂屋・太洋社・栗田出版販売・
誠光堂・鈴木書店・西村書店・中央社

特別定価：2,500円〔本体2,381円〕
年間直接購読料：26,000円
特別定価号＋送料込み

表紙：つくば市立東小学校
デザイン：山口デザイン事務所／山口信博＋狩野幸洋

005

Special Feature:

School Architecture:

Toward Environments that Foster Individuality

Supervision:

Jun Ueno + Tokyo Metropolitan University Ueno Laboratory (Ryoko Kurakazu, Taku Rikiyasu)

006

Toward New School Images for the New Century

008

Seventeen Texts on Schools for
the Twenty-first Century

1. From "Schools for Teaching"
to "Schools as Environments for Learning"
2. Computerization of the Learning Environment
3. Schools as Learning Centers
4. School as Living Environments
5. The Child's Scale and School Space
6. Continuity of Space: British Schools 1
7. Eco-school: School Symbiosis
with the Global and Community Environment
8. Structuring Space for Small-scale Schools:
British Schools 2
9. Reorganization of Practical Subjects Workspace
10. School as a Town Educational Center:
British Schools 3
11. School-community Facilities Complex and
the Path to Community Schools
12. Schools for Symbiosis of Seniors and
School Children
13. Schools within a School: U.S. Schools 1
14. "House"-formula Schools: U.S. Schools 2
15. Plan for Junior High Departmentalized
Classroom System
16. Plan for Comprehensive Senior High Schools
17. Unit Plan Organization: U.S. Schools 3

041

Portraits of Ten Selected Schools

058

Iwadeyama
Junior High School
(Miyagi)

064

Ikuei Gakuin Salesian
Elementary and
Junior High Schools
(Tokyo)

070

Taito Ward Ueno
Elementary School
(Tokyo)

078

Shinjuku Ward Ochiai
Junior High School
(Tokyo)

086

Inagi Wakabadai
Elementary School
(Tokyo)

094

Namiai
Elementary and
Junior High Schools
(Nagano)

105

Round-table Discussion
"Schools Change, Architecture Changes" Jun Ueno
Akiyo Tamaru, Manabu Sato, Tohru Funakoshi,
and Kazuhiro Kojima

113

A Day in an Elementary School

121

Design Manual:
How to Determine Scale/Unit Measures for
School Space

129

Design Hint Collection

Approaches, Small Entrances,
 Small Space: Alcoves,
 Terraces, Verandas, and Wooden Decks,
 Stairways and Split Levels, Courtyards, Atrium,
 Lofts, Water Supply and Drainage,
 Libraries, Media Facilities, Computers,
 Teachers' Corners

074

Kibi-kogen
Elementary School
(Okayama)

082

Tsukuba-Higashi
Elementary School
(Ibaraki)

090

Harumi Sogo
Senior High School
(Fukushima)

100

Miharu Sakura
Junior High School
(Fukushima)

137

The Entropic Forest: Urban Infrastructure 7
Photo: Heiner Schilling Text: Hiroo Yamagata

146

Culture Cafe: This Month: Dance,
The Royal Ballet "Manon" Koji Taki

148

Culture Cafe: This Month: Play,
Brecht "The Good Person of Sezuán" Kenya Hara

150

News: Theories of Alessi's Product Development
Noriko Kawakami

151

News: The Realities of Citizen Participation in Design

153

Book Review

154

Book Information

155

Announcement

Published by
 Kajima Institute Publishing Co., Ltd.

6-5-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan
 TEL: 03-5561-2551 [Management], 03-5561-2555 [Editing]
 FAX: 03-5561-2561 [Management], 03-5561-2565 [Editing]
 TELEX: 02422467 KAJIMA J
 URL: <http://www.kajima-publishing.co.jp>

Printed in Japan

This Copy: ¥2,500
 ¥30,000 a year
 ¥50,000 two years

Order Form: Page 164

Cover: Tsukuba-Higashi Elementary School (Ibaraki)
 Design: Nobuhiro Yamaguchi / Yamaguchi Design Office

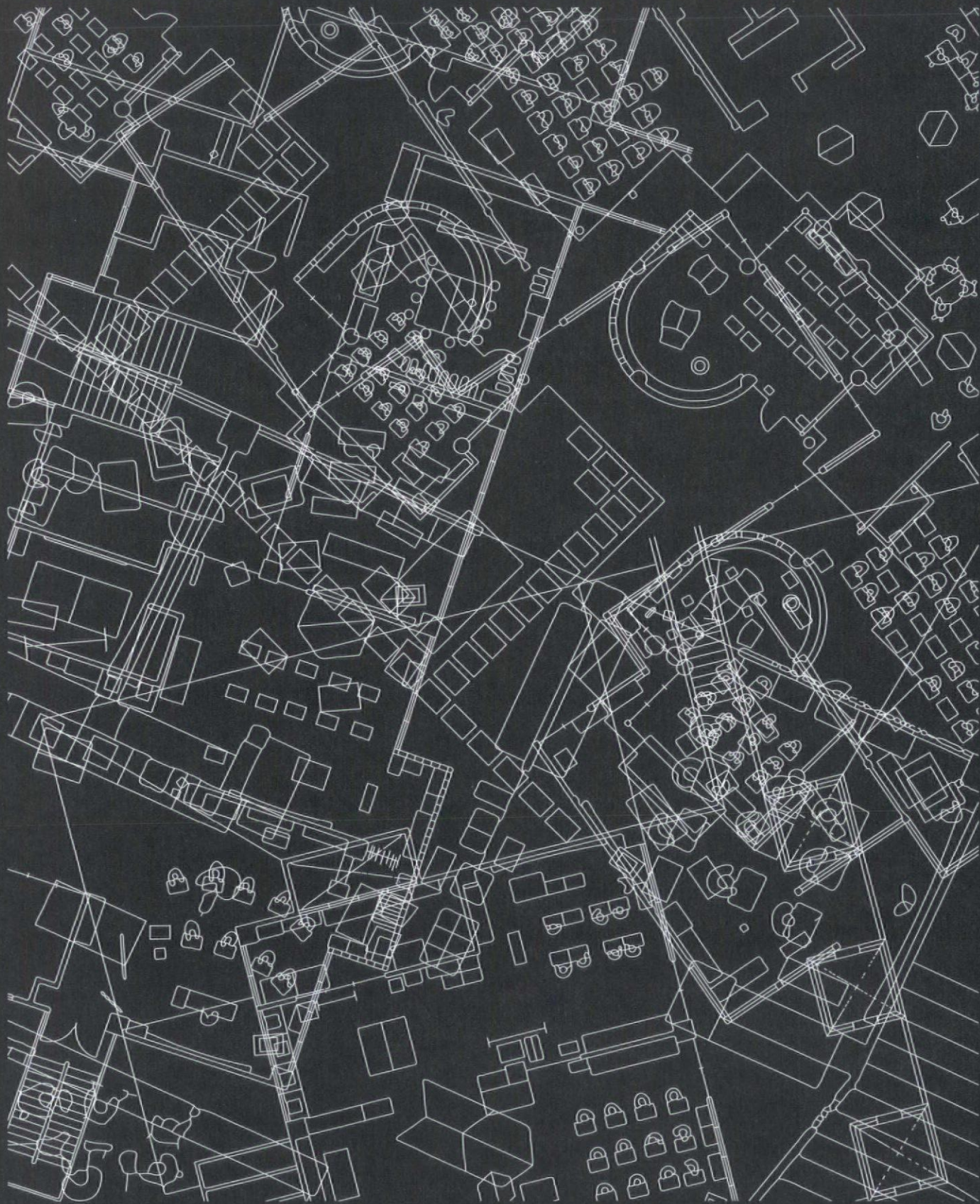
学校建築

個性を育む環境創出へ向けて

School Architecture:

Toward Environments that Foster Individuality

監修：上野 淳十 東京都立大学上野研究室（倉斗綾子、力安 拓）



新しい世紀の新しい学校像を求めて

上野 淳

学校施設のストックとその行方

1998年度現在、全国には2万4295校の公立小学校があり、同中学校の数は1万1236校である。当然のことながら最も数が多い地域公共施設である。児童・生徒数減少が伝えられているが、学校数の減少はそれほど顕在化しておらず、地域社会における学校の数・密度は現状程度では落ち着くのではないかとみられている。

この建築ストックのうち、非木造建築（そのほとんどがRC造）のものは合計で約1億3千万㎡に及んでいる。膨大な建築ストックである。文部省が公表している資料によってこの経年別の内訳をみると、建築後30年以上を経過している建物面積が約18%、同20年以上を経過している建物面積が約39%となっている。すなわち、築後20年を超える学校建築のストックが過半に達していることになるが、これらにこのまま手を着けずに放置すると、10年後にはそのまま築後30年を超えるストックとなる。現時点での築後30年の校舎とは、昭和30年代から40年代にかけての児童・生徒数急増期に急いで建てられたものであり、少なくとも構造的には優良なものとはいえない。事実、文部省は現時点で築後30年以上のものには改築が、20年以上のものには大規模改築または構造的補強が必要として将来計画を立てようとしている。来世紀初頭には、物理的な意味に限っても、学校施設大改造事業が愁眉の課題になると思われる。

学校に求められるパラダイムのシフト

こうした膨大な学校施設のストックが、仮に構造的には健全であるか、または多少の構造補強で乗り切っていけるとしたら、来世紀の学校として使用に耐えていけるだろうか。残念ながら答えは否定的にならざるを得ない。学校に求められている基本的な理念が、現在大きく転換しようとしているからである。明治以来営々と築いてきた「教室と廊下だけから

成り立っている校舎」は、どう考えてもこうしたパラダイム・シフトに追随していけそうにないと思われるのである。

今日の学校に求められているパラダイム・シフトとは何か。それは次の3点に集約されよう。

1. 教える学校から学ぶ環境としての学校へ
2. 閉ざされた学校から地域と共にある学校へ
3. 収容施設としての学校から生活環境としての学校へ

以下にそれぞれの趣旨を要約してみたい。

学ぶ環境としての学校へ

20世紀の学校の姿とは、定められた知識・技能を効率よく間違いなく児童・生徒に詰め込んでいく機関であった。そこに必要とされるものは教え込む場としての「教場＝教室」であり、この閉ざされた空間を羅列していくことが学校の姿であったといえる。この教え込み型の教育が工業化社会と経済的繁栄を日本にもたらしてきたとも言えるが、こうした営為を来世紀社会でも反省なく続けていけるか。答えは明らかに否である。

爆発的に増殖を続ける知識や情報の社会において、一定の知識を詰め込むことだけに終始してられるか。オリジナリティや個性に富む思想や技術が求められるこれからの社会において、皆が均質的になることを強いられた「学校教育」がどれほど阻害要因になっているか。今、学校を取り巻く重い閉塞感がこれらに無言の答えを示している。学ぶ環境としての学校への脱皮が必要である。閉鎖的な教室を開き、学習者の興味・関心ががまます拡がっていく環境を構築していく必要がある。ラーニングセンターとしての学校、コンピュータ学習環境に満ちた学校。これが来世紀の学校の姿であろう。むしろ、定型的・一斉的な授業が行いにくい環境を作り出していく位の覚悟がないと学校改革もおぼつかないと考えられる。こうした意味で、今次の中教審が

「自ら学ぶ力」を強調し、2002年からの新学習指導要領が「総合的な学習」の時間を創設したことは、象徴的な出来事であったといえる。

地域社会とともにある学校へ

現在の学校は、地域社会に閉ざされた聖域としての性格が濃い。戦後、この閉鎖性が徐々に高じてきているのである。その背景や要因に詳しく触れている余裕がないが、物理的な環境としても、重く無粋な門と塀で閉ざされた姿は、何か邪魔者を追い返す収容所のそれに似ている。数年前に起こったある公立高校での「校門圧死事件」はそれを象徴した出来事であったと思返される。

学校が地域社会に閉鎖的なままの聖域として生き残っていけるかどうか。これも答えは否である。生涯学習社会において、そしてまた高齢社会において、学校が地域社会の中心的な役割を果たしていくことが求められている。コミュニティ意識・活動の上で中心的な役割を果たす機関があるとすればそれは「学校」しかない、ということも衆目の一致するところである。

こうした重い要請に既成の学校は応えていけるか。その答えはともかく、例えば今次の中教審は、学校の自主性・自律性の確立を強く求めており、地域社会の実状やニーズに合わせて各学校が特色ある教育活動を展開するよう促している。地域住民の学校運営への参画も重要なテーマとして取り上げられており、学校評議員制度の設置なども提案されている。さらに、表だって取り上げられはしなかったが、学習者の側に（公立小・中学校といえども）学校選択の自由を与えてはどうかとの見解も根強い。こうなると、画一的で閉鎖的な学校が全国に蔓延する姿はまったく時代の要請にそぐわないものであることがわかってくる。学校がそれぞれの個性を持ち、その個性に対して地域社会のチェック機構が機能する。そして、多角的なコミュニティ活動を呼び

起こす。これが来世紀の姿であると言える。

かつて、千葉市の小学校で本当の意味での門と塀の全くない学校を試みた。この物理的な意味での開かれた学校が、やがて伸びやかで広範な住民の学校参加を促し、地域社会と共に歩む学校に成長したことは、未来を予感させる象徴的な出来事であったと思う。

生活空間としての学校へ

卑近な例を取り上げると、例えば、学校で児童・生徒はどのようにして喉の渇きを癒しているだろうか。建築家の皆さんは想像したことがあるだろうか。廊下の傍らに設けられた人研流しの水栓。蛇口が回転式のものである。この蛇口を上向きにして、蛇口に口を付けるようにして児童・生徒は水を飲む。当たり前のことだと思われるだろうか。

例えば、学校のトイレはどうだろうか。ウエット仕上げの床。いつもじめじめしている床でサンダルに履き替え、しゃがみ式の便器で止むを得ず用を足す。薄暗く、時にはうっすらと異臭を放つトイレである。近年、学校のトイレを怖がったり、用を足せない児童・生徒が増えているのである。家庭のトイレや一般的な公共施設ともあまりにもかけ離れた貧しさである。

例えば中学校の休み時間。生徒達は何処で休息し、何処でくつろいでいるか。答えは簡単である。そのような場はない。狭い教室で、または、無味乾燥な廊下で、たむろし、たたずみ、生徒達は時間をやりすごす。

以上、あまりにも卑近な例ではある。しかし、最も身近な生活行為に対してすら、当り前の環境を用意できていないのが学校である。食事、交流、遊び、集まり、くつろぎ、などの生活の全般に考えを敷衍させていくと、学校という空間がいかに貧しい場であるかが納得できる。こうした空間的な特質に、全制的施設(トータル・インスティテューション)

としての全体主義的・統率的な体質が加わると、学校が児童・生徒に一方的に忍耐を強いる場になってきている状況が見えてくる。学校を恐れる子供、学校に行けない子供が出てきても止むを得ないという気すらしてくる。

学校は言うまでもなく、子供が1日の3分の1の時間を過ごす場である。この生活環境を、少なくとも子供達にとって生活的・精神的にストレスが少ない場として構築していくことは建築家としての最低限の責務だと考える。

オープンスペースという画一化

イギリスでは1960年代から、アメリカでは1970年代から、大規模な学校改革が起こった。児童・生徒の個性性の尊重や学ぶ環境の構築が、閉鎖的な教室空間への見直しへと展開された。そして、我が国でも、1970年代の後半から80年代にかけて大きな学校改革のうねりが始まったのである。例えば、愛知県の緒川小学校、岐阜県の池田小学校、富山県の福光中部小学校、横浜の本町小学校、そして、東京都目黒の宮前小学校など、オープンスペースを空間構成の基調においた注目される学校建築作品が次々と登場したのである。特筆すべきことは、これらいずれのケースにおいても、その教育の営みにおいて児童・生徒の生活の個別化・個性化のためのみずみずしい実践が試みられ、大きな成果を生んだことである。建築環境の持つ力を実感し得た幸せな時代であったともいえる。明治以来の定型的・画一的な学校の姿に対し、強い警告を与えた点でもこれらの建築事例は高く評価されて良い。

しかし、それからまた十数年を経てみると、「オープンスペースという名のものと新たな画一化」が深く進行し始めていると断じざるを得ない。オープンスペース、多目的ホールなどの広漠たる空間がそれこそ雨後の竹の子のように蔓延し始めたけれど、メディアや設えのない空間、ひと気のない空間がいたずらに拡散

していき、その「学びの場」としての理念さえ忘れられるようになってきている。この責任の一部は教育改革に臆病な現職教師達の怠慢に帰するが、何のヒント性もない場を具体的な学習・生活のアクティビティを想定しないで作り続けてきた建築家の責務も大きい。フレキシビリティを強調するあまり、場所性のない空間を作りすぎた点も反省されるべきであるし、子供のスケールや感覚を超えた大きすぎる空間の在り方、捉えどころのなさも大きな問題点である。

個性性・地域性へ

世紀末1995年に千葉県立打瀬小学校が竣工・開校したことは、上述の流れの中でまさしくエポックメイキングな出来事であった。児童の学習・生活の個別的なアクティビティを本質的に捉え直そうとし、屋内外での空間のアンジュレーションと子供のスケールをきめ細かく追究しようとしたこの作品が強い関心を呼び、共感を得たのはこうした系譜の中で当然であったともいえる。ここには定型にすぎらうとするデザイン態度が見られず、地域社会の特性にも合わせて、新しい学校のスタイルを模索しようとする清々しささえ感じられる。学校建築には定型がないものと改めて宣言しよう。地域社会の個性性によって様々な姿があり得ることを改めて確認しよう。この学校は私達にそう語りかけているものと理解したい。

今、学校建築はこうした時代の流れにある。以下の17章では、これらをさらに具体的に語ってみたい。

(うへの・じゅん／東京都立大学大学院教授)

1

21世紀の学校のための17章



「教える学校」から「学ぶ環境としての学校」へ

今までの学校——教える学校

20世紀の学校の姿とは「教える学校」であった。閉鎖的な教室で、40名の均質的・固定的な集団に、黒板と教科書で、一斉に画一的に一定の知識を教え込んでいくのが「学校」の姿であったといえる。これには、気が散らないように閉鎖的な教室を廊下に沿って単調に並べていく方式が最もふさわしかったのである。かくして、明治期にできた校舎の定型が、約100年以上全く変わらず続いてきたのである。地域性や風土にかかわらず、日本全国、例外なくこの定型が蔓延していることもまた特筆される点である。

こうした、一定の教育水準を確保しようとした学校教育施策は、目覚ましい成果を生んできた。日本は世界に冠たる教育立国であり、戦後の驚異的な復興や経済成長はこうした高い教育水準が支えてきたともいえる。しかし、これに様々なかげりが出てきている。教育や学校を覆う重い閉塞感、不登校、学級崩壊などに見られる軋轢や破綻、そして「偏差値優秀しかし指示待ち人間」の言葉に代表される若い世代の「生きていく力」の乏しさ。様々な事象が、今までの「教え込み型」教育の限界を示唆している。

21世紀の学校——学ぶ環境としての学校

一定の知識を教え込んでいく20世紀型の教育にどんな問題点があるか。知識や情報は常に爆発的に増え続けるのがこの情報化社会である。教え込んでいく営みを続けるとすれば、時間が足りなくなることは目に見えている。うまく情報を使い、未知の課題に遭遇したとき様々な試行錯誤を繰り返しながら自分なりの解答や解決策を見出す人間が求められているのが21世紀の姿といえる。先行き不透明な社会に敢然と挑んでいくような学習者を育てることが学校に求められる役割である。

オリジナリティや個性も重要な観点である。今我々は、工業化社会、成長指向社会を脱し、成熟社会にさしかかろうとしている。定型的な誤りのない製品を生産する事に終始していれば良かった時代を脱し、創造力に富む付加価値の高いオリジナルな製品を作り出していく能力こそが求められている。このとき必要なのは既成知識の量でなく、未知の問題に挑戦し、思いがけない発想で、オリジナルなものをつくれる能力であるといえる。均質的で平均値が高い集団を育成するのではなく、一人ひとりの個性や着想を育て得る環境が学校に求められている。



かまぼこ型の校舎の風景



潤いがない片廊下の空間



閉鎖的な教室の風景

今までの「教える」学校

新学習指導要領（2002年）

このほど2002年から施行される小・中学校の新しい学習指導要領が発表された。文部省による学習指導要領の改訂はほぼ10年おきに行われてきているが、今回の改訂はかなり大がかりであり、かつ、学校教育に関する基本理念に大きな改革を要請している点、きわめてドラスチックな内容となっている。今後の学校教育や学校建築の在り方に大きな変革をもたらすものと考えられる。

完全学校週5日制の下で、「ゆとり」と「特色のある教育」を展開することが主たる目標であるが、

- ①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること
- ②自ら学び、自ら考える力を育成すること
- ③ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本の定着を図り、個性を生かす教育を充実すること
- ④各学校が創意工夫を生かし特色のある教育、特色ある学校づくりを進めることなどが骨子となっている。

学習は生涯続くもの、との認識も重要である。増え続ける知識・情報・技術に学校教育の枠組みだけでは対応できないのは明らかである。偏差値優秀でも生涯学び続ける資質がなければ、やがてはその資質も錆び付く。この意味で、学校は生涯続く学習の場としての転換が必要である。

学力観の転換

新しい学力観が求められつつある。中央教育審議会や教育課程審議会はこれを、「生きていく力」と表現しているが、

- 1) 児童・生徒の主体的に生きていく力の育成を目指す
- 2) 自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力を重視する
- 3) 社会の変化に主体的に対応できる自己教育力を育てる

こととしている。今次の学習指導要領の大規模な改訂もこれに沿っており、この中で、「児童・生徒自らが課題・問題を発見し、教科の枠にとらわれず探求的に試行錯誤を繰り返しながら追究していく過程を重んじる」総合的学習の時間を創設している。つまりは学びの時間である。

学びの時代の学校環境

これからの学校の教師は「教える」営みに終始するのではなく、学校を、学ぶ刺激に満ちた環境へと設え、児童・生徒の学ぶ意識をかき立て、そして、学ぶ活動のサポート役に廻る、などの役割が大切になってこよう。学ぶ営みは個々人の単位であり、また、指導書などの規範があるわけではない。あくまでも、学校単位、各教師独自の創意工夫がもっとも大切な要素になってこよう。

これからの学校計画に携わる建築家の役割は、「教える教室」を羅列することにはなく、いかにひとり一人の学びのアクティビティを受け止め得る環境を構築するかにあるといえるだろう。学ぶ営みに規範はなく総合学習にも定まったモデルがないとすれば、学校建築にこうあらねばならないという規範もないはずである。ひとつ一つの学校でその学校の個性に合わせ、独自の計画論やデザインを開発していく。そうした姿勢が求められるのである。こうした努力が多少なりとも継続したとき、日本の学校建築もその画一性から脱却できる。建築家も、今、学びの時代といっている。

これからの学ぶ環境としての学校



学年オープンスペースでの個別展開



ビデオで学習ができる小部屋



思い思いの場所で行われる学び



多目的ホールでの観察学習



校内の各所にプリント棚が配置される

「学びの風景」全校一斉に展開される個別指導

愛知県・緒川小学校

2

21世紀の学校のための17章

コンピュータ学習環境の充実



アメリカの学校とコンピュータ学習環境

最近、アメリカの学校を数多く見て回る機会を持ち様々な感銘を受けたが、その中で最も強烈な印象を与えられた点といえばコンピュータ学習環境の充実ぶりである。

どの学校でも、非常に多くのコンピュータが校内の様々な場所に展開されている。我が国の平均的な姿は、1校あたりせいぜい20～30台程度で、これを一斉教育のためにひとつの教室にまとめて配置しておくのが一般的であるといえる。アメリカでは、児童・生徒10名に1台のコンピュータというのが大まかな水準で、これが校内のあちこちにオープンに展開されているのである。台数の多さと、いつでも児童・生徒が触れられる環境に展開されているという点で、大きな水準の違いがある。

アメリカでは、児童・生徒がコンピュータに触れ、使い、遊ぶ、ことに心理的な抵抗がほとんどないようである。中学校以上になるとコンピュータをノート代わりに使い、Eメールを使いこなし、そしてインターネットで情報を集める、などは日常のことになっている。おそらく、コンピュータ学習環境という点で見ると我が国の学校の水準は10年以上の遅れをとっている、というのが筆者らが抱いた感想である。

コンピュータ学習環境の可能性

「コンピュータ・リテラシー」とは、心理的抵抗感なしにコンピュータに取り組むことができ、ここから様々な情報を引き出したり、ノート、電卓替わりに気軽にアクセスできるなど、日常的な学習ツールとして使いこなすことができる能力をさす。現代社会で生きていく上での必須の能力ともなり、こうした能力を身につけていることによって自らの世界を様々なに広げていける潜在能力を獲得していることにもなる。「学びの環境構築」が最も大きな課題となる今後の学校計画の上で、コンピュータ・リテラシーの育成は大きなテーマとなることに議論の余地は無いように思われる。

学校における学習ツールとしてのコンピュータの持つ可能性には

1. 教材提示装置としてのコンピュータ利用
2. コンピュータの文書・図形処理能力の利用と学習
(「Productivity Tool」としてのコンピュータ)
3. 個別学習機器としてのコンピュータ利用 (コンピュータとの対話型学習: CAI学習)

アメリカの学校／コンピュータ学習の光景



Heathcote Elementary School (New York)



Oakview Middle School (Minnesota)



Prairie School (Wisconsin)



同左



Central Park East Secondary School (New York)



Warren Central High School (Indiana)

4. コンピュータ・プログラミング学習

5. CMIの教育利用（図書の検索利用や成績・進路情報の管理など）

6. Eメールやインターネットなどの通信・情報取得手段としてのコンピュータ利用などの様々な側面がある。こうした多段階でのコンピュータ利用学習が進めば、学校の授業スタイルは大きく変わってくるだろうし、このための学習環境の様相も一変するものと思われる。

いつでも誰でも気軽に触れるコンピュータ環境

我が国のコンピュータ学習環境整備の一般的な現状は、閉鎖的な教室としての「コンピュータ教室」を1部屋設け、一斉教育用に20台内外のコンピュータを整然と並べ、使わないときには鍵をかけておく、といった形で進行している。学ぶツールとしてではなく、教える道具、管理しておく部屋、との発想が強い。児童・生徒が気軽に使える雰囲気からはほど遠いものがある。

しかし、繰り返しの主張になるが、コンピュータは個別学習機器としての位置づけが大切であり、身近な場所にあつて常日頃慣れ親しむことから次第にコンピュータ・リテラシーが身に付いてくるといった環境構成が何よりも大切である。部屋に囲い込んでいくコンピュータを全校に分散していく姿勢が望まれるし、今後次第に増えていくコンピュータを教室、特別教室、オープンスペース、教科センター、図書室、メディアセンターなどに順次展開していく戦略が必要となろう。

普及しはじめた頃とは違って、近年、コンピュータは安価になり、かつ壊れにくくなっている。貴重な機器ではなく、身近なツールとしての認識が学校以外の社会では浸透してきているのである。今後、遅ればせながら学校でもコンピュータ密度は急速に増えていくものと想定される。このために、校内各所での電源や情報ケーブルの備えが大切になってこよう。

文部省の施設補助行政も、1室型のコンピュータ教室を整備する他、校内各所に分散配置を図る場合にもこのコンピュータ台数に応じて必要な面積を追加補助する制度に改められている。

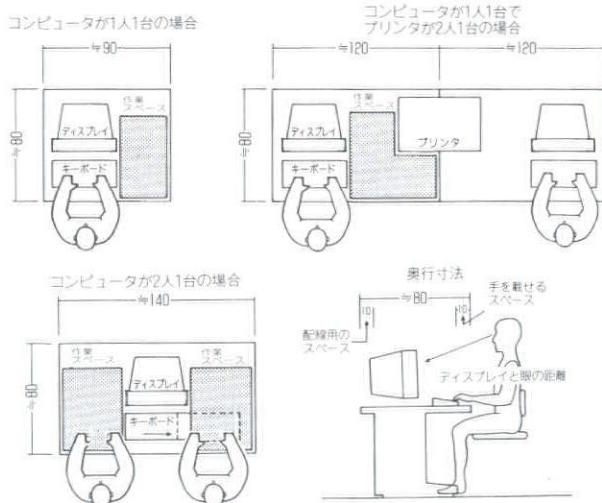
新しい学力観・生きていく力

KEY WORDS

「旧い学力観」とは知識・技能偏重であり、簡単にいうと偏差値で測りうる学力を指すものといえる。これに対し「新しい学力観」とは、①児童・生徒の主体的に生きていく力の育成を目指し、②自ら学ぶ意欲や興味・関心、思考力、判断力、表現力を重視し、③社会の変化に主体的に対応できる自己教育力を育てる、ことなどを指すものである。中央教育審議会、教育課程審議会などで、繰り返し議論・強調され、新しい学習指導要領の基本理念ともなっている。「生きていく力」とは概ね前述の各項をさすが、将来予測がつきにくい不透明な未来社会に、あらゆる情報や知識、実践的な技術を駆使して果敢に生きていける子供を育てたいとする意志が込められている。

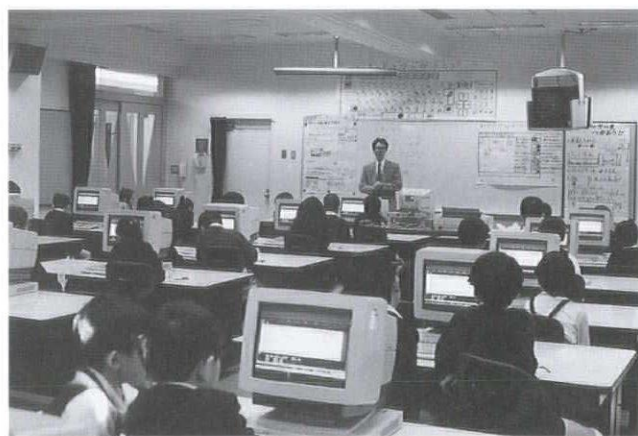
今までの学校教育が一定の知識を正確に「教え込む」ことを基調にしてきたのに対し、これからの学校では、「自ら学び、自ら考える」子供を育てることを主目標にする教育観の転換が求められているといえる。

コンピュータ学習活動のための単位空間



学校の中にコンピュータ学習環境を構築していく上で大切なのは、コンピュータ学習のための単位空間についての確かな知識を持つことにある。児童・生徒の人体寸法への配慮は当然として、学校でのコンピュータ利用は、オフィスや研究施設とは異なり、傍らにノートや教科書を広げるという形態も多いし、ふたりや数人のグループで教え合い、相談しながらという場合も少なくない。こうした学習形態とそれに対応した単位空間計画への理解が大切である。

また、児童・生徒への視環境上の配慮も重要である。明るい窓面や天井照明がCRTに映り込み、画面が非常に見づらいような環境設定は、注意深く避ける配慮が必要である。



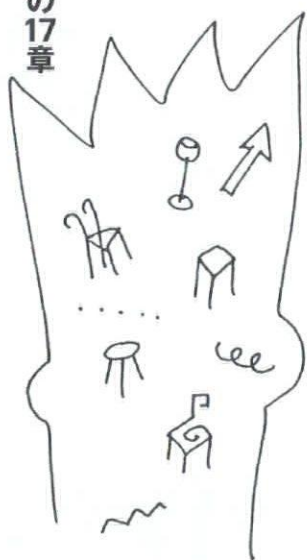
充実した構成のコンピュータ教室（東京都上野小学校）



同上

3

21世紀の学校のための17章



ラーニングセンターとしての学校

ラーニングセンターとは？

ラーニングセンターとは、従来の（学校）図書室を拡張した概念といえる。図書を中心として、CD、VTR、スライドを始めとした視聴覚教材と機器、コンピュータとそのソフトなど、学習に必要な様々なメディアを集め、管理し、学習者にオープンに提示するセンターである。この意味で、メディアセンターと呼ばれたり、リソースセンターと呼ばれることもある。リソースセンターとは、様々なメディアを供給するセンターとしての意味が込められている。

ラーニングセンターは自学・自習の場としての意味ももつ。たくさんの教材、メディアに囲まれ、個人またはグループによる調べ学習をはじめとした様々な学びのアクティビティの場となる。従って、個人学習用のキャレル、グループ学習用のテーブルなどの場の設定も大切になってくる。

学校の中の位置も大切である。すべての学習ゾーンから近く、文字通り学校の真ん中を占めるのである。そして、中の様子が外からもわかりやすく、たくさんのメディアが学習者をいつも誘っているような環境構成が大切である。

Deerwood Elementary School——ラーニングセンターとしての学校

アメリカの学校計画の中心はこのラーニングセンターである。小学校から高校まで、近年の学校計画では必ず大規模で魅力的な構成のラーニングセンターが学校の中心的な位置を占め、これをコアとして各学習スペースが配置されるのである。

その典型的事例を「Deerwood Elementary School」(Minnesota, 1987年、児童数630名)に見ることができる。中に入ると驚く。10教室分はあるかと思われる大きな一体的スペースが2層吹き抜けで学校の真ん中に位置しており、すべての教室がこれにオープンにとりつく構成をとっているのである。すなわち、学校の中のどこにいてもこのラーニングセンターの様子が分かり、そして、アクセスするのも簡単になっている。たくさんの魅力的な図書、コンピュータ、AV教材が整然と並べられ、学習者を待ち構えている。司書教諭が常時2～3名いて、メディアの整理や提示に気を配っている他、資料を探しにきた児童の相談や手助けをしている。例えば、新刊図書の陳列や、その時々

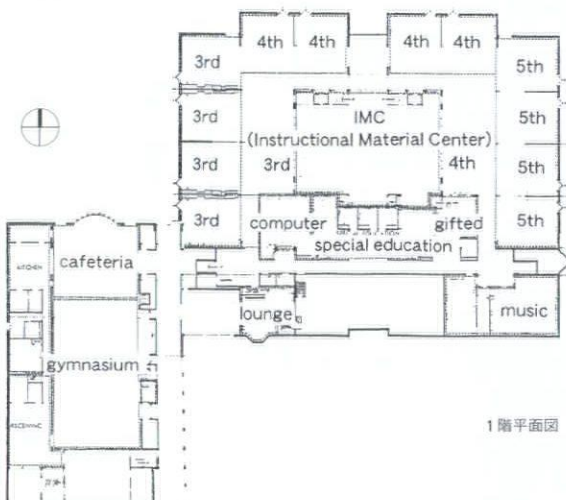
Deerwood Elementary School 1987年



大きな吹き抜け空間のラーニングセンター



メディアを求めて集まってくる児童



1階平面図

学習テーマに関連した図書・教材をコンテンポラリーなコーナーとして設えるなど、興味や関心を引き付けようと魅力的なディスプレイがなされていることも特徴的である。クラス担任とは別に専属の司書教諭を複数置いていることから、いかに学習メディアの集積とその活発な利用を学校の大切な要素と見なしているかが解る。文字通り、学校の中心的存在である。

ブアな日本の図書室

対して、我が国の学校図書室とはどんな存在か。

むしろ、静かな場所を選んでか、校舎の端部に閉じた部屋として置かれていることの方が多い。蔵書数も決して多くなく、また図書の新鮮度も満足いくものでないことが多い。司書教諭が配属されているケースは小・中学校では希で、そのせいか整理整頓も行き届いていない。日中、昼休み以外の時間は鍵が掛かっていることも多いのである。

最近の児童・生徒は本を読まなくなったとも言われる。しかし、魅力を欠いた学校図書室が子供達を引き付けることができないのはむしろ当然の帰結とも、筆者には思われるのである。

学びの時代とラーニングセンター

繰り返しになるが、これからの学校の目指すべき方向は、「学び舎」としての学校である。児童・生徒が自ら発見したテーマによって、様々なメディアを活用して、探求的な学習活動を繰り返していくことが、これからの学校の中心的存在となる。こうしたとき、その主たる活動場所としてのラーニングセンターが閉じた場所であったら、そして、魅力に乏しく蔵書数も少ない場所であったら、どんなことになるか。そもそもの出発点として学校環境が対応できていないことになってしまう。「総合学習」もおざなりな形に終わってしまうことは、想像に易い。図書・メディアを集積しオープンな場として設定すること、または、学校全体に図書・メディアが連続的に展開しているような環境を構築すること、そして、学校全体がメディアセンターでありラーニングセンターであるような場としていく設計思想、それらが今学校のデザインに求められている。

総合的学習

正式には「総合的な学習の時間」といい、今回の学習指導要領改訂の大きな目玉になっている。既成の教科の枠をはずし、例えば国際理解・外国語会話、情報、環境、福祉・健康などをテーマとして横断的・総合的な学習を展開する時間を小・中学校のカリキュラムに創設した。

そこでは児童・生徒自らが課題・問題を発見し、教科等の枠にとらわれず探求的に試行錯誤を繰り返ししながら追究していく過程を重んじようとする意図がある。

従って教科書や定まった授業方法、指導書があるわけではなく、各学校や各教師が創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開することが求められている。この総合学習の時間は、小学校で週当たり約3時間、中学校でも2～3時間を割り当てることになっており、例えば既成の教科である理科や社会の時間数に匹敵するものになる。

文字通り「自ら学ぶ」学習のアクティビティが主体となる学習時間帯であり、旧来の普通教室や特別教室だけで成り立っている画一的な校舎では対応が難しくなる。

開かれた環境としての図書室



コンピュータもラーニングセンターの重要な要素



開かれた構成のクラススペース



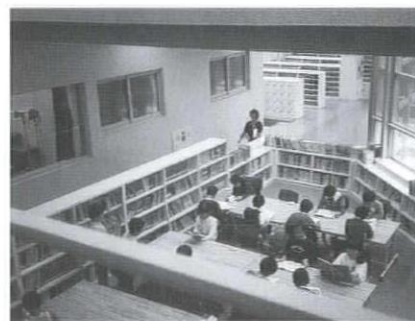
コンピュータ・ラボ



多目的のホールに面した開かれた図書スペース
(東京都上野小学校)



くつろいだ雰囲気のある図書・情報センター
(Ecton Brook Middle School, イギリス)



毎日必ず通る玄関の前に図書ラウンジを設けた事例
(東京都宮前小学校)

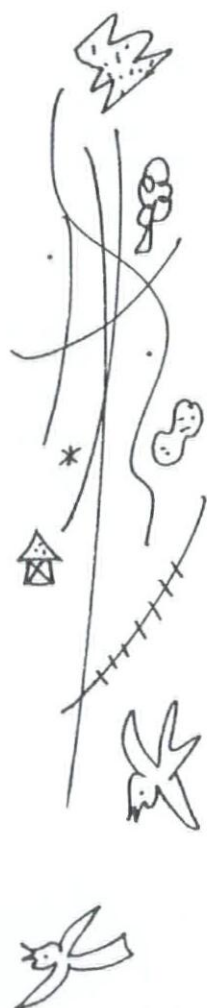


校内に分散配置された図書ラウンジ
(Holly Primary School, イギリス)

4

21世紀の学校のための17章

生活環境としての学校



子供の生活の場としての学校

小学校でも中学校でも、概ね午前8時過ぎに生活が始まり、そして午後3時半近くに放課後となる。学校は子供達が1日の3分の1近くの時間を過ごす場所なのである。この大半が学習に充てられるかといえそうでなく、例えば、集会、給食、休憩、掃除などいわば生活的な行動に充てられる時間帯が約4割もある。すなわち、学校という空間は生活空間としての役割も大切であることがわかる。

生活的な時間と居場所

学習の時間帯は、残念ながら現状では子供達が自らの行動を自らの意志で決定でき能動的に振る舞える時間ではない。教科や単元、学習材、学習方法などこと細かく決められ、いわばこれに従って行動している時間であり、個性を発揮できる余地は少ない。子供達が自分の行動を自分で決めることができる場面が1日の内どの位あるか、様々な学校で計測を試みたことがある。学習に個別化・個性化の様々な手法を導入し、試行・実践している学校で約3～4割、一斉授業で終始している学校で1割ちょっと、という結果が出た。後者の場合、その大半が生活時間、それも、中休み（小学校で2時間目と3時間目の間に比較的長めにとられる休み時間）と食事の後の休憩時間にほぼ限られるという結果である。

休み時間を中心とした子供達の居場所、そして、食事やくつろぎの時間帯のための快適な居場所を、もっと大切に考えてあげたいと思う所以である。

今までの学校に子供達の居場所はあるか？

子供達の居場所、くつろぎの場所、食事の場所、などといった観点から学校がデザインされることは減多にない。明治以来、100年以上営々と続けてきた片廊下型校舎の定型に従って学校を建てる場合はなおさらである。閉鎖的な教室と廊下。もちろん、廊下の片隅に素っ気なく置かれた手洗い流し（子供達は喉が渇くところここで水を飲む）や、薄暗くいつもじめじめした便所などがこれに付け加わるが、これらは空間と呼ぶにふさわしい設らえを持っていないし、必要最低限の生理機能をまかなう役目しか果たさない。かくして児童・生徒達は、短い休み時間、無味乾燥な教室でたたずむか、廊下をうろつき廻るしかないのである。

子供の居場所と生活の風景——集会・くつろぎ・食事・あそび



集会



くつろぎ



食事



遊び

個別化・個性化

個性の尊重は本来、教育の最も基本的な理念である。しかし、伝統的に行われてきた学校教育では、閉鎖的、均質的なクラス集団を一括的、集团的、一斉的に処遇し、一定の知識を正確に覚え込ませる画一教育に偏してきたとの反省もある。そこでは、豊かで多様な児童・生徒の個性はしばしば無視されてきた。教育の本来の目標である個性の尊重を基本的なところで認め改革していこうとする意志が、しばしば個別化・個性化の言葉で表現される。このことは、学習面のみならず学校生活全般に及ぶべきであるとの考えから「学習・生活の個別化・個性化」ともいわれる。

個別化とは、学習場面において一人ひとりの到達度や理解度に充分注意を払い個別的に処遇する様々な指導方法を指すが、学力面だけでなく、課題に対してどのようにアプローチしたいか、どんな方法で解決に導きたいかのプロセスにおける個性（すなわち個性）をも重視したいとの意味も込められている。教師の意識改革や指導方法の工夫改善が不可欠であるが、これを受け止める学校空間の在り方にも大きな変革が求められている。

休み時間の子供達の居場所

中休みや食事の後の休み時間などの比較的長い休み時間に子供達がどんな場所を選んで居場所としているかを観察調査によって調べてみたことがある。学校毎のグラウンドの広さや空間構成の違いによって様ではないが、屋外：屋内＝1：1というところが平均的な姿であろうか。

屋外は、グラウンドで元気よく遊ぶ子供達がイメージしやすい。しかし、グラウンドの広い中央部でサッカーに興じたりする子は意外に少なく、周辺の鉄棒や砂場、または、校舎とグラウンドの間のテラスや花壇、植え込みの廻りなどで比較的静かに遊んだり、たたずんだりしている子のほうが多いのである。つまり、屋外での子供達の居場所ということを考えると、大きなスペースより、校舎とグラウンドの中間領域あたりの界限性に富んだ場所の方が子供達にとっては大切といえる。

屋内はどうか。一般的な学校では、教室か廊下しか居場所がない。しかし、図書室や家庭科教室などが空いているときは、ここを数人の仲良しグループがみつけ自分たちだけの居場所としている光景などを発見する。近年のオープンスペースは、意外に子供達の居場所にはなりにくいことも特徴的である。広いがらんとした場所は子供達が身を寄せる場にはなりにくいのである。広いオープンスペースの端部、またはその中の家具などで小振りのコーナーとしてつくられた場所などは子供達を集めやすい。

必要な空間の変化とアンジュレーション

繰り返しになるが、今まで、学校を子供達の居場所として、また、生活の場所としてデザインする考え方が極めて希薄であった。教育上必要な諸室を並べることだけに終始してきたのである。これに近年流行の大きな「オープンスペース」が付け加わると、状況がますます深刻になる。子供達のスケールにあった空間が、子供達が自分たちの居場所と感じられる場所が、見つけにくいのである。

例えば、ロビーやラウンジ、小さなアルコーブ、閉じた小部屋、薄暗い階段裏のような場、など様々なアンジュレーションに富んだ場所があっている。

今までの学校には先生が入れない場所はなく、子供が入ってはいけない場所は多かった。この逆をしてみてもはどうだろうか。

教室と屋外オープンスペースとの空間的連続



教室前面の広いバルコニー（東京都杉並第4小学校）



教室と連続したテラス——実習活動の場となり、生活の場ともなる（東京都宮前小学校）



多様な屋外空間の創出



校舎群に包まれた中庭空間——実習活動、そして天気の良い日には昼食の場となる（愛知県緑川小学校）



カバード・スペース／学習、生活活動のための半屋外スペース（左：東京都宮前小学校 右：Eveline Lowe Primary School, イギリス）

5

21世紀の学校のための17章



子供のスケールと学校空間

教室の天井高3m

建築基準法によって学校の教室の天井高は3mと規定されている。様々な建物種別の中で天井高が規定されているのは学校建築に限られる。かくして、小学校入学したての身長が低い1年生の教室から高校・大学生の教室まで、教室というと全国一律3mとなっている。なぜ3mか？ その根拠は何か？ 起源は100年以上前に遡る。

当時、学校環境は劣悪であった。狭い部屋に80名ほどの児童を詰め込み、冬は火鉢で暖をとるありさまである。当然、二酸化炭素中毒が頻発する。事態を重く見た文部省は医学者・三島通良に調査・対策を依頼した。様々な調査や検討の結果、教室に十分な気積を確保すること、すなわち、4間×5間（20坪）の教室に80名の児童がいるとして45分の授業の間に二酸化炭素が限度に達するまでの気積として、天井高10尺（約3m）が推奨されたのである。明治28年（1895年）のことである。蛇足ながら、この頃『学校建築図説明及び設計大要』などで示された片側廊下校舎のモデルプランが、今日の学校建築の原型となっているのである。

やがてこの10尺が基準となり、戦後の建築基準法=3mに引き継がれた。しかし、元々は20坪の教室・児童数80名に対してたてられた理屈であり、今日、1教室当たりの児童数は半減している。加えて、今日のオープン化。1人当たりの気積は何倍にもなっている。しかし教室の天井高3mは守らなければならないのである。天井高3mという一般の建築に比べかなり高い方である。天井高が高いことに文句をいっている訳でなく、これをなぜ建築家が決定できないか、なぜ身長が100cmにも満たない小学校1年生の教室から180cmにも達しようとする高校生の教室まで一律なのかが、疑問なのである。

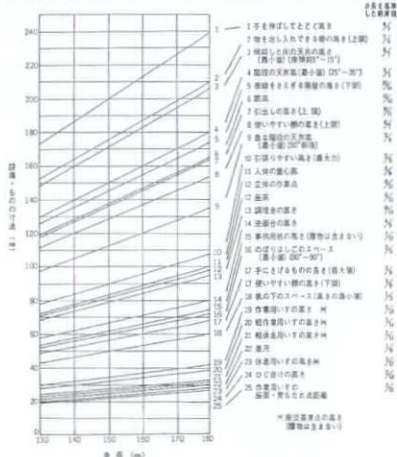
画一的な学校の部位寸法

天井高3mに加え、教室の平面寸法もかなり一律的である。4間×5間はその後8m×8mに変わったりしているが、ほとんど変化がない。こうした単位空間の一律性は教育の画一性に起因しているともいえるが、学校建築の様々な部位寸法が子供のスケールに合っていないことは建築家の責任といっている。例えば、片廊下型の4階建ての小学校



子供のスケールと小さな空間。低学年クラス図書コーナー（東京都若葉台小学校）

身長を基準にした設備・もののスライディング・スケール



チームティーチング

学校では普通、1クラス40名（以下）の固定的な児童・生徒の集団が1名の教師に固定的に対応し、授業・生活が集団的・一斉的に営まれる。ホームルーム（普通教室）のなかに閉ざされ、その関係は一般に閉鎖的であり、固定的である。多様な個性を持つ児童・生徒と教師の関係、または児童・生徒間の関係にミスマッチングが起こったりすると、時として「学級崩壊」なども起こる。

チームティーチングとは、複数の教師集団が自分の持ち味（教師にも個性がある）や役割分担を発揮し、クラス集団とは異なる編成の学習集団に対して協同で指導に当たるなどの方法で、「協力教授方式」などとも呼ばれる。

例えば、学年3クラスの集団を解体して、習熟度別や、学習テーマ別、学習スタイル別などに編成し直し、これらの集団に対して3名の教師が役割分担を決めて対応する授業スタイルなどが挙げられる。教師の持ち味を発揮できる、児童・生徒の多様な関係が形成できる、個々の児童・生徒にフィットした学習形態を提供できるなどのメリットがある。

校舎。教室の平面や天井高だけでなく、窓の高さ、手洗い流しの高さ、物入れの寸法など1度決められた寸法が各階一律に繰り返される。しかし、低学年と高学年では身長に数十cmの違いがある。廊下の腰壁、窓の高さなど、高学年には外が見通せても低学年には頭の高さを超える寸法となり、小さい子供には全く外が見通せない場合も多いのである。子供の寸法に空間のスケールが適合していない場所が多すぎるのが今日の日本の学校建築の現状といっている。

児童・生徒の寸法知覚能力について

小・中学校の児童・生徒が学校空間のいろいろな場所の寸法をどのように知覚しているかを実験によって確かめてみた。児童・生徒が自分の身長や手を上げた長さ（指極—概ね身長と一致）に比べて、例えば天井高や教室の広さをどの程度のものと認識しているかを図示させる方法によっている。

図1、2は、小学校2、4、6年、中学校2年の児童・生徒が教室の天井高（3m）、教室の横幅（8m）をどのように認識したかの概略を示したものである。図3は、教室の天井高（3m）と体育館の天井高（6.5m—2層分の高さ）を児童・生徒が自分の身長と比較してどのように判断したかを表している。横軸が一人ひとりの身長、縦軸が評定した寸法である。教室の天井高については、身長が低い児童ではその評定幅が2～6m程度と分布の幅が大きいのにに対し、身長が高くなるとその評定値が真値にかなり近づくことがわかる。つまり教室の天井高は小学校1、2年の低学年では正確に捉えることが難しく、高学年位になってやっと正確に捉えることができる寸法であるらしい。体育館の天井高についての結果も概ねこうした傾向に似ているが、しかし、高学年でも狂いの幅はかなり大きく、2層分の高さ位になると的確に捉えることは難しいらしい。

つまり、学齢や身長によって寸法の知覚能力はかなり異なるのである。例えば低学年の教室の天井は低く、高学年や中学校以上になれば高くするなど、発達段階によってデザインを変えられないか。感覚や知覚の能力に的確に対応したデザインが、特に小学校計画では大切なのではないかと思う所以である。

図1 水平方向実寸法L=750に対する評定寸法

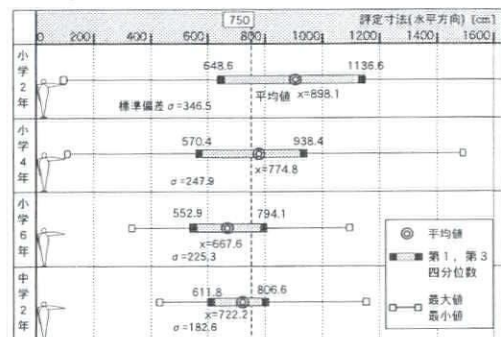
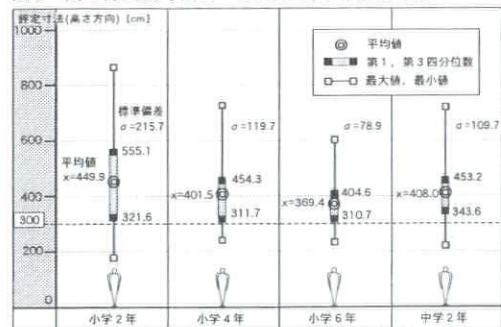


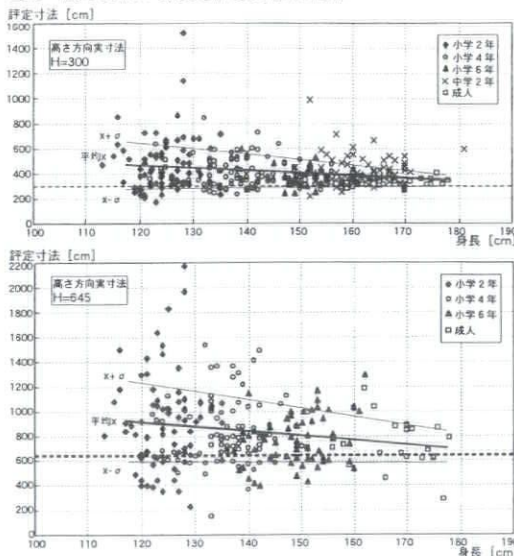
図2 高さ方向実寸法H=300に対する評定寸法



実験光景：自分の身体をスケールにして学校内の寸法を測る子供達



図3 高さ方向：身長と評定寸法の関係



6

21世紀の学校のための17章

空間の連続性 イギリスの学校①



今までの学校——閉じた環境

これまでの学校は閉じた環境において成立していた。閉鎖的な教室を廊下に沿って並べる。特別教室も図書室も普段は鍵が閉められている。廊下を歩いても学校全体の様子は一向に分からず、中でどのような営みがあるのかその雰囲気把握しにくい。

閉じた教室の中は、しばしば「学級王国」と呼ばれる。ひとりの教師が固定的なクラス集団を指導する閉鎖社会である。中の様子が他のクラスに伝わることも少ない。あるクラスが長く「学級崩壊」の危機に苦しんでいた事実を、隣のクラス、同じ学年の教師も気付かなかった、などの現象がしばしば起こっているのである。

閉じた環境と開かれた環境

例えば従来型の閉じた図書室と開かれたメディアセンターとを考えてみる。閉じた図書室はそこにわざわざ行って部屋を開けて見ないことには、どんな本があるか、誰が本を探したり読んだりしているのかわからない。常に図書情報が人を引き付けようとするポテンシャルにも乏しいものがある。

一方、学校の中央に開かれた環境として構えているメディアセンター。誰でもが、学校のどこにいても、その雰囲気を知ることができる。新しく届いた新刊書が魅力的にディスプレイされ、誰がどんな学習をしているかも、自然に伝わってくる。こうした環境が人を引き付け、次の学習への動機付けに寄与する。

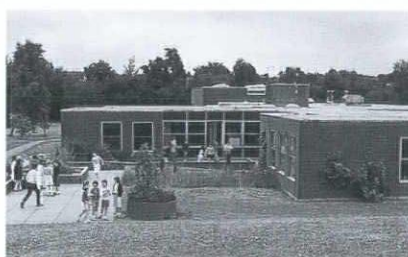
このように、開かれた環境と閉じた環境では、人に様々な情報を自然に伝えるという点で、そのポテンシャルに大きな差があるといえる。

「学ぶ環境」は「開かれた環境」

今までの学校環境がなぜ閉じた環境であったのか。それは、学校が「教える」場であったためである。教える場（教場→教室）において、教師や黒板に児童・生徒を集中させねばならず、気を散らしてはいけないので閉じた環境となる。

繰り返し述べてきたように、これからの学校は「学ぶ環境としての学校」であり、そこではひとり一人の学習者の学ぶアクティビティが主体とされる。学びの活動には、様々な学習の機会やメディアが、学習者に常に訴えかけている環境がどうしても必要になる。極論すれば、学校全体がメディアセンターのようにになっている姿が、これからの学校の姿であるといえる。

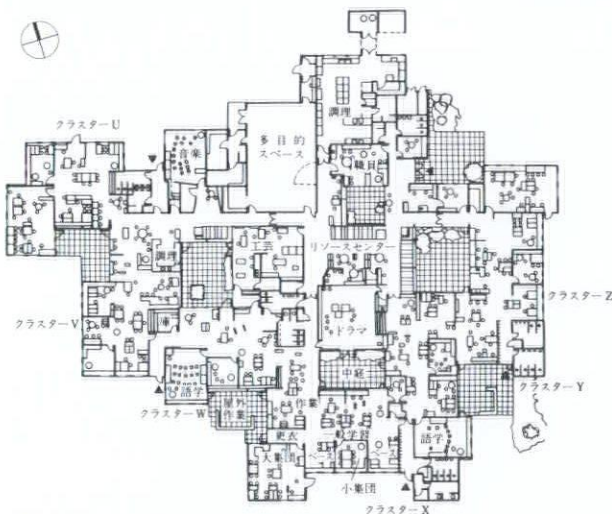
Guillemont Junior School 1973年



校舎内外の空間を巧みにつないだ計画



クラス集団が床座で集まる場：ベース



全体平面図 S=1:1000

開かれた教室の効用

閉じていた教室を開くことで様々な目に見えない効果がある。例えば教師にとっては、閉じた環境ではわからなかった隣の教師の授業の進め方が、自然とわかるようになる。教材の作り方、使い方にはそれぞれの教師の個性が表れるものだが、こうした点にも相互理解が進むようになる。互いの教材の共有、交換が進むようになり、自然にチームティーチングの雰囲気が醸成される。

児童・生徒にとっては、異なったクラス間の交流が進むことはもちろんだが、これまで閉ざされていた隣のクラスの学習活動の様子が伝わることにより、様々な刺激に満ちた環境となる。これまで各クラスに囲い込まれていた情報が全体のものとなり、立体的になってくる点も挙げられる。

こうした開かれた環境において、教師も児童・生徒も、自然と伸び伸びと振る舞えるようになるのは当然のことかもしれない。

Guillemont Junior School

開かれた学校環境の典型的な事例として、「Guillemont Junior School」(イギリス Hampshire 州、1973年)を取り上げた。「Formal Education」から「Informal Education」への改革を決意した時期のイギリスにおけるもう20年前の作品であるが、その環境の連続性には息をのむような迫力と魅力がある。

ここには画然とした廊下や教室というものはなく、学校全体が連続した学習スペースである。よく見ると、クラス集団の帰属の場としての「Base」や、一般的な学習活動が行われる「General Space」、そして実験・実習活動の場となる「Practical Area」などが巧みに組み合わせられ、その中の小さなコーナー、アルコーブがそれぞれに教科・単元に対応した固有の学習目標を持った場としての意味を持っている。

子供達は緩やかに自分たちのクラス・テリトリーを保有しながら、全体に三々五々散っていく。自分の学習目的に合った場やメディアを選択しながら、学びのアクティビティを展開していくのである。屋外と屋内のスペースが織りなすような連続性もすばらしい。それぞれの部分が子供のスケールに気を配ったデザインになっていることも好ましい。学校建築の名作と言っていい。

自由校区制

今日の日本ではほとんど例外なく、通学すべき公立の小・中学校は居住地が定まると自動的に定まる「学区区制」によっている。すなわち、学習者の側からは(私立を選択する以外に)自ら通う学校を選ぶことができない仕組みになっている。裏返せば、どの学校も全く同じ学校環境で、全く同じ教育内容を提供しているということにもつながり、我が国の学校の画一性もここに起因しているとみることもできる。

例えば、イギリスでは、もう10年ほど前にこの通学区の概念が事実上消滅しており、地域社会に小規模に分散配置されるそれぞれ個性を持った学校の中から、児童・生徒の個性に合わせて学校を選ぶ仕組みが定着している。自由校区である。

しかし、この仕組みも日本において次第に現実味を帯びている。国や都道府県の指導・規制を極力少なくし、学校独自の創意工夫を重ねる考え方や、地域社会と公立学校の連携をもっと密にしていこうとする路線などはこれにマッチしている。ひとつ一つの学校が個性を持ち、学習者が自らの個性に合わせて地域社会の中の学校を選択する社会が、遠からず訪れるかもしれない。



家具のレイアウトと実際の使われ方 S=1:600



その後思い思いに学習スペースを展開していく



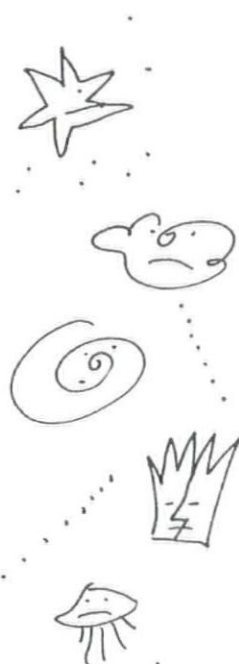
時には小グループに対する一斉指導も行われる



自分の学習テーマにしたがって、学習の場を選択する



食堂ラウンジにおける昼食風景



エコスクールⅡ地球・地域環境と共生する学校

エコスクール構想

地球温暖化、オゾン層破壊、水質汚濁、海洋汚染、熱帯雨林の減少、酸性雨、有害廃棄物の環境移動、等々。近年、地球規模の環境問題が提起されており、環境を構築していく職能としての建築家に課された責任は大きい。

学校は、最も数が多く地域社会に密度高く分布するコミュニティの中心となる公共施設であり、ここを地球・地域環境と共生し得る低エネルギー消費の建築として再構築していくことの意義は大きいと言える。

また、児童・生徒が多感な時期を過ごす学校を環境共生建築として整えることは、居ながらにして自然に「地球・自然環境への配慮」を学ばせる格好の教材を提供していることにもつながり、その教育効果も決して小さくない。

文部省でも、今後の学校施設の整備において環境への負荷の低減を図ることは極めて重要な課題として取り組んでおり、

1. 環境への負荷の低減を目指して設計・建設がなされる施設であること
2. 環境への負荷の低減の目的に沿った運営がなされる施設であること
3. 環境教育にも活用されることが可能な施設であること

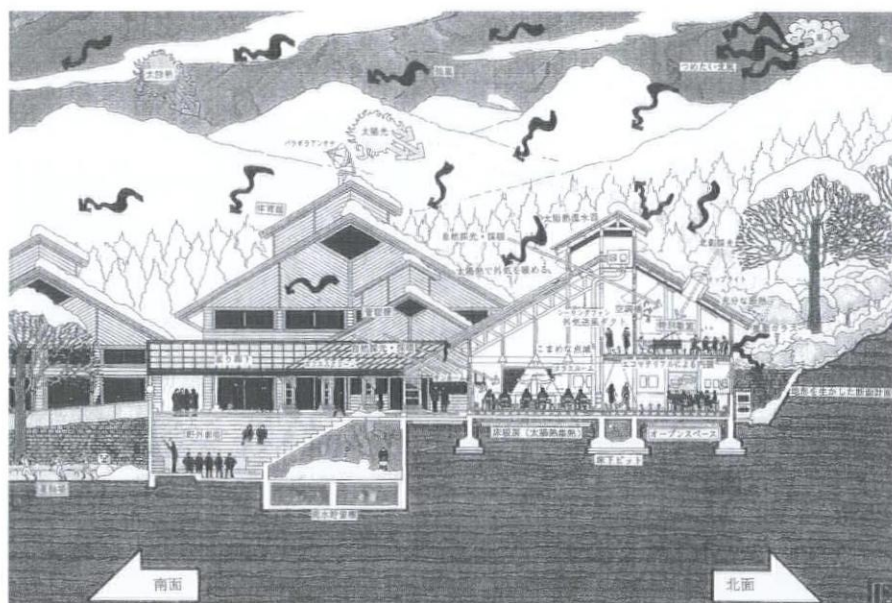
の3つの条件を兼ね備えた学校を「エコスクール」と呼ぶこととし、この実現・普及に様々な施策の手を打ちつつある。

地域、地球にやさしい環境

エコスクールの目標のひとつは、地域、地球環境にやさしい環境をつくることである。設計・建設にあたっては環境負荷の少ない材料の選択や熱帯材の使用の抑制などが求められる。これは今後建築家にとって普遍的な課題となろう。地域風土になじむ学校景観の試みや緑被率を高めた屋外環境の工夫などが進めば、それだけで日本の学校の画一的な表情は是正されていくに違いない。

児童・生徒にやさしい環境

明る過ぎ、暗過ぎる。採光・照明条件の不均一が目立つのが今までの学校であった。寒過ぎる場所もあれば、暑過ぎる場所もある。温熱環境、暖房条件にも十分な配慮が行き届いていないことが多い。温風ヒーターを教室にひとつずつつけておけばよいとするな



山間部のエコスクール（冬季）

出典：『環境を考慮した学校施設（エコスクール）の整備について』（1996年3月、文部省）

エコスクールに関しては、文部省と通産省の共同によるパイロットモデル事業が推進されており、計画策定のための調査研究費の補助、エコスクール実現のための施設整備費への補助などが行われている。既に38校の実績があり、来年度までに100校程度のエコスクールを実現する予定。

習熟度別学習

最近の文部省の調査によると、「授業がほとんどわからない、または、わからないことが多い」と回答する児童・生徒は、小学生で4%、中学生で20%、高校生で23%に上る。学力や能力、個性、興味・関心がそれぞれ異なるひとクラス40名の集団に対し、平均的なところに照準を合わせ、黒板とチョーク、教科書で一斉的に授業をしていかなければならないこれまでの授業スタイルでは、理解が進む児童・生徒、授業にやっとなんていける児童・生徒の他、実は、その内容を理解できず能動的に授業に参加できない児童・生徒も相当数に上るのが今日の学校の隠された現実である。

こうしたときに、固定的なクラス集団を一旦、一時的に解体し、理解度別、すなわち、その教科・単元に限っての習熟度別に学習集団を編成し直し、前述のティームティーチングによって授業を編成する方式などを習熟度別学習編成と呼ぶ。

時に、固定的な「能力別クラス」と混同されることもある。目的はあくまでも、ひとり一人の児童・生徒に少しでもフィットした学習場面を提供しようとするところにある。

おどりの暖房設計では、快適な温熱環境はとうてい実現できない。教室に適切な換気設計を施している事例をみることも少ない。中間期は窓を開ける自然通風でまかなえるが、冬季に窓を締め切りがちの教室は空気はかなり汚れていることが、多くの調査で明らかになっている。子供達に適正な空気環境を提供することすら日本の学校ができていないのである。

一般の建築設計では十分な配慮がなされる環境設計上の諸点が、学校建築になるとなぜか通り一遍で済まされる。このことを考え直すだけでも日本の学校は随分変わると思う。資源・エネルギーを賢く使う環境

学校建築は窓面が大きいことが特徴のひとつである。断熱性能は当然劣り、冬季の熱損失は大きい。ここに、複層ガラスを用いれば熱損失の少ない、効率的で暖かい環境が実現できる。加えて、パッシブソーラーシステムなどを活用した設計が併行すれば、少ないエネルギー使用で快適な環境が実現できる。屋根面が大きい学校建築では、太陽熱給湯、太陽光発電、太陽熱空気集熱パネルなどの太陽エネルギー利用の設備的な工夫の余地が沢山ある。

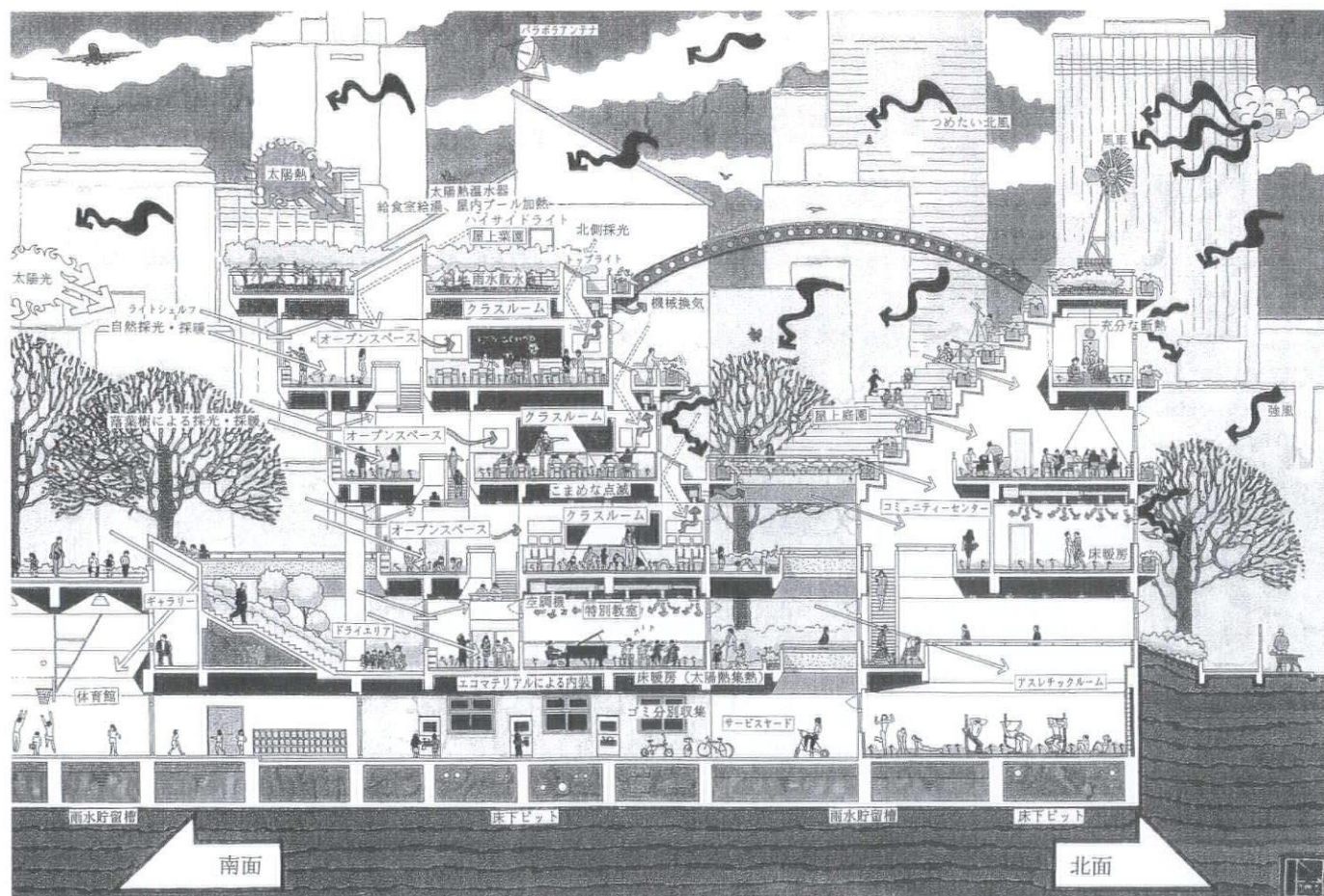
環境共生が学習に資するしくみ

単純な「かまぼこ型」の校舎に比べ、屋上緑化、採光コントロールのためのルーバー、パッシブソーラーシステムの集熱パネル、雨水利用の散水システムなどを装備したエコスクールは、それ自体が児童・生徒に環境共生を考えさせる生きた教材となる。また、そうした原理や仕組みを表示できる機器や、刻々変化する使用エネルギー、受容エネルギーなどを表示できるコンピュータ提示装置などが児童・生徒の身の廻りに置かれていれば、エネルギー問題にも理解が深まることだろう。

環境問題に対して知識を深め、常に関心を持ち続ける態度は、これからの地球人に必須の素養となろう。「環境を考慮して設計・建設され、環境を考慮して運営され、環境教育にも活かせるような学校＝エコスクール」の思想は、これまでの学校を根本から変革していく潜在力を持っているかもしれない。

参考文献：『環境を考慮した学校施設（エコスクール）の整備について』文部省

環境を考慮した学校施設に関する調査研究協力者会議：1996年3月

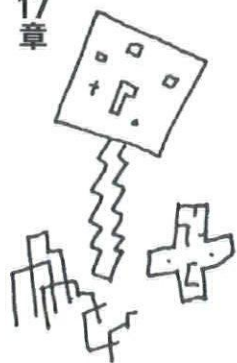


都市部のエコスクール（冬季）

出典同左

8

21世紀の学校のための17章



小規模学校の空間構成 イギリスの学校②

小規模化する日本の学校

現在、日本の多くの小学校が学年1クラス編成、またはこれ以下の規模である。これに児童・生徒数減少、少子化の傾向が加わる。過疎地だけでなく、郊外地、都心部でも学校の小規模化の傾向は強まっているといえる。21世紀の小学校の姿とは、地域社会における小規模学校の分散的配置なのかもしれない。

しかし、現在すでに圧倒的多数の小規模小学校の計画において、「標準規模校」を想定して立てられた計画論がそのまま踏襲されている。旧来の計画タイプでは、一回り小さくした閉鎖型教室を廊下に沿って並べ、あとはいくつかの特別教室など。学校全体に活気やアクティビティが乏しいことはいうまでもない。オープン化を試みる計画にしても、学年単位に設けられるオープンスペースなどはかえって人气が乏しい寂しい空間になってしまう。小規模校には小規模校なりの計画論やデザイン手法が模索されるべきであろう。

小規模学校の特別教室

小規模小学校で、一般規模校に模して理科、図工、家庭、音楽などの特別教室をつくったらどうなるか。学年1クラスとして、家庭科教室などは週4時間しか使われない。最も利用率が高い音楽教室にしても週12時間、半分以上の時間は空くことになる。利用率が低いという機能面だけでなく、いつも使われない部屋が多く全体の雰囲気を沈めてしまうという心理的な影響も大きい。

音楽は別としても、その他の実習スペースを思い切って総合化し、総合特別教室、または総合実験・実習スペースとして構成してみる方法が考えられる。実習活動の性格によって、やや荒っぽく作業が発生するスペースと比較的クリーンな活動に向けたスペースとに分けて構成するのもひとつの考え方だろう。小規模校では1クラスの人数も少なく、多角的な使い方ができる実験・実習スペースをデザインすることは難しくない。なによりも、小規模学校には常に活気を保っておける空間の仕組みが適していると言える。

小規模学校の開いた環境

小規模学校の特色として、全体に穏やかな環境でありながら活気が乏しく、アクティビ

Holly Primary School 1986年



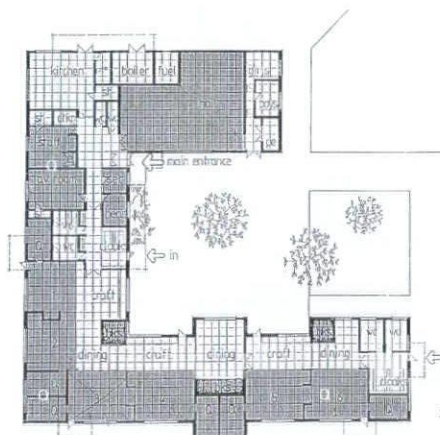
田園風景の中にこの学校は建っている



一般教科のための学習スペース



日本の学級教室にあたるクワイエットルームの内部



平面図 S=1:800

統合教育

「integration」と「normalization」

心身に障害を持つ児童・生徒は、現在では一般に、盲・聾・養護学校などの特殊教育諸学校や特殊学級において教育を受けている。こうした心身障害児もできるだけ、障害のない子供（健常児）と一緒に環境で教育を受け、多様な経験に触れるようにできることが望ましいと考えられ、通常の小・中学校に通えるような環境を構築しようとするのが統合教育の理念である。一方、健常児も、現在は障害児と分離され、そうした存在すら知り得ないで生活をしているが、互いの間に交流や接触が深まれば、思いやりの心や助け合いながら共生していく態度が自然に身に付くものと思われる。

統合教育の実現には、障害児が通常の学校でも普通に生活できていくための、物的、人的、社会的な環境整備が不可欠であり、どの程度の障害ならば統合が可能かについての実践的な検討も今後深められる必要がある。

障害児教育だけでなく、障害者と健常者が共に同じ環境で生活していける社会を構築していくことは普遍的課題であり、一般の学校計画にも今後、十分な配慮が必要になる。

ティが低いという点が挙げられる。こうしたところにおいて、閉じた教室、閉じた学年クラスをつくったら、ますます活気に乏しい環境になってしまう。思い切ってクラスや学年を開き、実験・実習スペースやメディアセンターなどとも連続的な構成に仕立てていくのが小規模学校の本来あるべき姿ではないのか。

こうした開かれた環境では、子供達は常に学校全体の様子や雰囲気に触れていることができるし、小人数の集団が孤立している感じを持たなくて済む。環境のポテンシャルが高いとそこから受け取る情報量も多くなり、学習のヒントやチャンスも多くなると考えられる。

小規模学校は言うまでもなく小人数の学校であり、思い切って環境を開いてもそれによる騒音などの問題点も比較的少ないと考えられる。全体が住居のように穏やかで居心地がよく、しかも学習機会に満ちた学校になる可能性は充分にあると思う。

Holly Primary School

小規模小学校の計画・デザインについて、筆者が常々、モデル的なケースとして考えている「Holly Primary School」（イギリス、Nottinghamshire 州、1986年）を紹介する。イギリス農村部に建つ、全校180名、各学年1クラス編成の小規模学校である。

ホームルーム集団の帰属の場所は、8畳間ほどの小空間。クラス集団はここに床座で先生の廻りに集まり、日に何度かクラスミーティングを行う。国語や社会、算数などの一般教科学習は、そのすぐ外側の「General Learning Area」で行われる。オープンなスペースであるがクラス集団毎のスケールに分節されている。

実験・実習スペースは閉じた特別教室として設けられるのではなく、「General Learning Area」にオープンに接続し、学校全体をモール状に貫く連続的なスペース（Practical Activity Zone）として設けられている。

この小空間からモールまでどこにも閉じた壁や扉がなく、ヒエラルキカルに連続していく空間のスケールが心地よい。穏やかで、しかも、活気を帯びた空間構成。小規模学校デザインの手本となるような学校だと思うのである。



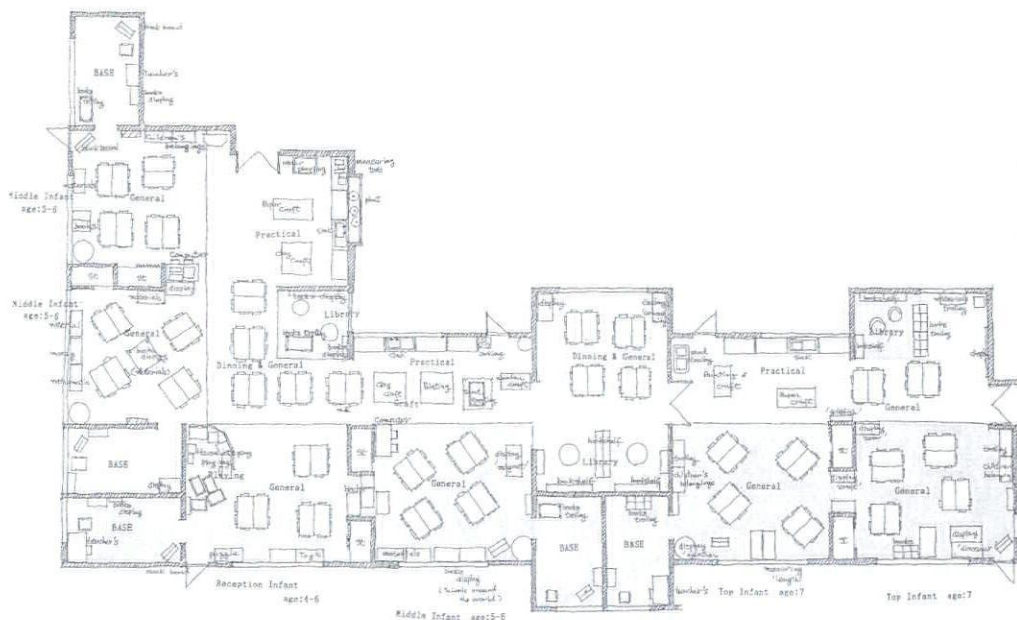
Generalな学習スペースは、様々な学習コーナーから成り立っている



学校全体をモール状の実習スペースが貫く

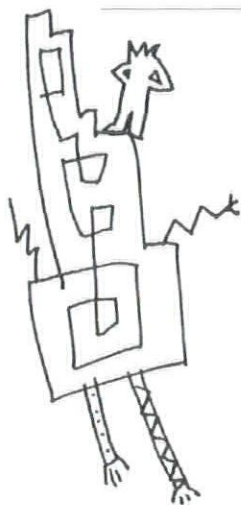


一般学習スペースと実習スペースが隣接している



実験・実習スペースのフレキシビリティを支える様々な工夫

家具レイアウトと実際の使われ方 S=1:300



固い特別教室

今、学校の「特別教室」の在り方を根本的に見直すべき時期にきていると思う。特別教室とは、特別な場所なのか? 「総合学習」がカリキュラムに正式に位置づけられ、創意工夫を凝らした体験的・実習的・操作的な学習活動が重んじられるべきこれからの学校で、特別教室が特別な教科の学習だけに機能していればよかった時代は過去のものとなりつつある。一般的な学習スペースの方は、この間随分と弾力化してきた。開かれた教室環境、オープンスペースを中心として連続的に構成される学年スペースは様々な学びのアクティビティを受け止め、多様な学習形態や弾力的な集団編成を可能にできた。しかしこうした学校でも、特別教室の方は旧態依然たる固い構成のままであることが多い。特定の教科にしか対応していない、他に対して閉じられていて中の様子が伝わらない、実験・実習機が固定されていて決まり切った使い方しかできない、などの様々な問題点がある。しかし、特別教室は言ってみれば実習スペースである。一般教科にもまして、学習スタイル、学習集団の編成などは多様性を帯びているはずであり、ここが旧来の固い姿を引きずったままでは本質的な学校改革はおぼつかないというのが筆者の常々の考えである。

利用率が上がらない特別教室

利用効率が上がらないことも問題だろう。例えば学年2クラス規模の小学校の家庭科教室を考えてみる。家庭科は5年、6年、週2時間である。つまりこの学校では週に8時間の家庭科の授業がある訳だが、このすべてに家庭科教室を使ったとしても週の大半は教室が空いていることになる。効率だけで学校をつくるわけではもちろん無いが、長時間使われないで閉ざされている環境という点も問題にされている。

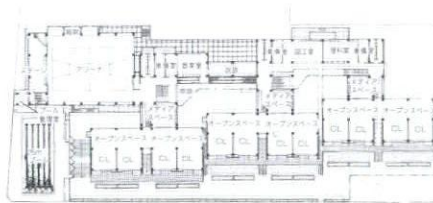
特別教室に求められる機能の類似性

特に、小学校の場合、特別教室に求められる機能はそれほど高度なものではない。実験・実習の内容がそれほど複雑でなく、例えば理科教室に求められる熱源は、カリキュラム上、そのほとんどがアルコールランプで済む内容である。家庭科の調理実習にしたところで、例えば、家庭でのすき焼き鍋などで用いられるテーブル式コンロでも充分こ

多目的ワークスペース



教科別の特別教室とは別に、2学年のまとまり毎に多目的な実習スペースを設けた事例



東京都宮前小学校：2学年のまとまり毎にワークスペースが設置された事例

ワークスペースと一体化された特別教室クラスター



モール状のオープンスペースに特別教室が連続する

音楽以外の特別教室を群として集め、明瞭なクラスターを形成すると共に、共有スペースとしてのワークスペースと一体化して計画した事例



埼玉県辻小学校：ワークスペースと一体化された特別教室群

学校施設整備指針

文部省が示す学校施設の計画・設計上の指針であり、このほど約20年ぶりの大改訂があった。1992年に小学校施設整備指針、中学校施設整備指針が同時に発表され、ついで、幼稚園、盲・聾・養護学校、高等学校と出版されている。

学校施設整備は設置者である市町村に委ねられており、この指針は強制力、規制力は持たないが、新しい時代の学校施設の在るべき姿について見解を示し、企画、基本設計、実施設計の各段階で留意すべき重要事項について解説している。

特に、1) 教育方法の多様化・弾力化や教育内容の高度化に対応できる高機能な教育環境の在り方、2) 地域社会の中での学校の在り方、3) 児童・生徒の生活環境としての学校の在るべき姿、などに詳しく言及している。近年の教育改革の動向にも対応し、旧来の画一的な校舎の姿をうち破ろうとする姿勢が認められる、革新的な内容となっている。

この指針改訂に併せ、(文部省) 小中学校校舎補助基準面積の見直しも進められ、補助基準面積が旧来のものに比べ平均で18%程増加することになった。

なせるような学習内容が多いのである。類似性は多い。大きなテーブルがある、水道があり流しが使える、電源が豊富にある、熱源がある、床が耐水性で少々の水のこぼれや細かいゴミが発生することを気にしなくてよい、などである。こうした共通性を生かし、多様な実習活動を行うスペースと考えれば、さらなる活用ができるはずである。

教科の枠組みは不滅か?

この点も今後の学校計画にあたって、一度はじっくり考えてみたい。例えば、前回の学習指導要領の改訂では小学校低学年の社会・理科が廃止され、生活科という教科に統合された。実習的、体験的な学習が重んじられ、児童の生活経験を主体とした教科に生まれ変わったのである。そして、今次の改訂における「総合学習」の創設である。これも各学校、各教師、そして児童・生徒個々人の様々な創意工夫を重んじる総合的かつ実習的色彩が濃い時間帯である。こうした教科の再編成、統合は今後、今までにない早さで進んでいくだろう。その度に新たな特別教室をつくることになるのだろうか。そんなことにはならないだろうし、そうした発想で学校環境を考えるべきではない。

特別教室の弾力化

学校計画にあたって、特別教室の弾力化は今後大きなテーマになろう。そして、総合学習の正式な位置づけがこれに拍車をかけることも予想される。その方策には様々なものが考えられるが、

1. 教科別の特別教室を解体し、例えば学年別の実習スペースとして再編成する。この学年実習スペースを学年オープンスペースと連動させる計画とする
2. 学年スペース廻りに簡単な実験・実習ができるスペースを付属させる
3. 特別教室をオープンスペースと連動させて計画し、多様な学習形態や弾力的な集団編成に対応しやすい計画内容とする
4. 特別教室内部の実験・実習机を床に対して固定しないで、フレキシブルな使い方ができる編成とする

などが考えられる。特別教室については、もっと多様な試みが登場してもよいと思うのである。

学年別の多目的特別教室



学年オープンスペースと学年特別教室が一体となった環境



ランチスペースでの調理実習



神奈川県大磯小学校2階平面図
S=1:3000

3階平面図

特別教室のフレキシビリティーの追及



テーブルの配置が様々な組み替えられる理科実験室
(愛知県緒川小学校)



床のコンセントビッドに連結して用いる可動流しテーブル
(富山県福光東部小学校)

家具・設備を可動式にして
フレキシビリティーを高めた試み



Sutton Centre Community Comprehensive School

イギリスのコミュニティスクールの典型的事例として、「Sutton Centre Community-Comprehensive School」を紹介する。

「Sutton」とは街の名前であり、イングランド中西部 Nottingham 州にある人口3万程度の小さな街である。「Centre」とは文字通り街の中心地にあるという意味で、この施設は街の目抜き通りのショッピングセンターに面して建てられている。「Community」とは、これも文字通りこの学校が広範な住民の生涯学習施設としての「Community School」であることを意味している。そして最後に、「Comprehensive School」とは、この学校が義務教育施設としての5年制中等学校でもあることを示している。この学校は、コミュニティカレッジ（リカレント教育を主とする）であり、コミュニティスクール（生涯学習講座を主とする）であり、地域のスポーツ・娯楽施設であり、そして義務教育中等学校でもある。これらが渾然一体となって、街の一大文教センターを構成しているのである。

渾然一体となった施設構成

ショッピングモールを抜けるとこのセンターに行きあたる。中に入ると驚く。アイススケートリンクやボーリング場、アスレチッククラブや若者のためのユースクラブ、高齢者のデイセンターや身障者のデイサービス施設、託児所まであり、そうした大規模な複合施設のなかに公立（義務教育）の中等学校がとけ込んでいる。学校教育ゾーンとその他の生涯学習ゾーンとの間に明確な区切りはなく、運営も全体を一括して取り仕切る校長の下、渾然一体となってなされている。ここでは、中学生が通りすぎりの高齢者の車椅子を押してあげている光景などがごく自然に見られるし、コミュニティカレッジのリカレント講座の授業が終わると、次の時間には引き続き同じ教室で Comprehensive School の授業が行われる、などの姿はごく当たり前のこととして受け止められている。

そして、筆者にとって嬉しいのは、そんな一角にパブ（イギリス風居酒屋）があることである。もちろん、夕方5時以降しか開かないが、スポーツで汗を流したり、講座の勉強を終えた後、ちょっと立ち寄り、ビールでのどを潤しながら談論風発である。時に勤務を終えた校長や教師も立ち寄り、教育論に花が咲くといった光景もみられる。事

Sutton Centre Community Comprehensive School 1976年



街のショッピング・モールの中にこの学校はある



アイススケートリンクがある



若者の集う場所/ユース・センター



身障者デイセンター



老人デイクラブ



そして……学校の中にパブがある！

Comprehensive School イギリスの中等学校の仕組み

イギリスにおける（義務教育）中等学校を「Comprehensive School」と呼ぶが、直訳すると「統合制中等学校」ということになる。それまでは初等教育終了後、大学進学を目指す「Grammar School」、卒業後職業に就くことを前提とした「Secondary Modern school」などに振り分ける仕組みになっていたが、1970年代にこれらを進路・資質等に関係なく生徒を受け入れる「Comprehensive School」へと統合する改革が始まり、現在のイギリスではほとんどの中等教育がこれによって行われている。5年制であるが、多様な選択講座のメニューを持っていることが特徴である。入学当初は必修のメニューが多いものの、年次の進捗と共に職業・実技的な科目を含む多様な選択講座から自らの興味・関心や適性、進路にあわせて時間割を選択し、次第に専門性の高い授業を受けられる仕組みになっている。多様な生徒のパーソナリティに対応しようとの仕組みである。

我が国が現在試みようとしている「6年制中等学校」や、すでに取り組みが始まった「総合学科高校」の原型がここにあるといえる。

実、何回目かの訪問の時、私はここで校長先生にビールをごちそうになった。

生涯続く学習のためのコミュニティスクール

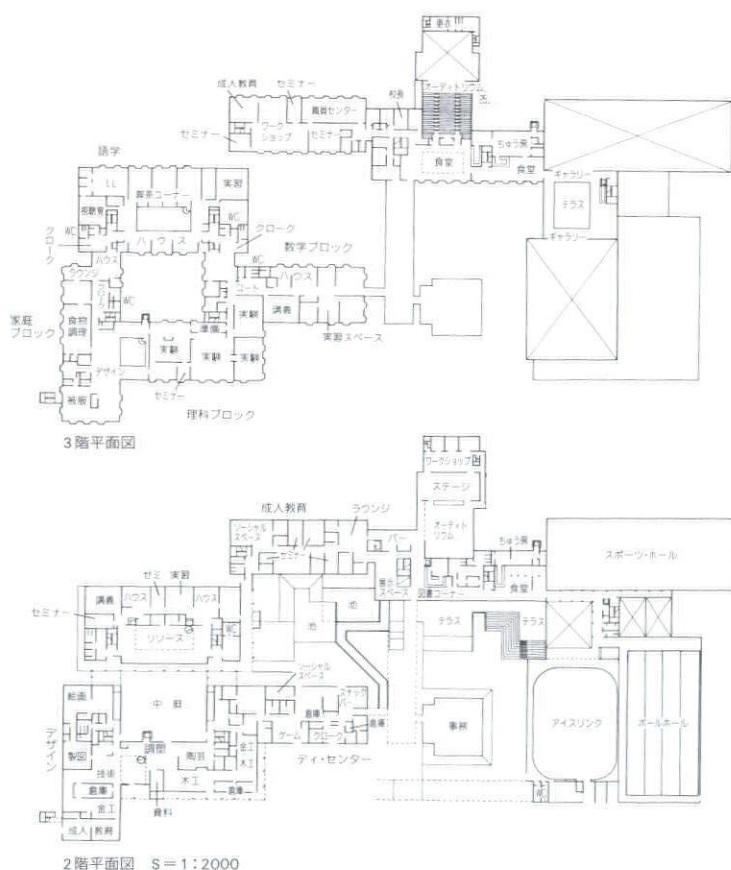
「学ぶ」営みは「学校教育」のみに止まるものでなく生涯続くものである。これが来るべき生涯学習社会の最も基本的な理念であろう。そして、「学校」とは学ぶ意志のあるものが集う場であり、「Sutton Centre Community Comprehensive School」ではこのことがきわめて自然に受け止められていることに気付く。中・高校生から成人、高齢者まで、様々な学習機会を求めてこのセンターに集まってくるわけだが、こうした多様な階層の学習者が集まり、交流することから、互いの理解と触発が深まり、新しい学習活動への動機付けも起こることになる。また、誰もが「自分たちの街の学校」に関心を持ち、共に育てていこうとする気運も生まれる。

さらに、集合化、複合化のメリットも見逃せない。学校単独では持ち得ない、また、社会教育施設単独でも持ち得ない充実した施設・設備を共有でき、そして利用効率も上がり、かつ、楽しい賑わいも生まれる。こうしたスケールメリットもコミュニティスクールの大きな利点である。

なぜパブがあるか？

どの「Comprehensive School」にも必ずパブがあるというわけでもないが、一角にパブがあるコミュニティスクールは、イギリスの中等学校以上では決して珍しいことではない。イギリスにおける小学校は一般に小規模で、かつ、小さな子供のスケールにあわせてデザインしてあるので成人利用に向きにくいということもあってか、イギリスでは特に中等学校以上で大規模なコミュニティスクール化を図るケースが多い。そして、ここにパブを置くのは深い意味はなく、とにかく人々に集まってほしいからであり、また集まってくる人々のためにパブが必要になるからに他ならない。学習・教育というと何か堅苦しく厳格なものと考えがちな我が国に対し、イギリスでは学ぶことが生活を楽しむ手段のひとつともなっているようである。

集まって学ぶ、そしてそこに、集まって語り合うためのスペースとしてパブもある。彼らにとっては当たり前のことなのかもしれない。



リカレント講座



教科教室型の中・高等学校



学校の図書室は地域図書館でもある



学校複合化とコミュニティスクールへの道

地域社会の拠点としての学校

今次の中央教育審議会の答申（1998年9月、今後の地方教育行政の在り方について）は、学校の自主性・自律性の確立を強く求めている。画一的・均質的になりがちであった我が国の公立学校の在り方に対し、地域社会の実状やニーズにあわせて各学校が特色ある教育活動を展開するよう促している。地域住民の学校運営への参画も重要なテーマとして取り上げられており、学校評議員制度の設置なども提案されている。

学校施設の在り方にも触れており、「地域コミュニティの拠点としての学校の活用」の項で、・学校管理体制の整備、教室・体育館等を活用した住民の交流・学習設備の整備、学校体育施設の社会体育との共同利用化などの開かれた学校のための基盤整備を進めること・地域コミュニティの拠点として学校等を活用するため、学校の新增築や学校の統廃合に伴う校舎の設計などに際して、地域住民や学校の意見を参考にし、地域住民による利用が可能となるような施設として建築するなどの工夫を講じること

と述べている。この種の答申が学校の設計・デザインに具体的な注文を付けることも珍しいことと言える。

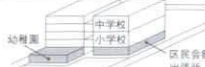
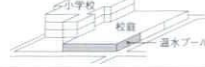
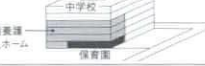
言うまでもなく、学校は最も数が多い、そして、地域社会に最も密度高く分布している地域公共施設である。コミュニティにとって求心的な役割を果たす施設を見つけようとすると、それは学校以外にないことに誰もがすぐ気づく。来るべき生涯学習社会において、公立学校が基幹的な役割を果たさざるを得ないことは議論の余地がない。

閉鎖性を強めてきた日本の学校

一方、戦後の日本の学校は閉鎖性を強めてきたとの客観的情勢がある。学校は部外者の立ち入りを嫌い、聖域としての性格を帯びているようでもある。神聖なる教育行為が、静かで閉ざされた場所で粛々と営まれる。学校はそんな場所としてイメージされていないか。あらかじめアポイントをとっておかないと、ちょっとぶらっと立ち寄って授業を見せてもらうなどは、とても許してもらえそうにない雰囲気を持っている。地域住民にとって敷居の高い聖域なのである。

だが、実際は学校開放が盛んに行われている。ほとんど例外がないと言っている。この意味で地域住民の活動に一定の寄与をしているとみることもできるが、これは夜間や休日に限られ、学校現場はほとんどこれにタッチしない仕組みにおいて成立している。

学校を中心とした地域公共施設の複合化事例（東京都区部の例）

系	施設種類	典型事例：施設構成	主たる複合施設
教育系施設	学校教育系	台東小・下谷中 	小・中学校 幼稚園 国際教育センター 帰国子女センター
	社会教育施設	和泉小 	図書館 社会教育館 児童館 公民館
	社会体育施設	赤坂小 	屋内温水プール 社会体育館
福祉系施設	特別養護老人ホーム	晴海中 	特別養護老人ホーム 老人保健施設
	高齢者通所施設 デイセンター	湯島小 	高齢者デイケア 高齢者デイサービス
	高齢者生涯学習 在宅サービスセンター	根津小 	高齢者 カルチャーセンター 福祉作業所
	公園	杉並第一小 	



複合化された屋内温水プールでの水泳授業の光景
（東京都上野小学校）



学校に複合化された地域図書館で本選びをする児童・生徒
（東京都日本橋小学校）

インテリジェントスクール

臨時教育審議会で登場した、生涯学習都市の中核となるべき「学校」の性格を言い表した用語（和製英語）。

高度に情報化された社会環境の中で学校が大きく取り残されつつある現状に対して、地域社会の中で中核となるべき学校施設が、高度に情報化され、生涯学習拠点、情報拠点として生まれ変わるべきであるとの主張がそこに込められている。学校が、従来の姿のままの閉鎖的な単独の学校として在るのではこうした高機能化に対応できないとし、学校以外の生涯学習施設と積極的な連携を図るべきであるとの主張もなされている。このことから、地域施設群と複合化される学校の姿をインテリジェントスクールと呼ぶこともある。

1990年に文部省から「文教施設のインテリジェント化」と題する報告書が発表されているが、91年に東京都台東区に開校した区立上野小学校は、その具現化の第1号である。

生涯学習社会という背景もあり、地域公共施設と複合的に建設される公立学校の事例はその後激増している。

イギリスのコミュニティスクールが、平日の日中から生涯学習講座で賑わっているのとは大きく様相を異にする。また、ほとんどのケースが登録団体への貸し出しであり、自由な個人の利用は許されていないのが現状である。

今、夜間・休日の場所貸し的な開放を超えた、地域と学校の大胆な融合が求められている。

学校複合化の進展

こうした全般的情勢とは裏腹に、しかし、近年学校の複合化が進展しつつある。公立小・中学校と生涯学習施設が、または高齢者福祉施設が一体的に建設されるケースである。背景には、

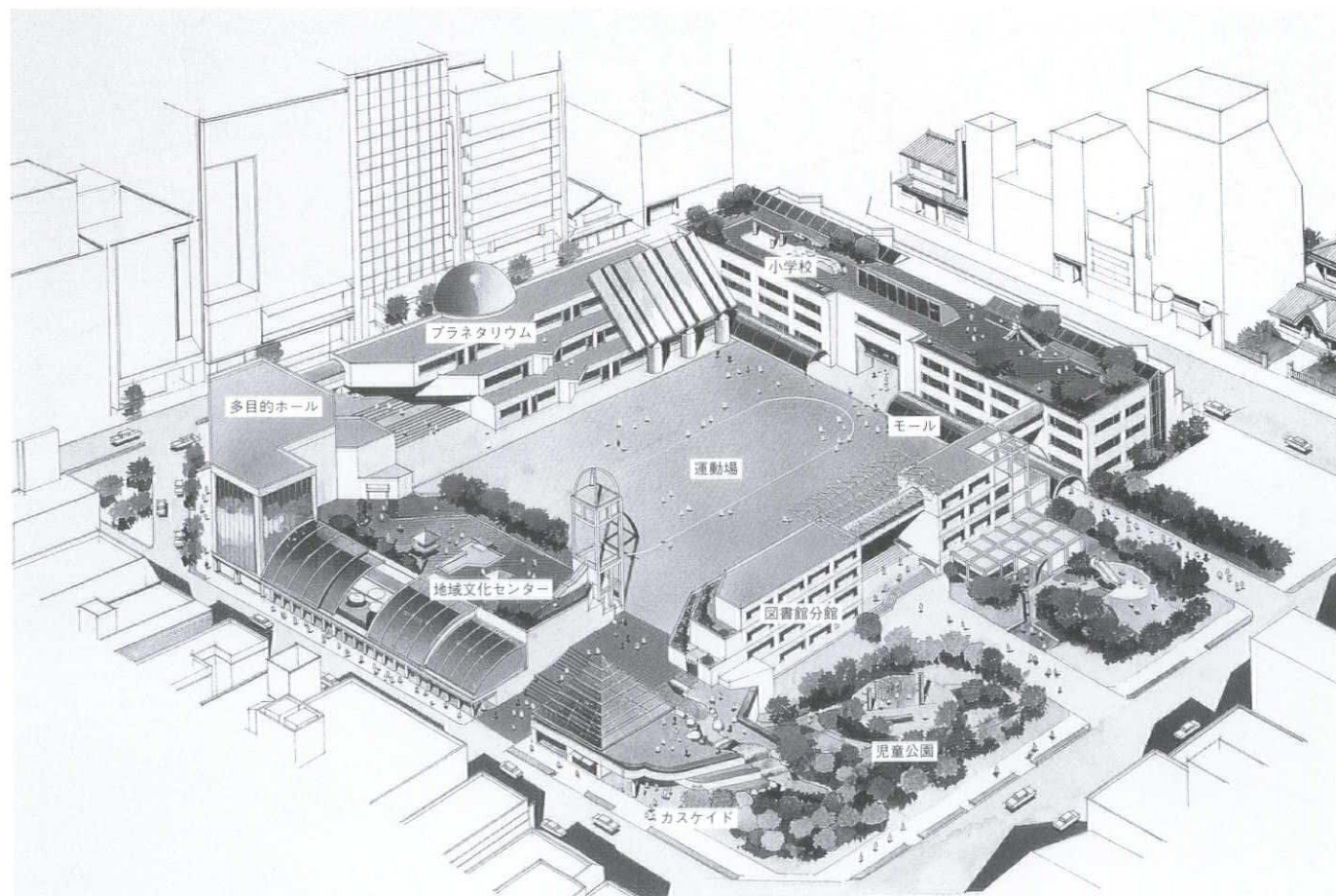
1. 児童・生徒数減少による学校統廃合の顕在化
2. 生涯学習ニーズの高揚による施設需要の増大
3. 高齢社会における高齢者施設整備の緊急的必要性

などがある。特に、90年代に入ってから増加傾向が著しい。いわば外圧に迫られての複合化の進展であるが、学校が地域社会に対して閉鎖的なままでは生き残っていけないことを暗示しているようでもあるし、そこに学校教育と生涯学習が融合し、地域社会の総合的なセンターへと脱皮していく道筋の可能性を見たいとも思うのである。

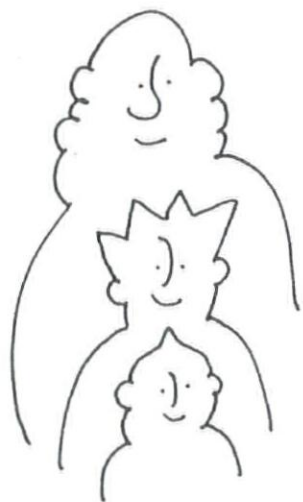
複合学校の風景

小学校と地域図書館、地域社会教育館、屋内温水プールなどが大規模に複合化された都心区の「学校」などでは、例えば、図書館利用学習の時間に児童がエレベーターを使って地域図書館に昇っていき、実に楽しそうに本選びをする。学校の小さな図書室は本の数も少ないが、こちらは豊富である。午前中の図書館は訪れる人もまばらで、迷惑をかけることも少ない。司書の人も親切に対応してくれ、先生との自然なティームティーチングが成り立っている。放課後、帰宅前に図書館に寄り道していく児童が増えるのも自然な成り行きである。

図書館や社会教育館に日中訪れる成人にしても、自然に学校の光景に触れることになり、関心や理解を持つことに役立っているはずである。同居していることで接触がおり、交流が始まる。我が国での学校の地域化は、こんなところから始めるしかないとの感慨である。



都市型インテリジェント・スクールのイメージ／出典：『文教施設のインテリジェント化について』（1990年3月号、文部省）



高齢者デイサービスセンター

学校計画に関する論述の中で高齢者施設について記すのはやや場違いかもしれないが、「高齢者デイサービスセンター」について若干の解説をしておきたい。

高齢者デイサービスセンターとは、障害や痴呆を抱えたり、虚弱で自宅に引きこもりがちなお年寄りに外出の機会を与え、生涯学習やリハビリ、給食・入浴サービスなどを提供する福祉施設である。残存能力を維持し、社会参加の機会を増やすことで在宅での生活継続を支援しようとするねらいであるが、介護に従事する家族の負担軽減の意味も大きい。新ゴールドプラン（99年度末までの高齢者施設緊急整備目標）では、全国に1万7千ヶ所のデイサービスセンターを整備するとしている。今日、全国の公立中学校が約1万2千校であり、これを上回る密度で高齢者デイサービスセンターのネットワークを構築する必要があることがわかる。これにしても緊急的な目標であり、サービス頻度や密度を将来的に増していく必要があることなどを考えると、例えば小学校の圏域に匹敵する施設密度が必要になるとの見解もある。いずれにせよ、21世紀における最も基幹的な地域公共施設のひとつとなることが想定される。

学校と高齢者デイサービスセンター

言うまでもなく学校も最も基幹的な地域公共施設であるが、児童・生徒数は長期的な減少傾向にある。しかし、地域社会における学校の数をこれに比例させて減らすわけにはいかない。学校統廃合もそろそろ限界に近づいており、また、学校の消滅は地域社会の崩壊につながりかねない。一方、高齢者の数は増え続けており、今や我が国は世界に冠たる高齢社会である。4半世紀後には65歳以上高齢人口が全人口の4分の1を超える。一方の基幹的な地域施設であるデイサービスセンターの整備は急務である。しかも、将来的な姿としての両者のサービス圏域の大きさ、地域社会における施設密度はほぼ同等であると想定される。従って、両者を融合させてはどうかとの発想も生まれやすい。事実、学校と高齢者デイサービスセンターの複合的な建設の事例は、この10年間増え続けている。

先駆的な事例としての京都府宇治市のケースを訪問してみた。児童数減少によって生じた空き教室を1棟にまとめ、大規模なモデルによって高齢者デイサービスセンター



空き教室1棟を高齢者デイサービス・センターに改造した小学校（京都府小倉小学校）



小学校の一角に設けられた高齢者デイサービスセンター。昼休み、児童が訪れる（京都府小倉小学校）



デイサービスからの帰途につくお年寄り。児童が見送りに来る。「おじいちゃん、元気だね」（京都府平盛小学校）

に改造している。当初、やむを得ずの措置との認識が強かった。しかし、訪れてみて驚く。昼休み、児童たちが三々五々、デイサービスを訪問する。おじいちゃんの話し相手になったり、おばあちゃんに折り紙を教わったり。デイサービスが終了して帰宅の途につく時間、女の子たちが見送りにきて頬ずりをして別れを惜しみ、再会の約束をする。何ともほほえましい、自然な交流が息づいているのである。地域社会の穏やかな風が、学校の中を吹き抜けているような感慨を持った。

中学校と特別養護老人ホーム

特別養護老人ホームは在宅での生活が困難になった障害や痴呆を持つお年寄りの24時間生活施設である。彼らにとっての事実上の「終の棲家」である。この特別養護老人ホームを公立中学校と複合的に建設する事例も登場している。計画段階では強い懸念の声があったことは当然かもしれない。しかし、スタートしてみると、当初小人数の女子生徒がボランティアとしてホームを訪れるようになり、その後、これがクラブ活動まで発展している。お年寄りの誕生日会に慰問に訪れたり、学芸会や運動会に招いたりとの全校的交流にまで発展した。核家族でお年寄りと接触する機会を普段持たない生徒達にとって、貴重な体験学習の場であるといえる。

お年寄りと子供

孤立しがちになるお年寄りがはたつらつとした子供と同じ屋根の下で生活していけることは、ずいぶんと勇気づけられることに違いない。グラウンドでの子供たちの歓声が伝わってくるだけでも、施設の雰囲気はぐっと和らぐ。子供たちにとって、障害や痴呆を抱えながらも懸命に生きていこうとするお年寄りの姿を間近に見ることは、それ自体が貴重な社会学習のチャンスと言える。いたわりの心、尊敬の心を自然に醸成できる環境である。

最も基幹的な地域公共施設としての学校と高齢者施設が手を携える。連携し、複合化される。これが21世紀の学校の真の姿かもしれない。文部省も、こうした学校と高齢者施設の連携に前向きになっており、前述の空き教室の高齢者施設への転用などは随分と簡略な手続きでできるようになってきているし、両者を複合的に建設するケースなどに対し、手引き書を作成し教育委員会等に提示するまでに至っている。

余裕教室の活用計画と学校のリモデル

小学校児童数は1981年のピーク時以来激減傾向にあり、これに伴って大量の余裕（空き）教室が発生している。97年度現在で公立小・中学校には約5万7千の空き教室があるとみられており、全国平均で、保有する教室の12%程にあたる。すなわち、平均的な姿としてどの学校でも1割以上の部屋が空いていることになるが、これを施設レベルの向上に向けた新たなストックの獲得とみることもできよう。

その「有効」利用の方策は、会議室や資料室など看板を掛け替える（消極型）、食堂や低学年図書室などに模様替えして使う（模様替え型）、廊下との間仕切りを撤去しオープンスペース、ラーニングセンターなどの新しい教育スタイルのための空間として活用する（積極型）、などがある。

一方、こうした内向きの使い方の他、学校の一部を大規模なリモデルによって高齢者サービスセンターなどの地域施設として生まれ変わらせるなどの事例も少なからず登場してきている。ゆとりのスペースを新しい時代の要請に対応してどのように生まれ変わらせるか。今、それが問われている。



特別養護老人ホームと複合化された公立中学校
(東京都戸越台中学校)



中学校の生徒たちが七夕の飾りつけを作り、老人ホームに慰問に訪れた（戸越台中学校）



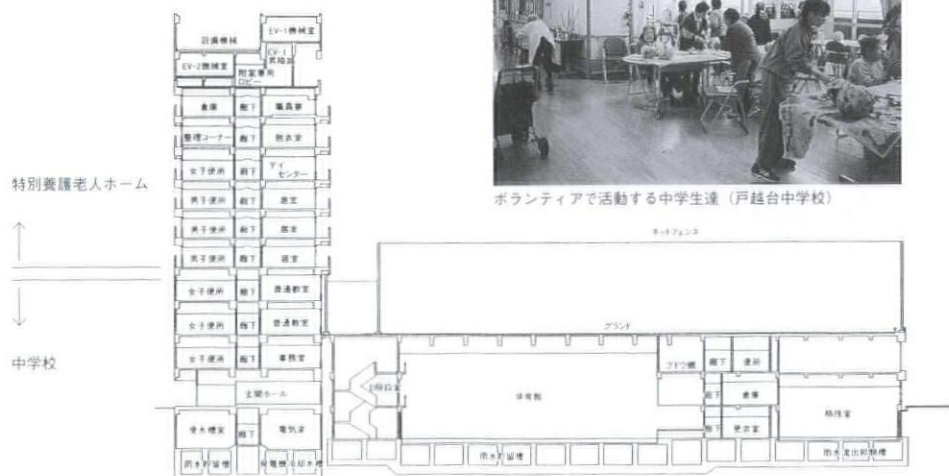
保育所と中学校とが複合的に建設された特別養護老人ホーム



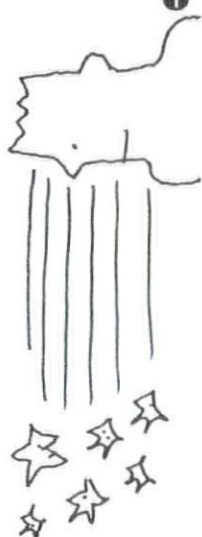
ボランティアで活動する中学生達（戸越台中学校）



空き教室を改造して設けられたシルバー大学の授業風景



断面図（戸越台中学校）



Schools within a School

アメリカの学校① 学校編成システムの可能性1

Schools within a School

文字通り、ひとつの学校（体）の中に幾つかの学校（体）が存在するかたちを呼ぶ。アメリカやイギリスにはかなりの事例があるが、我が国でこうしたケースにお目にかかったことはない。学校という組織体をいかに編成していくかの方法論について、適正な学校規模という概念を引きながらドラスティックな試みを行っているのがこの「Schools within a School」である。

学校規模について

我が国では、公立学校のクラス規模が計画的にコントロールされることはほとんどなく、計画的に建設されるニュータウン地域でもなければ一般に成り行き任せで決まっているのが実状である。しかし、学校規模は社会的集団としての学校の性格や、計画の方向性を決定づける大きな要因である。例えば、小規模学校を取り上げ、そのメリット・デメリットを簡単に整理してみると以下ようになる（これを裏返せば、大規模校のデメリット、メリットにもなる）。

メリット

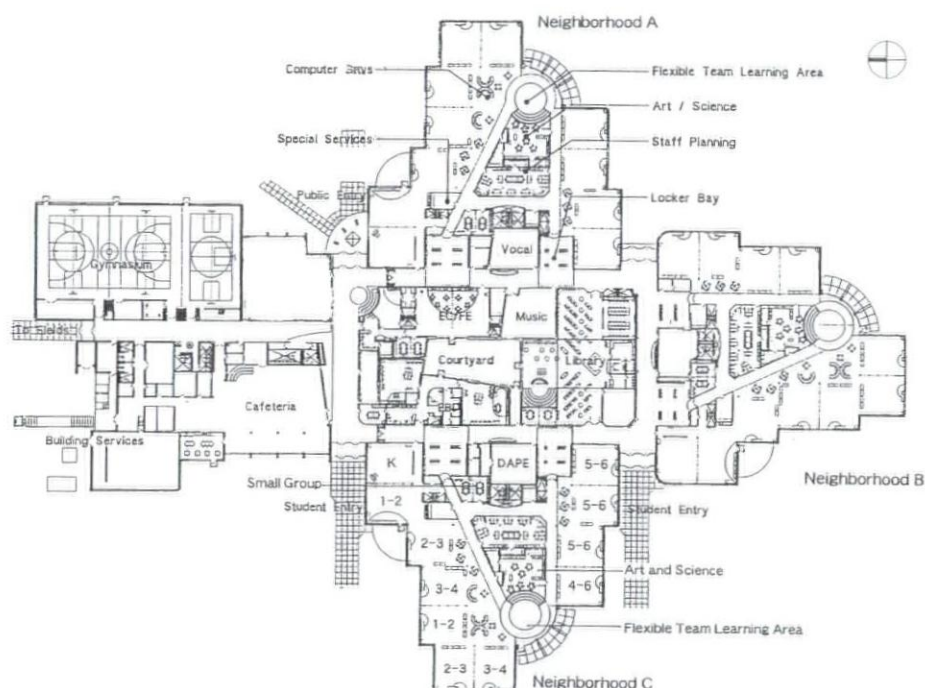
1. 教師と児童・生徒のクロスコンタクト（親密な人間関係）が形成しやすい
2. 親密な人間関係や穏やかな社会集団のなかで、非行や問題行動が発生しにくい
3. 例えば運動会や部活動などの活動場面において個々の児童・生徒が主役として主体的に振る舞う機会が増える

デメリット

1. 特別教室や機器・設備などを充実させるににくい。教職員数が少なく、多様なパーソナリティのスタッフを揃えにくい
2. 児童・生徒間の人間関係が固定しがちで刺激が少なく、互いの評価が固定しやすい
3. 活動場面の数が相対的に少なくなり、多様な機会に参加できるチャンスが大規模校に比べて減る

「Schools within a School」とは、まさしくこの、大規模校と小規模校の双方のメリットをとった学校体をつくろうとするものである。

Valley Crossing Elementary School 1996年



Valley Crossing Community School

典型的な事例としてアメリカの「Valley Crossing Community School」(Minnesota, 1996年)を解説する。全校900名ほどの小学校である。これを約300名ほどの3つの小学校に分割し、それぞれを「Neighborhood A、B、C」と呼んでいる。それぞれに幼稚園から小学校6年生が含まれ、あたかも独立した小規模小学校のようである。それぞれに権限を与えられた副校長がおり、全体をひとりの校長が統括する。各「Neighborhood」のカリキュラムや学年歴は異なり、教育運営上の方針も異なる。学習者の側が選択し自分の所属する「Neighborhood」を選んで通学することになる。各「Neighborhood」の中には完全なオープンプランになっているが、全体の空間規模が小振りで、かつ適切なスケールに分節されており、閉じた小部屋なども用意されている。オープンプランという意味では70年代のアメリカを風靡した大規模オープンスペースの学校と類似しているが、スケールがヒューマンにできており、活動する人数も少ないことからぐっと落ち着いた印象を与える。児童数が少ないので、教師と児童との関係も親密であり、行き届いた指導ができる。一方、学校の中央には大規模な図書室(ラーニングセンター)や音楽教室、カフェテリア、体育館などがあり3つのMini-Schoolの共有施設となっている。こちらの方は、大規模のスケールメリットを生かし、設備・備品、蔵書数、コンピュータ台数などは大変充実しているのである。

学校規模などにはお構いなしに、常に画一的な学校を何の工夫もなく作り続ける我が国の現状に照らし、こうしたドラスティックな方法論を公立の小学校にも適用しようとするアメリカのチャレンジ精神には打たれるものがある。

「Alternative School」と「Mini-School」

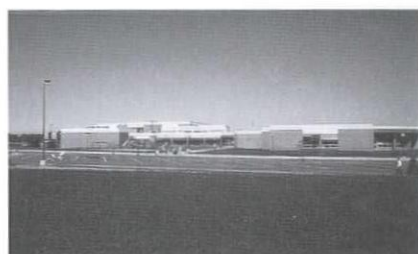
これと似た概念の学校の仕組みとして「Alternative School」と「Mini-School」がある。アメリカの大都市などで試みられている方法論で、多くの実践がみられる。大都市における学校の大規模化への反省から生まれているが、こうした学校でドロップアウトや非行が頻発したことに端を発している。「Alternative School」は、文字通り学習者にとって個性ある学校の選択が可能なシステムをつくらうとする仕組みであり、「Mini-School」とは学校規模を小規模化し、児童・生徒と教師の関係を親密化を図ることをねらいとする概念である。

70年代のアメリカの
オープンスクール

1970年代のアメリカではきわめてドラスティックな学校改革の動きがあった。巨大なスペースフレームで包まれた大規模オープンスペース学校である。ひとり一人の児童・生徒の個別的な学習アクティビティを基調とし、様々な教育ニーズの変化に対応できる仕組みとして登場した。多くの学校が建てられ、我が国にも衝撃をもって紹介された。その理念の新しさはともかく、落ち着いたのさ、集中を妨げる騒音などの問題点も指摘され、その後衰退し、別な形へと発展を遂げるようになった。



1970年代のオープンスクール/
Fodrea Community School (Indiana, 1973年)



平屋建の校舎外観



各Neighborhoodの入口・ロッカースペース



各Neighborhoodの学習スペース



小さなスケールで展開していくオープンスペース



クラスのまとまりと連続



各Neighborhoodに職員室がある



学校中央には充実した構成のLearning Center



Learning Centerには専属の教師がいる



ハウスの学校 アメリカの学校② 学校編成システムの可能性②

Black Hawk Middle School

「House」システムを説明する格好の素材として、アメリカの「Black Hawk Middle School」(Minnesota, 1994年)を紹介する。全校1200名規模の公立中学校である。

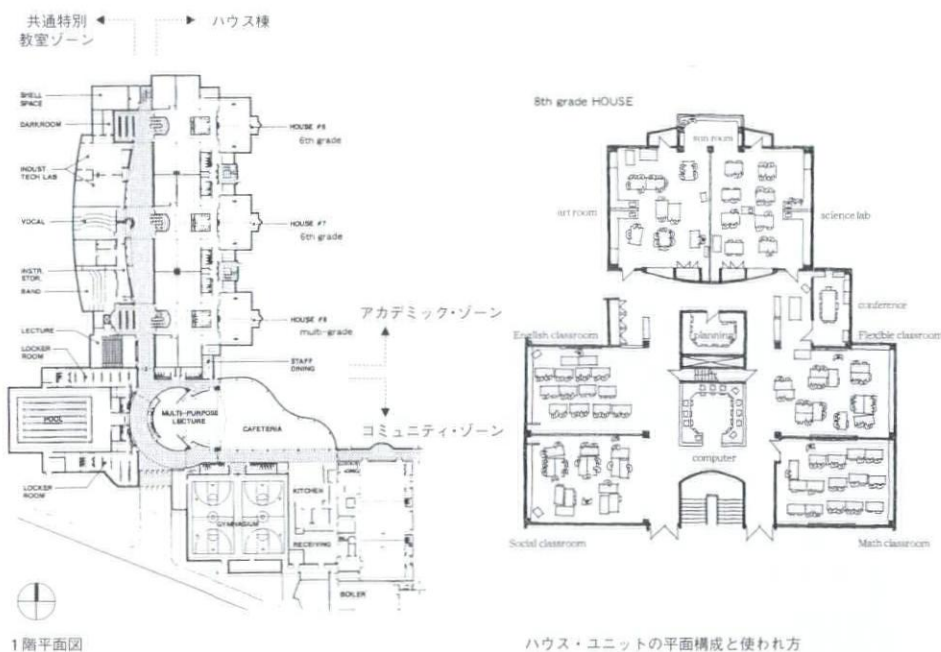
この学校に限らず、アメリカ、イギリスなどでは中学校以上では教科教室型運営を前提とした学校計画が行われるのが一般である。各教室の教科の専門性を高め、その教科に関係した多様なメディア類を豊富に揃えて置くためにはこの運営方式が最適であるとの認識である。一方、教科教室型運営では、毎時間の教室移動が必然的に伴い、小・中規模校ではともかく、大規模学校では相当な混雑を覚悟しなければならない。また、生徒の居場所(ベース)が安定しにくいという困難さもある。

この「Black Hawk Middle School」の「House」制は、こうした大規模校の運営上の困難さを学校分割のシステムで打開しようとする実践例である。3階建てのそれぞれのフロアを各学年に割り当て、さらに、この学年の中を3分割してそれぞれ6クラス(1クラス25名以下——従って120～130名程)の集団を形成する。これを「House」集団と呼び、それぞれに明確な学習・生活拠点を与えることにしている。図に示すハウスユニットがそれで、この中で基幹的な教科の教科教室型運営が完結するように仕組みられているのである。

ハウス・ユニット

この「Black Hawk Middle School」のハウスユニットのプランニングは実に巧みである。中央に、いつでも誰でも自由に出入りでき、アクセスできるコンピュータラボが置かれ、これを中心として6つの教室またはオープンな学習スペースが取り巻く。その他、ハウスの教師たちの研究室、小人数授業やコンサルティングができる閉じた小部屋も用意されている。この6教室とは、数学、英語(国語)、社会、そして理科、美術などとなっている。すなわち、単調な教室が羅列されているのではなく、ハウスの中で教科教室型運営ができるようになっており、ハウスメンバーは基幹的な教科の時間を自分たちのテリトリーの中で過ごすことができるようになっている。全体が、120～130名と集団規模も小振りで、落ち着いた雰囲気であり、生徒同士、または生徒と教師の人間関係も親密である。授業間の教室移動も狭い範囲で、静かな内にあつという間に終わる。文字通りのメンバーたちの「家」である。

Black Hawk Middle School 1994年



共通特別教室ゾーン

このハウス棟と大きな吹き抜けのコンコースを挟んで、充実した構成の特別教室棟が配置されている。音楽、家庭、技術、大講義室などである。こちらの方は、大規模学校に対して用意される特別教室ゾーンとして、きわめてリッチな内容である。音楽教室群は声楽、管弦楽、音楽鑑賞などに特化した各教室、技術教室群はコンピュータ・マニファクチュアリングも学べるような高度な実習室などである。大規模校のスケールメリットを生かし、専門性の高いスタッフや機器・設備を用意している。一般的な規模の学校では、こうした特別教室はなかなか利用率が上がらず、従って、多様な編成をとりにくいものだが、ここでは質・良とも高いレベルを維持できているのである。

コミュニティ・ゾーン

以上のハウスと共通特別教室ゾーンは、アカデミック・ゾーンと呼ばれているが、ここからさらに学校の中心、エントランスホールに出てくると、コミュニティ・ゾーンと呼ばれ、屋内温水プール、正規のバスケットコートがゆったり2面とれる体育館、広く快適なカフェテリア、大講堂などがまとめられたゾーンがある。日中は中学校が独占的に使うが、夜間や休日にはコミュニティに積極的に開放しているところから、こうしたネーミングがなされている。大人も楽しんで使える、魅力的な施設群である。

全体の構成は、ハウスから出てくると学年のまとまり、そして、大きな吹き抜けを抜けて共通教室ゾーン、そしてコミュニティ・ゾーンへと、そのシークエンスもヒエラルキカルであり、都市社会の縮図のような理解しやすさがある。

ハウスの構成

ここでのハウス集団は単学年構成になっているが、その他の事例では学年をミックスしそのハウス内で下級生から上級生までのクラスが揃っているケースなどもある。また、イギリスなどではこのハウス集団を学習集団とは切り離し、縦割りや部活動の集まりで編成し、生活集団のまとまりとする方法がみられる。

いずれにしても、適切な人間関係が保ちやすい社会的集団の編成を大規模学校の中で実現しようとする試みである。

Total Institution

トータルインスティテューション

訳が難しいが、全制的施設などとも呼ばれる。社会から隔離された空間の中で、そのメンバーの生活全般を全面的に統率することで社会化、再社会化を図る機関をさす。例えば、修道院、刑務所、精神病院などが典型的なこれにあたる。

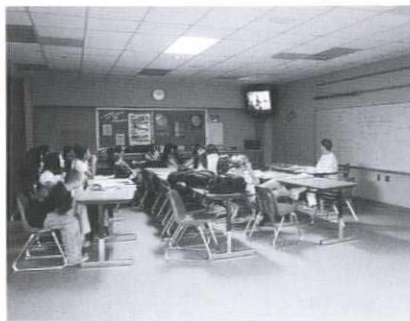
「施設症」という言葉もある。例えば老人ホーム。社会と隔離され、訪問する者もまばらである。食事やリクリエーションなども集団的、一括的。こうした一斉的な処遇が入所者の自ら生きていく力を次第に削ぎ、生活が人任せになる。しばしば、痼果がかえって進行したりすることもある。

学校という機関の閉鎖性、その全人格への働きかけ・統制、それぞれの個性よりも集団性を重んじる風潮、などからこれも典型的な「トータルインスティテューション」ではないのかとの考え方も成り立つ。こうした全制的な学校の体質が、不登校、いじめ、学級崩壊などの様々なネガティブな現象を生み出しているのではないかとも思われる。

21世紀の学校の在るべき姿は、いかにこの全制的な性格を学校から除去していくにかかっているといえよう。



ハウス中央にあるオープンなコンピュータ・ラボ



ハウス棟のセミ・オープンな授業スペース



ハウス棟内の実験・実習スペース



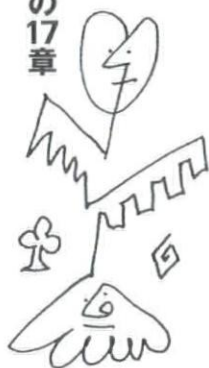
中央の吹き抜けモール（右がハウス棟、左が特別教室棟）



充実した構成の特別教室



中央の巨大なメディア・センター



教科教室型編成の中学校計画

教科教室型とは？

教科教室型運営の学校では、教室を「ホームルーム教室」の側から組み立てていくのではなく、「教科の教室」によって組み立てていく。従って、国語、社会、数学、英語などの一般教科もすべてそれぞれの専用の教室で授業が行われる。それぞれの教科教室にはそれぞれの教科に関係の深い学習メディアが充実しており、教室のつくりかたもそれぞれの教科の特性に合わせた設計がなされる。

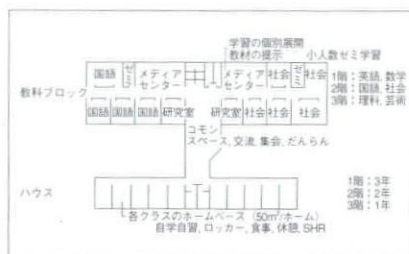
各教科の教室数は学校規模に対応した教科時間数にあわせて算出されるが、このいくつかの教室群が教科オープンスペースを中心に配置される。ゼミ教室や教科研究室（教科職員室）も置かれ、ここに来ればその教科の学習に必要な一切が揃っていることになる。この教科オープンスペースが大切な意味を持っており、ラーニングセンター、メディアセンターとしての位置づけが重要である。自主学习や小人数のグループ学習の場としての機能を持つほか、教科に関係する豊富な教材類がオープンに提示され、教科学習の雰囲気作りに寄与する。教科センターとも呼ばれ、この方式を「教科センター方式」と呼ぶこともある。

なぜ、今、教科教室型か？

長く、我が国では「教え込み型」の教育が行われてきた。閉じた教室で、黒板と教科書で、平均的な学力の生徒に照準を合わせて、一斉に教え込んでいく方式である。これには生徒をなるべく「普通教室……ホームルーム教室」に閉じこめておく方式が便利であったといえる。しかし、これからは「学びの時代」である。学びのためのメディアが必要であるし、生徒が学ぶ意欲を持ち、学びの動機づけを発見するための環境が必要である。そして、各教科の特質に適した学びの部屋やスペースが必要である。このためには、無味乾燥な、何のしつらえもない「普通教室」を羅列しておく環境では全く対応できないといえる。

小学校は学級担任制であり、教師の創意工夫で教室や学年オープンスペースを学びの環境として整えることができる。中学校以上では教科担任制であり、たとえ「学年オープンスペース」を持てたとしても、そこを特定の教科に偏した教科の学びの環境としては設けにくい。中学校以上で教科教室型運営が意義を持つてくるのはこうした点にあ

教科教室型の学校の構成と条件



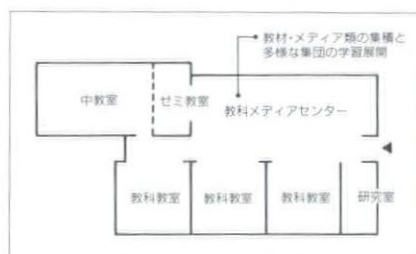
教科教室型の中学校の構成ダイアグラム



教科棟が明瞭なまとまりをもつ計画
(沖縄県具志川東中学校)

教科教室型の校舎は、明瞭なまとまりをもつそれぞれの教科の教室群と生徒の生活の拠点としてのホームベース・ハウス棟から構成される。

教科メディアセンター中心の明瞭なブロック



教科ブロックの構成



教科教室や教科研究室に囲まれた教科メディアセンター
(福島県桜中学校)

各教科ブロックは教科メディアセンターを中心として、教科教室、教科研究室、ゼミ教室などで構成される。各教科ブロック毎にその教科学習の雰囲気が整えられている環境構成が大切である。

る。欧米の中学校以上では、むしろきわめて一般的な方式であることも、付け加えておこう。

教科教室型運営の課題

教科教室型運営の学校では、一般的な学校に比べ、そのマネジメントや建築計画に工夫を要する点がある。それは、

1. 生徒の居場所、ホームルーム集団の帰属の場所について特段の配慮が必要になる
2. 時間毎に教室移動を繰り返すことになり、この生徒移動を受け止めるための建築計画的、運営的な配慮が必要になる

の2点に集約される。

1については、クラスの生活拠点としてのホームベースとハウスを構築する方法が望ましい。右欄にやや詳しい解説を施しておいたので参照されたい。2については、小規模学校ではほとんど問題にならない。筆者の経験では学年3クラス程度までの規模ならば、混雑もさほどでなく、かえって学校の中に活気が出る。教室移動が気分転換になり、教科ゾーンに入っていくことでその教科の学習をするという気構えが自然につくられるというメリットもある。移動を減らすためには、一部の教科を2時間続きにすることなどの運営上の工夫も有効である。しかし、大規模校の場合にはこうした工夫にも限界がある。この場合、前述した「ハウス制の学校」の手法を参照したい。小集団の中で教科教室型運営を行う方法で、日本的にいうと「学年内教科教室運営」ということになるのか。なぜ、教科教室型の学校は増えないか？

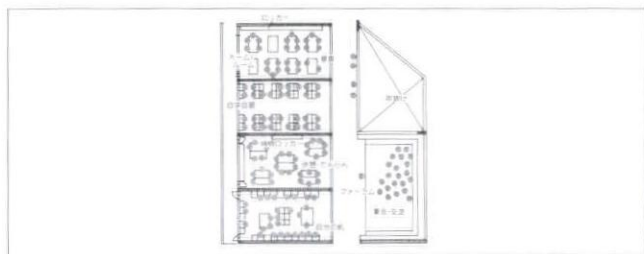
欧米ではきわめて一般的なこの方式が、日本で一般化しないのはなぜか？ 答えはきわめて簡単である。中学校の教師達が生徒を教室に閉じこめておきたいと願っているからに他ならない。いわゆる「生徒指導」とか「生徒管理」の思想である。しかし、繰り返しになるが、これからは「学びの時代」である。多くの社会情勢の変化がそれを教えている。無味乾燥な教室に生徒を閉じこめ管理だけしていれば済んでいた時代は過去のものとなりつつある。しかしやっと、徐々に意欲的な試みや実践が生まれ始めている。この後に続く事例編の中学校では、意識的に教科教室型の中学校を取り上げることにしているのも、こうした背景があることをご理解いただきたい。

ホームベースとハウス

いわゆる「普通教室——ホームルーム教室」とは、考えてみれば不思議な空間である。例えば中学校では、朝のショートホームルームに次いで国語、数学、社会などの教科の授業が行われ、授業間の休み時間のくつろぎの場所ともなり、また、給食の場ともなる。ほとんどの生活や学習がここで行われることになり、従って、特定の教科や生活行為に機能を特化させたデザインができにくい。小学校はともかく、教科担任制をとる中学校以上では、当たり障りのない無味乾燥な空間とならざるを得ない。

ホームベースとは、こうした機能の内、居場所、食事、くつろぎ、交流、持ち物の保管（ロッカー）などの生活機能だけを取り出して空間化しようとするものである。通常、クラス集団に対して与えられるが、縦割りホームなどの異年齢集団に対応することも考えられる。ここから、授業に出かけていきいつもここに戻ってくる、生徒たちの「住処」としての場所である。ホームベースを学年クラス数だけ集めたまとまりを「ハウス」と呼ぶが、これはアメリカやイギリスで試みられている「学校のハウス制」とは、やや異なった概念である。

ホームベースとハウス



ハウスとホームベース



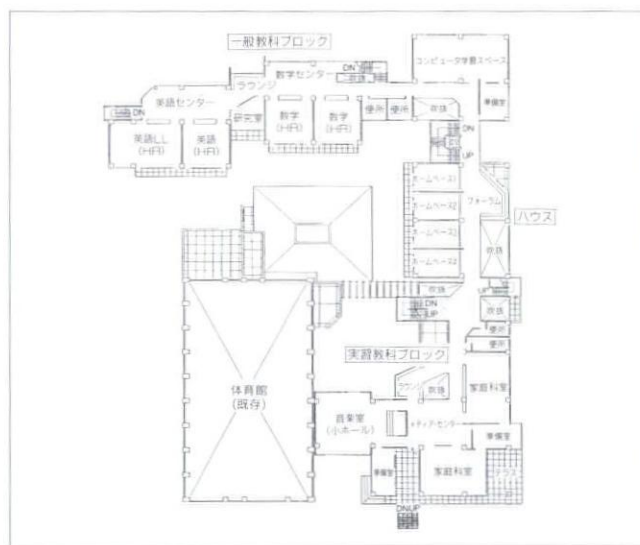
ホームベースの実例（福島県桜中学校）



授業のあい間にホームベースに立ち寄る生徒たち（宮城県岩出山中学校）

専用のホームルーム教室を持たない教科教室型運営の学校では、生徒の生活の拠点としてのホームベースの計画が大切になってくる。この他、道徳やロングホームルームなど長時間のクラス単位の活動の場の設定も必要で、例えば国語、社会などの一般教科の教室を割り当てる方法も考えられる。

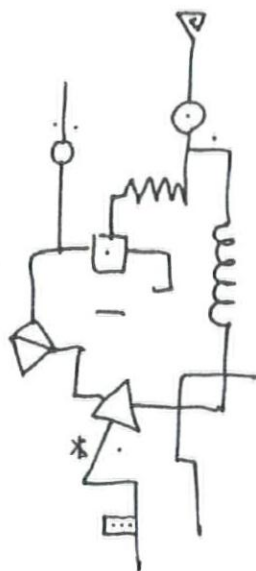
教科教室型中学校の平面構成



教科教室型中学校の構成計画例
（12クラスの中学校改築計画）

教科教室型中学校の平面構成事例。既存の体育館を残しながら教科教室棟、ハウス棟、実習教科棟などによって構成している。

総合学科高校の計画



総合学科とは？

普通科高校、専門科高校（農業、工業、商業など）に並ぶ新学科として1994年度に創設された。98年度現在すでに107校が開校されており、現在も設立が相次いでいる。文部省は、将来的に1学校区に少なくとも1校の総合学科高校を置きたいと構想しており、この意味では今後の高等学校教育の主流のひとつになるものとも考えられる。現在のところ総合学科高校には高校教育改革のパイオニア的な役割が期待されており、国としても教職員定数、施設・設備面などで格段の配慮を行っている。

総合学科設立の背景

現在、高等学校進学率は96%を越えており、この意味ではほとんど義務教育に近い位置を占めている。しかし、大量の中途退学者が出るなど、多様な生徒の個性・資質や進路に既成の態勢が対応し切れていない側面もある。総合学科は、いわば普通科、専門学科を統合した第3の学科ともいえるべき性格を有し、普通科的な科目群の他、例えば、情報、商業、エレクトロニクス、フードサイエンス、福祉などの多様な「学系」をも併せもち、この幅広い選択群の中から生徒の自らの意志によってカリキュラムを選択させることを特徴としている。そのため、中学校卒業時には自らの適性や進路を見極めることが難しくても、高校入学後、多様な学系・選択講座群の授業・実習を実際に経験してみても、学びながら自分の専門性を定めていけるメリットがある。1970年代にイギリスで始められた「Comprehensive School」の理念や仕組みに似ているが、これが5年制で行われているのに対し、総合学科高校は3年の期間で達成しなければならないという困難さもある。

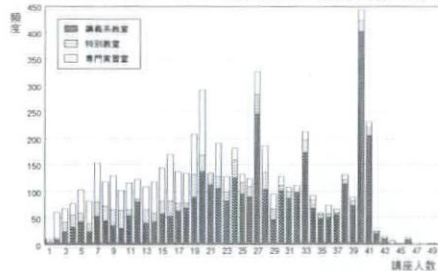
総合学科のカリキュラム

総合学科高校では、人文、理数、情報ビジネス、生活デザイン、メカニクス、健康・福祉、エコロジー、フードサイエンスなどの幅広い学系が開設され、通常、学年5～8クラス編成の学校規模に対し5～8程度の系列が用意される。この学系はあくまでも専門性を持つ科目群の総称であり、クラス集団がこの系列で組まれるわけではない。様々な学系を志す生徒が渾然となったクラスを編成し、異なった志向を持つ生徒が互いに刺激しあい理解を深めることも大切な目標とされている。

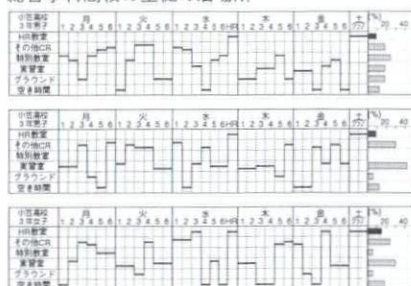
総合学科高校のカリキュラム例

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32						
1年次	国語Ⅰ			現代社会 倫理 政治・経済				数学Ⅰ			世界 史A		地理IA 化学IA 生物IA 地学IA		体育		保健 美術Ⅰ 書道Ⅰ		総合選択科目			家庭 一般		産業 社会と 人間		L H R		クラブ										
2年次	日本史A 地理A		地理IA 化学IA 生物IA 地学IA		体育		保健		家庭 一般		情報 基礎		総合選択科目												自由 選択 科目		L H R		クラブ									
3年次	体育		課題 研究		総合選択科目																				自由選択科目										L H R		クラブ	

総合学科高校における選択科目の講座人数の分布



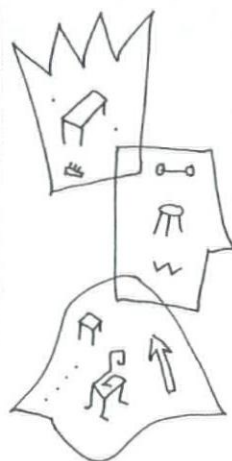
総合学科高校の生徒の居場所



ホームベースの事例



空き時間の居場所の事例



ユニットプランの編成

学校計画において、いくつかの教室をまとめてクラスタとし、これを繰り返し可能な平面型にまとめるユニットプランの計画は普遍的な課題といえる。オープンスペースを基調としたクラスルームユニットやハウス制の教室群、教科メディアセンターを中心とした教科教室ユニットなどもこうした工夫の一部である。

アメリカの小学校建築におけるクラスルームユニット

最近のアメリカで頻繁に試みられているセミオープンなクラスルームユニットについて解説したい。Vinton Elementary School (Indiana, 1994年)は、この典型的なケースである。学年4クラス編成の小学校であるが、各学年のクラスタをコモンスペースを中心としたセミオープンなユニットにまとめている。大がかりなオープンスペースを基調とした計画に比べて学年のまとまりは固く、他に対して閉鎖的である。但し、中央に学年コモンスペースが設けられており各クラスはスライディングウォールによっていつでも開けられるようになっている。各クラススペースはSelf-Contained型であり、この中で大抵の活動はまかなえるが、コモンスペースはコンピューター学習やチームティーチングの場として位置づけられている。教師のワークステーションもガラス張りの小部屋としてコモンスペースに面して設けられており、全体が学年完結型になっている。開放性を抑えたセミオープンの考え方を採用している点、学年完結型にしている点、などは1970年代の大規模オープンプランへの反省かとも思えるが、ユニット全体面積が児童ひとり当たり6㎡もあろうかと思われるゆったりした環境は閉ざされた感じを与えない。

方位へのこだわりの無さ

アメリカの学校建築のプランをみていると奇妙な感慨におそわれる。方位の呪縛からの開放といったものであろうか。様々なコンセプトのユニットプランが、方位を考慮せず理想とされる繋がりにおいてブロックプランに位置づけられていく。照明や温熱環境は人工的にコントロールされることはいうまでもない。ユニットプランの明快さはこうした割り切りに裏付けられているともいえる。いささか行き過ぎの観がないわけではないが、しかし、方位への強い呪縛から一向に脱却できないでいる日本の学校計画の現状も問題にされるべきだと思う。

Vinton Elementary School



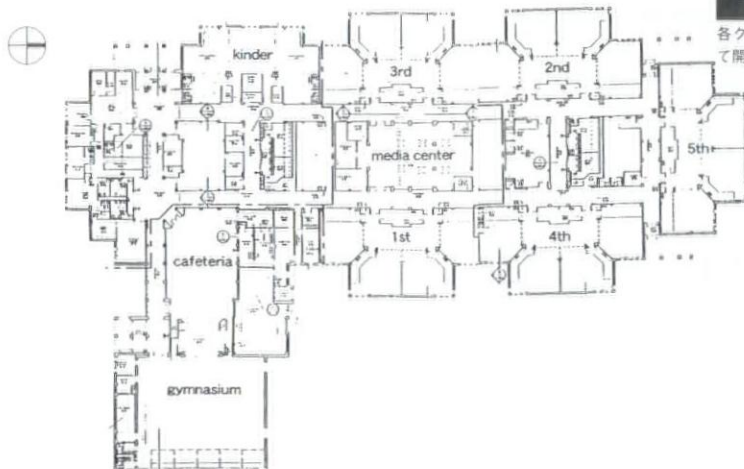
学年ユニットの平面構成



Self-contained型のクラスルーム



各クラスルームはコモンスペースに対して開かれる



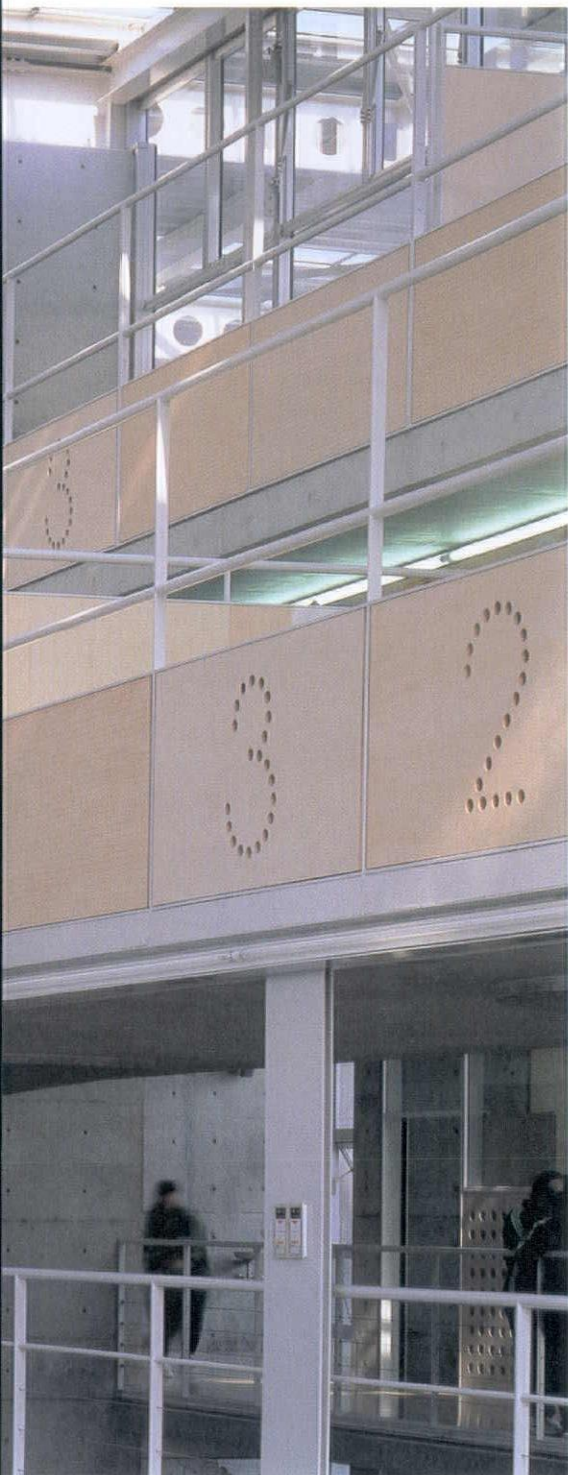
全体平面図 S=1:1500

学校10選





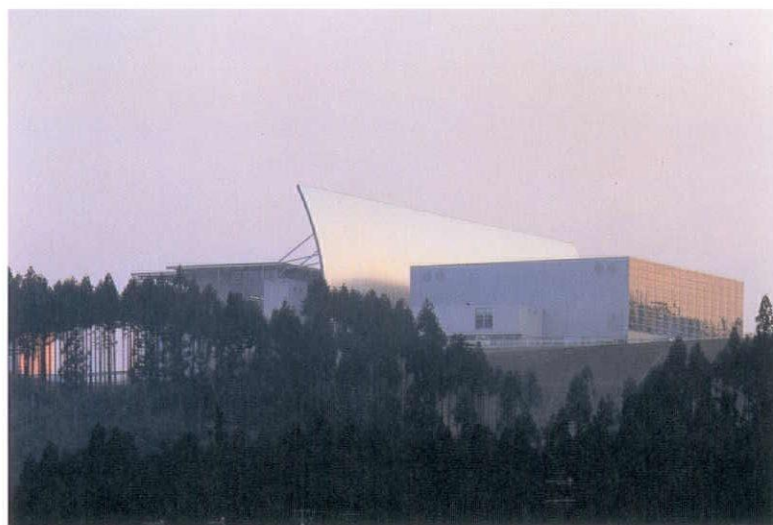
生徒フォーラム



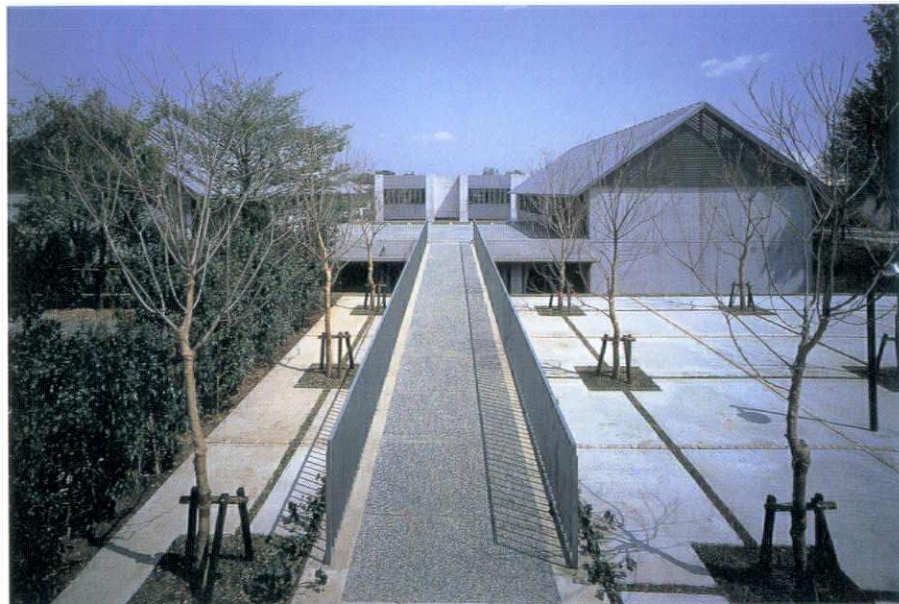
教室棟と芸術棟を結ぶブリッジ



言語系メディアギャラリー



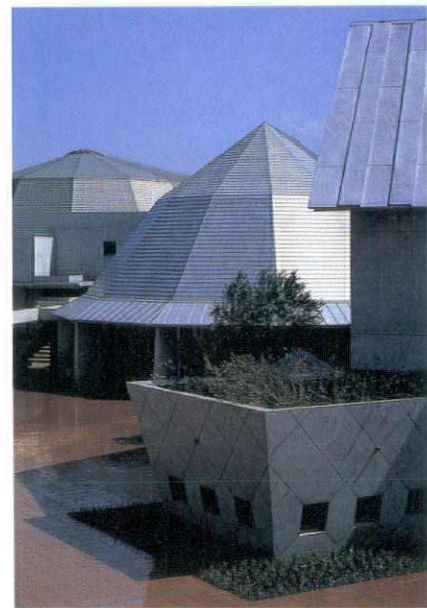




アプローチ



小学校教室内



講堂（手前は宗教司牧室）



アプローチのせせらぎ通り





小学校多目的スペース



社会教育センターの多目的ホール



体育館



中央を通るバス



バスから中庭を見る



南側外観



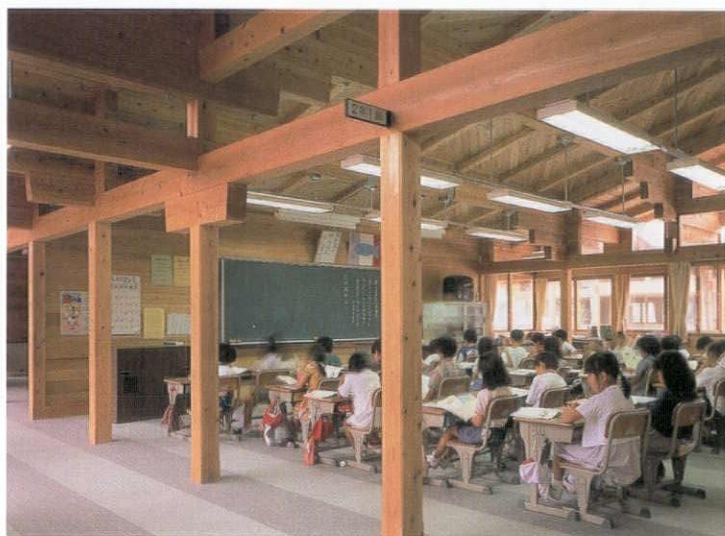
校門側から中央モールを見る



校庭側から中央モールを見下ろす



低・中学年棟



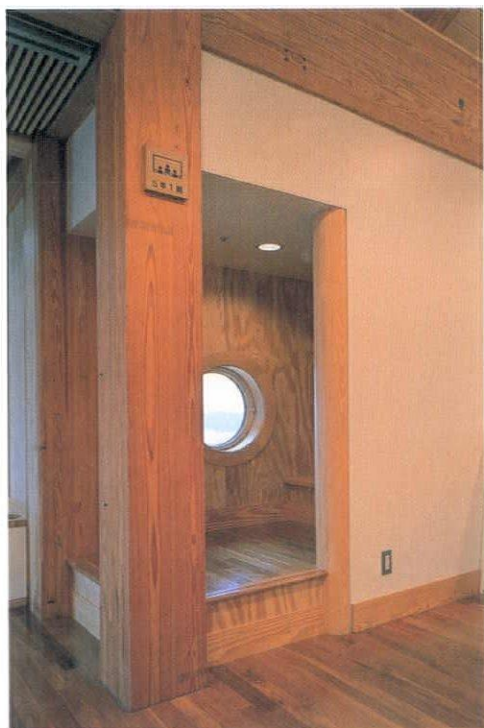
教室内



メディアセンター



中庭



アルコーブ



オープンスペース

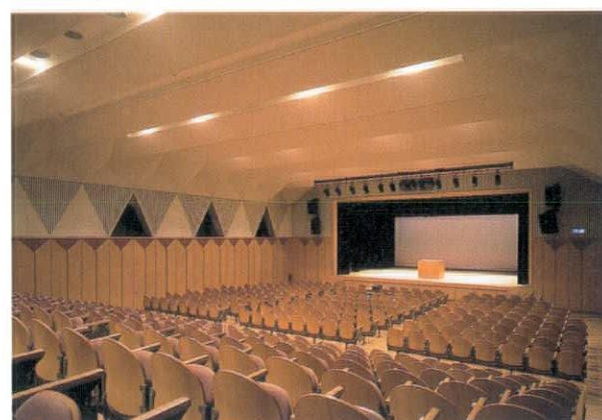




ランニングデッキ



図書室



講堂





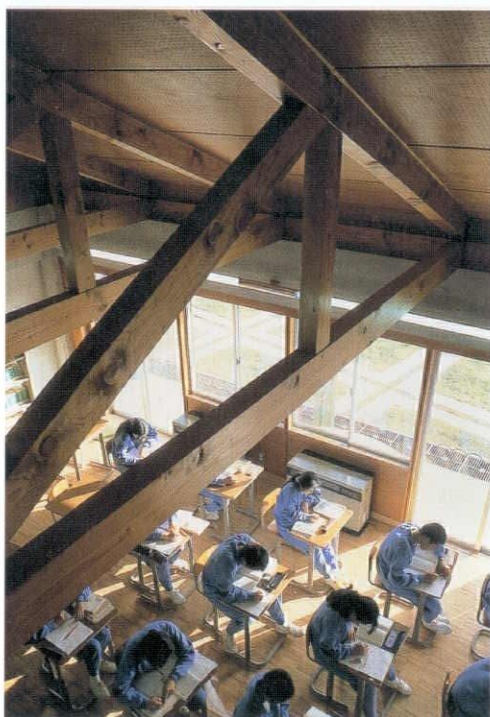
体育館



本館と小学校を結ぶブリッジ



西側外観

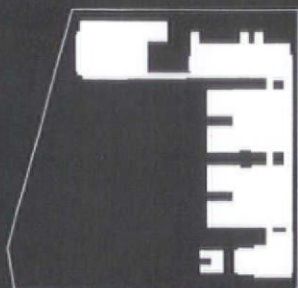


ホームベースから教室を見る

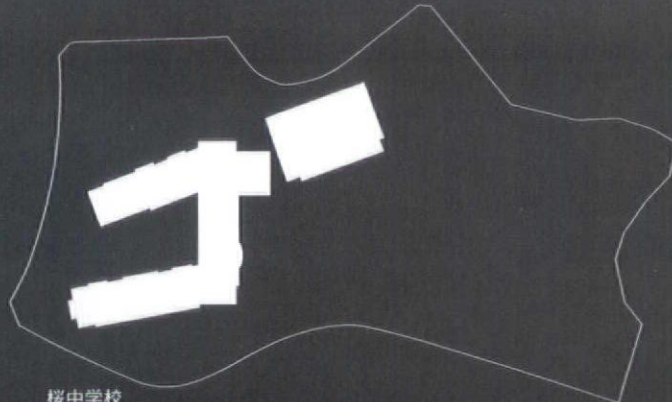
SD9907



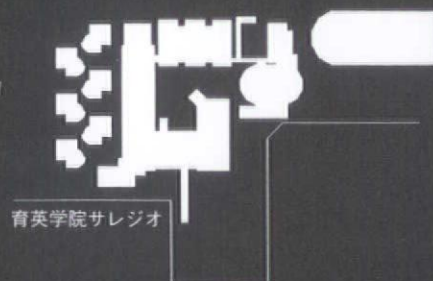
柱廊から中庭を見る



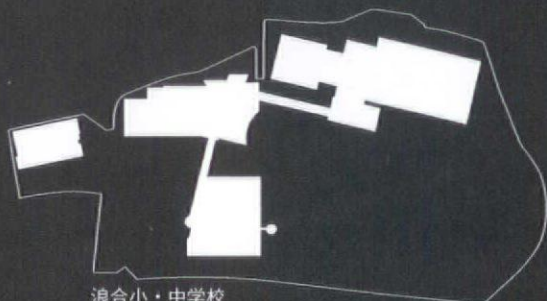
つくば東小学校



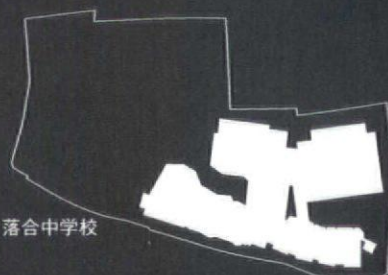
桜中学校



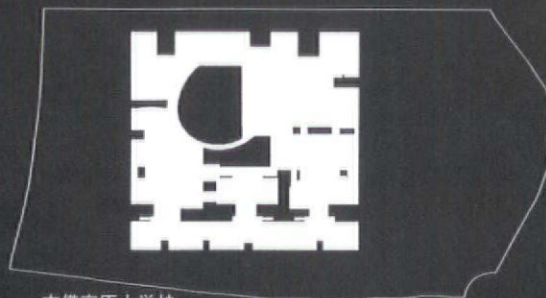
育英学院サレジオ



浪合小・中学校

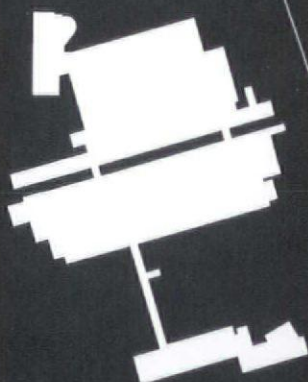


落合中学校



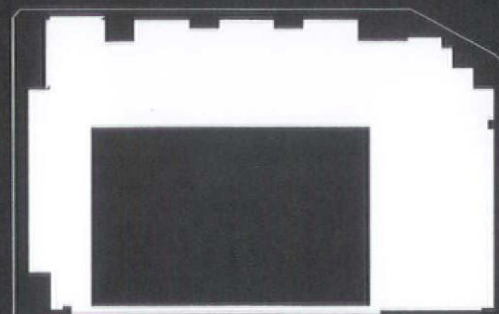
吉備高原小学校

岩出山中学校



若葉台小学校

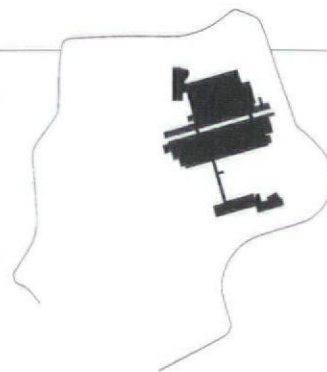
上野小学校



晴海総合高等学校

最近の学校建築作品10選を紹介する。建築作品としてのレベルの高さもさることながら、その計画趣旨やコンセプトにおいて21世紀の学校を考えるにあたっての提案性を含んでいると考えられる事例を採り上げたつもりである。設計者の方々に記事を依頼する方法をとらないで、筆者等が現地に赴き、児童・生徒の生活・学習の様子をルポした結果に基づいて記事や写真を用意した。とりすました建築作品としての姿だけでなく、子供達に生き生きと使われている光景を伝えたかったからである。文＝上野淳(U)、倉斗綾子(K)、力安拓(R)

メディアギャラリー中心の教科教室運営と 生徒の生活拠点である生徒ラウンジ



岩出山町立岩出山中学校

岩出山中学校は、宮城県岩出山町の3つの中学校の統合により生まれた学校で、中学校としてだけでなく、生涯学習の基盤となる町民の学舎としても機能している。関連ある教科の教室をまとめた「系列教科教室型」を取り入れており、言語系（国語・英語）、自然系（数学・理科）、生活系（社会・家庭科・技術）、芸術系（音楽・美術）の4つの系列に分けられている。

建物は体育管理棟・教室棟・芸術棟からなる。教室棟は系列ごとのメディアギャラリー、系列教室、研究室からなる学習拠点と、吹抜を介して設けられた生徒の生活拠点となる生徒ラウンジで構成されている。教室棟と芸術棟の間は広く町民に開放された森の広場と呼ばれる公園になっており、両側に音楽室、コンピュータ室などの一般開放を行う特別教室が並ぶ。小高い丘の上に立つこの学校は、特徴ある形態の風の翼を伴って町のランドスケープとなっている。

所在地	宮城県玉造郡岩出山町
設計	建築 山本理顕設計工場
構造	構造計画プラス・ワン
設備	団設備設計事務所
構造	RC+S造
竣工年月	1996年3月
敷地面積	201,811.00m ²
建築面積	6,757.17m ²
延床面積	10,879.06m ²
計画クラス数	14クラス
クラス数	18クラス
生徒数	527人



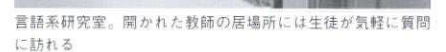
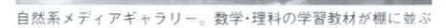
休み時間の教室移動の合間にメディア・ギャラリーのパソコンを利用
SD9907

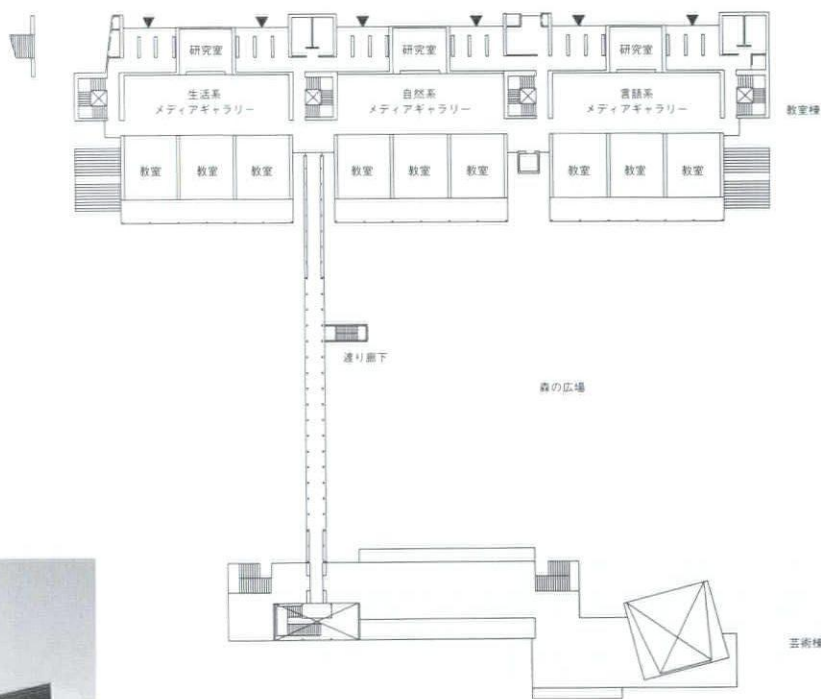
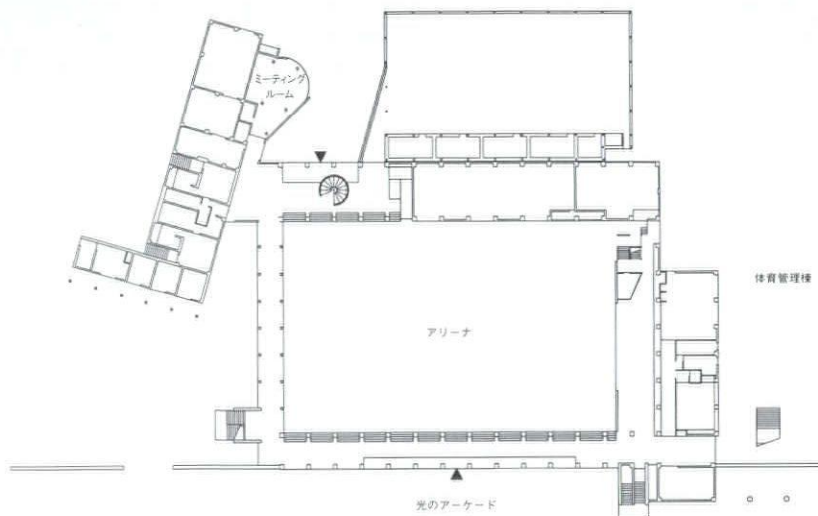
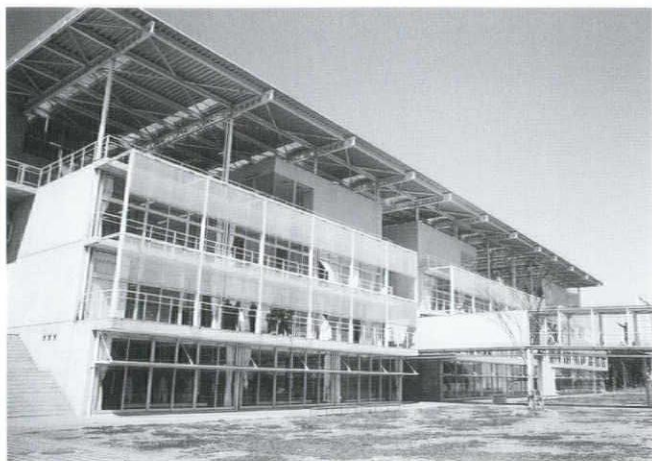


生徒ラウンジの様子。大きめのロッカーの向かいにベンチが
設えられている

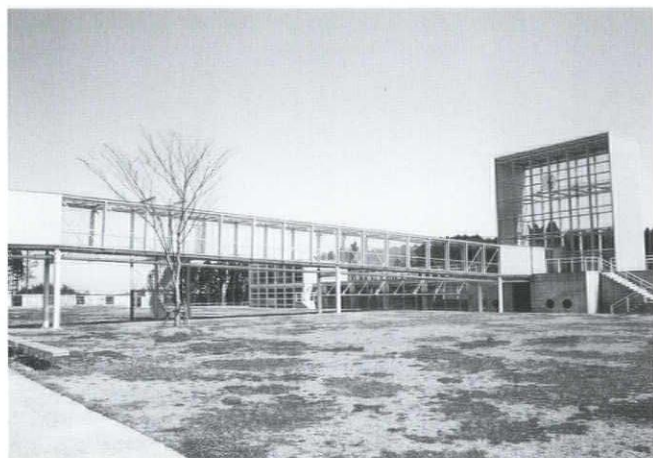


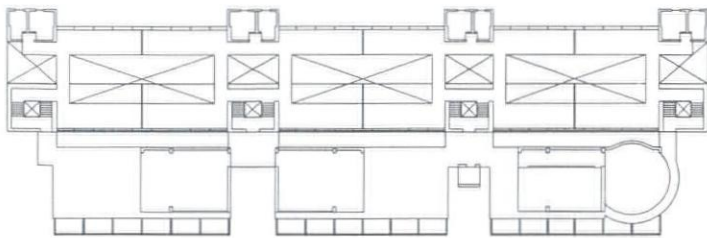
校務センターには、教師の校務スペースとして学年ごとに長
机が用意されている



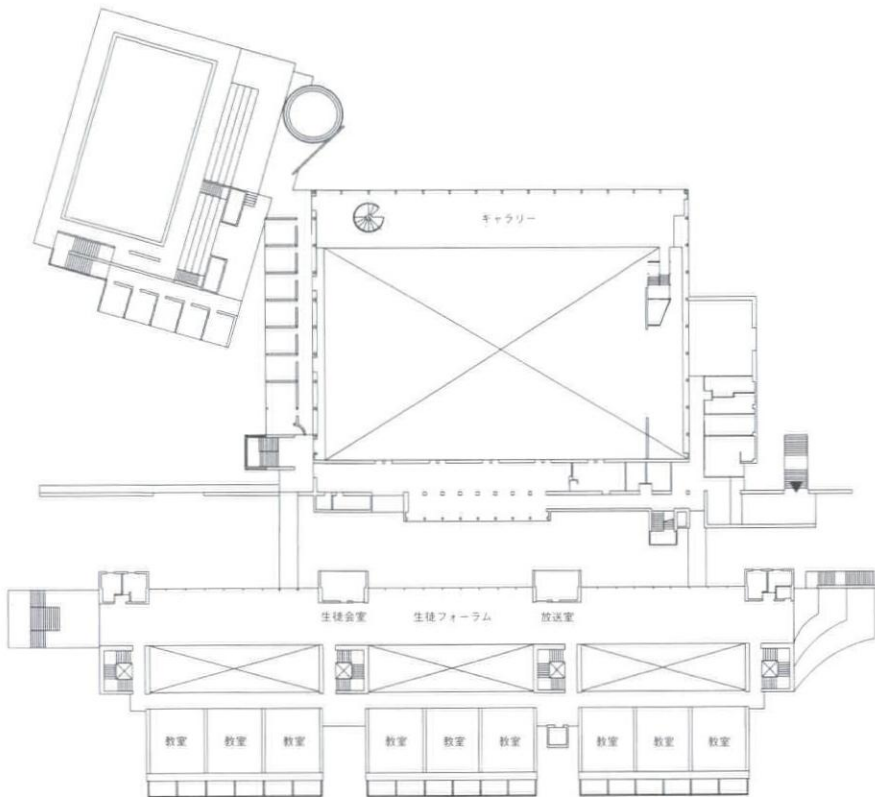


1階平面図 S=1:1000

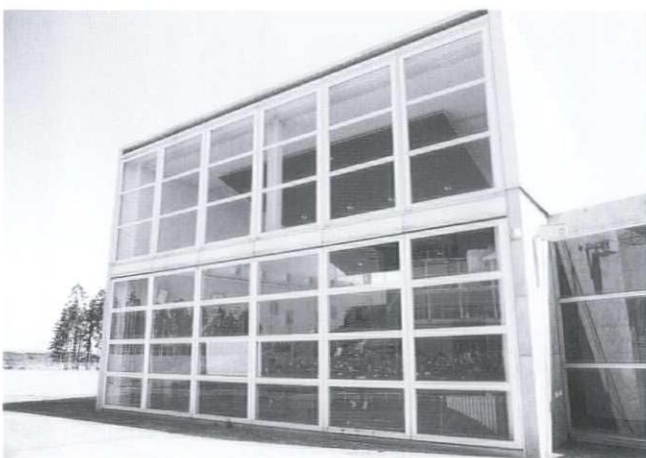


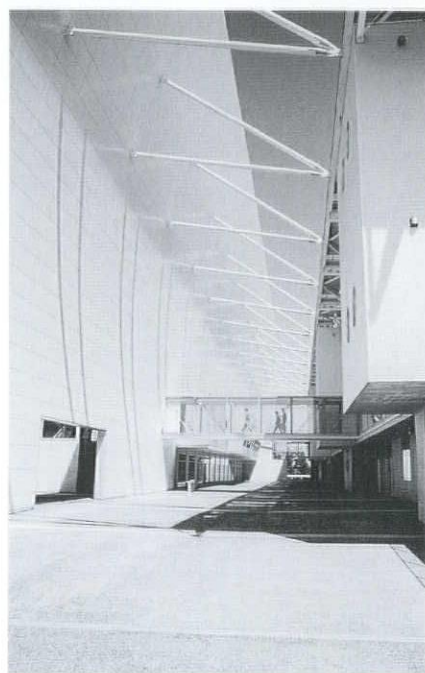
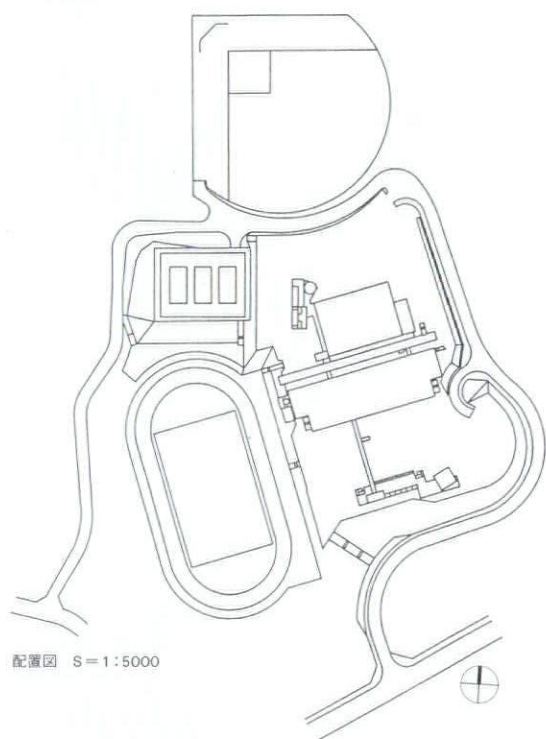
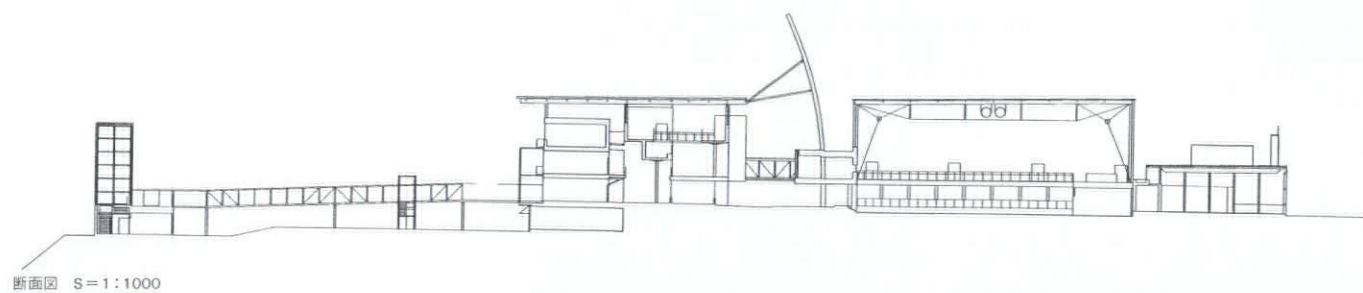


3階平面図

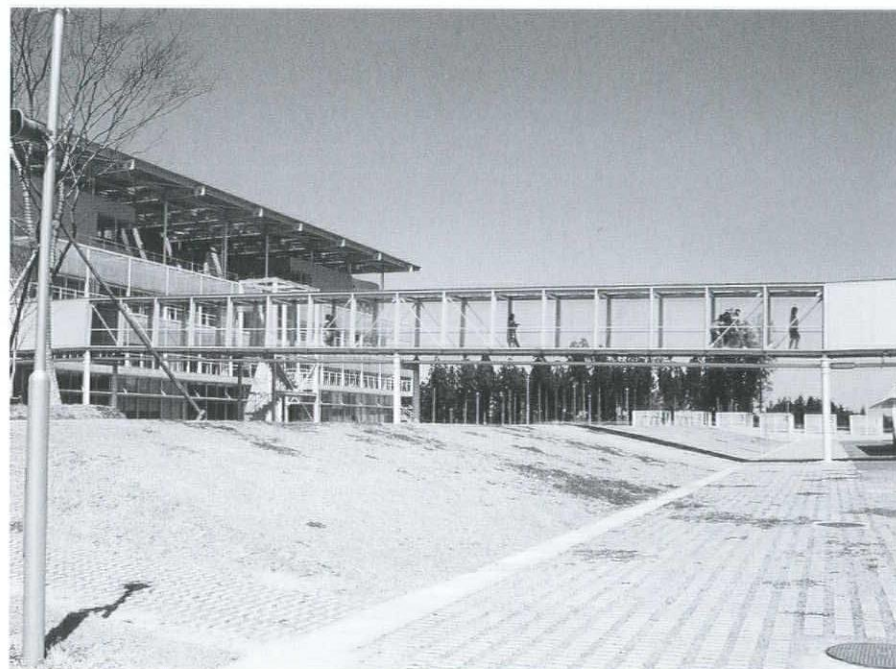


2階平面図





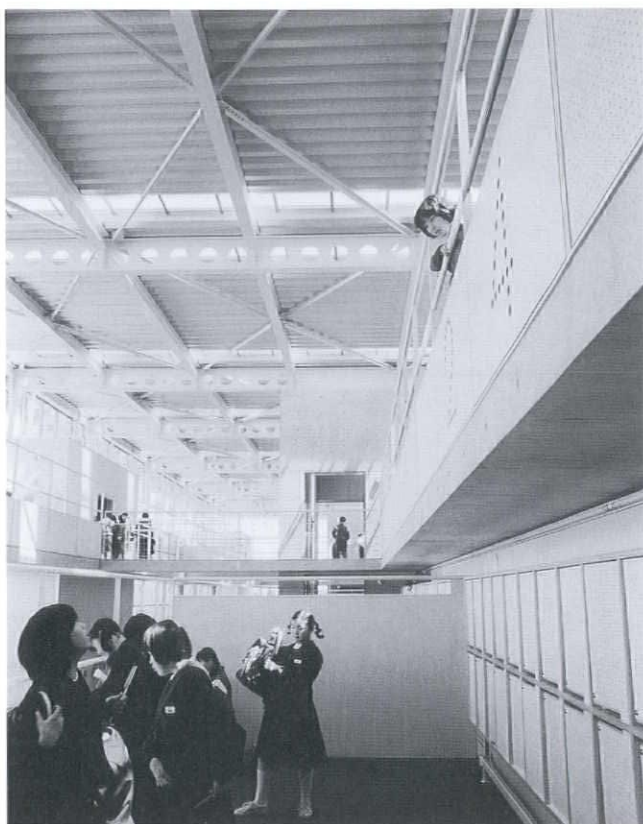
体育管理棟と教室棟を結ぶブリッジ



ブリッジを渡って芸術棟の音楽室へ向かう
SD9907



芸術棟と教室棟を結ぶブリッジ



レベル差のある生徒ラウンジにいる生徒同士が吹き抜け越しに会話



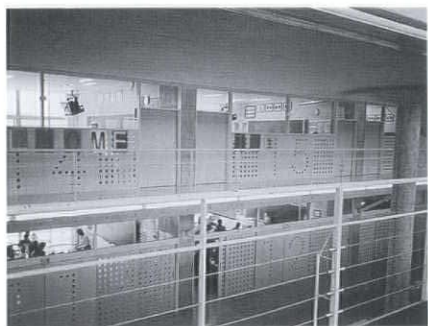
休み時間の生徒フォーラム上部の吹き抜けを見渡す

休み時間になると授業の終わった生徒が次々に教室から出てきて、次の教室、生徒ラウンジへと向かう。教科教室型中学校の特徴的な場面であり、しばしばこの移動が問題とされるが、岩出山中学校ではスムーズに移動が行われ、次の授業に遅れる生徒もほとんどいない。毎時間生徒ラウンジへ教科書などの荷物を取りに戻る生徒、2時間分の荷物を持ってまわる生徒、午前中に必要なものすべてを鞆に詰め込んで授業を受けてまわる生徒、とそれぞれ自分のスタイルで柔軟に対応している。

各メディアギャラリーは十分とはいえないまでも、それぞれの教科の雰囲気を持った空間となっており、ガラス越しに隣接する研究室の教師の活動の様子が生徒からも見え、開かれた教

師の居場所となっている。しかし、各教科教室はホームルームを行うための部屋としても使われるため、それぞれの教科の雰囲気を出すことが困難であるようだ。

音楽を聴いてそのイメージを絵で表現する、地域の地理を歴史的な背景と地質的な面とで捉える、などの教科の枠を越えた総合学習も行われている。また、2クラスを3人の教師が担当し、プリント学習グループ・パソコン学習グループ・講義型グループなどのグループに分けて弾力的に授業を行うチームティーチングも試みられている。このような学習展開に際し学校空間が柔軟に対応しているといえる。(R)



言語系教室。1年生のホームルーム教室としても利用されている

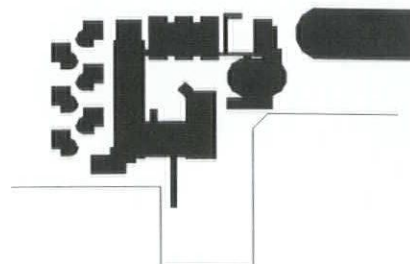


生徒ラウンジでの準備の様子



休み時間の移動風景

分散配置された 住居のようなセルフコンテナンドの教室群



育英学院サレジオ小・中学校

緑に恵まれた住宅地にある〈東京サレジオ学園〉に隣接し、芝生や雑木林のある敷地を持つ育英学院サレジオ小・中学校は、教室・建築空間と外部空間とを自由に入り組ませた低層・分散十連結型の建築プログラムに基づいて計画された。この学校は小学校教室群と残りすべての校舎群というふたつの領域で構成されており、それぞれが連続しつつも、独自の領域を形成している。

小学校教室群を学校の中の「村」あるいは「里」と見立て、各学年の教室棟はあたかも「家」のようにデッキを介して分散配置されている。学年20人程度の小人数編成で先生が絶えず児童の傍らにいて共同生活をするという独自の教育方針を持つこの学校では、各学年の教室も「自足完結型（セルフコンテナンド）」を採用し、レクチャースペースとワークスペースからなる住居的なスケールの空間を構成している。

中学校、特別教室、講堂、食堂からなるもうひとつの領域は、「街」をイメージして計画されており、煉瓦でペーブされた広場を中心としたコートハウス形式で構成されている。ここでは、煉瓦を用いたドライなスペースをつくることで、都市的な外部空間を演出しており、一方の小学校教室群の緑豊かでウェットなスペースとは対照的な印象を与えている。

「街」には中学校教室を始め様々な機能・デザインの空間を点在させ、回遊性のある変化に富んだ空間をつくりだしている。

所在地	東京都小平市
設計	建築 藤木隆男建築研究所
	構造 構造計画研究所
	設備 愛住設計
構造	RC+W+S造
竣工年月	1993年2月
敷地面積	8,136.00m ²
建築面積	2,764.27m ²
延床面積	3,125.24m ²
計画クラス数	6クラス（小） 3クラス（中）
クラス数	6クラス（小） 3クラス（中）
生徒数	102人（小学校）+76人（中学校）



休み時間になると教室まわりは子供たちで大賑わい

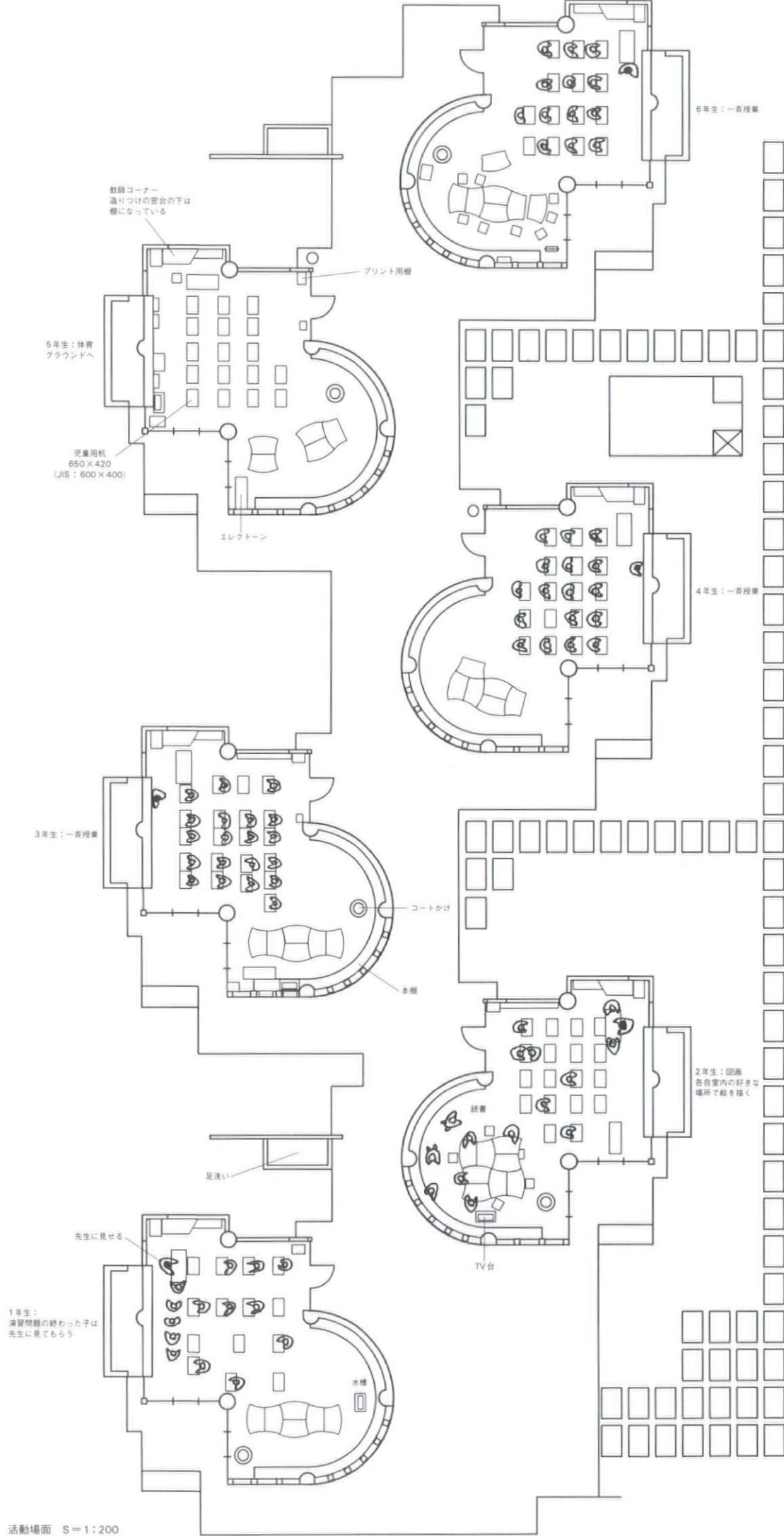
SD9907



ワークスペースの机で図画作業。2年生教室



中央の広場で遊ぶ小学生と、2階から眺める中学生



中央の広場を抜けて緑豊かな小学校教室群に入ると、静けさの中に各教室棟から子供たちの声や先生の声が聞こえてくる。絵本に登場する「おうち」のような教室棟の中を窓越しに覗いてみると、「教室」というイメージとはほど遠い、20人程度の子供たちとひとりの先生の生活空間が広がっている。温もりのある木のテーブル、机、いす等の家具も、窓やトップライトから差し込む木漏れ日も、子供たちの手元を照らす照明器具も、既成の「学校」にはない優しさを感じさせる。ワークスペースには、クラスの子供たちが全員で集まれるテーブルが配置され、壁には子供たちの描いた絵が暖かい色の光で照らし出されている。その雰囲気は、まさに家庭の食卓であり、居間である。思わず入り込んで子供たちと一緒に生活してみたいくなる魅力的な空間がそこにはある。

休み時間になると子供たちは次々と外へ飛び出し、ウッドデ

ッキやペープされた中央の広場で元気に駆け回る。ボール遊びをする子、追いかっこをする子、池で釣りをする子、雑木林の中へ出かけていく子、それぞれが思い思いの場所へ出かけ、思い思いに時を過ごす。

広場に面した中学校教室棟に入ると、1階に広々とした中学生ホールが広がり、その脇には静かな図書室とガラス張りの生徒会室が設けられている。2階は中学1年生から3年生の3つのクラススペースが並んでおり、それらをつなぐスペースには、広場を見渡す大きな窓とベンチがある。そこには、休み時間になると生徒たちが集まり、外で元気に遊ぶ小学生たちを眺め、声をかけ合う姿が見られる。こうして中央の広場は小学生と中学生のふれあいの場となり、まさに「街」の広場を思わせる、子供たちの活気に満ちた空間となる。(K)



ウッドデッキは上履きで気軽に遊びに出られる場所

SD9907



ワークスペースはちょっとした展示空間にもなる。5年生教室



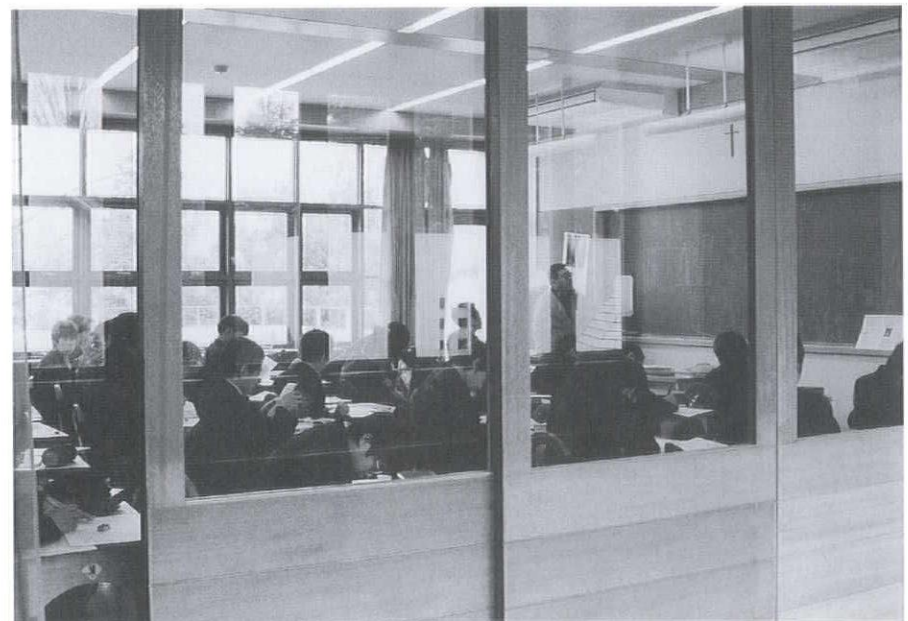
お弁当は各自気に入った場所でお食べる



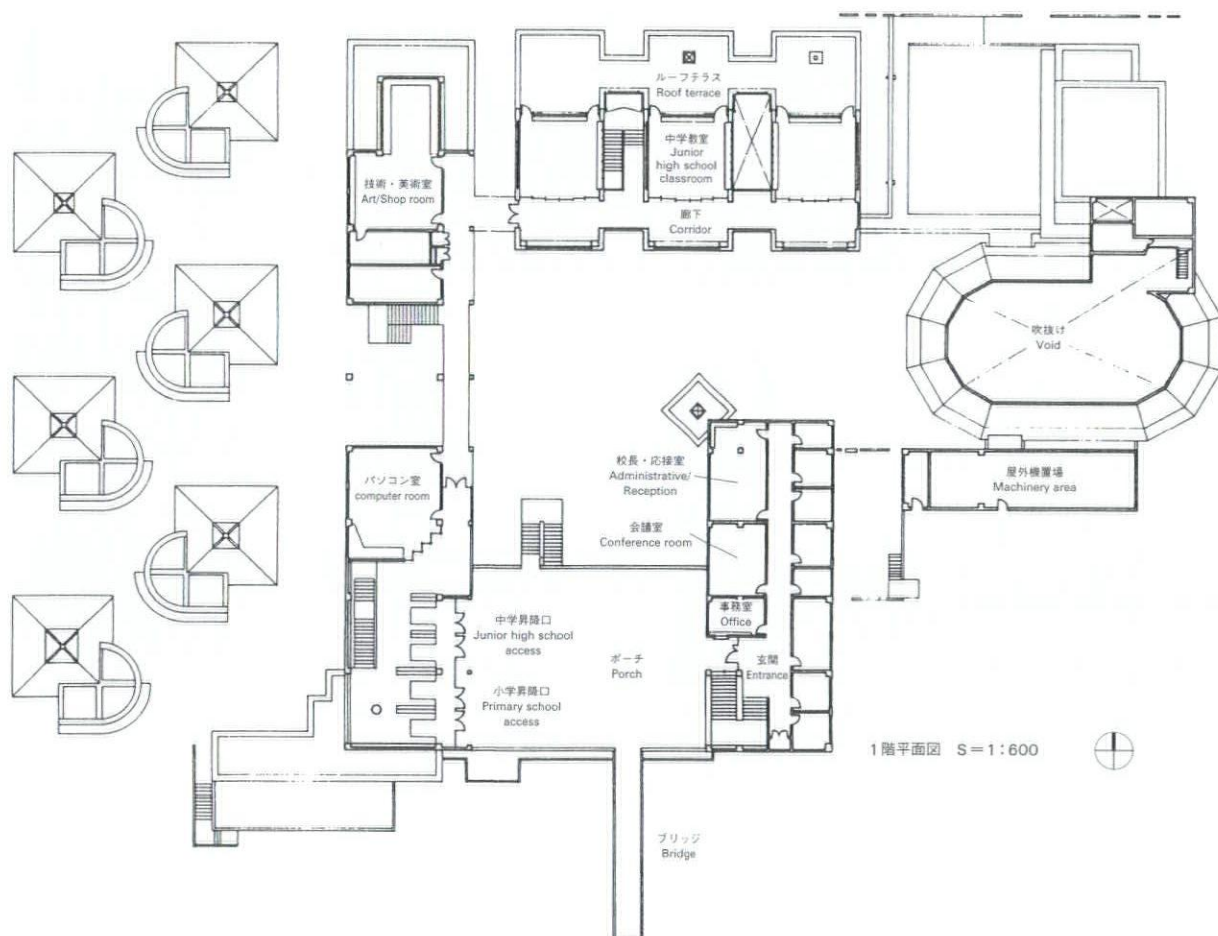
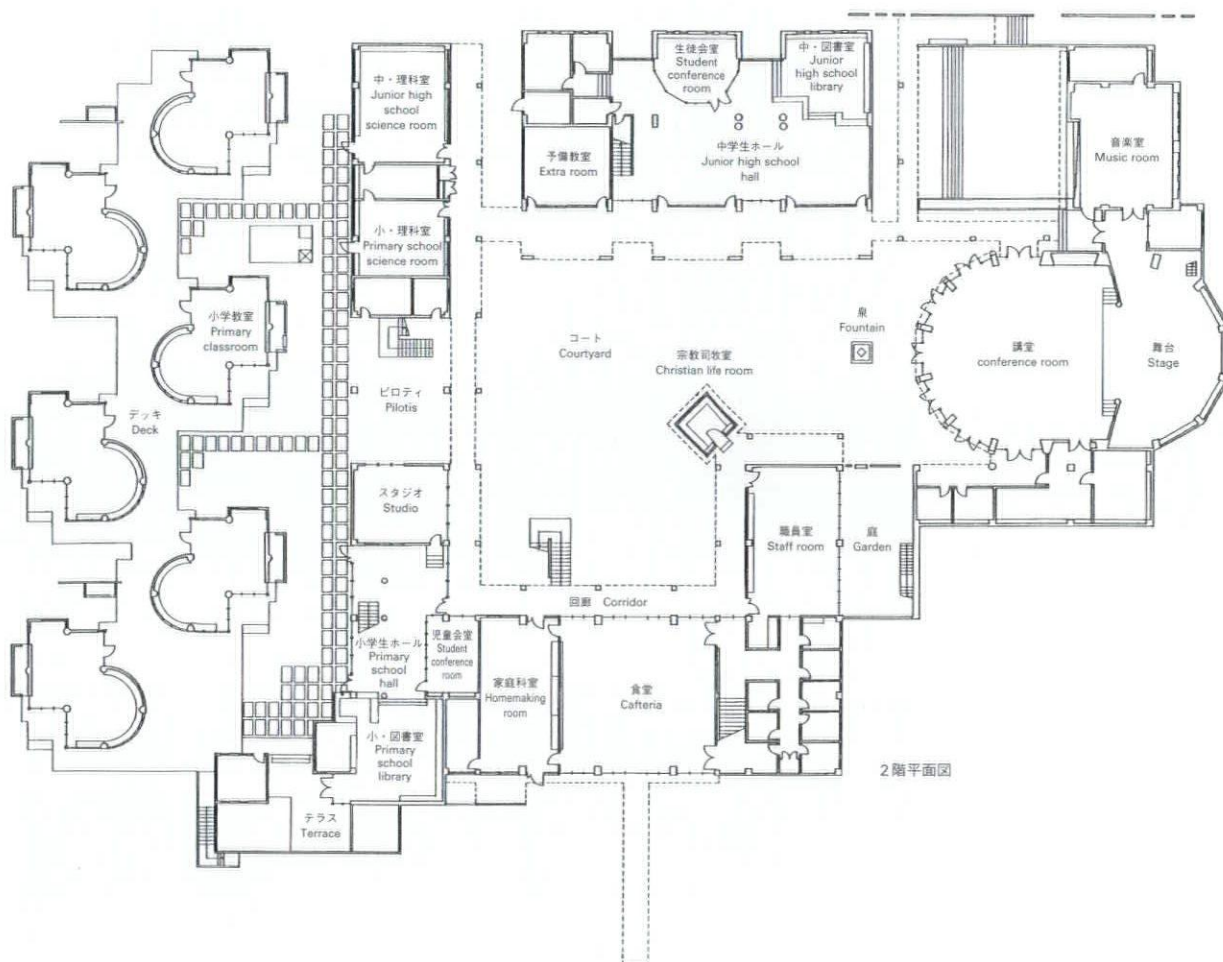
小学校図書室。右奥はアルコーブ

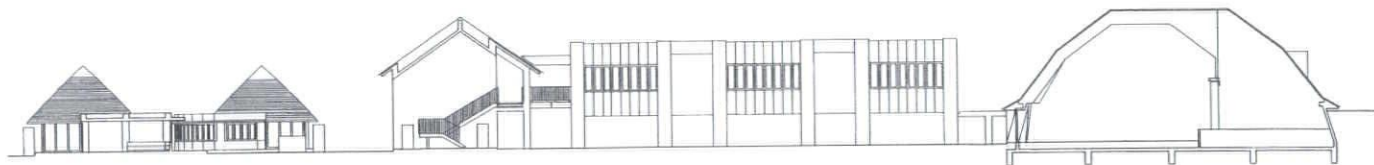


レクチャースペースでの授業の様子。6年生教室



中学校の授業風景。3学年分の教室が並ぶ





東西断面図



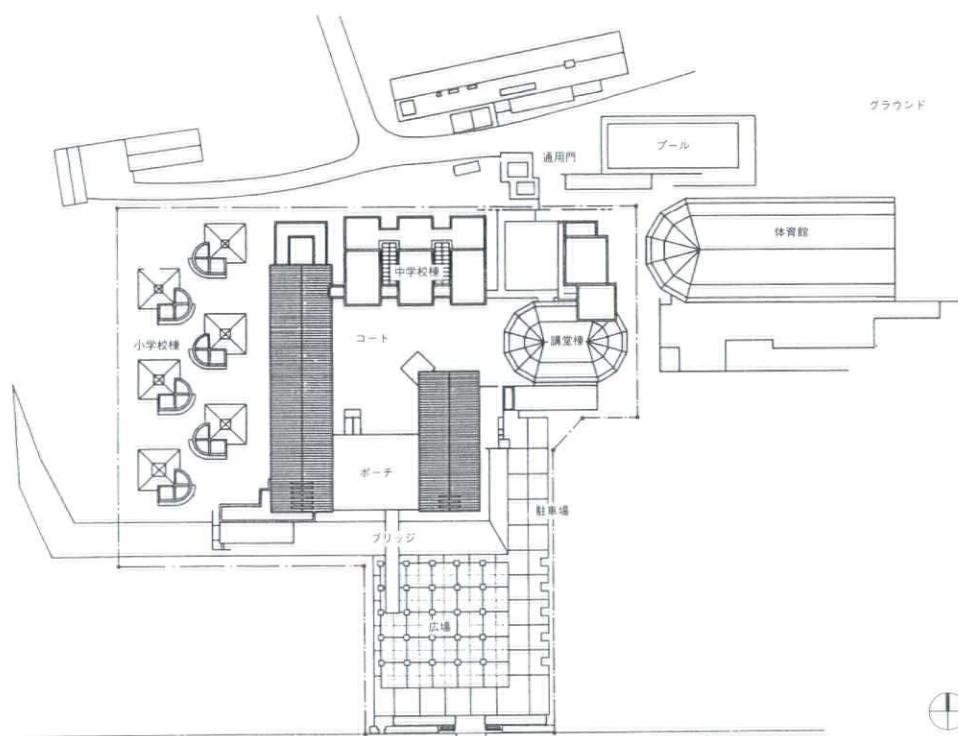
南北断面図



南立面図



西立面図 S=1:600

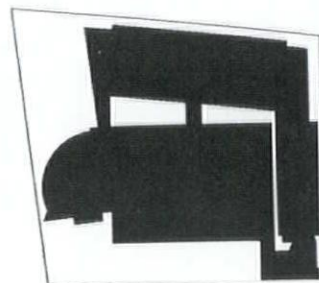


配置図 S=1:1500

都心に位置する 社会教育センター・幼稚園との 複合のインテリジェントスクール

台東区立上野小学校

東京上野の都心に建つ上野小学校は、統合により計画された学校で、小学校児童のためだけでなく、園児・地域住民もが学ぶ場、生涯学習の拠点としてつくられた地域の中核をなすインテリジェントスクールである。狭小な敷地の中に幼稚園・小学校・地域の屋内温水プール・社会教育センターなどが複合化されている。敷地中央に温水プール・体育館を半地下に設け、その上部が人工地盤のグラウンドとなっている。小学校は管理棟と教室棟からなり、教室棟は地域開放しやすい1階に特別教室を配し、2～4階に各学年ごとにまとまった教室・オープンスペースを置いている。扇形をした社会教育センターは西側に位置し、多目的ホール、調理室、会議室などや小学校と共用の音楽室があり、小学校と渡り廊下でつながっている。

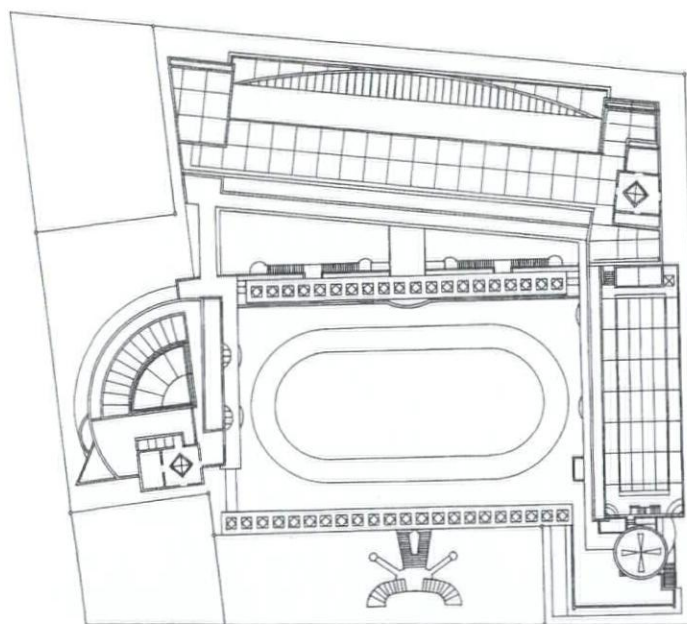


所在地	東京都台東区
設計	建築 内井昭蔵建築設計事務所
	構造 MAY 設計事務所
	設備 森村設計
構造	RC造
竣工年月	1991年3月
敷地面積	4,793m ²
建築面積	3,851m ²
延床面積	10,642m ²
計画クラス数	12クラス
クラス数	12クラス
児童数	374人

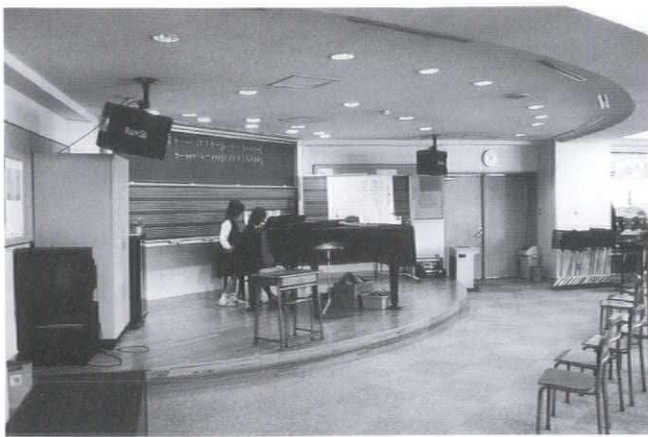
小学校の入口を入り、園児が遊ぶせせらぎ通りを昇降口に向かって歩くと、上のグラウンドから子供たちの声が聞こえ、窓越しに一般の人が泳ぐ温水プールが見下ろせる。まさにここが園児から大人までが学ぶ場であることを実感する。直接的な交流は少なくとも、普段から小学生は大人たちが社会教育センターで学ぶ姿を垣間見ること、生涯学習活動に触れているし、大人もまた子供たちの生き生きとした活動の様子にはほえみながら利用しており、お互いの存在が相手に良い影響を与えているように感じられた。

小学校は、各学年2クラスで教室横にオープンスペースがある。学年ごとにまとまったつくりとなっているため、オープンスペースの可動間仕切りはそれぞれの学年の特色ある作品や掲示であふれ、オープンスペースにはコンピュータも数台設置されている。2階の中央に位置する吹き抜けの多目的スペースのまわりにも全国・世界の新聞が展示されているなど、学校中いたる所にさまざまな展示・掲示がなされており、子供たちの興味を引きつけるしかけとなっている。多目的スペース奥の図書コーナーは開かれた存在でありながらも、階段の奥にあるため落ち着いた雰囲気を持ち、休み時間になると多くの子供たちが読書に耽っている。社会教育センター側にある音楽室は教室から離れた位置にあるにもかかわらず、昼休みには女の子がピアノを弾きにやってくる、音を聞きつけた男の子がグラウンドから様子をうかがいに来るような場面もあった。

多くの人が学ぶこの学校の南側にある公園では、学校帰りの子供たちと地域住民とがともにくつろぐ姿も見られた。(R)



配置図 S=1:1000



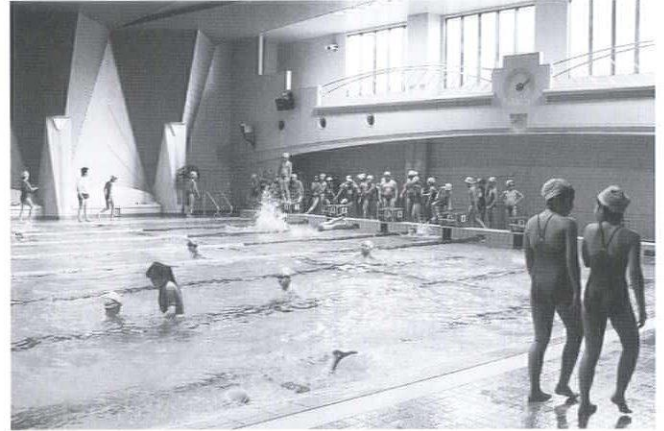
休み時間にも子供たちがよく訪れる音楽室は社会教育センター側にある



地域の能楽師によって体育館で開かれた能舞台



社会教育センターでのハワイアンダンススクール



温水プール



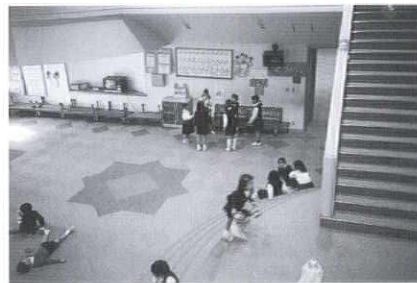
オープンスペースの可動間仕切りは児童の作品や掲示でいっぱい



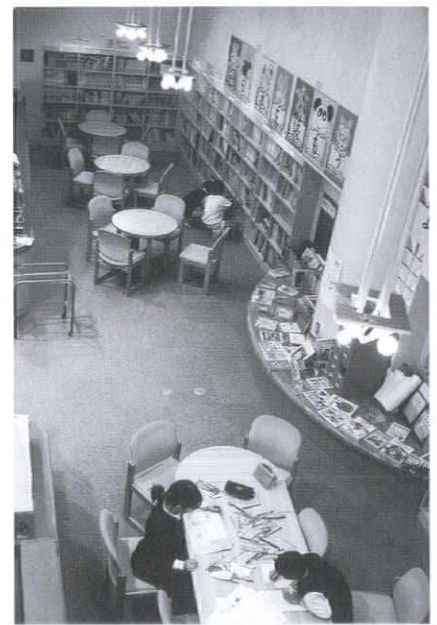
オープンスペースにしつらえられたテーブルでの作業



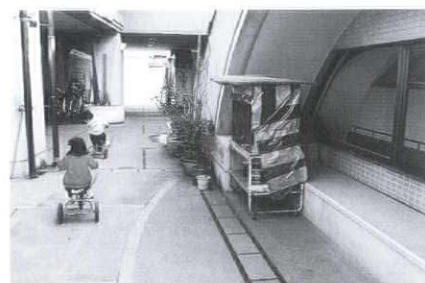
オープンスペースに2クラス集まって先生の説明を聞く



校舎中央の多目的スペースは集会等にも利用される



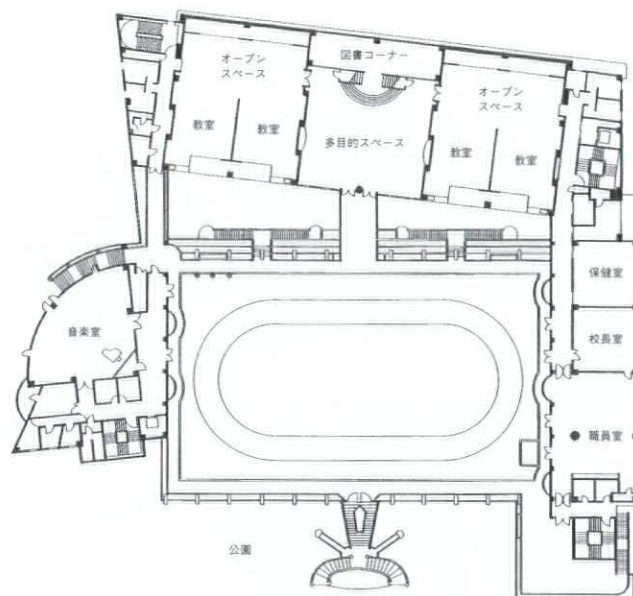
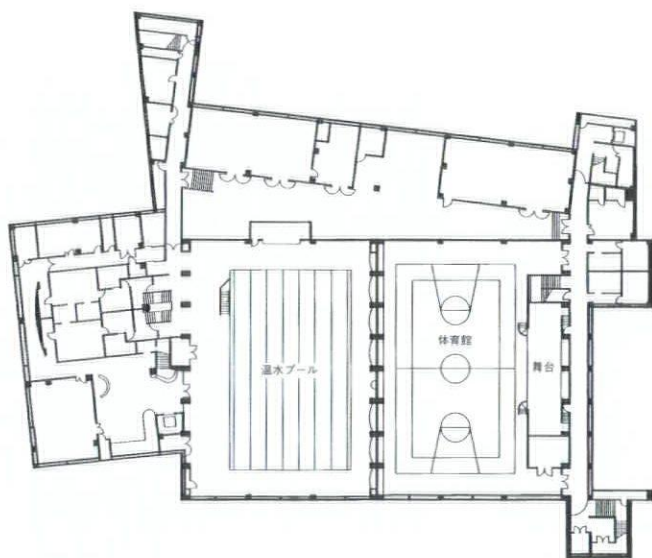
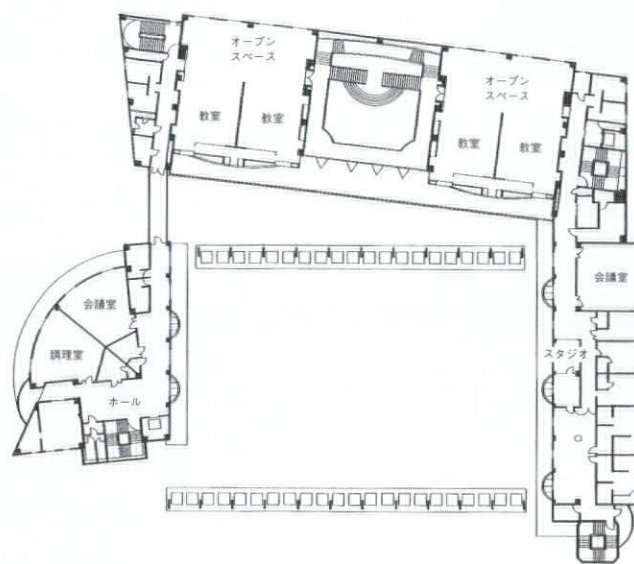
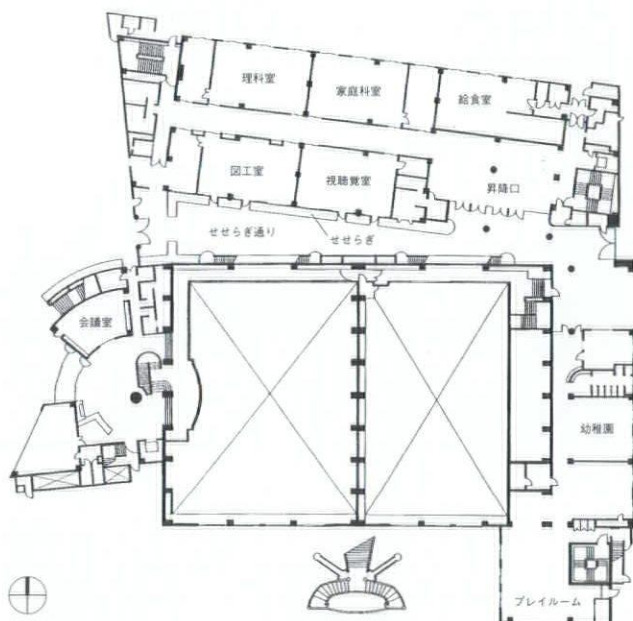
開かれた図書コーナーは人気のスポット

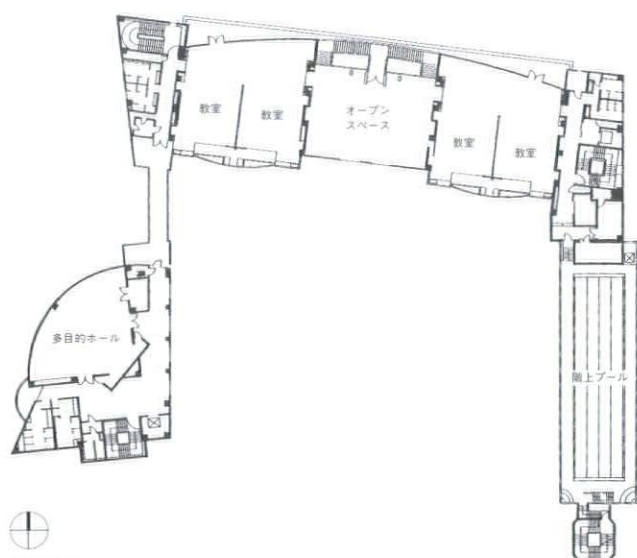


せせらぎ通りを三輪車で走り回る園児。右手の窓からは体育館とプールの様子が伺える

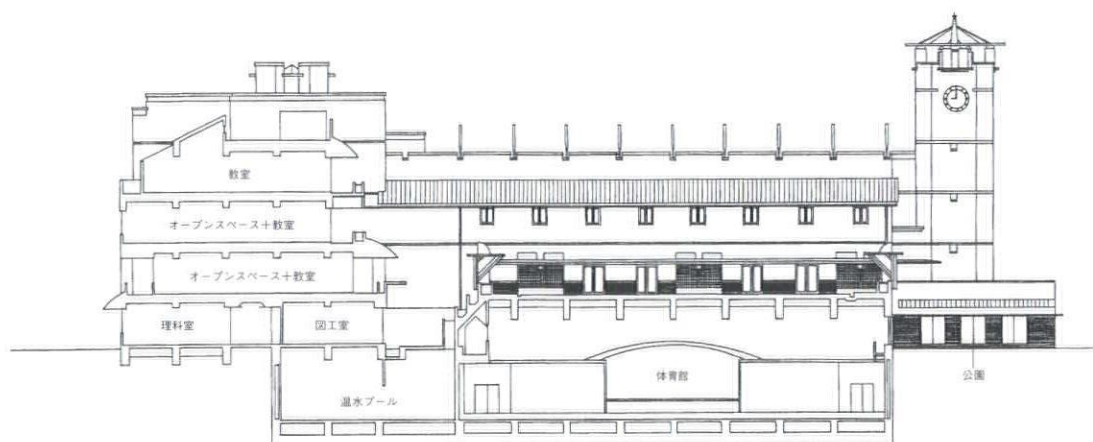


2階レベルにあるグラウンドは上履きで気軽に出でいくことができる

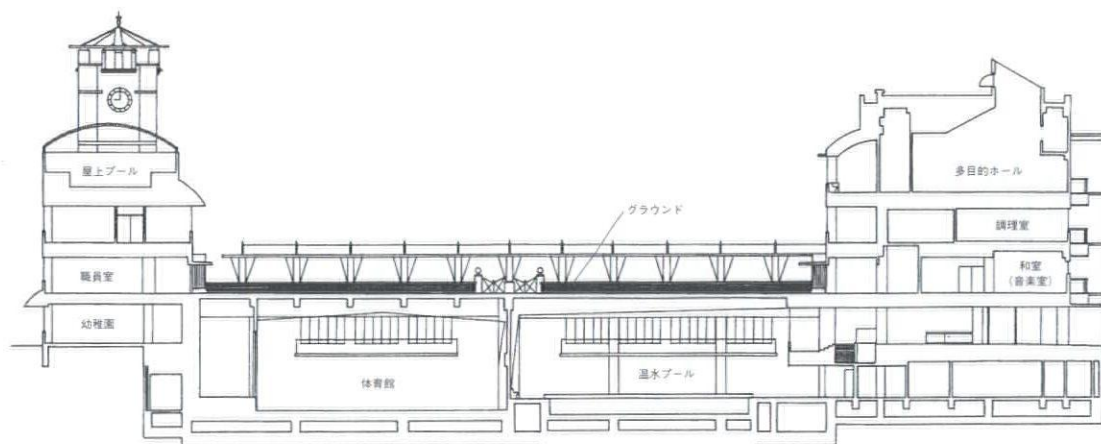




4階平面図

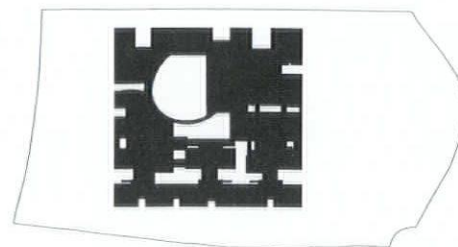


断面図 S=1:600



断面図 S=1:600

教室まわりに中庭を巧みに取り込んだ 小規模・平屋の学校



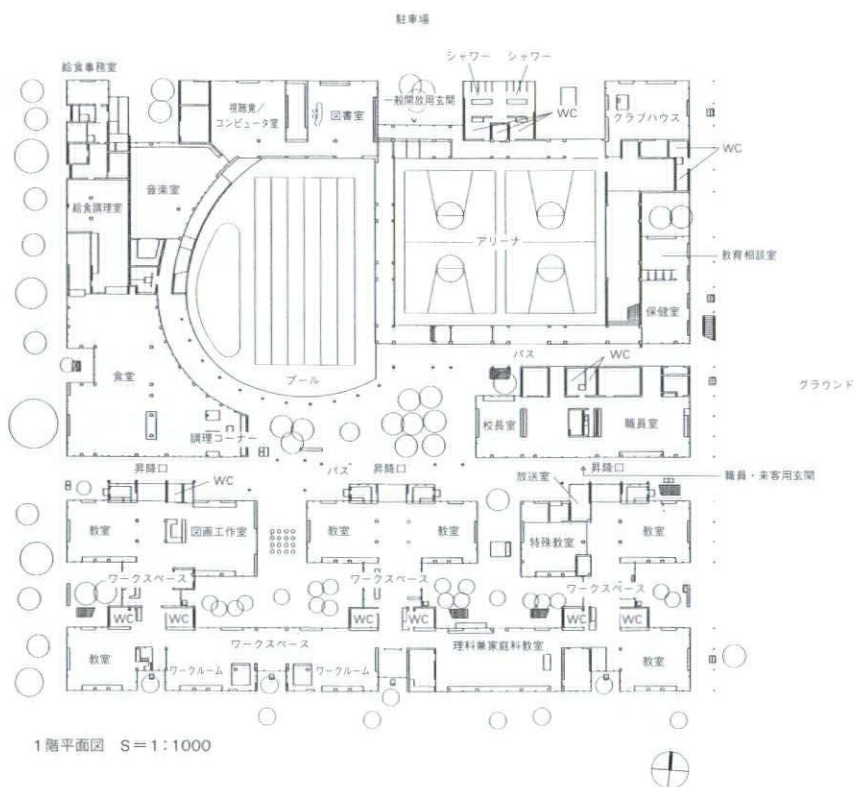
吉備高原小学校(吉備高原都市学校事務組合立)

岡山県中央部の吉備高原都市に位置する吉備高原小学校は、岡山県が進めているCTO（クリエイティブ TOWN 岡山）の参加プロジェクトで、開校後間もない現時点では全校児童数65名、各学年1クラスの小規模の小学校である。吉備高原都市が掲げている福祉の理念と、小学校に求められる接地性とに配慮した平屋の計画であり、中央を東西に抜けるバスによって、管理諸室・体育館などのある北側部分と、教室のある南側部分とに大きく分けられている。

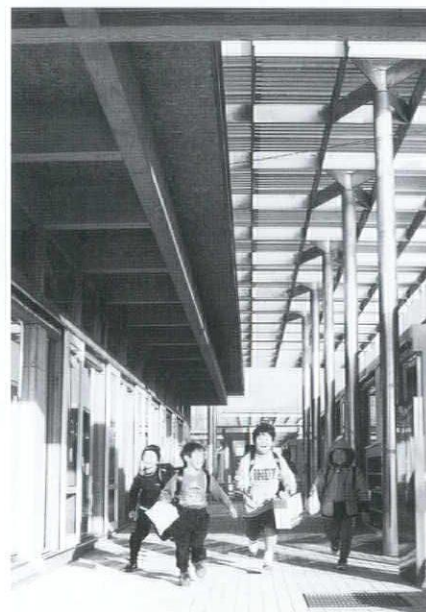
中庭に囲まれたクラススペースは、壁面3面を開口部とし、コーナー部分の建具を隠し框とすることで、内部と外部のつながりを強めている。

特別教室は、音楽室・図書室・コンピュータ室が体育館・プールとともに地域住民への開放を意図して開放用玄関のある建物北側部分にあり、図工室・理科兼家庭科教室はクラススペースの近くに配されている。

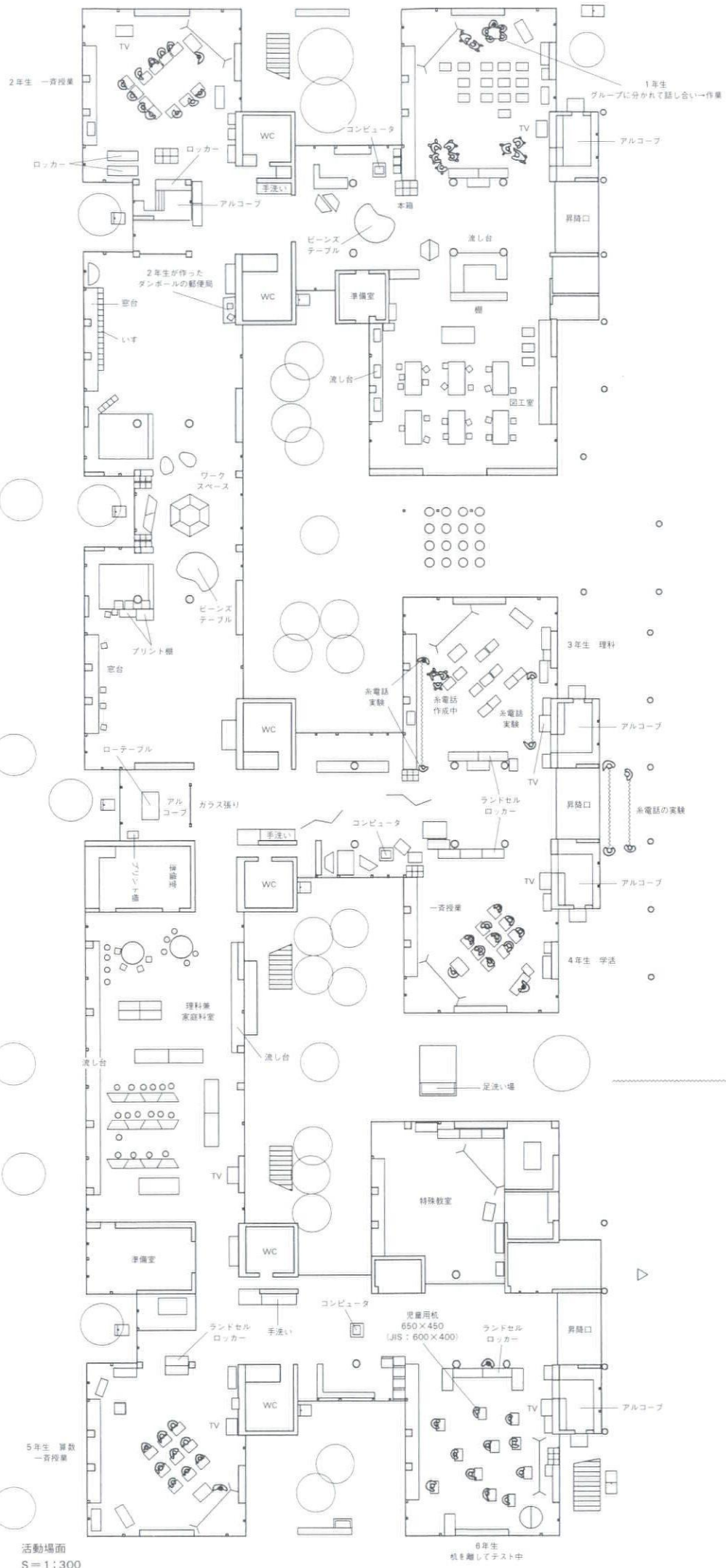
所在地	岡山県御津郡加茂川町
設計	建築 小泉雅生+小嶋一浩/C+A (シーラカンス アンド アソシエイツ)
構造	中田捷夫研究室
設備	設備技研
計画協力	上野淳
設備計画協力	科学応用冷暖研究所
設計・監理協力	エアー
構造	RC+W+S 造
竣工年月	
敷地面積	19,337.01m ²
建築面積	4,871.84m ²
延床面積	4,583.58m ²
計画クラス数	6 クラス
クラス数	6 クラス
児童数	65人



ワークスペースで異学年合同で朝の漢字チャレンジ学習



バスを駆けて家へと向かう子供たち



グループに分かれての作業。1年生教室



机をコの字型に配置した授業の様子。2年生教室



糸電話を使って理科の授業。3年生教室



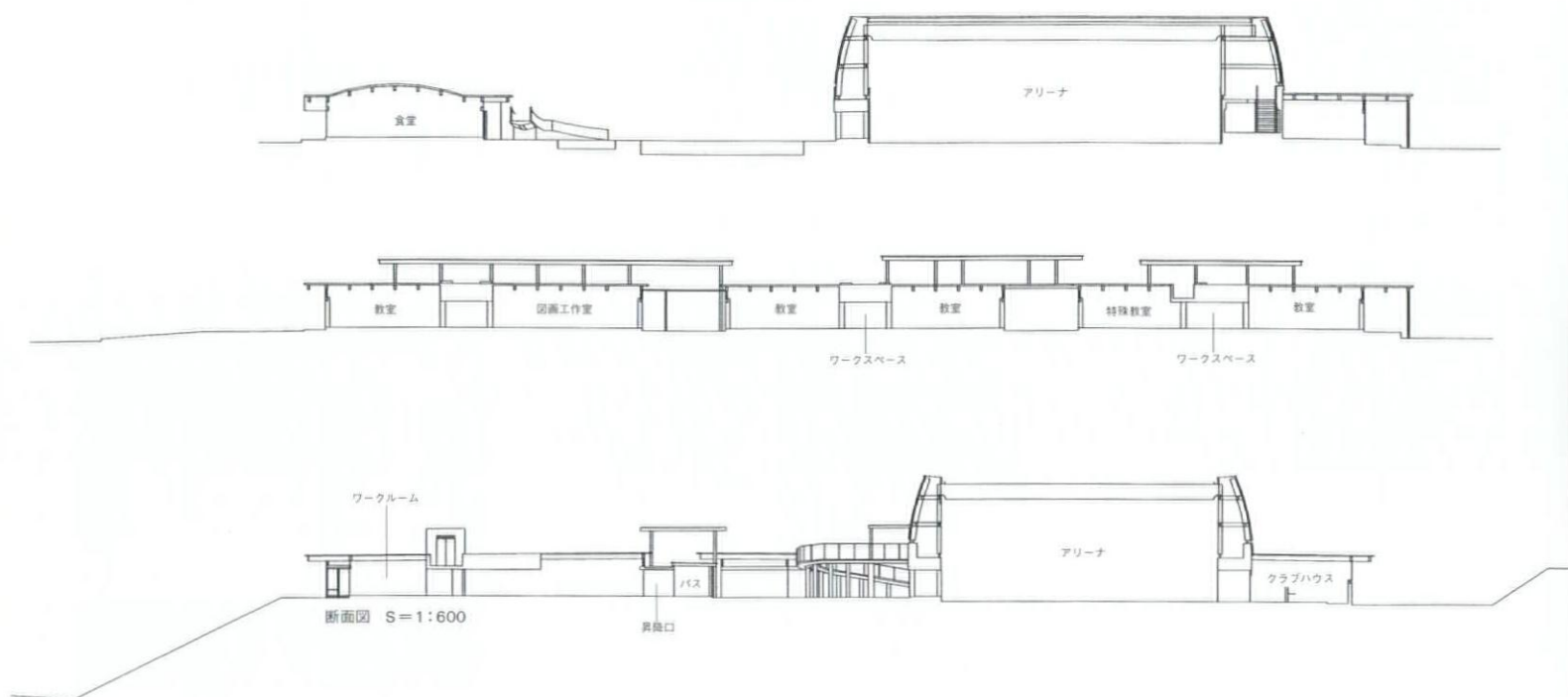
学活での話し合いの様子。4年生教室



算数の一斉授業。5年生教室



お互いの机を離れてテストを受ける。6年生教室



コンピュータ室は休み時間になると子供たちが駆け足でやってくるほどの人気スポット



音楽室へ昼休みにやってきてピアノの練習

SD9907

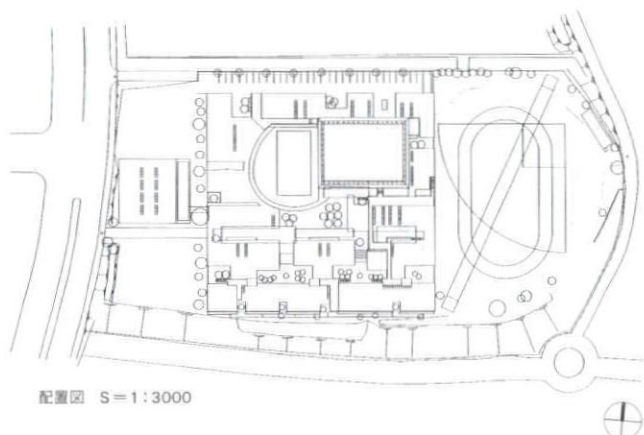


放課後に開かれる図書室での委員会活動の様子

吉備高原小学校の特徴のひとつは、可動黒板と黒板壁によってクラススペースが構成されている点であろう。活動場面を見ると、可動黒板は1年生から6年生まで各学年さまざまな向きに置かれていることが分かる。季節の光の射し込み方や、時々の学習内容に応じて柔軟に家具配置を変化させているという。壁に造り付けられた黒板によって正面が決まり、おのずと家具の配置も固定的になっていた従来の教室とはずいぶんと違った自由な印象を受ける。黒板壁には漢字の書き方や算数の公式など一定期間書き残されているものや、学級新聞・習字などの掲示がみられる。

朝、子供たちはワークスペースに集まり、チャレンジ学習に取り組む。その内容は子供たちひとり一人自分の学習到達度にあわせてプリント問題を解き、近くにいる先生に添削してもら

い、次のステップへと進んでいくというものである。ノーチャイム制を導入しているのも、それ以降の授業は45分という枠にとらわれることなく進んでいく。学年1クラスであるため、学年合同のチームティーチングなどの授業展開はみられなかったが、2年生生活科のワークスペースでの郵便局づくりや、学校全体を使った3年生理科の「音」の学習など豊かな学校空間を活かした授業展開がみられた。休み時間になると子供たちは思い思いに学校中へ散らばっていく。コンピュータ室でパソコンに向かう子、音楽室でピアノを弾く子、体育館で先生と一緒に遊ぶ子、中庭やバスを駆け回る子、ワークスペースでふたり仲良く本を読む女の子……、と様々な場所で様々な活動がみられる。チャイムはなくても子供たちは自分で時計を見て行動しており、自律性のある姿が垣間みられた。(R)



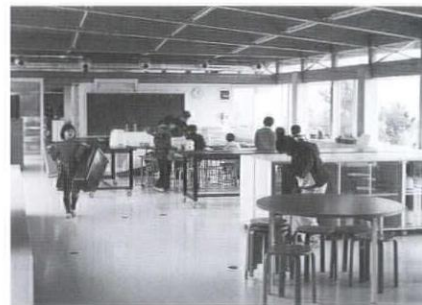
配置図 S=1:3000



教室脇のワークスペースにあるテーブルでビー玉遊び



2年生が生活科の郵便局づくりでワークスペースへ展開



使用頻度の低い理科室と家庭科室をひとつにした理科兼家庭科室でのミシンの実習



アルコーブの段差に腰掛け本読み

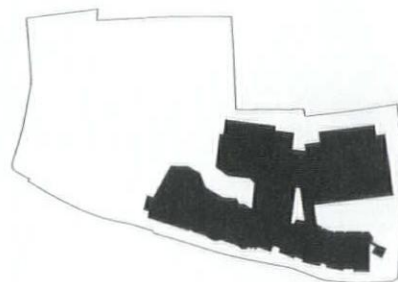


教室脇のアルコーブに入り込んでおしゃべり



昼休みには先生も一緒になって遊ぶ。体育館

敷地の形状に合わせ変化に富んだ ダイナミックな空間構成



新宿区立落合中学校

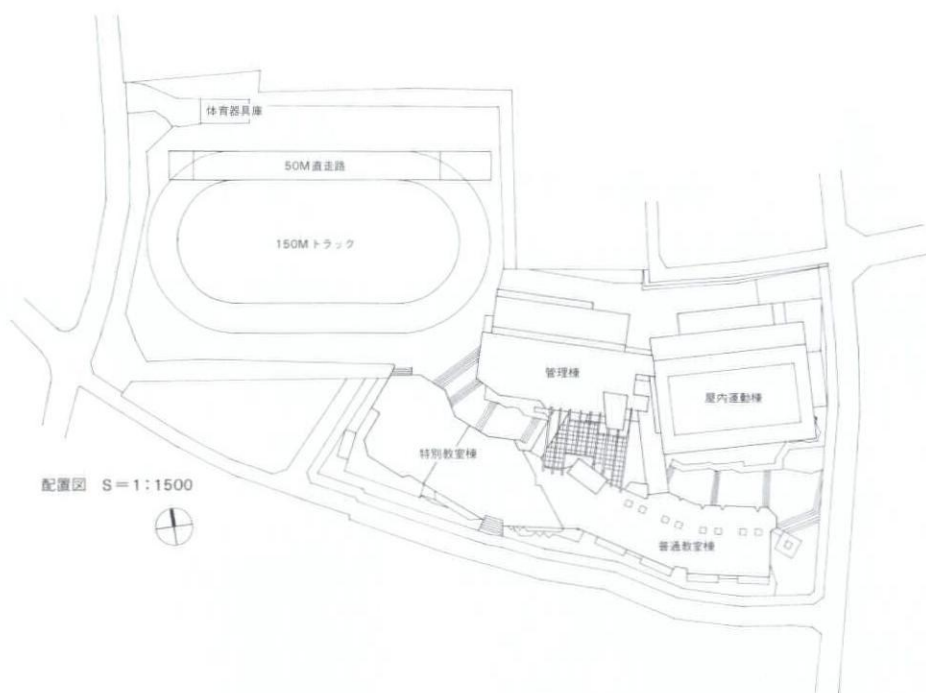
新宿区下落合の閑静な住宅地に建つ落合中学校は第一種低層住居専用地域の厳しい建築制限をクリアしつつ、変化に富んだ街並みのような空間を構成している。全体の骨格空間となるアプローチからグラウンドまでの通り抜け通路は、敷地の高低差を活かした溪谷を思わせるモール状の大空間となっている。また、モールの両側にそびえ立つ教室ブロックと管理・体育施設ブロックは、溪谷の兩岸をイメージし、あたかも岩壁のような不整形なファサードをつくりだしている。「溪谷」には兩岸を結ぶ2本のブリッジとガラスの屋根が掛け渡され、雨天でも利用可能な求心的な多目的空間を提供している。

教室棟は、普通教室と理科室、図工室といった教科別の教室を持つ「特別教室型」であり、現在もそのように運営されているが、普通教室を人文系、理科系、語学系に割り当てることにより「教科教室型」運営にも対応可能となるよう計画されている。

所在地	新宿区下落合 2-24-6	
設計	建築	船越徹+ARCOM
	構造	佐野建築構造事務所
	設備	P.A.C.
構造	RC+SRC造	
竣工年月	1993年3月	
敷地面積	9,577.41㎡	
建築面積	3,075.25㎡	
延床面積	6,600.16㎡	
計画クラス数	12クラス	
クラス数	8クラス	
生徒数	277人	



中央モール。校門から構内を見る





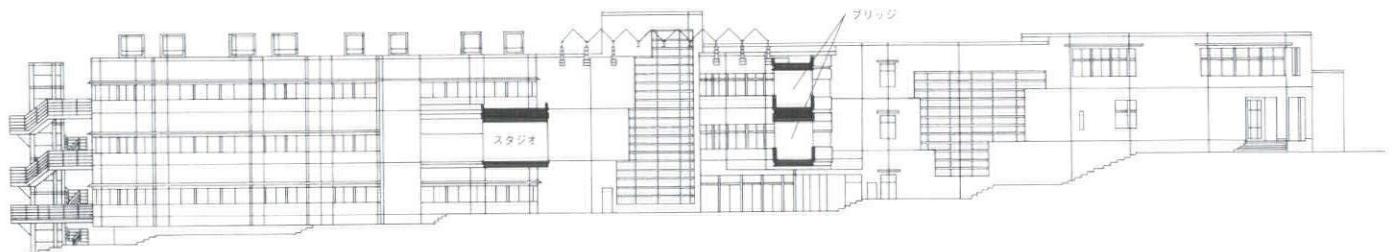
音楽室。教室内でパート別に分かれて合唱の練習



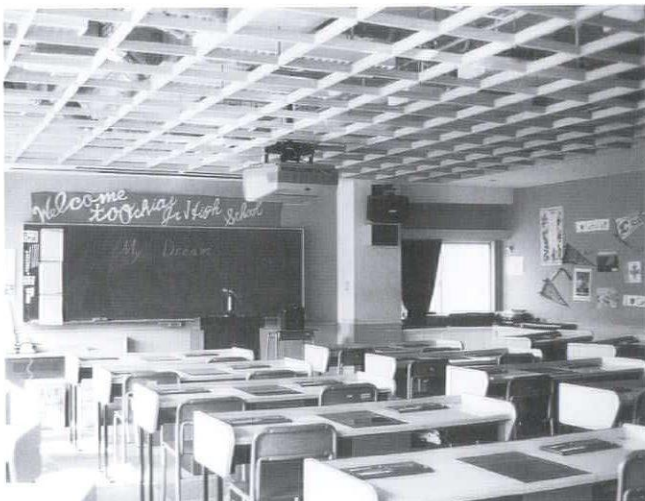
美術室。各自思い思いの机で作業を行う



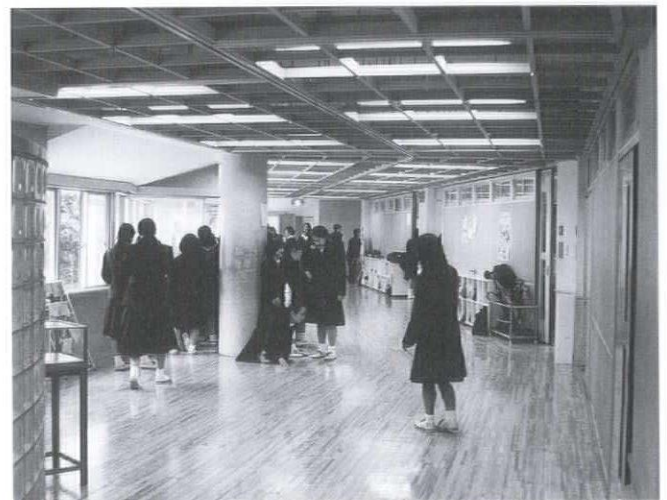
調理室。隣接している被服室と連続的な利用も可能となっている



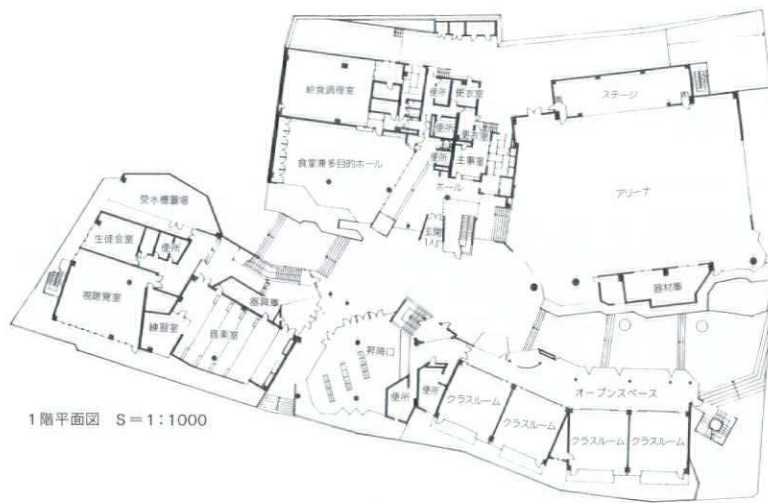
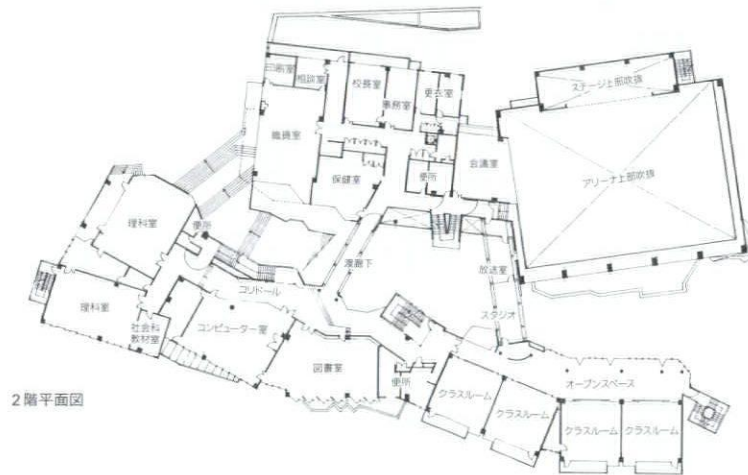
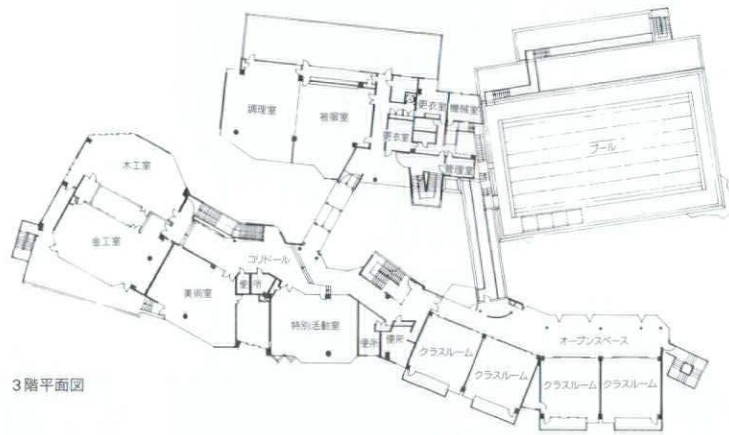
東断面図 S=1:500



視聴覚室。主に英会話の授業で活用されている



オープンスペースの風景。不整形で天井高は2.4m



閑静な住宅街の一角に小さなポケットパークのような空間がある。そこから中を覗いてみると、変化に富んだ不整形のふたつの建物の間をガラス屋根のモールが奥へと続いている。モール上部に架けられたブリッジの上を生徒たちが通過し、またモールの脇には小さなせせらぎが流れている。ここでは学校の中で生活する生徒の動き、せせらぎの水の動き、ガラス屋根から見える雲の動き、そしてモールの中を過ぎて行く風の動きが感じられる。

教室棟に入ってみると、モールと同じように所々にレベル差のあるコリドールが続き、窓際には建物の凹凸を利用した小さなコーナーやベンチが設置されている。オープンスペース天井部分には可動間仕切りを固定するためのレールが引かれており、教科教室型の運営に対応できる仕組みになっているが、現在はどのクラスルームもオープンスペースとの間を仕切って利用し

ていた。

また、すべてのクラスルーム、特別教室の天井は法規上定められている3.0mの高さを確保しているが、2.7mもしくは2.4mの高さに木製の格子を吊して生徒の身体スケールを考慮した空間を作り出している。

特別教室はそれぞれの部屋の形状が全て異なり、部屋毎に特徴的な空間を構成している。音楽室は地域解放を考慮し1階に設置されているため、敷地の形状に合わせた階段状の教室空間となっている。また、語学教育に熱心な地域性を反映して、概して閑散とした空間になりがちな視聴覚室も色とりどりの展示が施されており、活気ある楽しい学習風景が想像できる。

体育館、音楽室、多目的室、会議室などを地域に対して解放しており、「学校5日制」の導入に伴い、今後は地域コミュニティの拠点としての役割も期待できる。(K)



校門前の広場空間。ここからモールが続いている

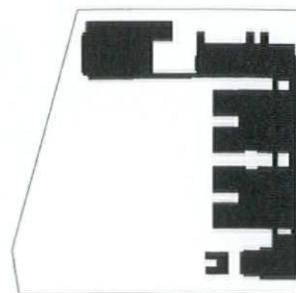


オープンスペースに設置されたベンチ



中央モール。グラウンド側から校門方向を見る

ハイブリッド構造がつくりだす 特徴ある内部空間



つくば市立東小学校

つくば東小学校では、「物づくり」「生活づくり」「街づくり」という3つの社会的課題を掲げ、それぞれの課題について、以下のように建築的解答を導き出している。

「物づくり」：子供たちの生活空間には木材を積極的に採用すべきだという考えを基に、平坦で画一的になりがちな学校空間に、伝統技術を活かした木造架構を採用し、豊かな空間性、高い質感を実現している。

「生活づくり」：校舎は各学年がひとつの「住まい」であると考え、各棟が昇降口やトイレを持つ分棟形式によるクラスター型配置としている。低・中学年のクラスターは2教室単位の2棟をRC造のオープンスペースと屋外のウッドデッキで連続させたコの字型の平面構成となっており、一方、2階に位置する高学年クラスターは個別学習など少人数での活動に対応しやすいよう、教室とオープンスペースが一体的に構成されている。

「街づくり」：外部の道路や緑道から周辺の住民も気軽に通過出来る「インナー街路」を引き込み、この街路空間に沿って学年クラスターや特別教室群・管理ブロックを配置し、学校の中に周囲と一体となった街並みをつくりだしている。

所在地	茨城県つくば市
設計	建築 現代計画研究所 構造 山辺構造設計事務所 設備 協栄設備計画
計画指導	長澤悟
木造架構技術指導	田中文男
構造	W+RC造
竣工年月	1995年3月
敷地面積	21,979.5m ²
建築面積	5,541.76m ²
延床面積	6,450.64m ²
計画クラス数	13クラス
クラス数	20クラス
児童数	389人

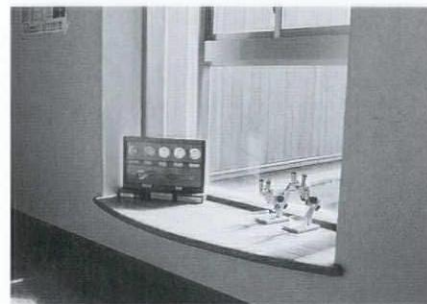


教室横の日向でくつろぐ子供たち

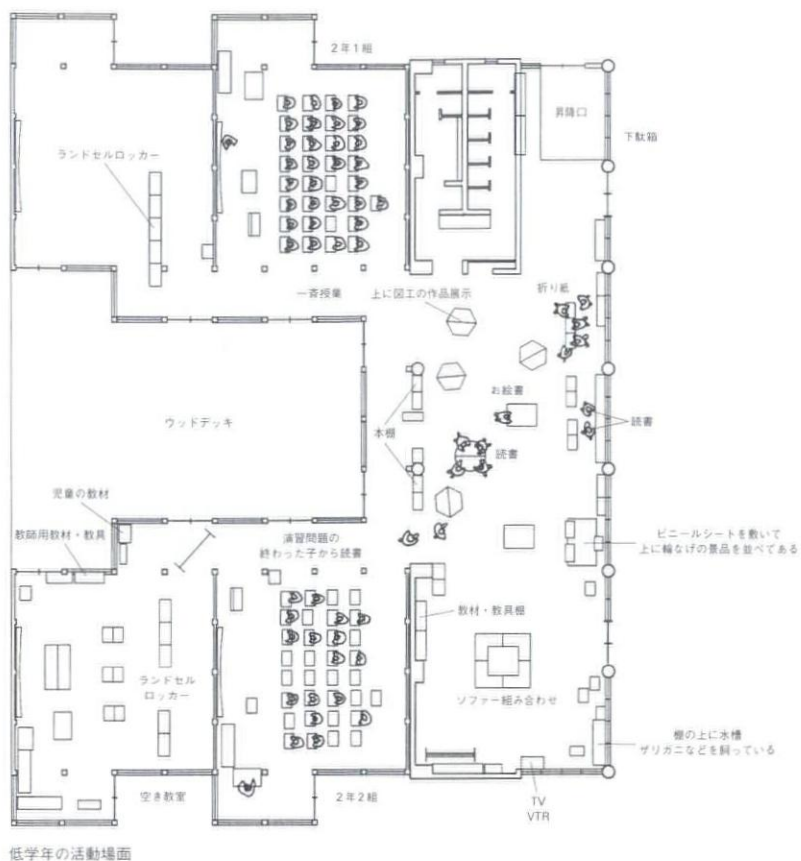
SD9907



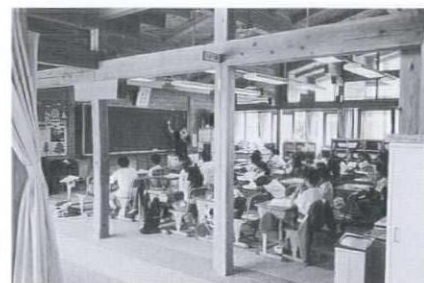
クラススペースの教師コーナーで遊ぶ子供たち



窓台に設えられた顕微鏡などの実習環境



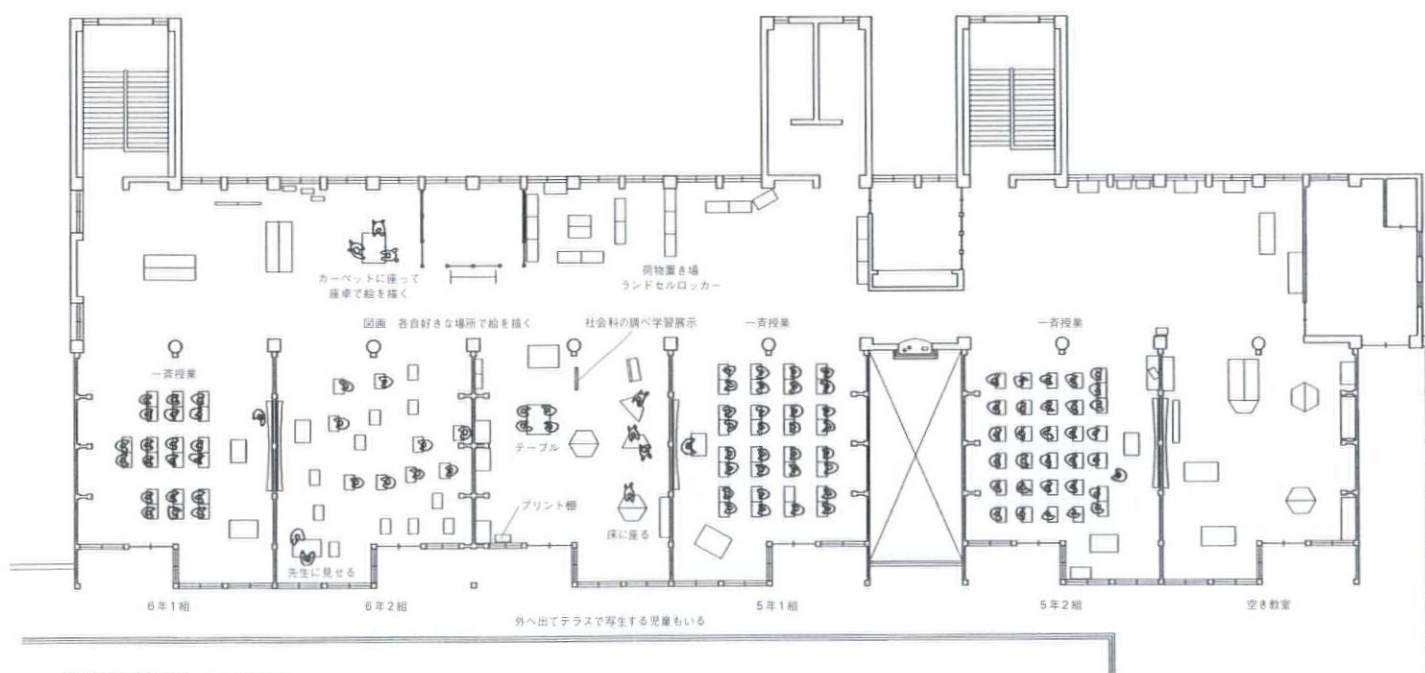
教室の柱にのぼる子供

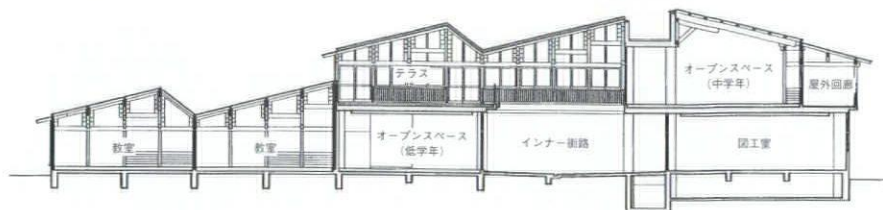


クラススペースの授業風景

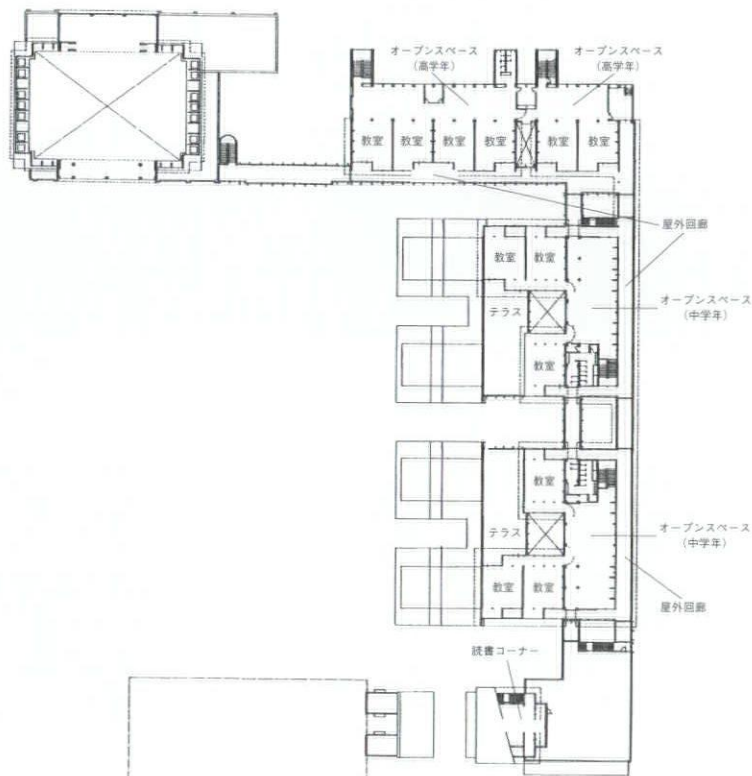


空き教室を利用した図画の実習活動

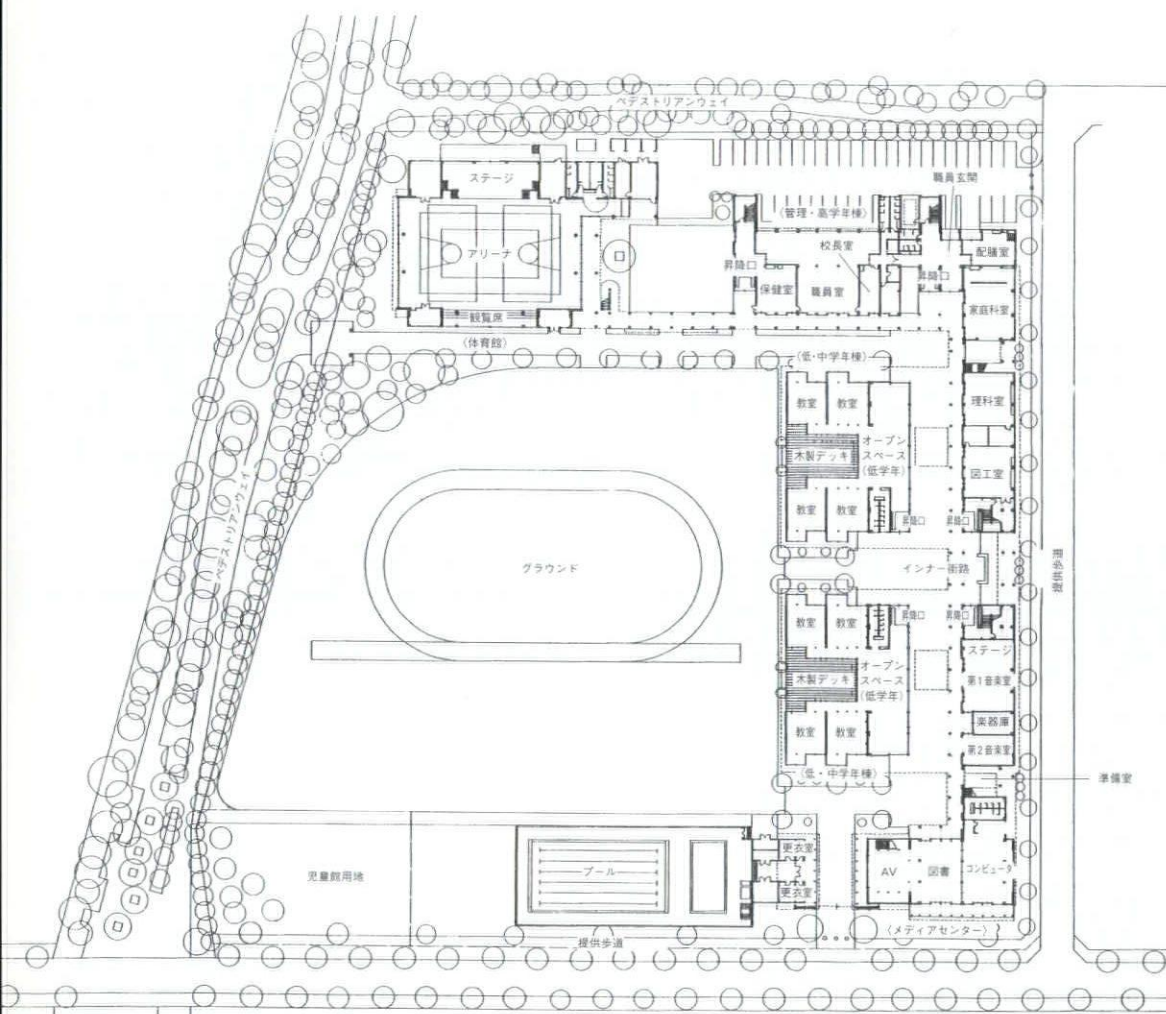




断面図 S=1:500



2階平面図



配置図兼1階平面図 S=1:1500

RCの壁と床に囲まれたインナー街路を抜けて学年クラスタに入ると、学年専用のオープンスペースが広がり、広々とした実習スペースが確保されている。さらにウッドデッキを囲んで両側に展開する教室部分に踏み込むと、そこはまるで雰囲気の違いが木造の空間となっている。ふたつの教室をつなぐ通路の部分は直接デッキに出ることもでき、日当たりも良く、縁側のような空間となっている。休み時間になると子供たちはいつの間にかそこへ出てきて座り込んでおしゃべりをしたり、ひなたぼっこをしたりして時を過ごしており、クラススペース周りの木造空間は子供たちのくつろぎの場となっているようである。一方、オープンスペース側では生活科の作業の続きに取り組む子供や紙飛行機を飛ばして遊ぶ子、ソファに集まって友達と一緒に読書をする子など、クラススペースに比べ、活発な活動をする子供が多く見られた。

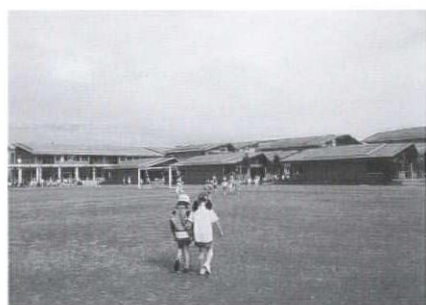
低・中学年クラスタでは、このように住宅にはない広々とした空間を持つオープンスペースと住居的な雰囲気を醸し出すク

ラススペース部分とが緩やかに連携している。そのため子供たちも自分の好みや活動の内容に応じて空間を使い分けているようである。

また、2階に位置している高学年クラスタは、1階と同様にRCでつくられたオープンスペースと木造のクラススペースで構成されているが、オープンスペースがクラススペースに向き合う形で一体的に構成されているため、空き教室も使いながら多様な学習環境を構成している。高学年の子供たちは、そのような多様な学習環境の中から思い思いの場所を選んで各自の学習や作業に取り組んでいる。

低学年棟の住居的な場（クラススペース）と広場的な場（オープンスペース）、高学年棟の一斉に学ぶ場と個別に学ぶ場。それぞれに適した空間の雰囲気が、それぞれの構造タイプと空間構成の調和から、うまく引き出されているように思えた。

(K)



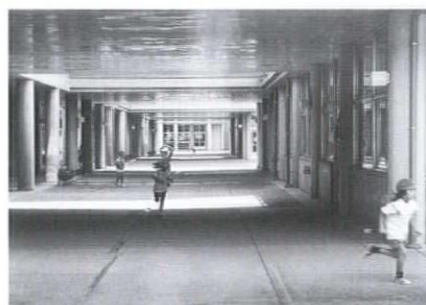
休み時間が終わり自分たちのクラスターへと戻っていく子供たち



教室と連続したデッキに出て植物観察



低学年クラスタと職員室の間を抜ける通路



インナー街路をかけぬける子供たち

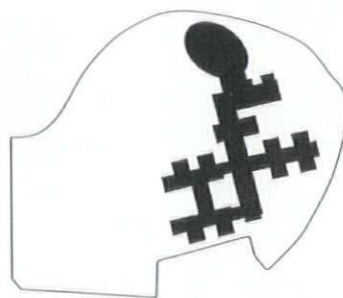


2階高学年オープンスペース



体育館。奥には公園通りの遊歩道が見える

ウッドデッキを取り囲み 内部と外部が連続的に広がる ニュータウンの小学校



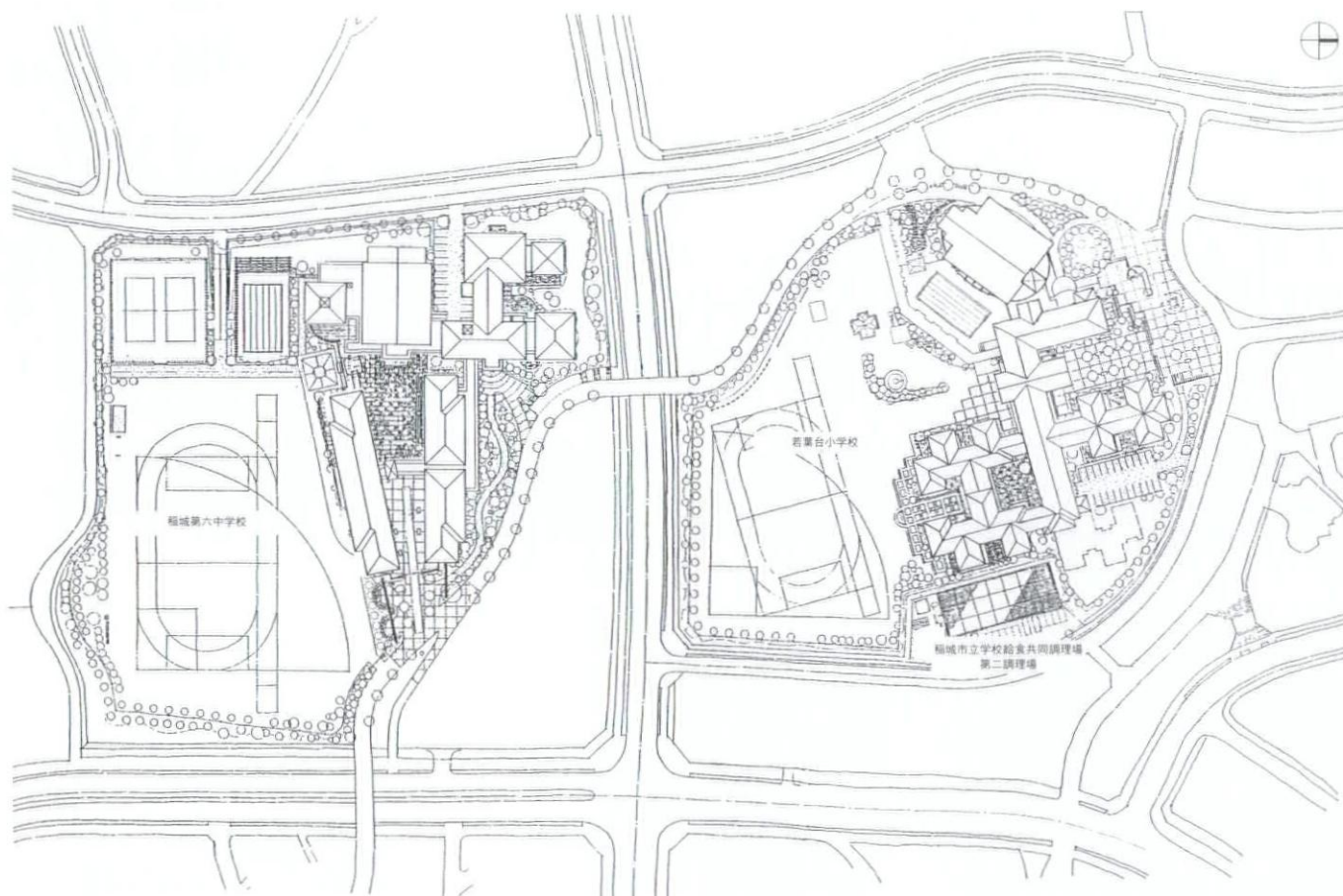
稲城市立若葉台小学校

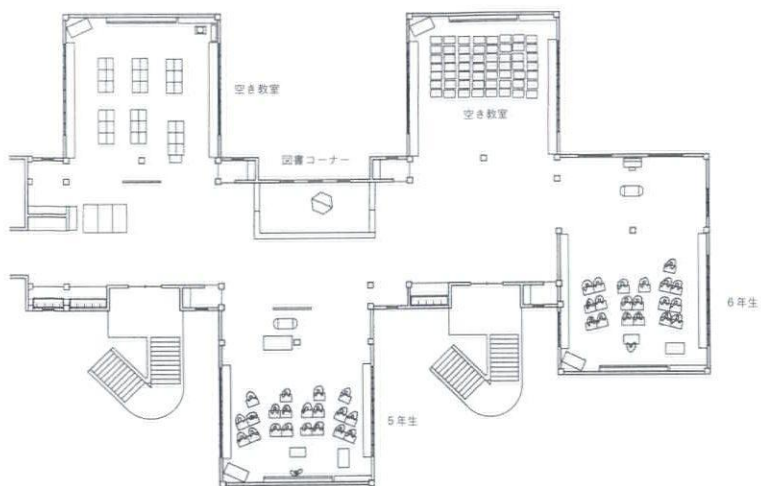
多摩ニュータウン最後の開発住区に開校したニュータウンの新設小・中学校である。

住区から街の中心地・駅にむけてなだらかに蛇行して続く緑道に沿って、小学校、中学校が隣接して配置されている。このプロムナードに沿って、小・中学校のレンガ貼りの壁とセメント瓦の屋根、特徴的な形態の時計塔などのシーンが連続的に展開し、周辺の住宅地環境とも良くマッチした、親しみやすい景観をつくりだしている。街開き当初の唯一の公共施設である学校によって景観形成を図り、街の魅力を演出していくとするデベロッパーとしての住宅・都市整備公団の意気込みや建築家の努力が見て取れる。

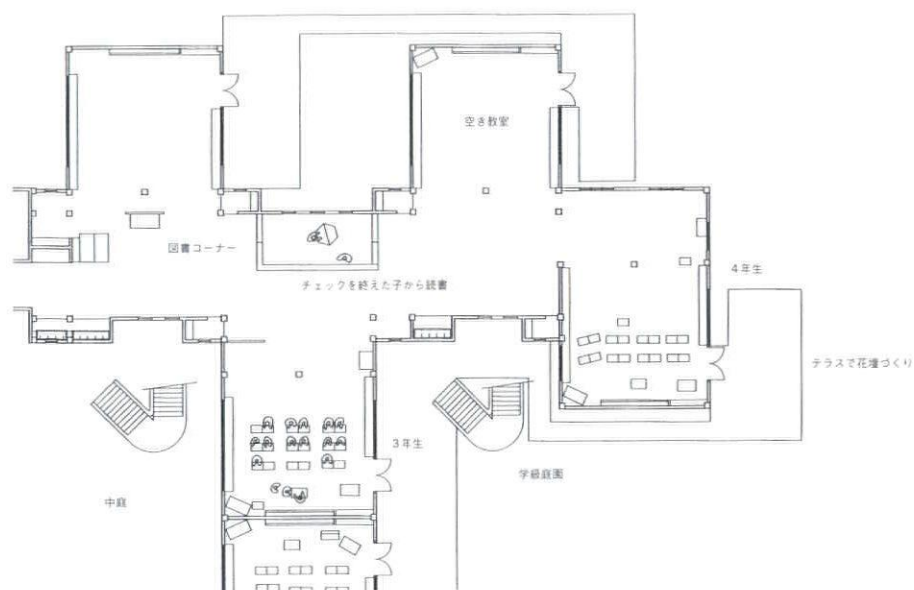
小学校は、木造校舎とレンガ貼りの外壁を特徴とする暖かい環境が大きな魅力となっている。各学年4クラス編成の計画であるが、2面採光のクラススペースをウッドデッキの庭を挟みながら配置し、これらを場のアンジュレーションに富んだオープンスペースで繋ぐ独特のユニットプランは明るく快適で、家庭的な雰囲気のある学校環境をつくりだしている。開校間もない現在は、小学校の全校児童数が139名と小規模校としてのスタートであるが、学校を開放してのオープン見学会に多数の地域住民が参観に訪れ、様々な感嘆の声を挙げるなど、滑り出しは順調のようである。

所在地	東京都稲城市
設計	建築 一色建築設計事務所 構造 中田捷夫研究室
計画協力	上野淳
構造	RC造+木造
竣工年月	1999年3月
敷地面積	26,206m ²
建築面積	4360.23m ²
延床面積	6,340.27m ²
計画クラス数	20クラス
クラス数	6クラス
児童数	139人

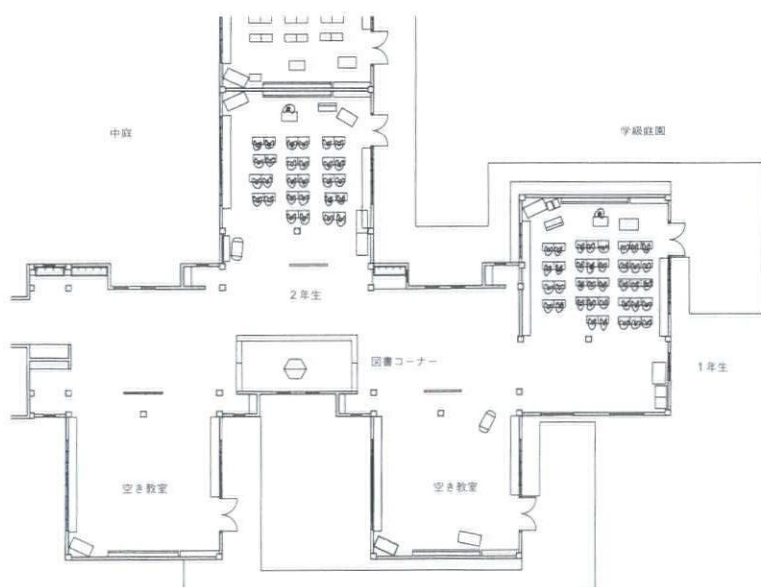




2階高学年活動場面



1階中学年活動場面



1階低学年活動場面 S=1:400



クラススペースと中央のホールに囲まれたウッドデッキ



中庭の階段に座って1人静かに過ごす



校庭に面した中庭。クラススペースから直接出られ、学級庭園になっている



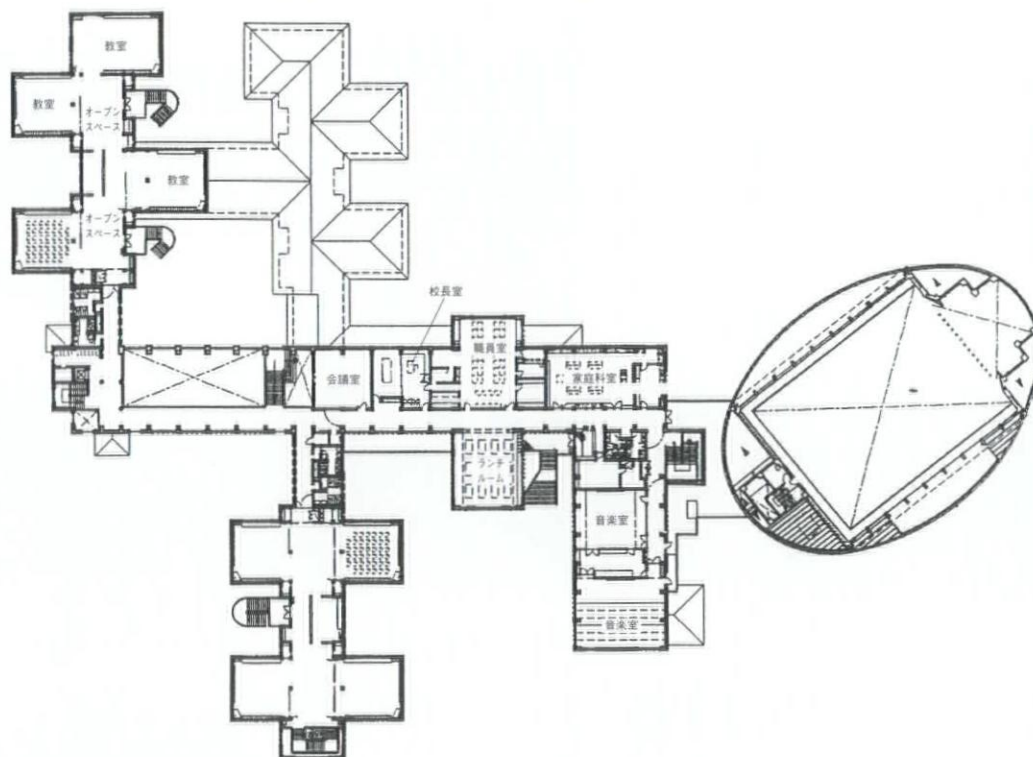
オープンスペースの風景。中央にはレベルの下がった図書コーナーがある



図書コーナー



各クラススペースの横にはアルコーブが設けられている

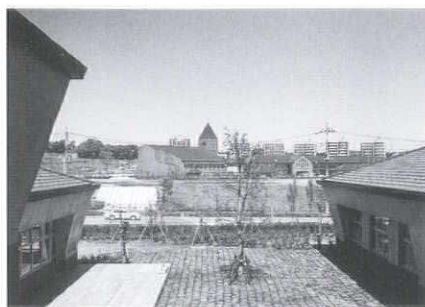


2階平面図



1階平面図 S=1:1000

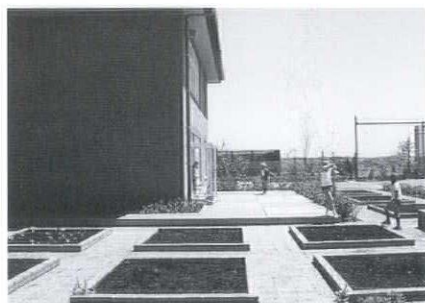




中学校から若葉台小学校を見る



低い校門越しに見える中央テラスの様子



クラススペースから連続的に広がるウッドデッキのテラス



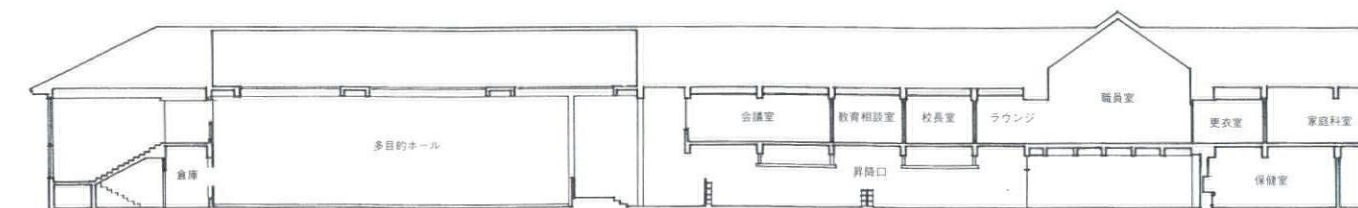
校門前の広場でおしゃべりをする子供たち



中庭に面した中央のホール



断面図 S=1:400



断面図 S=1:400

若葉台小学校は、多摩ニュータウンの新しい学校として99年4月に開校した。小高い丘の上に建つ、赤煉瓦の外壁で包まれたこの学校は、隣接する中学校と共に新しく生まれた、この街のシンボルともいえる。

朝、登校時間になると、まだ真新しい近隣の住宅街の中から子供たちが楽しそうに学校に向かって歩いてくる。散歩がてらに校門の近くまで来た母親に手をふる子、会社に向う父親と一緒に家を出てくる子、まだ造成中の空き地の中を探検しながらやってくる子。新しい土地で新しい生活を始めた子供たちのはつらつとした顔が学校に向かって集まってくる。腰の高さほどの低い校門の周りには小さな広場があり、ベンチや東屋、そしてそこから学校の周りへと続く遊歩道がある。子供達は集まってきた友達とそこで出会い、あいさつを交わし、ベンチに座っておしゃべりをする。

学年1クラスで始まった今年度は校舎の南側の棟を使用し、6

つのクラススペースが中庭を取り囲んだ配置となっている。各クラスともオープンスペースを囲むように教室が配置され、各教室には小窓のついた小さなアルコーブが設けてある。ここは、子供の身体スケールに合わせた小空間であるが、教師と子供の相談事や話し合いなどにもよく利用され、「相談室」などよりも心理的プレッシャーが少なく利用しやすい空間となっているようである。また、ふとした瞬間にその中を通過して教室とオープンスペースを行き来する子供の姿もよく見られた。

教室から直接出ることのできる広々としたウッドデッキのテラスや学年のクラスに囲まれた中庭は穏やかな心地よい空間となっており、休み時間になると子供たちは寝ころんだり、ひなたぼっこをしたり、おしゃべりをしたりする。これまでの学校の風景にはなかった雰囲気空間であり、これからの学校建築が目指す「子供の生活空間」の一例がここにあるように思えた。(K)

ホームベースをもつ 教科教室型の総合学科高校

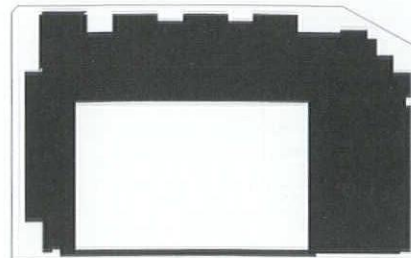
東京都立晴海総合高等学校

東京都立初の総合学科高等学校として、96年度に開校した。新設の総合学科高校は全国的にも事例が少なく、そのモデル的な建築計画の内容は注目される。

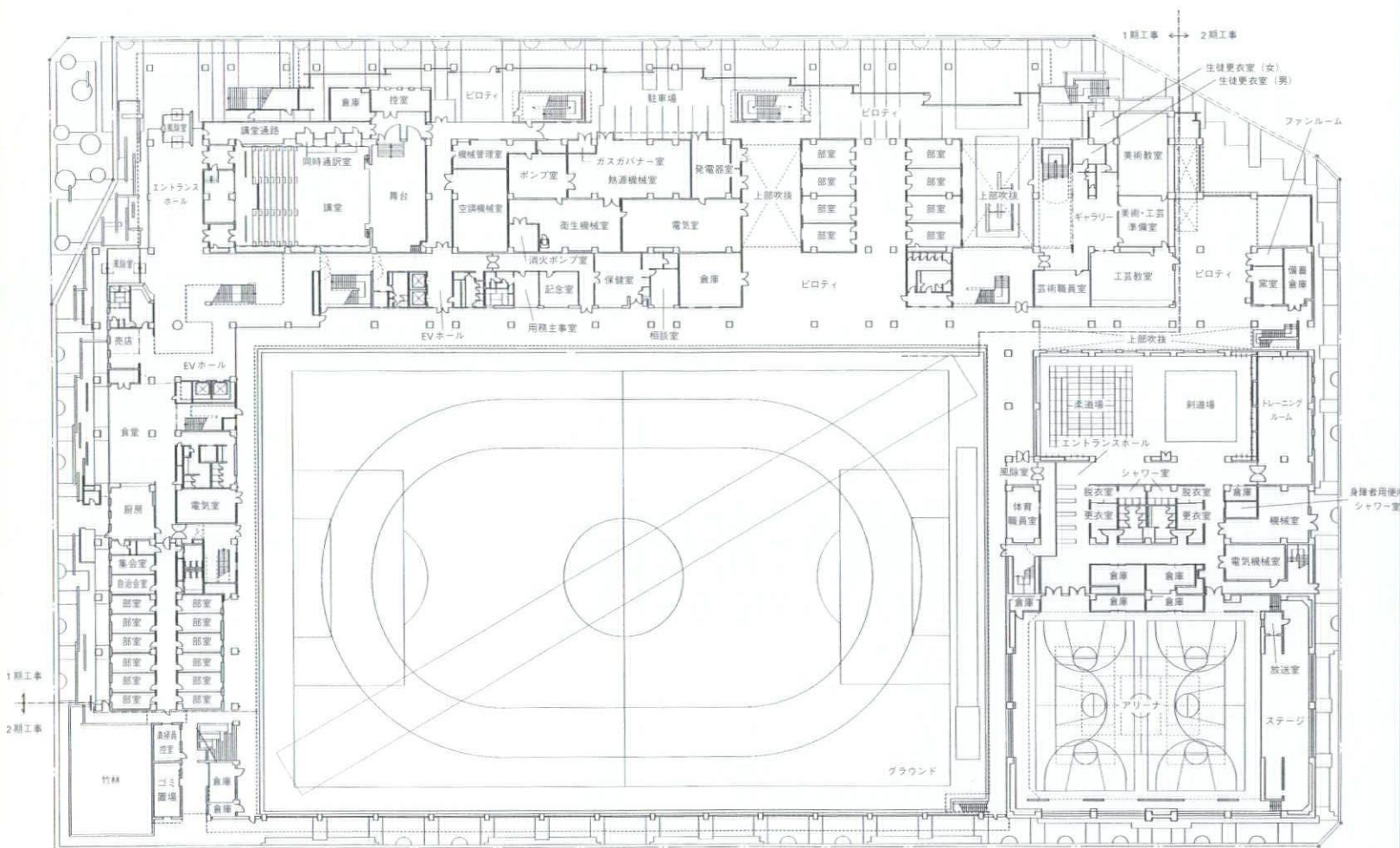
学年6クラス編成であるが、情報システム、国際ビジネス、語学コミュニケーション、芸術文化、自然科学、社会経済の6つの学系が設けられており、生徒の幅広い選択・専門指向に役立っている。

総合学科高校では1年生の間は必修科目が多いものの、2年、3年と学齢が進行するとともに選択教科の時間数が多くなるという運営上の特色がある。これに従って、1年生6クラスにはクラスルームを設けるものの、他の教室はすべて教科教室によって提供するという明快な方針に徹している。各教科ブロックは教科職員室、アゴラと呼ばれるオープンスペースと4～6の教科教室群によっている。ホームルーム教室を持たない2、3年生には半教室分の広さの「ホームベース」を生活の拠点として与えている。

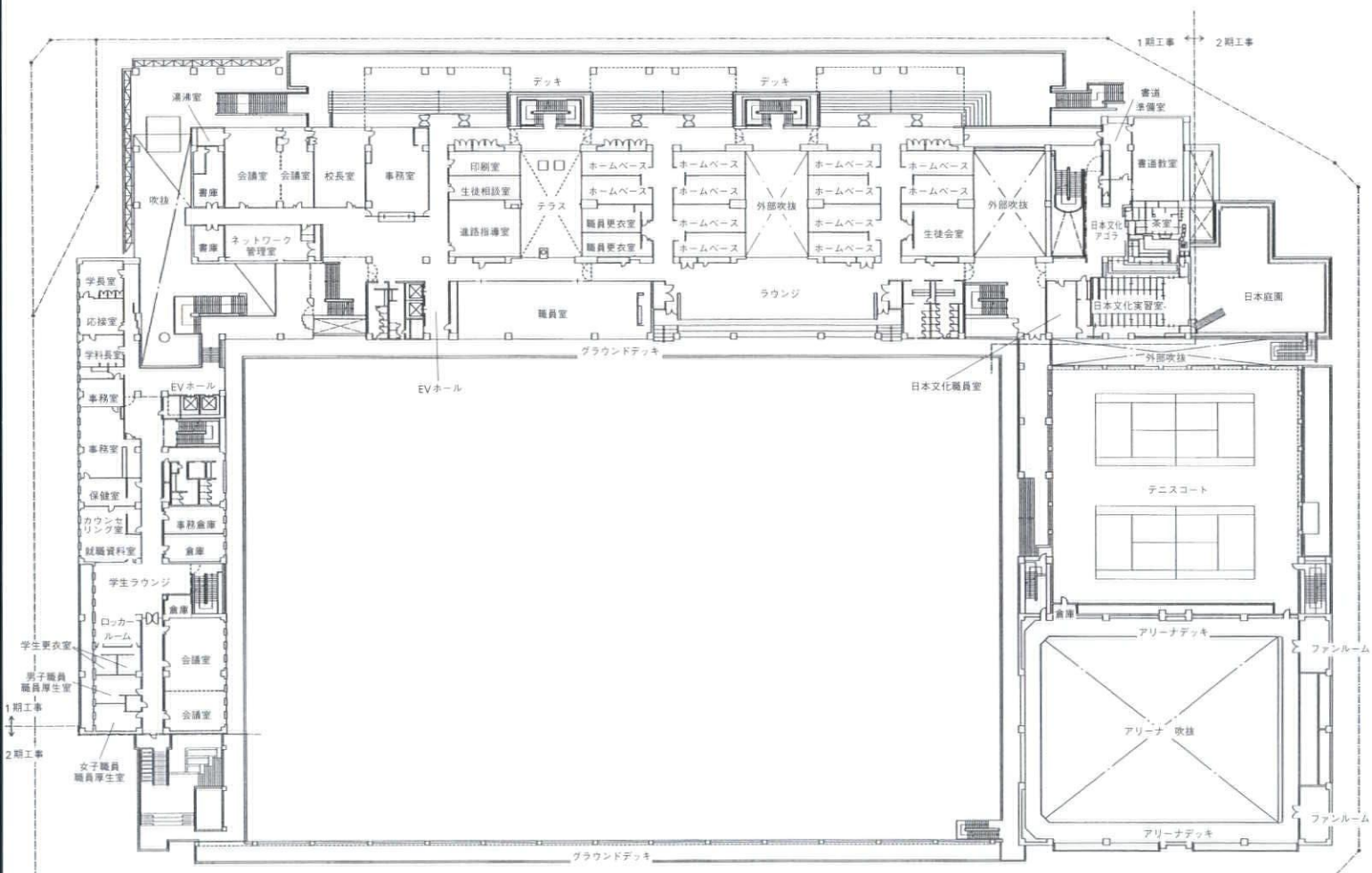
コンピュータ、語学、芸術などの特別教室にも充実した構成を持つ高校建築である。

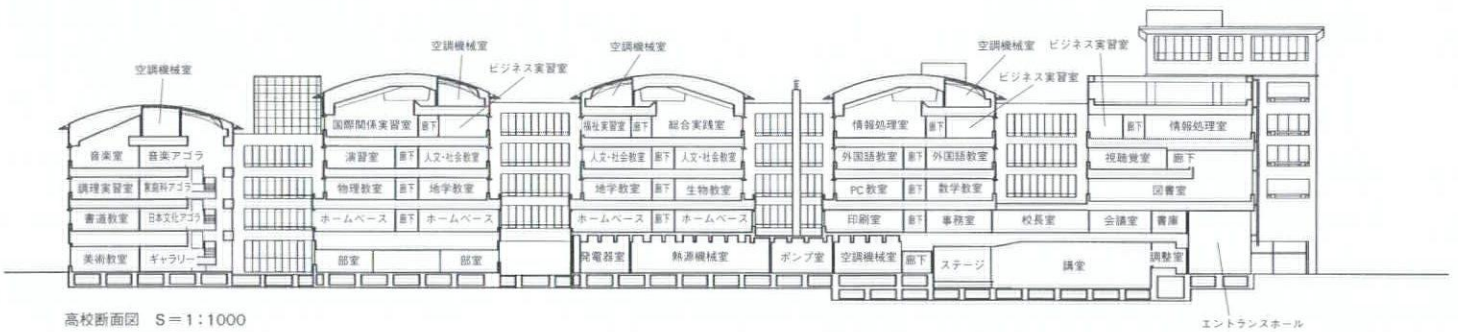


所在地	東京都中央区晴海
設計	建築 アルセッド建築研究所
構造	構造設計集団SDG
設備	ピーエーシー
構造	SPC+PC+RC+S造
竣工年月	1996年3月（1期工事）、 1998年3月（2期工事）
敷地面積	23,727.98m ²
建築面積	7,654.23m ²
延床面積	26,713.41m ²
計画クラス数	18クラス
クラス数	18クラス
生徒数	745人



1階平面図 S=1:1000





筆者はある時期、集中的に全国の総合学科高校を見て回る経験を持ったが、その中でもモデル的な総合学科高校であると思う。

計画のコンセプトが明快でしっかりしており、細部に及ぶシステマティックなディテール・デザインまで、設計者の思想が貫徹している作品と感ぜられる。

総合学科高校では、1年生の間はクラス単位の必修授業が多く、2、3年になると一転して各学系に別れる専門・選択授業が7～8割を占める。これに対応して、1年生には安定的なクラススペースを与え、2年以上には教科教室型運営を前提とした教室計画を考えている。新設校であるからこそ実現できた計画コンセプトであるといえるが、従来から学校建築に実績や経験を積んできた設計者ならではの提案であろう。

クラスの専用スペースを持たない2、3年生に専用の生活拠点としてのホームベースを与えているのも頷けるコンセプトである。但し、クラス人数に対してやや狭く、採光条件などの制約もあって、ゆったりした生活スペースとしての雰囲気に欠けている点は残念であった。

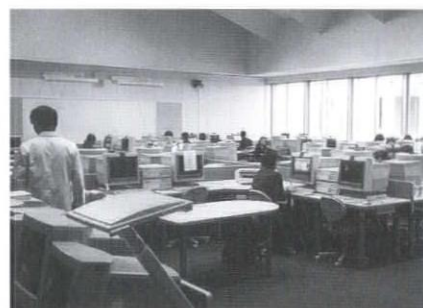
アゴラと呼ばれるオープンなラウンジが要所要所に配され、生徒の移動を受け止めるバッファ空間として機能している他、自学自習やくつろぎの場としても用いられている。このことも教科教室運営の学校、総合学科高校の運営上のニーズによく合っていると思われる。(U)



日本文化教室で茶道を学ぶ生徒たち



芸術関係教室も充実している



コンピュータも整備されている

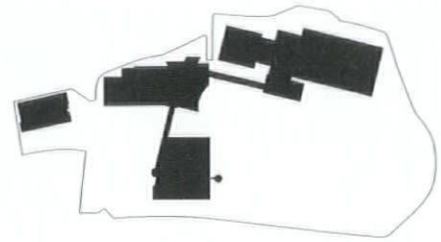


食事やグループミーティングに使われるラウンジ



吹き抜けの図書室を見渡す

村の中心施設としての 小・中学校一体の教育環境



浪合村立浪合小・中学校

標高1000m近い山間の村に建つ浪合学校は、小・中学校が一体に計画された学校であり、村で唯一の学校である。保育園が隣接し、修学館と呼ばれる地域住民開放ゾーンもあるため、児童・生徒のための学校ではなく村民全体のための学校となっている。

中央に位置する本館には小・中学校共用のランチルーム・音楽室・図書室・職員室などがあり、渡り廊下で小学校、中学校それぞれと結ばれている。

小学校は教室とオープンスペースに加えて、科目ごとのコーナーの集まりである総合特別教室で構成されている。

中学校は教科教室型運営を取り入れており、生徒の拠点となるホームベースと各教科の教科教室で構成される。小・中学校ともに教室の脇に教員ブースが設けられており教師の活動の拠点が児童・生徒の身近な位置に計画されている。

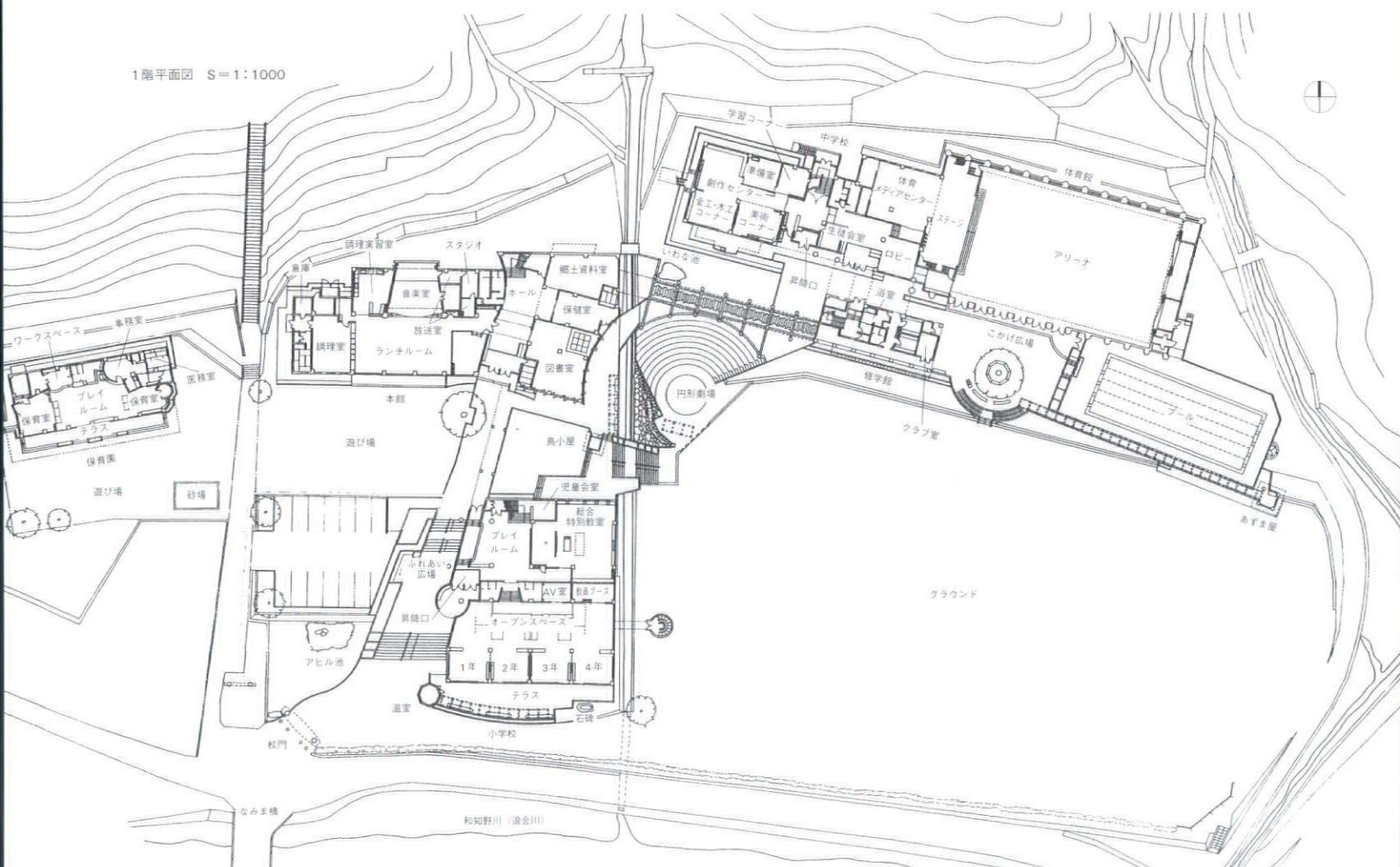
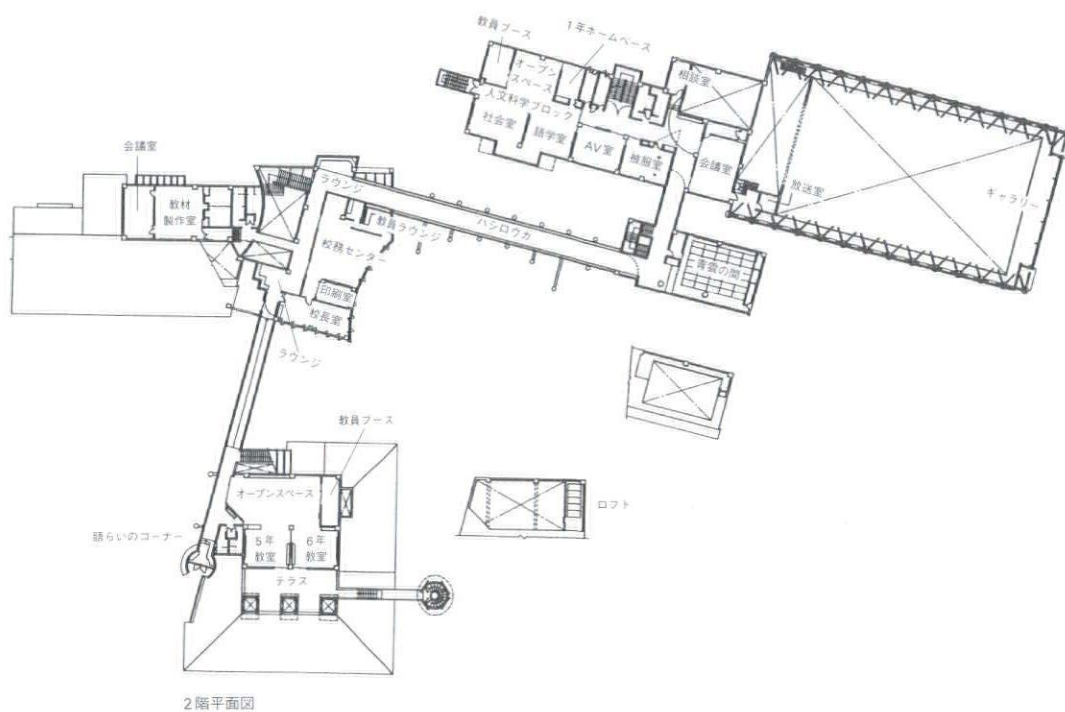
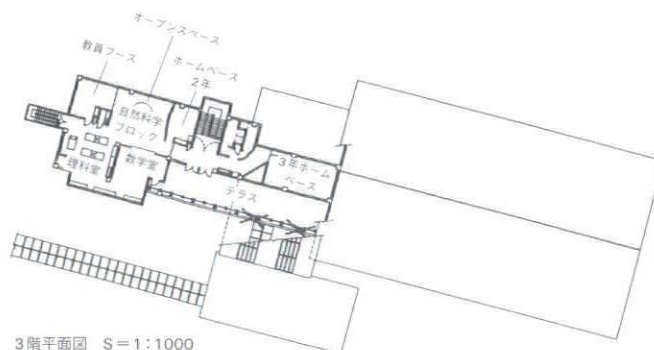
所在地	長野県下伊那郡浪合村
設計	建築 湯澤正信建築設計事務所 (現・湯沢建築設計研究所)
構造	藤井建築構造設計事務所
設備	環境エンジニアリング
計画指導	長澤悟
構造	RC造
竣工年月	1988年12月
敷地面積	14,695.97m ²
建築面積	3,480.56m ²
延床面積	4,896.76m ²
計画クラス数	6クラス (小) 3クラス (中)
クラス数	6クラス (小) 3クラス (中)
生徒数	50人(小)+27人(中)

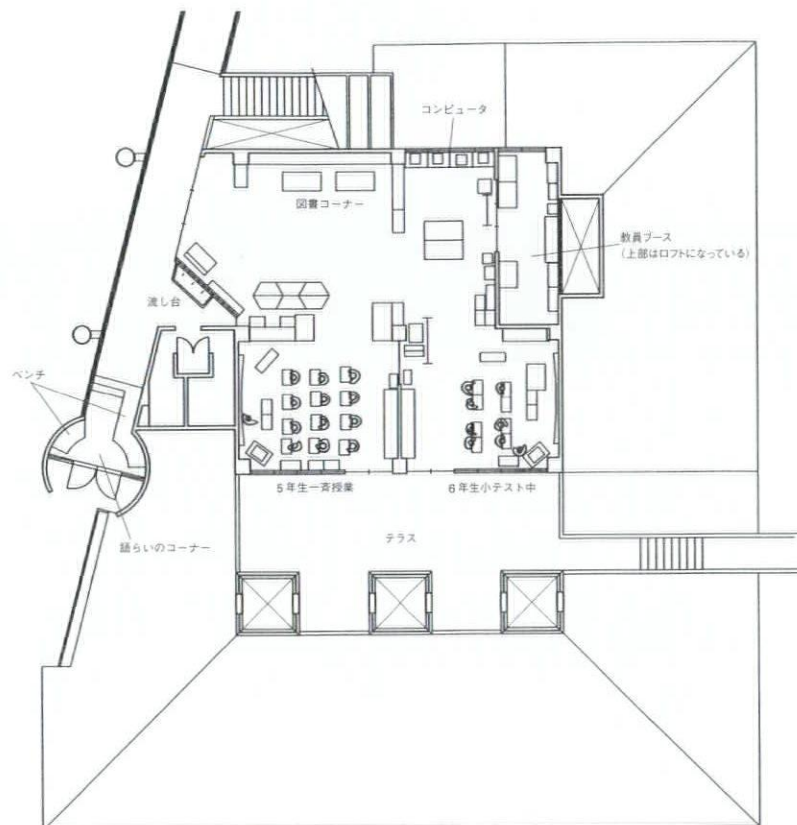


休み時間が終わり、ハシロウカを駆けて教室へと向かう子供たち
SD9907

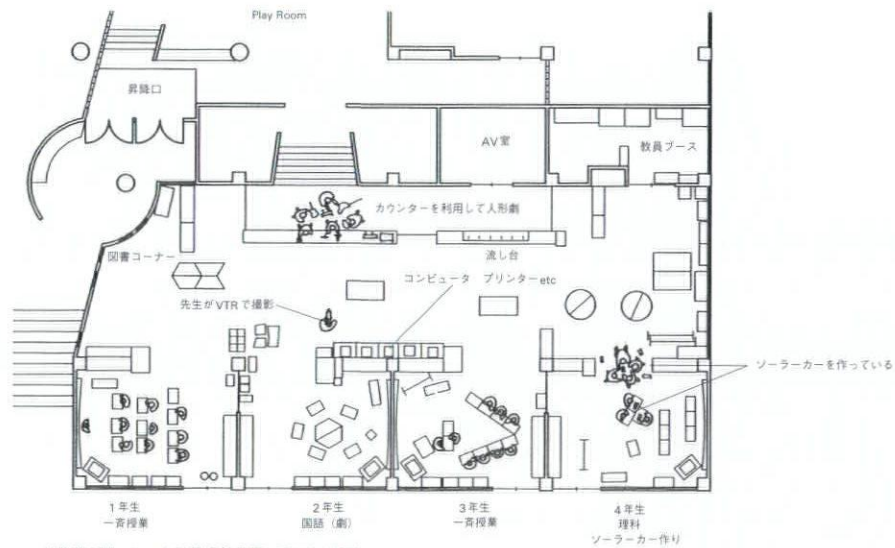


昇降口脇のプレイルームでなわとび

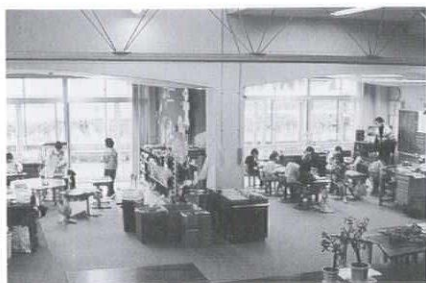




小学校2階 5、6年生活動場面



小学校1階 1～4年生活動場面 S=1:300



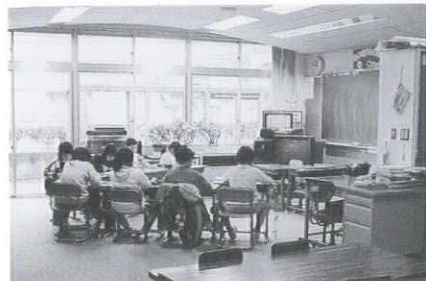
授業風景（左2年・右1年）学年によって机の配置も様々



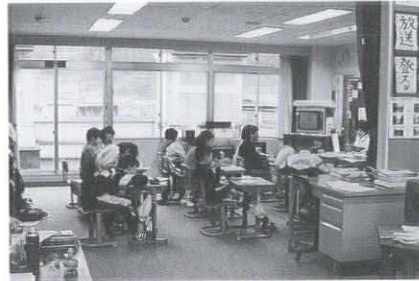
2年生。オープンスペースでの人形劇



4年生。グループに分かれて理科のソーラーカーづくり



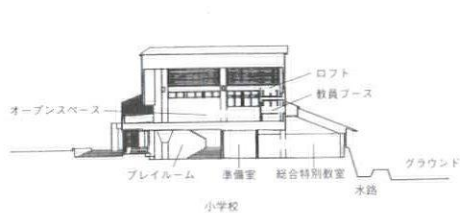
3年生。授業風景



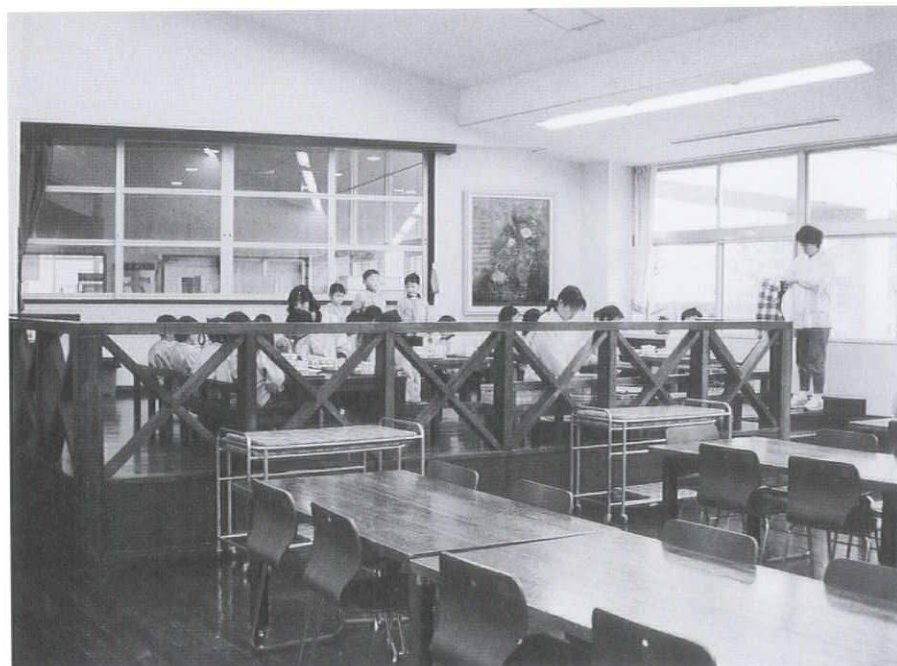
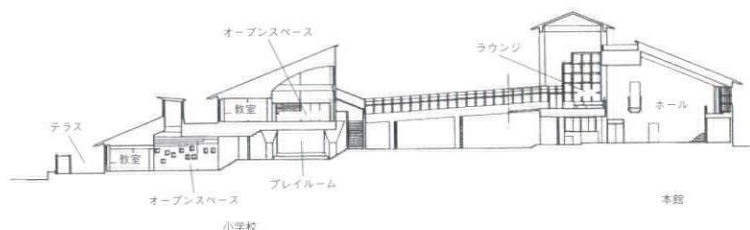
5年生。授業風景



休み時間。オープンスペースは格好の遊び場



断面図 S=1:800



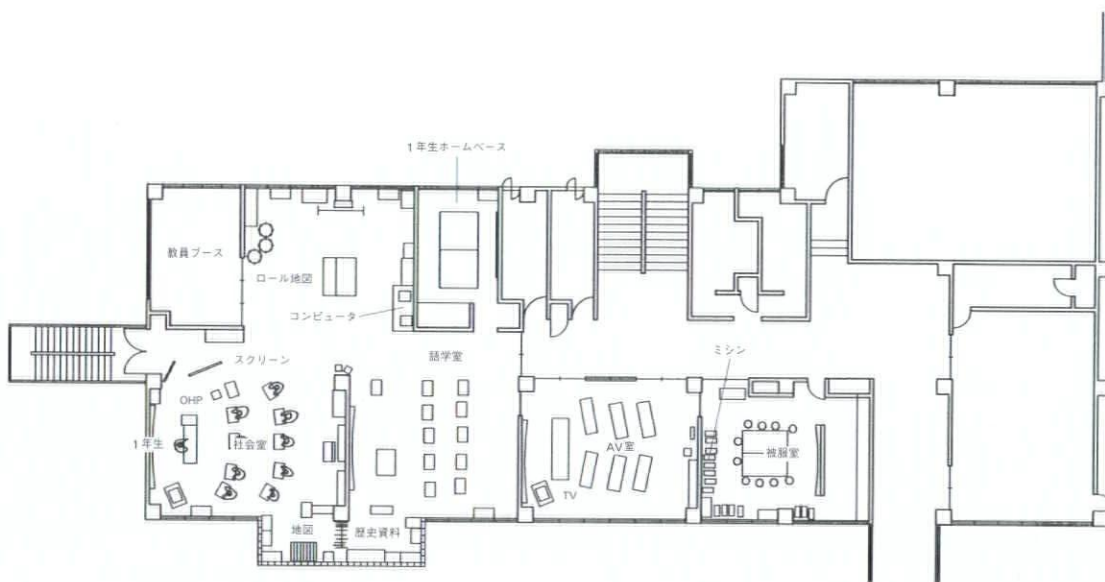
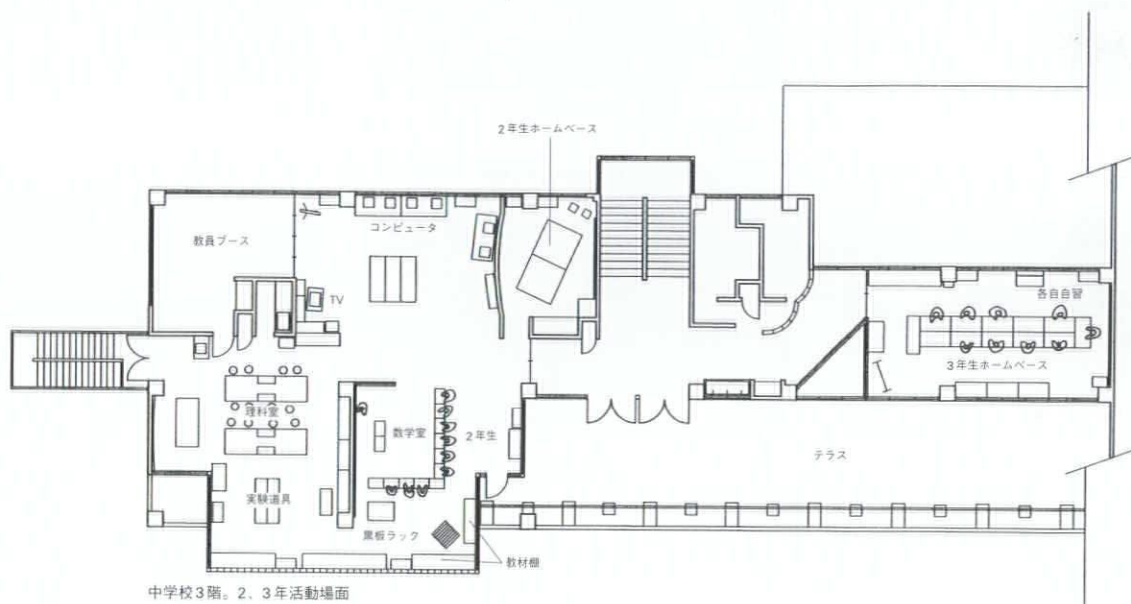
給食。始めに隣接する保育園の園児がやってくる



次に小学生がやってきて準備



最後にやってくる中学生は小学生と園児に囲まれての昼食となる





AV室で授業の準備をして待つ。休み時間は早めに移動して次の教室で過ごすことが多い



数学室。公式の掲示やグリッド入りの数学黒板などがある



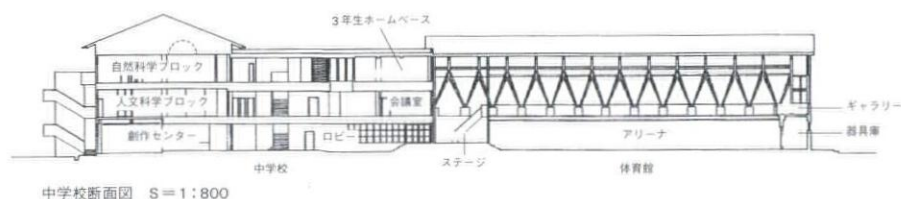
休み時間になると教科書の交換に戻ってきて、次の教室へと向かう



3年生ホームベースは1、2年生と違って各自一つの机がある



2年生ホームベース。教室とは違ったこじんまりとした空間が生徒たちの居場所



ハシロウカを駆け抜ける子供たちが印象的な浪合学校は小・中学校ともに学年1クラスと小規模な学校でありながら、どこからともなく子供たちの声が聞こえてくる学校である。

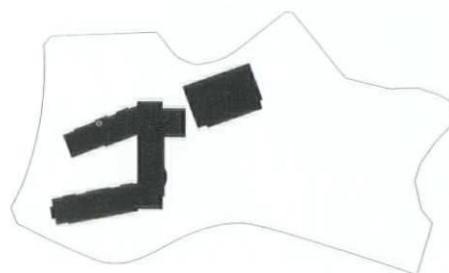
小学校は各学年10名程度の児童数で非常に小規模な学校である。どのクラススペースも数人の机を特徴的に配置し、室内の設えも積極的に行われている。1階部分は1年生から4年生までのクラススペースが横一列に並列され、それらをつなぐリニアなオープンスペースで構成されている。オープンスペースには教師ブースが隣接し、子供たちに身近な教員の作業スペースとなっている。また、子供たちの腰の高さほどのカウンターは、作業台としても利用できるようになっており、見学時は2年生の人形劇の舞台として利用されていた。1階と2階をつなぐ階段周りに設けられたプレイルームでは、縄跳びやおいかっこなど、子供たちの活発な遊びが頻繁に見られ、冬には豪雪地帯となる地域性からも重要な遊び場であると考えられる。2階には5、6年生のクラススペースがあり、比較的小さなクラスを構成している。オープンスペースは2学年でうまく利用

している様子が伺え、学習関連の展示なども積極的に行われていた。教員ブースの上に設けられたロフト（屋根裏部屋）は子供たちのスケールに合った楽しそうな生活空間となっている。

中学校はホームベースが生徒の生活の拠点となっている。1、2年生のホームベースは、教室の半分ほどの大きさで、ひとつの大机をみんなで囲んでいる。3年生には自分の机があり、受験を控え各自学習していた。朝夕の連絡は各ホームベースで行われ、1、2年生の学活などの時間は担任の先生の教科教室で行われる。教科教室は各教科の教材・備品・掲示に囲まれており、それぞれの雰囲気を作り出している。「ここに来ると数学をやるぞという気になる」と生徒が言うように教室移動で気分も変わり、めりはりのある学習・生活が行われている。

給食は隣接する保育園の園児も交えて、小学生・中学生みんなで食べる。時間割によって食べ始める時間は異なるものの、3歳の園児から15歳の中学生が、みんな一緒に食べる姿は小規模校ならではの光景であろう。(R)

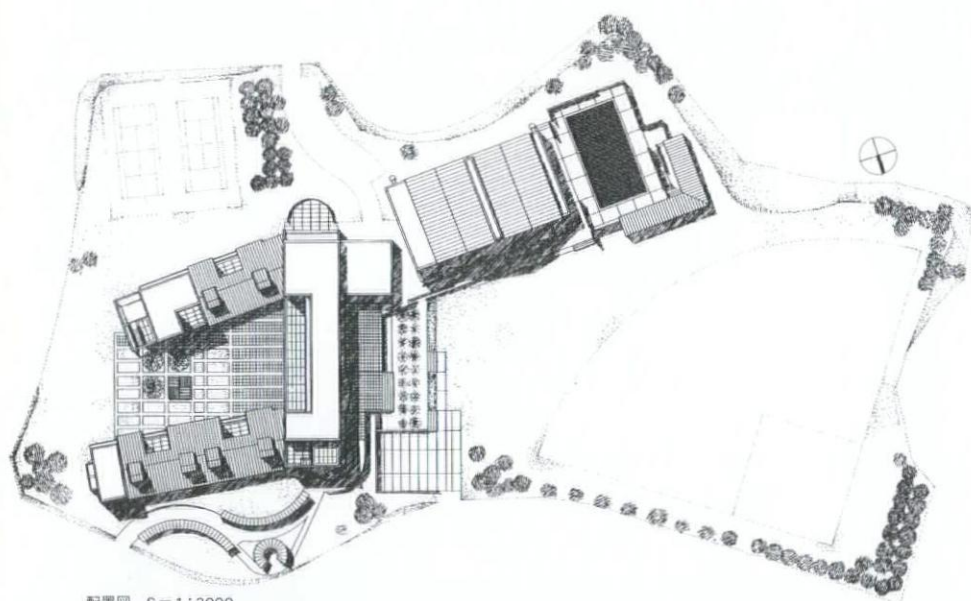
小屋裏のホームベースを拠点とした 教科教室型中学校



三春町立桜中学校

三春ダム建設によって水没する中学校2校の統合に伴って計画された、緩やかな丘の上に建つ新設の中学校である。教室棟は1階の教科教室と2階のホームベースで構成されている。教科教室は教科毎にそれぞれ専門の部屋があり、教室に連動するオープンスペース・教科準備室とともに学習ユニットを構成している。2階のホームベースは切妻屋根の小屋裏に作られ、教室とは違って屋根の傾斜が適度なスケールを与えている。ホームベースには光が射し込み、吹き抜けから階下の教室を見下ろすことができる。また、1階の教科教室のコンクリートと2階のホームベースの木によって、生活の場と学習の場の対比が作り出されている。職員室は、廊下からガラス窓越しに中の様子が伺える開かれた職員室になっていると同時に、棚に囲まれ教師がくつろぐことができるラウンジも設けられている。

所在地	福島県田村郡三春町
設計	建築 香山アトリエ／環境造形研究所
	構造 MUSA 研究所
	設備 大滝設備事務所
計画指導	長澤悟
構造	RC+W+S 造
竣工年月	1991年10月
敷地面積	27,474.11m ²
建築面積	3,954.94m ²
延床面積	4,432.91m ²
計画クラス数	6クラス
クラス数	4クラス
生徒数	119人

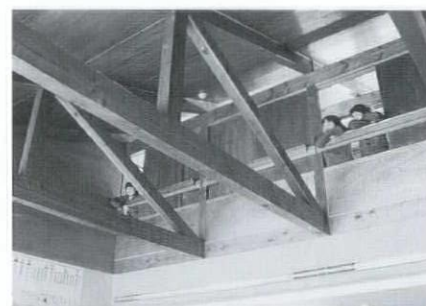


配置図 S=1:2000



ホームベースから数学教室を見下ろす

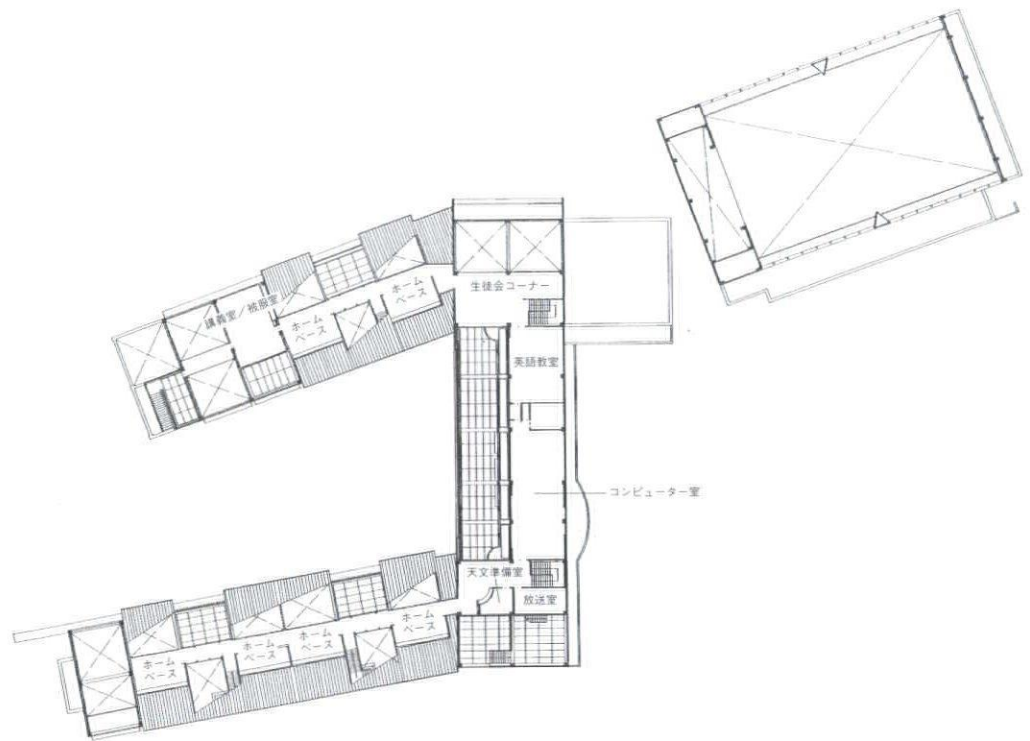
SD9907



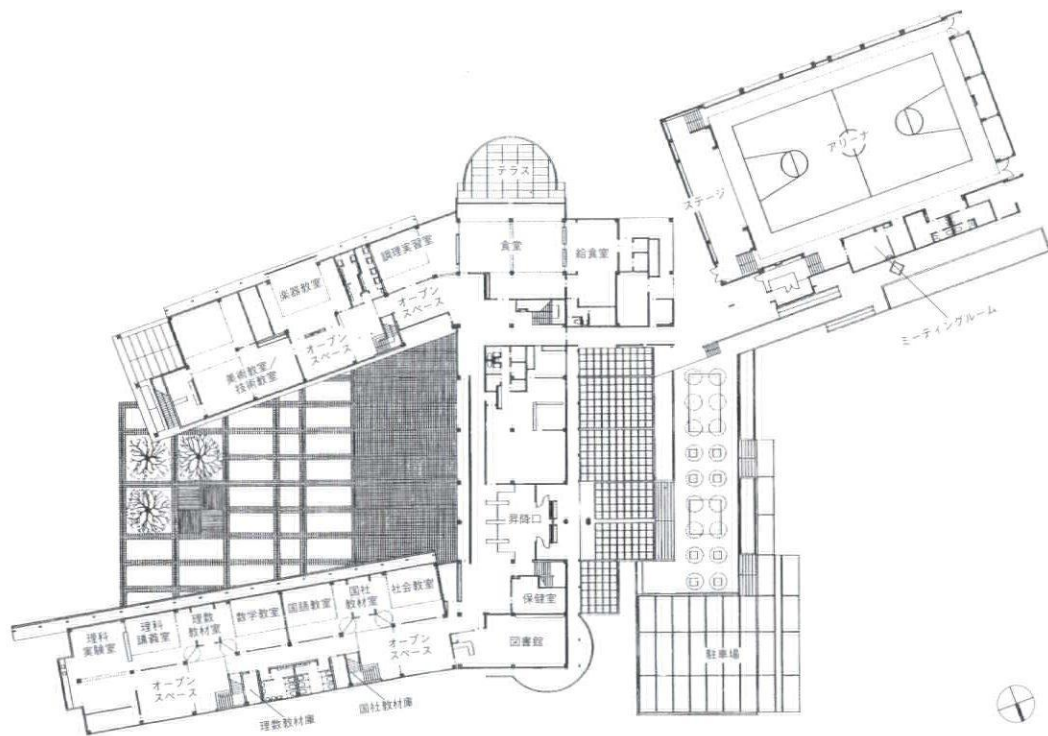
ホームベースと1階の音楽教室との間で会話



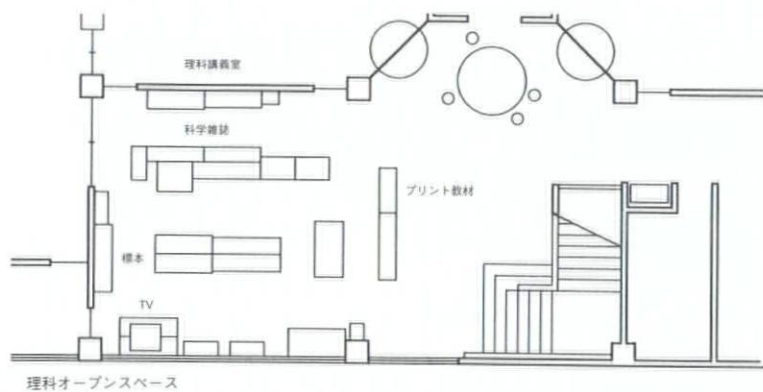
食堂と調理実習室で全校生徒そろって昼食



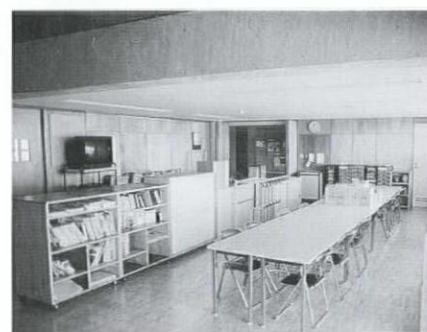
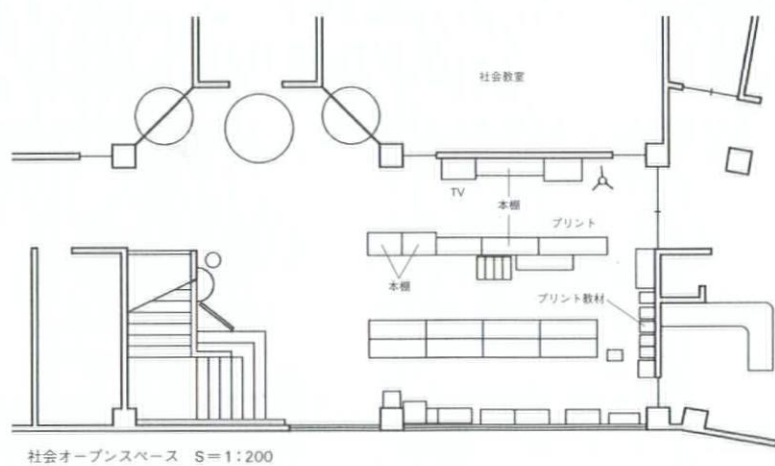
2階平面図 S=1:1000



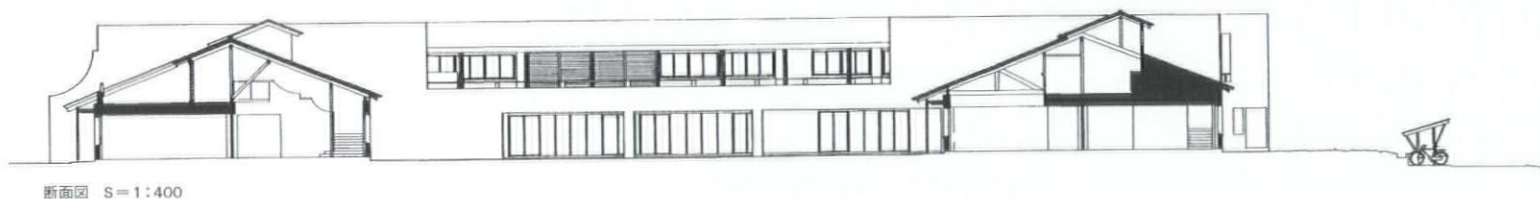
1階平面図 S=1:1000

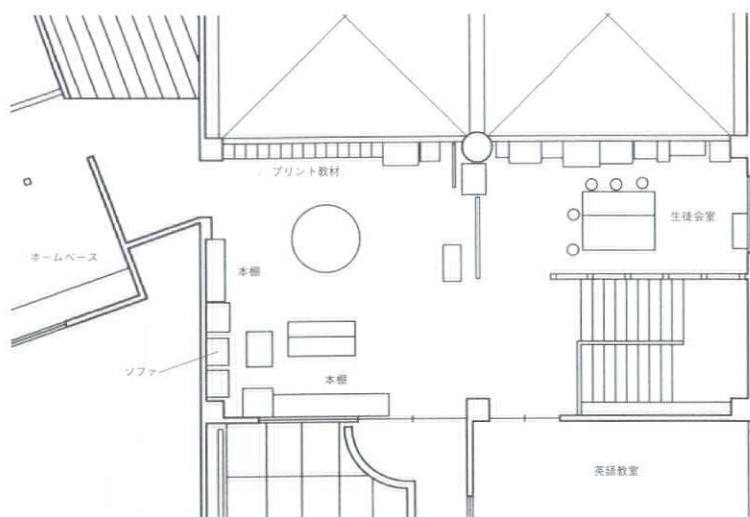


理科オープンスペース。プリント教材の他に標本や科学雑誌が置かれている。

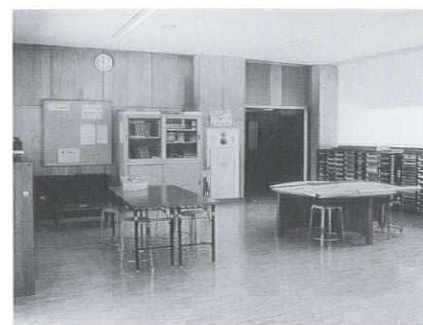


社会オープンスペース。様々な資料と調べ学習に使われる長机が並ぶ

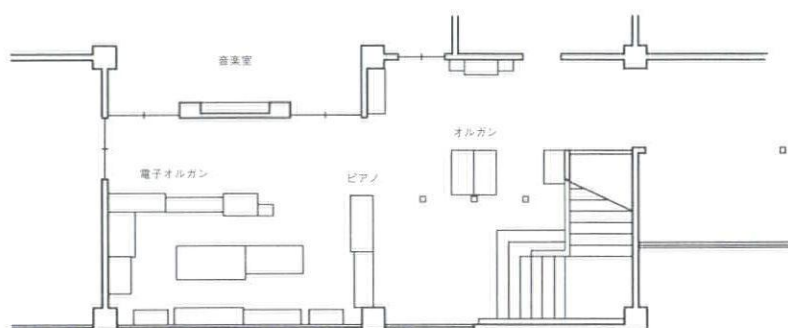




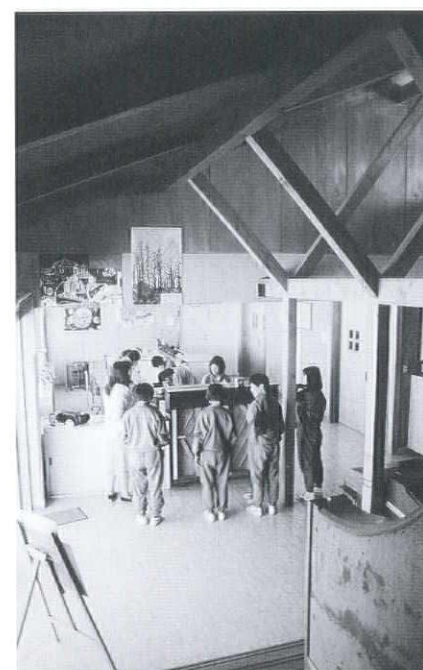
英語オープンスペース



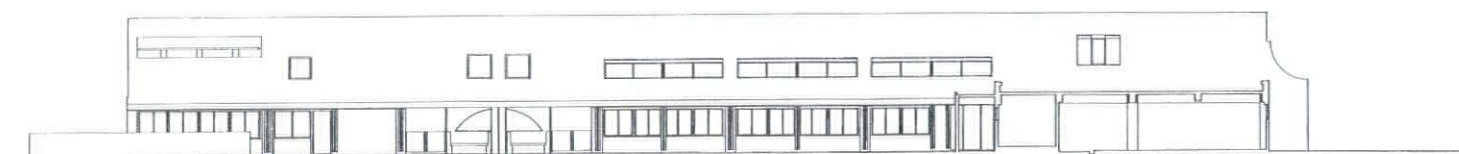
英語オープンスペース。プリント教材が多く置かれている



音楽オープンスペース S=1:200



音楽オープンスペース。ピアノやオルガンがあり、休み時間にもピアノの演奏が流れる



断面図 S=1:400



テラスから中庭を眺める



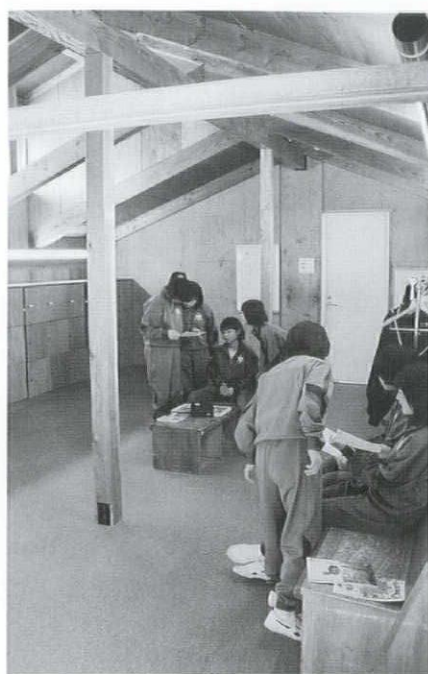
休み時間にデッキでくつろぐ



晴れた日は中庭を通過して教室移動



廊下の角にしつらえられたくつろぎのコーナー



休み時間のホームベースの様子。1年生女子

教室移動で中庭を通り抜ける生徒、昼休みに中庭のデッキでのんびりと過ごす生徒など、コの字に囲まれた中庭がこの学校の大きな特徴であろう。生徒数が少ないせいか他の中学校と比べ、ゆっくりと時間が流れ、落ち着いた印象を受ける。

学年2クラス、全体で6クラスの計画であるが現在は1、3年生が1クラスずつ、2年生が2クラスの計4クラスである。1、3年生はホームベースを男女ひとつずつゆったりと使っている。休み時間にはホームベースのベンチ、またはカーペット敷の床に座りくつろぐ生徒や、1階の教科教室にいる友達と会話をする姿などが頻繁に見られる。

生徒は2階のホームベースのロッカーに自分の荷物を置き、授業のある教室へと向かう。授業はモジュラー・スケジュールのもと、弾力的に進められている。1コマ50分の授業を25分

単位とし、通常の授業は2コマ、プリント学習は1コマ、書道は3コマ、理科の実験は5コマ、などとそれぞれの授業内容に合わせて時間割が構成されている。各教科の必要コマ数をすりあわせて作成した週毎の時間割プリントが生徒に配られ、これをもとにノーチャイムで授業が行われていく。

各教科教室に隣接するオープンスペースは、教科に関連のある教材、備品で設えられている。社会科教室横のオープンスペースには地理・歴史といった多種の資料とともに調べ学習用に長机が置かれ、理科教室横のオープンスペースには標本や科学雑誌が置かれるなど各教科の雰囲気うまうま出ている。

木に囲まれた落ち着いた雰囲気のホームベースと教科毎の特徴を持った教科教室・オープンスペースが見事に活かされた中学校であると感じた。(R)

座談会：学校が変わる、建築が変わる

21世紀の柔軟性のある学び舎に向けて

司会：上野 淳

溜 昭代×佐藤 学×船越 徹×小嶋一浩

建築と教育の行き詰まり

上野 今、学校では、教育の危機だと言われたりしています。一方、非常にみずみずしい実践をされている学校もたくさんある。いったい学校では何が起きているか。また、どう変わろうとしているか、あるいはどう変えていきたいかといった点について、まず佐藤先生に口火を切っていただきたいと思います。

佐藤 学校がこれほど問題になるようになったのは、校内暴力が中学を襲った1980年頃です。この年の高校進学率は93%、大学・短大は37%になっている。学校がもってきた吸引力が頂点に達した時に一連の問題が出てきた。ところがそれから約20年経って、それまでの学校の吸引力、象徴性、規範性、正当性が崩れているにもかかわらず、学校そのものの見直しがされていない。これまで学校という場を規定した効率性と管理というふたつの側面をつないでいるキーワードは機能主義です。学校というのはこれまでは機能的な空間として考えられてきたわけです。この機能主義が、肌触りも色合いも、息づかいもないような無機的な空間をもたらした。

そう考えますと、教育の行き詰まりと建築というか装置の行き詰まりは平行で、むしろ一体であると考えたほうがいい。「教育で何かを変えることができるか」というよりも、むしろ「建築や装置を変えることによって何ができるのか」というほうが可能性は大きいのではないかとさえ考えるのです。そのように考えた時に、今、学校建築において、時空を問い直すことを軸にした非常に面白い試みが出てきています。

上野 溜先生は、昨年3月まで打瀬小学校の校長先生として、みずみずしい教育を長く実践してこられました。先生にも同じことを伺いたいと思います。

溜 学級崩壊やドロップアウトや不登校や学校の問題はさまざまですね。私も子どもたちが学校へくる目的のようなものがすっかり変わってきてしまっているこ

とを感じるのです。私の子どもの頃は学校で勉強したりすることが楽しかったけれど50年たったなら、すっかりそれが変わってしまったのですね。私が教員になったのは昭和35年でしたが、山もぐりなどして遊んでいて来ない子どもはいましたが、対人恐怖症などで学校に来ない子どもはいませんでした。勉強は別として楽しかった学校が、一部の子どもにとっては息苦しい場所、心の居場所のない学校になってしまったのが問題でしょう。

実はハード、ソフトともに開放的な打瀬小を体験してから、私も従来の学校へ行くと、昇降口から圧迫感を感じるようになりました。教室に閉じ込められ、教師の授業を聞くだけの授業にはもう耐えられない、と子どもがサインを出しているのが現況の教育問題だと思いますよ。

上野 船越先生は、1960年代の初頭から素晴らしい学校をたくさんデザインなさっています。今、どんなポイントにさしかかっているか、学校の設計には、どんなことを心がけていらっしゃるかを含めて、お話しいただきたいと思います。

船越 私は、1953年に大学院に行って、研究や設計などを始めました。その時にまず私たちがテーマとしたのは、機能性だったと思います。でも研究室での経験で、学校はいくら機能的でも魅力がなければだめだという感じを持ち始めました。たとえばフランク・ロイド・ライトの〈自由学園〉。学校全体として全然違うものがあるという気がしました。空間をどうつくっていくかということが非常に大事ではないかと思いました。

1960年代末頃、アメリカやカナダからのオープンスクールの情報がいろいろ入ってきて実際に見に行ったりしましたが、びっくりしました。こんなところで子どもたちが生活するのはおかしいのではないかという気がしたのです。子どもたちの学習の場というところえ方が大事なのだという理念はよくわかったのですが、実際の空間としてはとても賛成できない。それでその後の設計では、今のオープン

スペースに近い、イギリスとアメリカの中間的な設計をしました。クラス単位を壊すことは日本ではなかなか大変なことで、そうしなくてもある程度開かれた教室にしていけるのではないかと。

これから先、すぐにドラスティックな変化が起きるとは思いません。でも教師と子どもの関係が1対1で固定されることの危険性がだんだん理解されてきたり、そういう意味では、大きな方向性は今のものでいいのではないかと。だけど、空間のつくり方は、まだまだ努力しなくてはならないと思っています。

上野 小嶋さんは、建築家として学校をどうみていらっしゃるのでしょうか。

小嶋 私は学校建築を専門としているわけではありません。初めて小学校の設計をすることになった時に、とにかくたくさん日本の学校の現状を見に行きました。そこで、廊下と教室で構成されている建築がうまくいっているようには見えない、とか、鍵がかかっている使われていない空間の割合が高く、いろいろなところに常にデッドスペースが現れている。それも何か変だなということから始めてみました。設計をやってみて一番驚いたのは学校建築の場合いわゆる要求諸室の面積表です。一般教室を1コマとか1ユニットと呼んで特別教室は1.5とか2.0というような恐ろしく単純な表しかない。公共面積などと呼ばれる廊下やトイレや玄関などは教室に対して何%などと示されるか、延床面積から教室の合計を引いた残りというようになっている。つまり、教室と廊下があれば機能の問題として一応ダイアグラムが解けたとされていて、廊下に沿って教室を並べていくことでハモニカ校舎といわれるような片廊下校舎なら設計は終わってしまう。ここではいろいろなアクティビティは〇〇教室と名付けられて部屋名とともに教室の中に押し込まれてしまっている。だから子どもたちの自発的なアクティビティが連続的に発生し変化するなどということは考えられない。設計する立場からは、壁

のない流動的な空間とアクティビティの応答がテーマとなるのではないかと考えました。

上野 小嶋さんの設計した学校を最初に受け取られたのは溜先生ですが、驚かれましたよね。

溜 それは驚きました。私たち教師は、教科書をどう上手に教えるかということだけはすごく勉強していますが、与えられた学校、与えられた教室を変えるという視点は全然なかった。大学の教育学部も、教室から子どもたちを自由に出してやっただけだろうとか、そういうことは全然視野にない。私は外国のオープンスクールについてもそれなりの知識はありましたが、それでも、打瀬小学校は、今までの学校観をすっかり変えさせる力があつた。私はいつも言うのだけれど「打瀬小学校をもらった時に、私自身の心の中に想像力と創造性、そして勇気をもらった」と小嶋さんの宣伝をしている(笑)。「よーし、やるぞ」と、本当にそういう気持ちになりましたね。

アクティビティを喚起するスペース

上野 お話を伺うと先生方あるいは大学の教育学部、教育界では意外と環境のもつ力について理解がないという気もしますが。先ほど、教育の行き詰まりと建築の行き詰まりが一致しているというようなお話が出ましたが、教育の行き詰まりというのは一体何でしょうか。建築がそれを打開できるのでしょうか。

佐藤 まずオープンスクールの流れをどう見るかです。日本には1970年頃からアメリカのオープンスクールのモデルが入ってきた。文部省の補助金がつくこともあって、今ではオープンスペースの学校がむしろ支配的ですが、ここではものすごい混乱があります。

ひとつはアメリカにオープンエデュケーションという流れがあるのは事実で、私はこの先進校を200校ぐらい回りましたが、その中でオープンスペースの学校は1校もなかった。建築におけるオープンスペースとオープンエデュケーションとは全く別なのです。ここに混乱がある。建築家の側にも責任があると思うのですが、建物だけご覧になるのではなく、オープンエデュケーションとして広まったものは、全く別の流れであると認識する必要がある。そのことが全く区別されないまま、日本の中に入ってきてしまった。私の見る限り、相も変わらず無

機的な空間で、一見すると開放感はあるだろうけれども、それが果たして問題を打開するものになるのかどうか。

ふたつ目は、どういう場所でどういうことが起こるのか、その場所における身体動きとつなげて考える必要がある。先ほど打瀬の話が出ましたが、実際、子どもは意外に狭いスペースでしか動いていない。そこに、打瀬のように曲線を取り入れることによって誘い込むだけで子どもたちの動きがうんと広がってくる。

今までは、教室を構成しているのは全部直線です。僕は大学のゼミ室に変形のテーブルを入れたのですが、それだけでお互いが相手の体を見て話すようになる、あるいは自分の体を意識する、それぐらいの仕掛けを今の学校はしなければいけない。なぜ廊下が真直ぐでなければいけないのか、歪んでたり、滑りそうな斜めをつくってもいいぐらいの気さえするのです。そうして初めて子どもは自分の今の体を意識するし、風景が風景として見えてくる。今までの真四角のスペースとは違った感覚をどこで準備できるかというのがポイントだろうと思います。単にオープンスペースを設けるとか開放感をもたらすだけでは、何も起こらない。皮肉なことに、オープンスペースを実際に取り入れた学校ほど、実はドリル学習が普及する。新しい学びが登場しないで、暗記ものの古典的学習が復活するのです。これは、明らかに破綻とみたほうがいい。これは無機的にしてしまうような作用が空間にあるからだろうと思います。

上野 そういう批判が建築家に投げられたという感じもしないではないのですが。船越 片廊下型でも有機的な空間もあるし、オープンスペースだからいいということではないですね。どういう空間をつくれるかということだと思うのです。

溜 よく、打瀬だからできたと言われてしまうのね。「それは何、校舎があるから?」とくやしいのです。普通の学校でも柔らかな頭があれば対応できると思うのです。打瀬で学年を超えた交流があるのは、「フレンド」という低学年の子も高学年の子も取り払った組織をつくったからです。組織をつくらなくて、クラスだけ、あるいは学年だけの授業をしては、やはり交流はないと思うのです。ソフトの工夫をしたのです。今まで通りの学校でも、ソフトを変えていけば授業も変えられるはず。オープンスクールがやりやすいのは確かですが。

佐藤 打瀬の場合、アルコーブとか、学年単位で中庭を囲んでいる。あれは素晴らしいと思うのです。オープンでありながらクローズドというか、ある親密圏をそこにつくり出しているわけでしょう。溜 使い勝手がいいです。私たちの教育活動が広がりやすいようなハードをつくって下さるのが建築家の仕事ですね。建築家の創造性に感謝しています。

上野 ただ、ハードの面から頑張っても、良い提案をしたつもりでも、意外と学校の現場がレスポンスしてくださらなかったとか、そういう経験はありますか。

船越 それはすごくありますね。それから、学校というのはとにかく人が替わってしまうでしょう。設計の時に先生方と相当な討論をしたり、先生方と一緒に他の学校を見学に行くとかいろいろな努力をしてやった学校がありました。3月に入った頃にやっとできて、わずか1週間後に行ったら、子どもたちも先生方も、もう何年も使っているような顔をして生き生きと使っておられるのです。これは良かったと、しばらくそういう感じをもっていたのですが、最近見にいきましたら、相当変わっていて、その雰囲気なくなっているのです。それは非常にがっかりしました。

上野 小嶋さんは、自分の設計なさった学校をしばしば訪れて子どもたちが動いている姿とか、先生にどう使いこなされたか実感してみたいと思いますが、何か気づかれることはないですか。

小嶋 それはいろいろあります。例えば打瀬では子どもたちが動き回る範囲がとても広いということを伺って、行き止まりなくループする動線や遠くまで見通せる視線の軸を入れておいたことには効果があつたかなと思っています。また、上野先生のアドバイスでコーナーや居場所をちりばめるということをやったのは、子どもたちが本当にいろいろなところでいろいろなことをやっているのにつながつていることがわかりました。何より、そうした子どもたちの自発的な動きを規制するのではなく、逆にノーチャイムの導入で時間まで流動的なものに切り替えられた先生方の前向きさには驚きました。また、打瀬小の場合、外と中とをできるだけ複雑な輪郭でネガ・ポジ反転できるようにすることで、両方の空間を分節しながらつないでいます。低層なのでいつでも出たり入ったりできるようになっています。そのために外の床の仕上げを



司会の上野淳氏

上履きでも叱られないようなものにするとか。これも実際にとても自由に使われているようです。

僕は制度の中でやっていますから、溜先生のような校長先生を初めから想定して設計して、違う考えの方が来たらうまくいかない、というのではお話にならない。枠組みとして全く普通の学校としても使えることというのが前提でした。だから、もし最初にいらっしゃった方がオープンスクール的なチームティーチングなどを一切やらないでも、多分文句は出ない学校になっている。

ところで先ほどの佐藤先生のお話にありましたが、オープンスクールという名の画一化が起り始めている。僕らからすると、ただ壁をなくしただけのオープンスクールというのは、均質空間のオフィスビルみたいなものです。パーティションをいろいろ入れ替えることでどうにでも場所がつかれることになっていて効率主義の最たるものとされています。それだと建築家としては試合放棄をしてしまったようなところがある、というのは建築家が設計する空間が学校という活動の場の内容にまったくかわっていないからです。いろいろ見に行っているうちに、壁をなくしてたっぷり場所をとったものがむしろ居心地が悪いということにはわかってきた。自分も普通の学校に通っていたので、はじめは仕切りがなくて他のクラスの授業が見えるだけですごいとか思っていたのですが、たくさんみると、どうもそうでもない。落ち着きがないし、他のクラスの活動がノイズになって感じられる。天井が高いのも寒々した印象につながる。そのあたりは微妙です。空間の問題として話せば、アクティビティを喚起するように設計するのに建築という動かないフレーム、具体的には壁とか柱はあまり頼りにし過ぎてはいけない。それらは強制的に作用しますから活動が固定してしまう。かといって家具であったりコーナーであったり、そういうものがだっ広いところに散らばって

いるだけで場ができるというのも手がかかりがないからとりとめない。強制でもなく何もしないのでもない中間があるのではないか。打瀬にはビーンズテーブルと名付けた特徴的な形をした大きいテーブルがありますが、その形態はひとりでも大勢でも座る位置を変えれば違和感がなくて決めていきます。佐藤さんが先ほどおっしゃったテーブルと似ているのかなと思います。それにはもうひとつ意味があって、オープンスペースにただ家具をいっぱい置くと乱雑な感じになるので、それに対してスケールの違うものを持ち込んでいる。大きいからちょっとアンカーされているというか、少し固定に近い感じで、だけど何人かで頑張れば動かせるというものを置いておく。そうすると少しだけ場所ができる。簡単に動かないものと、わりとすぐにサッと動くものが混ざり合う。そのように家具から考え始めて、次にコーナーを考え、最後に建築の壁とか窓とかを決めるという順番で設計しています。

船越 小嶋さんは学校の設計を始められる時に、すでに私どもがつくったようなオープンスクールがあったわけですね。それに対する批判からスタートしておられると思うのです。それを伺いたいと思っていたのですが。

小嶋 今までのものをできるだけ見て回るなかで、実際にオープンスペースでチームティーチングを行っている風景はとても新鮮でした。船越さんが設計された宮前小学校では、建築家の側の知恵と先生や子どもたちがのびのび工夫して使うことがうまく重なることで空間がとてもいいいききしていることがわかりました。そうした事例からどうも学校というのは建築空間ではなくいきいきしたアクティビティとセットの空間を実現しないとだめなんじゃないかということを学びました。一方で確かにいわゆるオープンスクールも数が増えるにつれて画一化し始めていて問題だなと批判的にとらえた点もあります。私にとって学校はどちら

かという窮屈なところに人がいっぱいいるというイメージだったはずなのに、オープンスクールでは校舎全体が大きくなってきて、子どもがいても淋しく見える。それは空間にアクティビティが伴っていないからです。

またもうひとつは、内部空間が大きくなってくると、外と中との距離ができてしまう。つまり、中が狭いので、短い休み時間でも外に飛び出していたのに、中が十分広くて魅力的につくられていると、逆に子どもは外に出ていかなくても満足できるので、昼休みくらいしか外にいかない。そういったことは何か変えられるかなと思いました。

「総合的な学習」に建築はどう答えるか

上野 教育関係の先生に伺いたいのですが、「学習指導要領2002年」が発表されました。「自ら学び自ら考える力を育成する」「個性を活かす」「総合的な学習」などが掲げられていますが、これらは学校建築に影響を与えるのでしょうか、あるいは今の学校建築はそういうものを受けとめられるのでしょうか。

溜 今度の指導要領では小学校から教科内選択でしょう。そこで、教科内の選択、自分の学習テーマを選択した時に、そのテーマに沿った学習の場所も選択したらいいいと思うわけです。コンピュータを使って情報収集する子もいれば、図書など他のメディアを利用して調べる子もいるとか、いろいろ学び方も違ってくるはずなのでオープンスクールのほうが私どものほうからすれば指導しやすいし、子どもからみれば勉強しやすい場になっていると思います。

佐藤 これは、おそらく今後の学校空間を考える場合の本質的な問題だと思っています。今度の指導要領では、自由な選択が基本の主題になっている。高校に至っては、保健・体育を除けば、必修科目まで全部選択になってしまった。他国に例をみない選択中心になっていて、中学校にも小学校にもその影響は下りている。



溜 昭代 (たまる・あきよ)

1960年千葉大学卒業後、千葉市内小・中学校勤務。市教委指導主事。95年4月千葉市立打瀬小学校の開校に伴い、初代校長。現在千葉市教育センター嘱託。元臨時教育審議会委員千葉市女性会館設立準備委員長。

そうした時に、ふたつのコンセプトが対立しているのだと思うのです。ひとつは、僕はショッピングモールだといっているのですが、お店がたくさんあって、子どもたちがそこを自由に選択をして空間性を活用する。それはスペースとしては非常に広がりをもつけれども、実は居場所を喪失するという問題が裏側にある。

もうひとつは、コミュニティですね。共同性が失われる危険がある。つまり教育とか学習の機能の前に、人と人が住まい、憩い、交わるといったいいのかな、そういう場所を構築していくのだという発想に立てば、今度は別の空間になりますから。

僕個人の立場は、ショッピングモール化するというのは、自由なようでありながら実は放浪にしか過ぎないし、意味を見失うし、仲間を見失うし、先生を見失うし、やがて自分自身も見失ってしまうような場になってしまうのではないかな。教師から見ると多様な選択をしているのだけれど、子どもはあちこちに行ってちょっと見るだけ、そういう空間になってしまうのではないかな。むしろ子どもたちが求めているのは、確かな感触であったり、確かな結び付きなのではないかな。

実際、高校の話ですが、このまま単位制とか自由な選択をやられますと、中退率は、近い将来、10%を超えます。選択制を導入したほど確実に中退率が高い。

廊下にしても、バルコニーのように組み替えた建築がありますね。象設計集団の富田さんがやられた笠間小学校はそうですね。バルコニー風にするによって、昔の縁側の機能をもう一回取り戻している。こういうふうにならざるを得ない仕掛けみたいなものをどうやってもう一度、居場所やつながり、連帯とかといったコンセプトの中に置き換えることができるかを考えることが必要のように思う。そうしないと、現在の個性化とか自由化という方向では、学校はますます個人を拡散させてしまう場所になってしまう。一斉か個人かという対立になっていくと問

題です。一斉か個人ではない形をとらなければいけない。今の学校のオープンスクールを巡る問題を全部一斉か個人で議論するから行き詰まってしまっている。

船越 今、総合制高校の設計で悩んでいます。24クラスの学校なのですが、教科の教室のほうは、教科教室型という形で、いくつかのグループに分けて教室群をもっている。それが片方にある、選択制だと生徒がばらばらになる可能性がある、もう一方でハウスをつくるという提案をしたわけです。ただし、学年別のハウスではなくて、各学年2クラスで計6クラスのハウスを4つつくる。3つにすると学年別に使われてしまいますから。ところが学校の先生方と話が具体的に始まりますと、異年次集団のハウスというのに対してものすごく抵抗がありまして、学年次別にしてくれと。学年別の集団は8クラスですがお互いのコミュニティみたいなものがうまくできる大きさではない。もっと小さくしたい。しかも異年次の集団で。そして、いつもハウスの担当の先生がそこにいるという形のほうがずっといいのではないかなという提案をしていて、今、それをやり合っている最中なのです。

佐藤 それは、アメリカで行われているスクールズ・ウイズイン・スクールです。ひとつの学校を150人ぐらいの単位にし、教師組織も10人ぐらいにして、ひとつ一つの組織を完全に独立した学校にしてしまう。だから、ひとつの建物の中に4つ、5つ学校があるといいますか、多い場合には7つ、8つある。これはいずれも成功しているのです。アメリカの高校の中退率は平均で25%、都市部では40%を超えているのですが、これを導入した学校では激減します。10%を切ります。上野 小集団にすることが大変良いことなのですか。

佐藤 ええ。教師も生徒も連帯します。いずれも驚異的な成功をおさめています。

溜 大学のカレッジみたいな。

船越 運動会なども、学年ごとにやって

いたものを、ハウスごとに対抗してやればいいのではないかと、修学旅行にしてもハウスの単位で考えればいいのではないかな。全体の何かを相談するのだったら、ハウスの代表が出てお互いに相談する。つまり、自分とは違う集団があって、そことちゃんと話をしなければいろいろなことができないということを、身をもって体験させるほうがいいのではないかとずいぶん言っているのですが、難しいです。

佐藤 選択制や総合制を取り組んだ高校で成功したところはいずれもハウスの形態をとっている。だから僕は成功したのはむしろ、ハウスを構成し、スモールコミュニティをつくったからだと思います。

船越 ハウスの中にホームベースをつくって、戻ってきて自分の自習ができるとか、ハウスの先生の誰かと話ができる場をつくる。根拠地としての場をちゃんとつくろうと提案しているのです。しかし、そうするとホームベースが普通の教室より少し狭くなる。先生方は、ホームルームをやるのも全部机を並べて座らせたいなどと言われるのです。そんな必要はないでしょうと言うのですが。

佐藤 大切なのは、なぜハウスのような形で小さなコミュニティをつくったことが学校の成功に導いているかを理解することだと思うのです。通常、中学と高校の先生はひとりで250人の生徒を教えているのですが、選択制を取り入れると、教師ひとりが教える生徒が一挙に広がって500人から700人になってしまう。逆にカリキュラムを単純化すればするほどパーソナルな関係ができるのです。つい先日にも埼玉県の選択制を導入した中学校で先生たちの悩みを聞くと、子どもの名前が覚えられない、と。当然です。選択科目を入れると700人から教えているわけですから。選択を導入することが関係を希薄にしまうかということです。溜 打瀬小学校は大きなお家です。学年という同年齢で学習する所属と1年から6年までマンション毎に組んだフレンド



佐藤 学 (さとう・まなぶ)

1951年広島県生まれ。75年東京教育大学教育学部教育学科卒業。80年東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。97年より東京大学大学院教育学研究科・学校臨床総合教育研究センター教授。主な著書に『カリキュラムの批評』『教師というアポリア』『ともに世帯書』『教育方法学』(岩波書店)『学び その死と再生』(太郎次郎社)など。

グループという所属があります。運動会やお祭りには言うに及ばず入学式、卒業式もフレンドが母体になっているので、子どもの意識は兄弟姉妹です。そこで子どもが狙ったものは、昔の地域子ども会みたいなものです。ひとりっ子とか少子化の中で異年齢同士がリーダーシップをとって、あるいはフォローシップをとる、そういう関係があまりないから、兄弟のようなものをそこでつくろうと思ったのです。担任も、自分のクラスと違うマンションの1番街から何番街の子どもたちを私が預かるというシステムです。21世紀はだんだんそうになっていけるのではないかなと思います。

子どもたちの「住処」としての学校

上野 今までは、教室と廊下だけという非常に無機質な空間で、それが拡張されただけのオープンスペースが付け加わるという姿で定着しています。今の学校に生活空間としての子どもたちの居場所はあるでしょうか。

船越 生活の場所をつくらうということはかなり昔からあったわけです。でも、実際にそういうものに面積が割けるようになったり、具体的な空間が与えられるようになってきたのは、比較的最近だと思うのです。

アメリカのオープンスクールを最初に見たとたんに非常に幻滅をしたのは、まさに生活の空間がないということだった。オープンスクールという形をとりながら広いところだけではだめだと思って。もっと狭い空間がほしい。小人数が落ち着いていられるような場所とか、逃げ込める場所とかそういうものがほしいということは思ってきたわけです。

私は帰属感のヒエラルキーという言葉を使っているのですが、自分があるクラスに属していて、それからある学年に属して、それから高学年とか低学年とかという集団に属して、しかも全体に属している、そういう帰属感がちゃんと感じられるような空間をつくっていかなくては

いけないのではないかと考えています。

上野 溜先生、実際に小学校で子どもたちの生活を見ていらしゃって、いかがでしょうか。

溜 子ども達は、学年やフレンドグループに心の居場所を持つ一方、好きな場所を持っていておもしろい。アルコーブという小さな空間があるでしょう。ああいうところで勉強している子もいるわけです。子どもたちは「僕はこういう狭いところが好きだ」とか、テラスに出ていて「私はここからの冬の庭を見ているのが好きだ。気持ちがいいから」と言うのです。学校へきて気持ちのいい場所があるなんて、最高ではないですか。

上野 学校には子どもたちのためにどんな場が必要なのでしょう。

佐藤 居場所というとき、娘が小学校に入る時に、初めて近くの小学校に連れて行った時のことを思い出します。小学校の建築というのは自分の身体の大きさからすると大き過ぎる。恐いのです。自分もそうだったことを娘が初めて学校に入って歩くのを見ながら、思い出しました。そして、彼女がどこで居場所を感じるかというのを見てみると、おもしろいところで感じるのです。裏庭に入っていて、自分がちょうど飛び下りられるぐらいの段差があって、そこを何回も飛び下りるのです。そして「ここ、気に入った」と。つまり、何か肌ざわりがあって自分が関わりがもてる場所。それを今の学校の中でどうつくれるか。

次に感じた点は、まさに教室の中の問題です。アメリカのオープンエデュケーションの教室でいいなと思った点は、彩りがあって、じゅうたんがあって、通常の居間なのですね。だから、まず居間のような感覚を取り戻さなければいけないのではないかと。たとえそこで授業が行われなくても、1日そこで暮らせと言われるのも、居住空間として存分に楽しめる。本があったり、そのテーブルで友だち

といろいろなお話ができたり。

溜 私もイギリスへ行った時に、小さなお部屋に子どもの好きなようなじゅうたんが敷いてあってクッションがあって、図書があるという学校を見ました。そして、先生は教室にいる。当時は考えられなかった。私たちは、先生の引率のもとに図書室へ行くという考えだったのだけど、近所のおばさんがきて、本の貸出とか本の整理とか手伝っているのです。それを見て、帰国してからすぐ自分で空き教室を改造したのです。カーベットもきれいにしてクッションも入れたりしたことがあるのです。少しでもホットな感じを学校の中につくらうとしました。打瀬小に行く前です。

上野 小嶋さん、どうですか、居間のような学校。

小嶋 居場所という時には、自分がそこに行きたくなるとか、そこにいて気持ちがいいかどうかですね。教室をつくるからといって、教室なんてこんなものだろうと思っているとそれがすぐに出てしまいますから、いつも注意しているところです。打瀬も、コンベの時に「1000人の住居である」ということを書きましたが、6年間もいるわけですからその間ずっと、卒業間際でも新しい発見があるような場所にしたいと思って設計しました。

そこから先で、片方では、学校全体の中に流動性みたいなものをちゃんと入れておかねばだめだといつも思っています。というのは、集落と町の違いともいったらいいのでしょうか、あまり個々の場所をつくり込みすぎると、逆に特定の誰かに占有されてしまうというのかな、ある場所を通るといつも上級生のあるグループがそこにいて、前がちょっと歩みにくい、みたいなことが起こるといけないのではないかと。これは学校の問題というより、建築は全部そのほうがいいと思うのですが、たとえば社長室の前の廊下は息が詰まる、という様なことはないほうがいい。だから職員室は通過動線の一部になるようにして、たまたま通



船越 徹 (ふなこし・とる)

1953年東京大学工学部建築学科卒業。58年東京大学大学院博士過程修了。70年アルコム設立。76年より東京電機大学建築学科教授。主な作品に〈東大和療育センター・都立北多摩看護専門学校〉(日本建築学会作品賞)〈稲城市立長峰小学校〉(東京都建築賞優秀賞)〈相模原市営清新住宅〉(神奈川県建築賞)などがある。著書には『視覚教育の理論と実践』(日本放送教育協会)『教育施設資料集』(第一法規)『建築・都市計画のための空間学事典』(井上書院)など。

りかかったら先生がいたから声をかけたんだよというふうにして、先生のそばに行けるような。

目的となる部屋しかない行き止まりの廊下を歩いていくというのは、プレッシャーがかかっている時などは大人でも嫌です。だから、どこまで行っても行き止まりにならないようにしておいて、必ずどこかに行く途中であるふりができるといったことは、非常に大事なのではないかなと。

船越 半分質問なのですが、普通小学校では、先生が各教室にいて子どもたちと接触する場が十分にあるから、職員室に戻ってきた時には、むしろ仕事場からちょっと離れて、ほっとして煙草でも吸うとか、あるいは分掌事務や自分の勉強の場だとした時に、隠れ場所が欲しいのではないかなという気がするのです。宮前小学校では、職員のコーナーを生徒からちょっと見える側につくったら、やはり使われない。休憩しているということを人に見せたくないのです。その辺がいつも悩みなのです。

溜 スペースとの関係もあるでしょうから、休憩室があればなおいいと思うのだけど。ちょっと休みたいという時に、あそこにカーテンでもちょっと引けばね。上野 加えて子どものスケールや空間の認知についても、再考する必要があります。学校に入学してくる時は身長が100cmしかないのです。そして、卒業する時は160cm。僕より大きい子がいますからね。だけど一般的には、1年生、2年生の教室の窓台の高さと5、6年生のは同じに設計してある小学校は、まだまだたくさんありますものね。

溜 廊下を歩いていると、全然外の景色が見えない。子どもたちは壁を見て歩いているのね。

佐藤 小学校の1、2年生は別に考えたほうがいいように思います。1、2年の場合はもっと子どもサイズの空間構成が考えられないか。

それから、今あるような運動場とか体

育館のようなものの形式的な使い方を崩せないかなと思いますね。すぐ近くに市営の体育館があり、市営のプールがあるのに、どうして狭いスペースの中に体育館から運動場までをつくらなければいけないのか。それをもし利用可能なら、それだけのスペースをもう少し多義的に使えるような、小高い山があって登れたり、川が通っていたり小さい水が流れていたりというスペースができたならどれくらいおもしろいものができるかというふうな、少し従来の発想を変えられるような形を求めたい。

芦原太郎さんが設計された、白石第二小では、体育館をエントランスにしてしまった。そうすることによって、同じ空間が全く別の意味を帯びてくる。上野 体育館やプールを少し共同化したらという提案も、建築計画の世界ではかなり長い間言ってきたはいるのです。

コミュニティと学校の関係

上野 今、地域社会の問題が出ましたが、戦後、学校の閉鎖性が高まっている感もあり、一方では地域の教育参加という声が強くなっています。また生涯学習社会に対して公立学校が一定の役割を果たすべきだというスローガンもかなり聞かれています。昨今では、都心部を中心として生涯学習施設と公立の小中学校が複合化されたり、極端な場合には高齢者施設と学校が複合しているケースもあります。いずれにしても、地域社会と学校の関係という意味でも大きなターニングポイントが来ていると思います。溜先生は地域社会に開かれた学校という非常にユニークな試みをなされたと思うのですが、その経験談からいかがでしょう。溜 私は打瀬小の教育目標を設定する時に、学校像と教師像と子ども像というのを把握したかったのでアンケートを取りました。あそこは知らない人が集まっている地域ですから、それこそ個の集まりなので、学校に対しては施設開放に止まらない、地域の拠点になる学校にして欲

しいという要望がすごく多かったのです。私も持論でもありましたから、積極的に施設を開く以上に教育内容を開く、学校運営を開くという考えで、地域の人にどんどん呼びかけをしたわけです。私は新しい学校を立ち上げるには、学校を皆さんの知り合いの場にするから、皆さんも学校に地域の先生として入ってくるとか、掃除や草取りといった労力を提供するとかギブ・アンド・テイクでいきましょうと提案して、了解してもらったのです。

船越 ことに幕張は、19世紀的街路の計画ですね。私たちが行っても、道以外に歩くところがない。どこにも入れない。そこで学校をああいいう形につくられたというのは、お世辞を言うつもりはないのだけど、本当にほっとしますね。他は非常に閉鎖的です。

上野 打瀬の町以外の、日本の都市社会における学校の存在はどうですか。

船越 閉鎖性というと学校に変質者が入り込んだ「キョウコちゃん事件」以来、学校がものすごく閉鎖的になりました。とにかく門は始業時間が始まると閉めてしまう。小さなくぐり戸からしか入れないというふうになった。その時期から思うと、相当開放的になったと思います。たとえば塀のない学校というのは、打瀬小もそうですし、僕なども〈杉並第十小学校〉でもやりました。他でも必ずしもきちっと塀を回さないでオープンな計画もわりに抵抗なく受け入れられ始めていることは確かだと思います。その意味では、悲観的ではないと思うのです。

上野 学校や教育のあり方が全国的に画一的で、地域社会とかなり縁が切れているのではないかと、しかし、先ほど溜先生が触れてくださいましたが、地域社会の人材が学校に参画することによって、学校のオリジナリティとか独自性みたいなことが生まれ得る可能性があるとか。そういう意味で、コミュニティスクールについて佐藤先生はいかがお考えですか。佐藤 今の学校が、塀に象徴されるような閉鎖性をもってきたことは事実ですが、



小嶋一浩（こじま・かずひろ）

1958年大阪府生まれ。82年京都大学工学部建築学科卒業。86年シラカンス設立。98年C+Aに改組、現在C+Aパートナー、東京理科大学理工学部建築学科助教授。主な作品に〈HOUSE TM〉（東京建築士会住宅建築賞）、〈千葉市立打瀬小学校〉（日本建築学会学会作品賞）、〈吉備高原小学校〉（日本インテリアデザイナー協会賞大賞）などがある。著作に『シラカンスJAM』『建築家への道（共著）』（ともにTOTO出版）など。

この5～6年でしょうか、地域との連携は急速に進んでいます。

そこから先の問題だと思うのですが東京のある区の30年間ぐらいの都市計画というのを調べて愕然としました。都市計画といいながらパブリックスペースの構成が公園以外に全くないのです。あとは地震の避難所だけ。そういう発想では地域は持ちこたえられなくなってきていると思います。地域が地域であるためには、そこに何らかの人と人が交わる仕掛けが必要です。これはおそらく東京だけの話ではなくて、日本のほとんどの、つまり7～8割の人が住んでいる郊外あるいは地方都市において、地域が地域で成り立つためには、学校が中心にならざるを得ないと僕は考えています。

今の子どもは、入学までは、母ひとり子ひとりの子育て、学校に行くとは今度は教室で学級担任ひとりと、子どもが大人になるまで密室の関係ばかり。これをどう変えられるか。それは、日本の長い子育ての歴史の中から見ても、この20年ぐらいが異様なのだという認識が必要で、生まれ落ちてから大人になるまでに絶えず複数の大人、しかも違った種類の大人と交わりながら育つことをどう保障していくか。それは、学校中心でやっていくしかないだろうと思うのです。

僕は、学校の施設は意外に可能性をもっていて、特別教室といわれるもののほとんどが開放できますね。家庭科の調理なども、今のだと実習室みたいで味気ないですが、あそこでみんながパーティできるようなつながり方とか、美術室もアトリエのようにつくるとか、廊下ひとつだって写真の展示会ができるとか、地域で共同スペースで使えるような、将来性をもったスペースの考え方をとれば、大人と子どもがそこでまた交われる。そこでクラブやサークルのようなものが生まれたら最高ではないですか。

溜 「開かれた学校」というのは臨教審の最終答申の時に入れたのだけど、これは学校の教師のある「イズム」、自分た

ちだけ、学校の中だけでやるものを外から打ち壊そうとして、臨教審が入れた言葉です。そして学校は施設を開放したり先生としてゲスト・ティーチャーを呼んだりしている。ただしこれは学校側の都合の良いところだけです。学校の運営とかその学校の教育の理念とか、そういうものはまだまだ開いていないのです。それで今度は中教審、教育課程審などが、学校の方針などのソフトの面を説明責任をつけて地域の人に開きなさいと言い出しているし、さらにもっと学校の教育を変えるために、学校評議員制度を提案していますね。今度はさらに外からの力で学校を変えよう、変えようとしているのです。この「開かれた学校」も、そういうことから始めたのです。

上野 佐藤先生は、学校を中心としていかざるを得ない時代になるのではないかと、心強いお言葉ですが……。

佐藤 学校をコミュニティの中心にしないと、コミュニティそのものがもう成り立たないと思うのです。

溜 そうですね。また、学校もひとりだけではいられないから。

船越 それは、上野先生が神戸の地震のあとですいぶん調査されてますし、私も見に行って感じたことですが、やはり学校というのはすごく大事だと思うのです。まちづくりなどという言葉が何を意味しているのかあいまいなところもあります。が、学校以外に中心になるものはないような気がします。これは苦い経験なのですが、3～4年前、東京都内のあるところで、老人施設と学童保育の施設との複合建築として小学校をつくるという計画がありました。我々の提案は、まちづくり的な意味も含めて、一方の道を全部公園化しよう。学校の子どもたちも出入りするし、老人施設もそこに面している。学校の食堂をその道路に面するようにつくて、老人もできればそこで一緒に食事ができるようにしよう。厨房は一ヶ所にするという提案をしたのです。そして体育館の上にプールをのせる。土地の問

題もありますが、水が高いところにあれば、地震で停電しても便所はいつでも使える。それから、老人施設ですからお風呂があるので、あと燃料があればお風呂も入れる。そういうゾーンを学校の片側につくって、それが地域社会の避難場所でもあるし、平素はそこが老人と子どもと接触する場であるし、あるいは地域の人も小さな子どもを連れて遊びに来る、そういう計画をしたのですが、だめでした。教育委員会が、それまでの文部省の施設整備指針の、「学校教育の高度化に役に立たない施設との合築は避けるほうがいい」という項を気にしたのです。

溜 〈晴海中学校〉は違いますよね。

船越 杉並でも、老人のデイサービスセンターと学校とがひとつの建物の中に入っている。そういう例はあるのですが。上野 休み時間に子どもが遊びにいったり、中学校ではボランティアをしたり、ずいぶん良い関係ができています。今まで子どもと先生しかいなかった学校に、訪問者やお年寄りなどの地域社会の風が吹くことが非常に明るい雰囲気をつくるのではないかと思います。

最後に、皆さんに学校建築のもつ力と言いますか、学校建築に今、何が求められているかというようなことをテーマにして、今までお触れいただかなかったことも含めてお話しいただきたいと思うのですが、いかがでしょう。

溜 学校建築については素晴らしい仕事を拝見させてもらっているのですが、反対に建築家のひとりよがりの学校もあると思うのです。宗教施設のような学校とか、どこかの有名な建築を真似した使いづらい学校などは、あとで大変。それだけは避けていただきたい。アドバイザー制度みたいな、十分に勉強した方のアドバイスを受けるような仕組み、私は今度、打瀬第二小学校のアドバイザーをさせていただいています。そういう方の意向も聞くようにしていただきたい。

それから、どういうわけか、学校の場合に、できあがるまで設計図も何も地域

住民に見せない例が非常に多いのです。設計の段階で町の人の意向を聞くとか、聞き入れるようなゆとりをもたせてもらいたいのがひとつ。

もうひとつは、教師のほうにも言いたいのですが、学校建築、施設などに、どうせ私たちが言っても通らないのだというあきらめが今まで長くあったけど、建築とか施設面にも自分たちの研究組織をつくって教師も発言する力をつけたいとい私は思っております。

上野 それは全く同感です。

佐藤 僕の意見を言うと、明るく元気に過ごさせていることが一番まずい。明るく元気にいるために、子どもたちが逆に窒息状況に追い込まれているというのが現在の構図ですね。これがどういう建築から起こってしまっているのか、あるいはどういう建築を準備すればそこを変えることができるのかという発想が欲しい。ひとつ例を挙げますと、この前、岐阜のある幼稚園に行ったのだけど、建築がよかったです。環境づくりがよいのです。普通、幼稚園にいくと、バンダとかウサギの絵がいっぱいあって、テレビのバラエティショーみたいな状況が演出されているのですが、そこはそうではないのです。その時は秋だったので、枯れ葉や蔓を随所に配置しているのです。だからほとんど原色が無い。普通、幼稚園を構成しているのは全部原色でしょう。そこは淡い色ばかりで、ふつと行ったら、幼稚園と思わないでしょう。子どもたちがそういう環境に置かれると、とても落ち着くのです。言葉もキンキンしていないし、すごくナチュラルな言葉で話をしているし、それでいて活動にうねりがある。そういう環境としての幼稚園建築ということが考えられてきたかどうか、あるいは、今の小学校でなんであんなに子どもがキンキンして、明るく元気にふる舞わなければいけないのか。もっと自然体で、もっと素朴にものに触れたり、確かに人と出会ったりとか、ひとつ一つの体験が経験として熟成していけるような環境になっているかということ考えた時に、相当、学校のコンセプトを変えなければいけないと思うのです。

小嶋 僕も同感です。どうやって良い学校というモデルを切り替えて成立させていくかという話なのですが、その良い学校がなかなか定義できないことが問題ですね。先ほど溜先生がおっしゃったよう

に、建築家が勝手に頑張ってくれたので非常に困ったみたいなものも、事実、多いと思うのです。学校の設計に限らないのですが、僕らが頑張っているだけでは当然良いものにならず、そういう意味で、僕らがつくって開校したふたつの学校が両方ともすごくうまく、最大限以上に引き継いでもらったので、たまたま話題になっているけどその部分、つまり使われる方へと空間を引く継いでいくことをきちっと担保するような制度はない。

今も総合学科高校の設計を、県の教育委員会などと打ち合わせしてやっていますが、教育アドバイザー的な働きで入ってくれている先生サイドの人が教育委員会の中にいます。だから使われ方について具体的に話ができるのは有り難い。実際にどういう案にするかを決定する時に設計の意図と応答してうまく使われるかどうかの判断をしてもらっています。通常は進めていく時に、たまたまの担当者がどう判断するかで、その人が前向きか安全側をとるかということに依存して進めていかざるを得ない部分がある。僕らは相当しつこく粘るものだから、相手が根負けしてしまうかもしれないけれど、そこまで粘らない設計者だと、役所の人がここまではやらないほうがいいんじゃないかと言ったら、そうですね、ということを決まっている。設計者の責任も大きくなるわけですが、もっと多くの人が設計段階で空間を考えることに参加し議論する時間と場所が必要でしょう。

そんなことを言っておきながら、ちょっと違ったことも考えていて、学校の設計をするからといって、学校だと思ってしまうということをやらないようにしています。実際に学校以外に使えないものをつくると、子どもが今みたいに減っていったりすると、20年ぐらいで建て替えられてしまいますから、何になっても耐えるようなパブリックスペースとして地域にある建物というのはどんなものか、ということ考えています。ビルディングタイプごとに理想的な学校とか理想的なホールとかと言い始めたときに何か変なことがいっぱい起こっているのです。そうではなくて、普通の人々がやってきて普通に活動した時に何か元気が出るような場所をつくる。学校だから特殊なノウハウがあるというのではなくて、学校の設計も住宅の設計も同じなのだととらえてもらわないとまずいのではないかと思います。

佐藤 余談ですが、2週間前に刑務所をふたつ見てきたのです。

上野 トータル・インスティテューションですね。

佐藤 まさにトータル・インスティテューションで、外観も見て中も歩いて痛感したのだけど、学校と病院と刑務所はほとんど同じです。その原風景を一回疑ったほうがいいと思った。今度、新しく東京拘置所も建て替えるのだけど、全く同じ形をとっているのです。なぜこんなに1列に並べるの。そうすると、人員削減で一番経済的に監視ができるからというのです。だから、僕らの「学校ってこういうもの」と常識的に考えているものを一度崩したほうがいい。公共スペースということではほかのものでも使えるような形で考えた時に、いちばん住み心地の良い場所が生まれるのではないのでしょうか。小嶋 それは建築家にとっては、設計するというのを効率よく部屋名を並べるような作業から、もっと立ち返って考えていかないといけないということです。ただ、今の話からは、いい学校はいつでもいい刑務所にも転用できるように設計できますね(笑)。

上野 船越先生、最後にまとめの言葉をお願いします。

船越 具体的なことは先ほどいろいろ言いましたが、ソフトの面でもハードの面でも、学校をつくるということはまちづくりではないかと思うのです。今までの町と学校との関係が大変良くなかったわけで、それを解消するべくいろいろなことを考えていかなくてはいけない面があると思うのです。防災面、それから老人との関係とかそういうことも含めて。ハード的にもそういう設計をしなくてはいけないし、それがコミュニティの中心という意識を住民の人たちが持てるようにつくられなくてはいけないのではないかと思います。

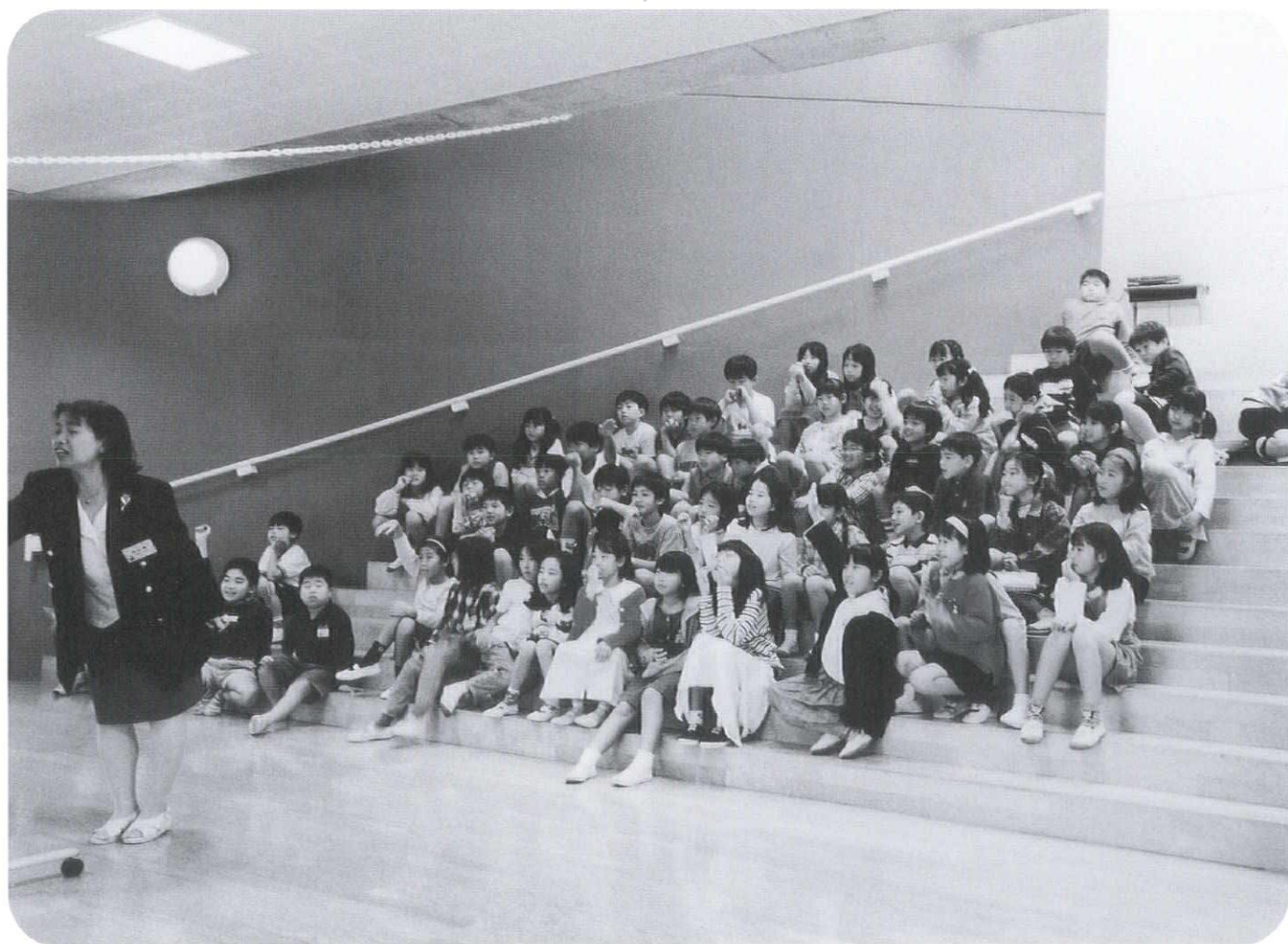
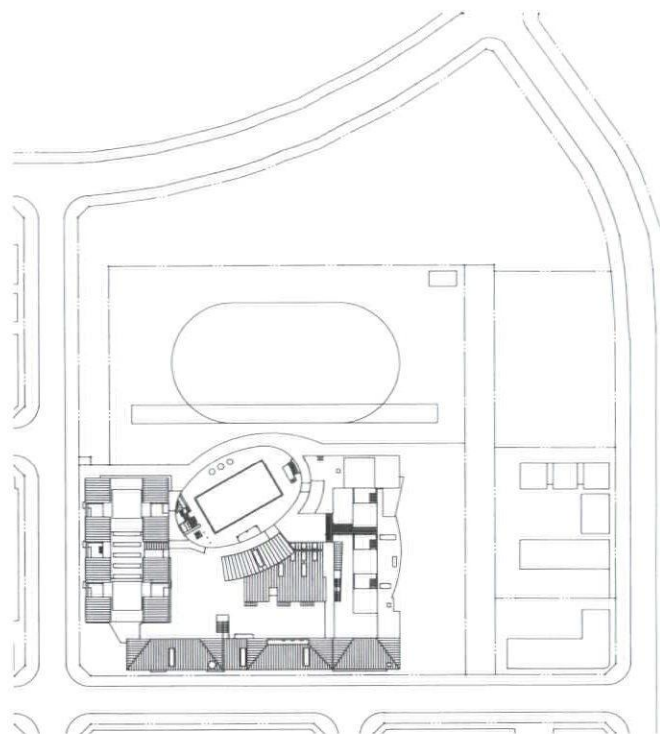
もうひとつ言いたいのは、それが大人になった時にいい形で、あの学校はこうだったなという思い出になるような学校でありたいと思うのです。誰でも自分の通った学校については思い出をもっている。それは悪い面の思い出もあるかもしれないけれども、それが本当にいい形で、ああ、あの学校は良かったと、そういう学校がくれたらいいなと思います。

平成11年4月5日(月) 於・鹿島出版会

小学校の1日

子供たちは1日のおよそ3分の1の時間を「学校」で過ごす。その中では学習、集会、給食、そして自由時間、実に様々な活動が行われている。子供たちは学校の中で、学び、遊び、そして生活しているのである。

ここでは、千葉市立打瀬小学校を取り上げた。子供たちの活動の多様さ、またそれらの活動の中で空間がどの様に使われているかに着目し、小学校における子供たちの1日の活動の流れを紹介する。



6年1組の1日

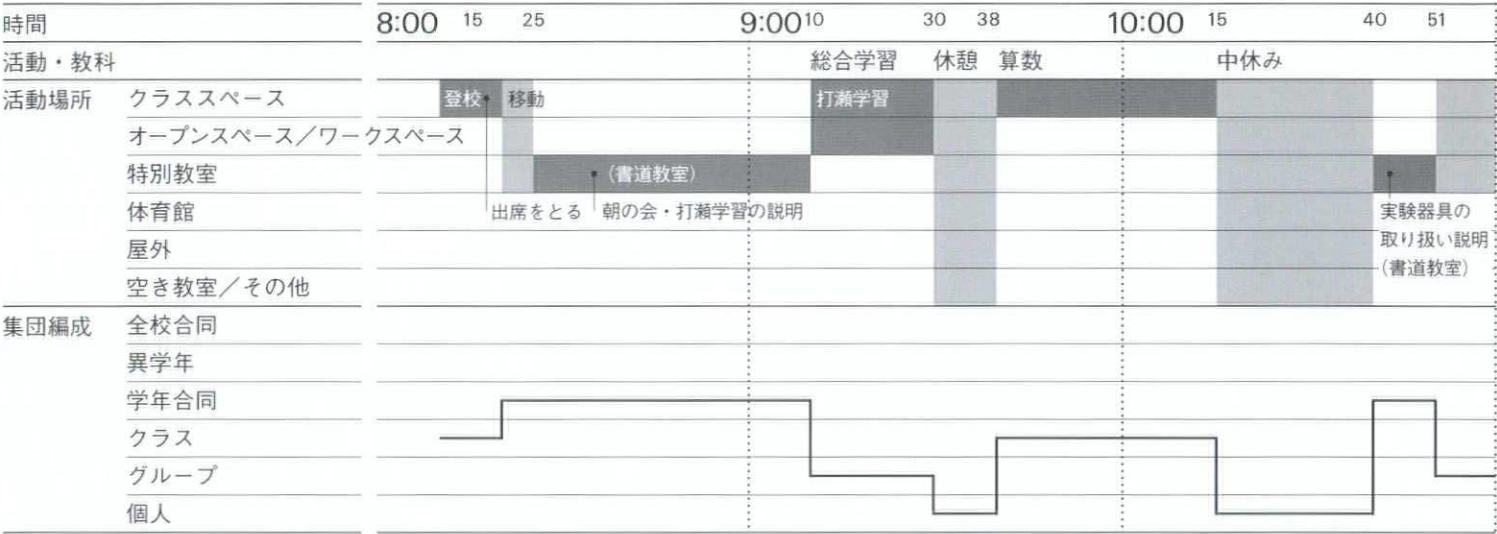
学校の中で子供たちは、「学年」「クラス」といった様々な集団に属して生活している。また、彼らの居場所は各自の「教室＝クラススペース」を拠点として多様に展開する。

ここでは、6年生のある1日の活動を取り上げ、バーチャートの形で表現してみた。この図からも分かるように、今日の小学校では、児童は一日中「クラススペース」に留まり「クラス一斉」に活動しているのではなく、様々な集団に再編成されて活動する。また、45分ごとに区切られた時間割に正確に従っ

て行動しているわけでもなく、時間の使われ方は、教師の指示、各自の作業スピード、その日のカリキュラムなどにより適宜調整されているのである。

そして彼らはその時々で活動や集団規模にあった空間へと展開していこうとする。

子供たちが「教室」で「教わる」時代から、「自分たちにあった場所」で「学ぶ」時代へと変化してきたことがここに現れているといえるだろう。



8:00 登校風景



8:25

学生ホームスペースに全員集合して朝の会



9:20

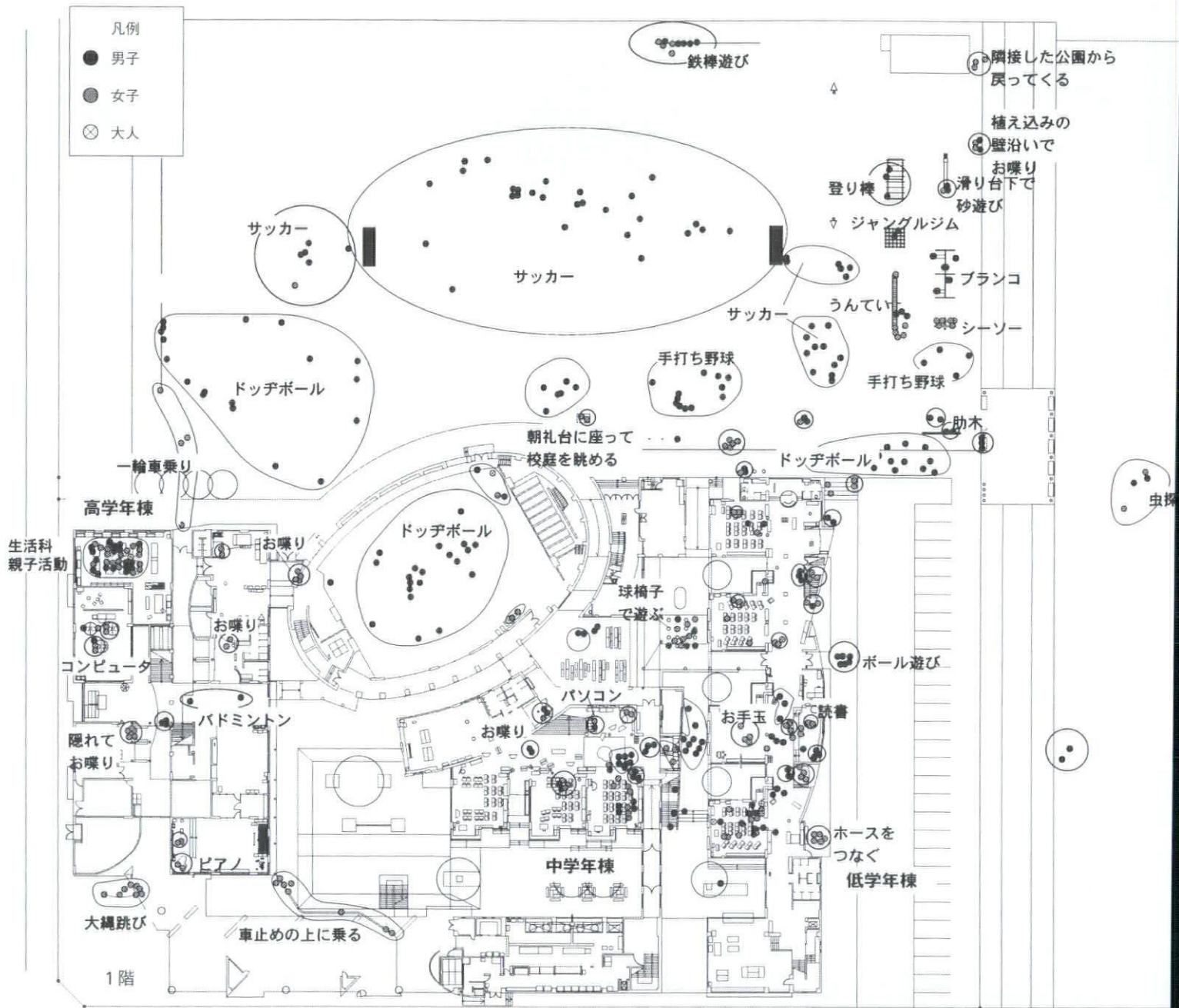
総合学習の課題が終了した児童からコンピュータで遊ぶ

[illegible]

オープンスペースでグループ毎に理科の実験計画を立てる



休み時間



中庭ではジャンケンゲームや長縄とびが行われている
SD9907



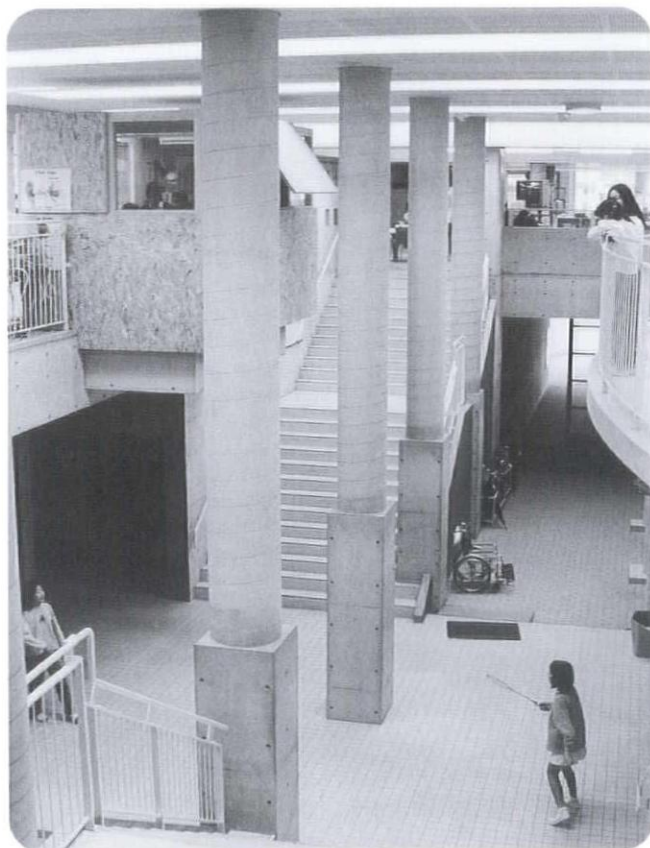
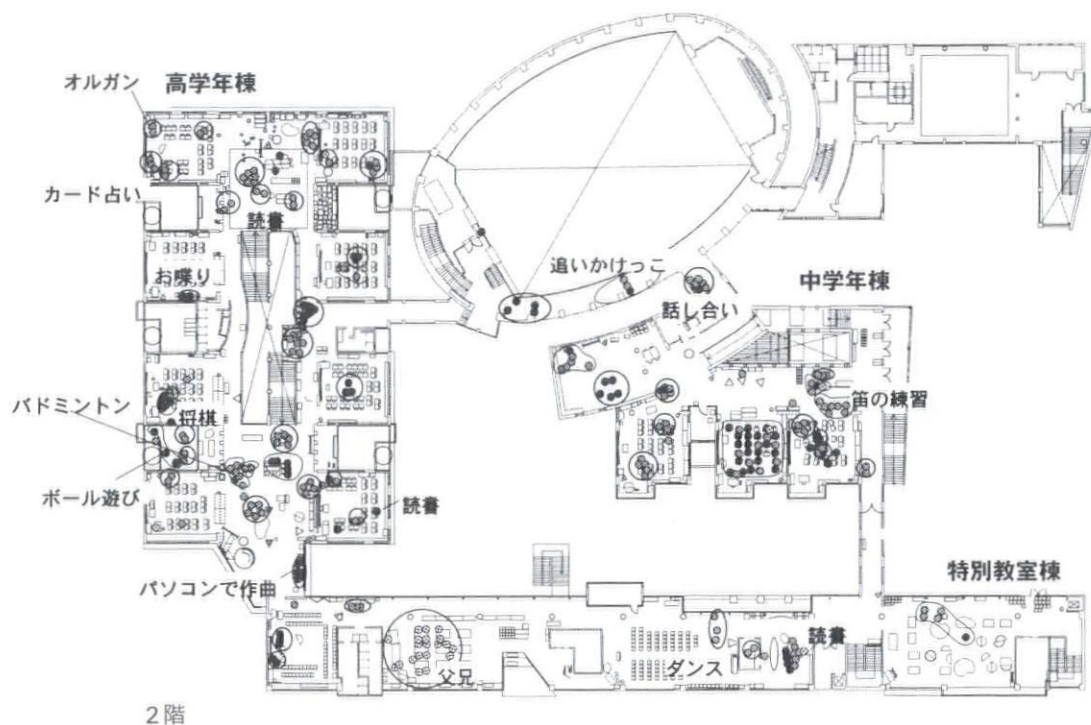
校庭から連続した公園までもが児童の遊び場となる

学校における生活の中で、子供たちが最も自発的に自分の意志に従って行動できる時間が「中休み」、「昼休み」などの自由時間である。小学校の1日の生活の中で、このような時間は、わずか1割程度に過ぎないが、そのわずかな時間が子供たちにとっては貴重であり、「社会」を体験的に学ぶ時間でもある。

打瀬小学校における休み時間の児童の居場所を見てみると、広々とグラウンドを使ってサッカーをやる子供たち、中庭で走りまわる子供たち、小部屋にこもってお喋りに夢中になる子供

たち、オープンスペースで一人読書に没頭する子などなど、実に様々な活動がそれぞれの場所を選んで行われていることが分かる。

広々とした空間、入り込める空間、見渡せる空間、隠れられる空間、自分の目的に合わせて場所を選ぶという行動は、このように多様な場所を持った学校の中でこそ可能となり、このことは子供たちの空間認知力だけでなく、社会を造り上げる力にもなっていくのかもしれない。



バドミントンを上から眺める子供たち



高学年棟の「人体博物館」をくつろぎの場とする女の子たち

学習活動と空間

今日の学校では、子供たちが自ら学習テーマや学習方法を選び、考え、それぞれの子供がそれぞれのやり方で学習していく場面が多く見られる。

高学年には、あるテーマに沿って行われる「調べ学習」が多く見られるが、これはその一例である。

子供たちはテーマによって、グループを組んだりひとりになったりして様々な場所へ広がっていく。広いオープンスペース（図中OS）のカーペットの上に座って学習する子、大きなテーブルを数人で囲んで資料を閲覧する子、小さなアルコブを仲のいい友達と占領して一緒に調べる子。彼らはそれぞれの目

的に応じて、それぞれの場所を見つけだすのである。

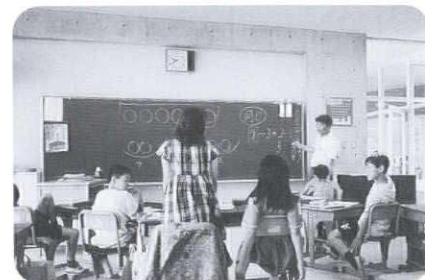
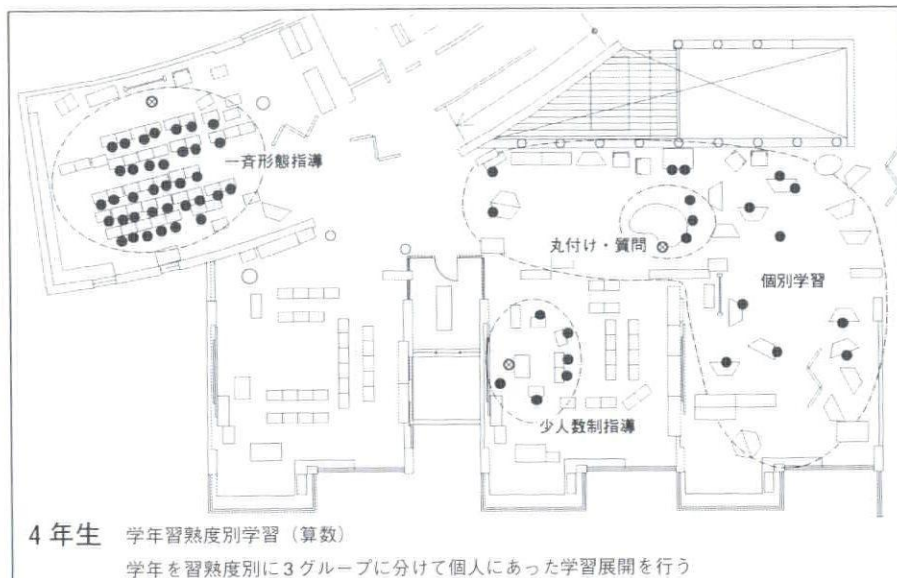
中学年棟では、各自の習熟度に合わせた3つのプログラムを設定し、学年のフロアを大きく利用して学習活動が行われている。ワークスペースでは大人数の一斉授業についていけない子供たちを集め、1人の教師の講義による指導が進められている。クラススペースのひとつでは、ゆっくりと学ぶことが向いている子供たちを数人集め、少人数制指導が行われる。一方、塾などに通い学習の進んでいる子供たちは、空き教室やオープンスペースの好きな場所で、各自の進度に合わせプリントやドリルなどの演習問題に取り組んでいる。



仲の良い友達とアルコブで学習



大きなテーブルに集まる



クラススペースで少人数指導を行う



ワークスペースで斉形態の授業を行うグループ



テーブルで学習する子、椅子を机代わりに学習する子



学習の進んでいる児童が各自で演習問題に取り組む

食事

生活活動のひとつである「給食」の時間も、クラススペースのみではなく、学年毎、クラス毎に様々な場所を選んで行われる。



お昼の図書室は、1年生の「ランチルーム」に



お天気のいい日は「ランチの庭」で給食

集合

小学校の中では、学習以外にも行事、給食、掃除などといった生活行動が営まれている。従って、学校内の空間には「教室」の機能だけでなく様々な生活的機能が必要とされる。

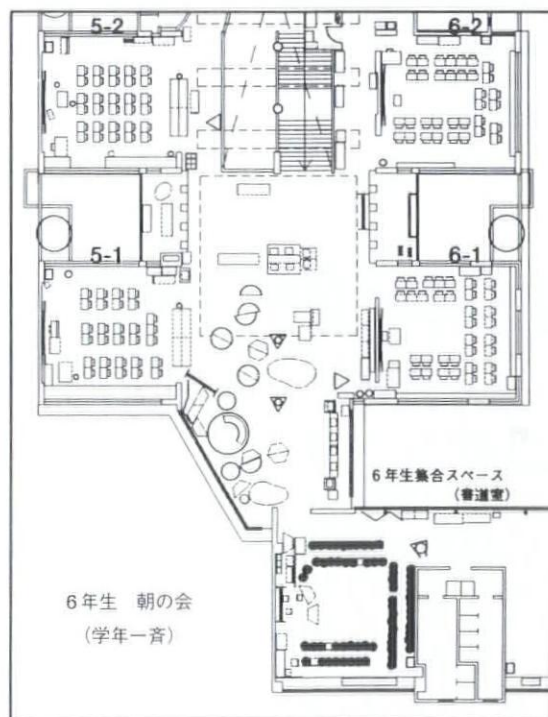
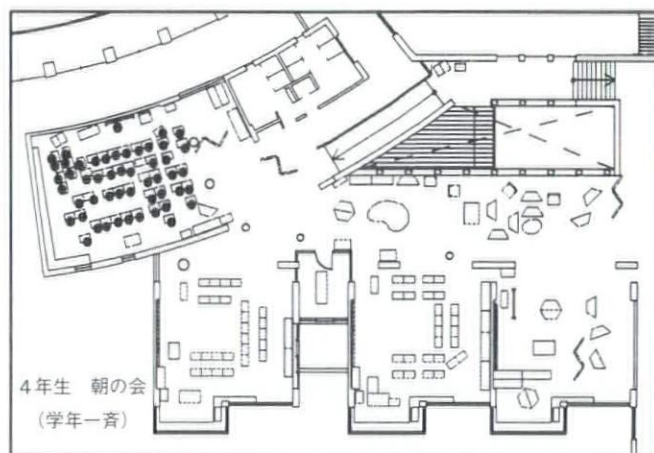
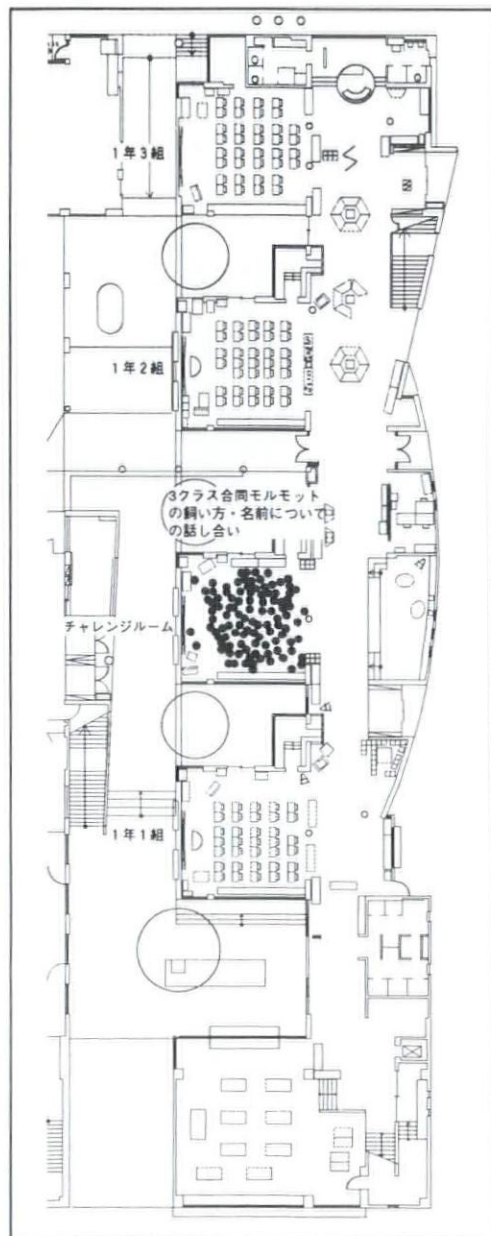
「クラス」という集団に固執しない打瀬小学校では「学年」をひとつの大きな母集団としている。そのため、学年全員が集い、活動できるスペースが必要とされる。

低学年棟では空き教室を利用して家具のない広々とした集合スペースを確保している。ここでは、カーペット敷きの床にじかに座って集合する。

中学年棟ではワークスペースに学年全員分の机とイスを並べ、

学年スペースを確保している。ここは子供たちにとって、もうひとつの自分の「クラススペース」であり、もうひとつの「自分の席」となっている。学年の集合場所としてだけでなく、学年の「教室」空間としても利用される。

高学年棟に連続した特別教室棟の「書道室」は6年生の集合スペースとして利用されている。ここには、学年全員分のイスが置かれ、やはり、もうひとつの「自分の席」が確保されている。すなわち、ホームルーム教室をクラスの数だけ並べておけばこと足りた旧来の学校計画の理念を疑わせるに足る予兆がここには感じられる。



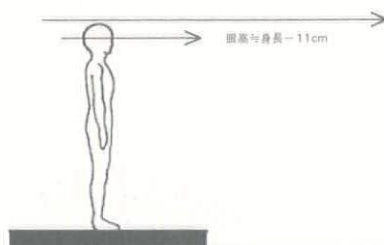
Design Manual

小学校に入学したての新1年生の身長は100cmに満たないこともあるが、6年生ともなれば大人と変わらない身長に達する子供もいるのが学校である。学校の様々な部位の寸法を求めるにはこうした子供達の寸法への深い理解が必要になる。また、特別教室の必要室数を求めるにあたって、学校でのカリキュラムについての知識などが必要になってこよう。以下には、学校を計画するにあたっての最小限のデザイン情報を用意してみた。

「学校建築設計」デザインマニュアル

学校の単位空間の規模・寸法の求め方

1……子供の身長



学年による身長の違い

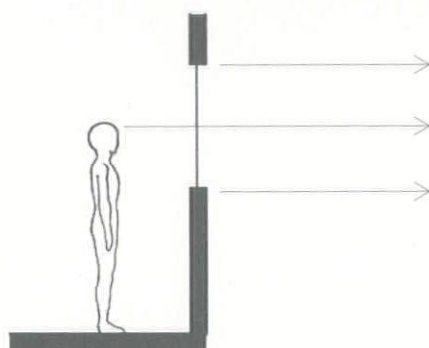
※: 平均 δ: 標準偏差

		小1	小3	小5	中1	中3	成人
男	※	117cm	128cm	138cm	151cm	162cm	165cm
	δ	5	5	6	8	7	5
女	※	116	128	140	149	155	155
	δ	3	5	6	5	6	5

*低学年と高学年とでは身長の平均が20-30cm異なる

*2学年違うと身長平均は10-12cm異なる

2……小学校の廊下の窓の高さの寸法



$$=146\text{cm}+3\times 6\text{cm}-11\text{cm}=153\text{cm}$$

=小学校6年女子の平均身長+3δ-[身長と眼高の差]

背の高い高学年の子も視線が通る高さ

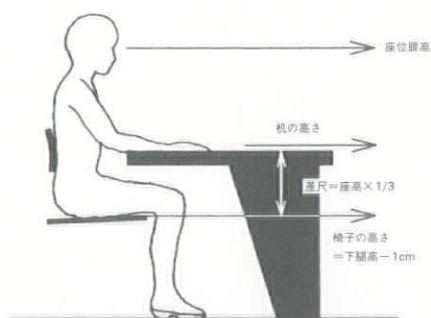
視線の通る高さ

背の低い低学年の子も視線が通る高さ

=小学1年女子の身長平均-3δ-[身長と眼高の差]

$$=116\text{cm}-3\times 3\text{cm}-11\text{cm}=96\text{cm}$$

3……椅子座位の時の机・椅子の高さ

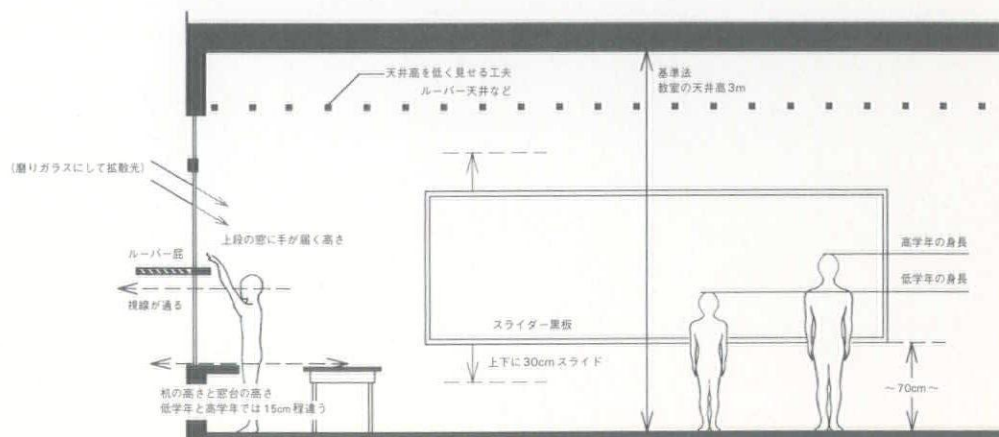


学校用机・椅子の高さ: JIS寸法

	平均身長	机	椅子	JIS号数
小1	116cm	46cm	26cm	10
小3	128	52	30	8
小5	138	58	34	6
中1	149	64	38	4
中3	162	74	42	2

*学校用机・椅子のJISは1~11号の11段階になっている

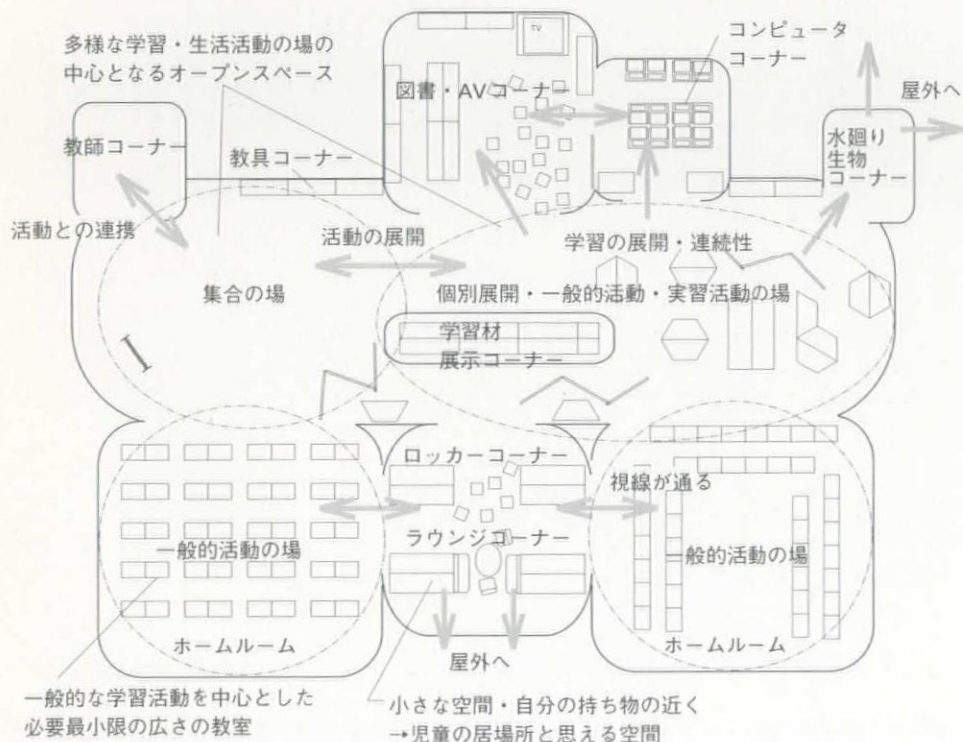
4……教室の展開の設計



5…… クラス・スペース/オープン・スペース廻りの計画

クラス・スペース/オープン・スペース 廻りに求められる機能と場

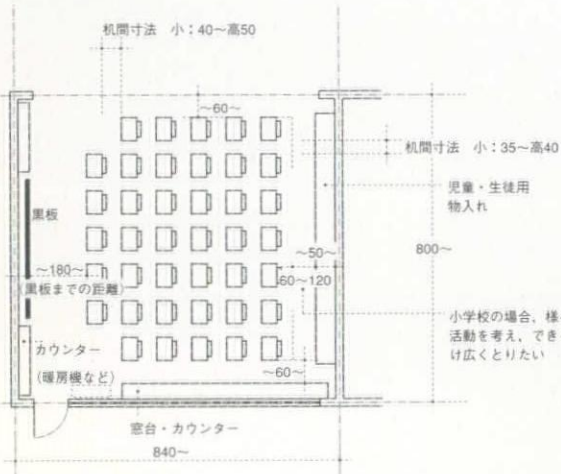
〈学年2クラスの場合〉



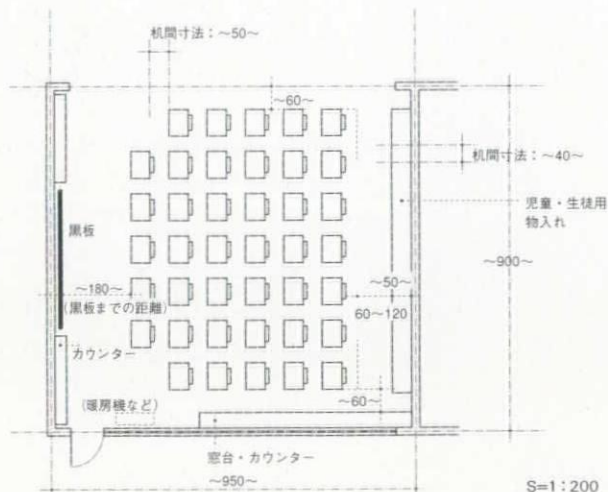
クラススペース・オープンスペースは、児童・生徒が1日の過半の時間を過ごす場所である。生活・学習の様々な活動が行われ、様々な機能が必要とされる。このダイアグラムは学年2クラスを想定し、いくつかの固有の機能を持ったコーナーの組み合わせにより学年スペース廻りを構成する考え方の例である。

学年・学級教室 基本のモジュールの求め方

机寸法 60×40



机寸法 70×50



学校用机のJIS規格寸法(平面)は小学校から高校まで一律に60cm×40cmとなっている。この規格は1970年に定められて以来変わっていないが、児童・生徒の体格の向上、教材類の大型化などにより一回り大きくすることが検討されている。クラススペースは8m×8m程度で計画されてきたが、学校用机の規格が仮に70cm×50cmとなると、少なくとも9m×9m程度のモジュールが必要となる。

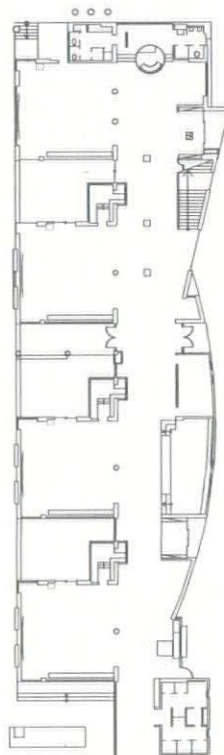
打瀬小学校低学年棟：各クラススペースに中庭とアルコーブを設け、このクラスセットを空間の変化に富んだオープンスペースで連結。

上野小学校学年クラスタ：クラススペースをこれと匹敵する奥行きをもつオープンスペースに開いて繋ぐ学年のまとまり。

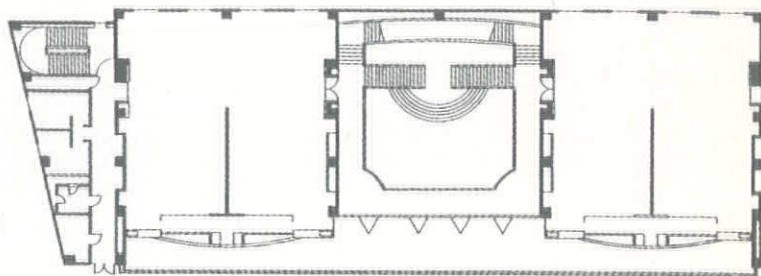
若葉台小学校低学年棟：木造平屋建てのクラススペースをウッドデッキの庭を挟みながらオープンスペースに繋ぐ計画。

つくば東小学校学年クラスタ：木構造のクラススペースとRC造のオープンスペースによる構成。

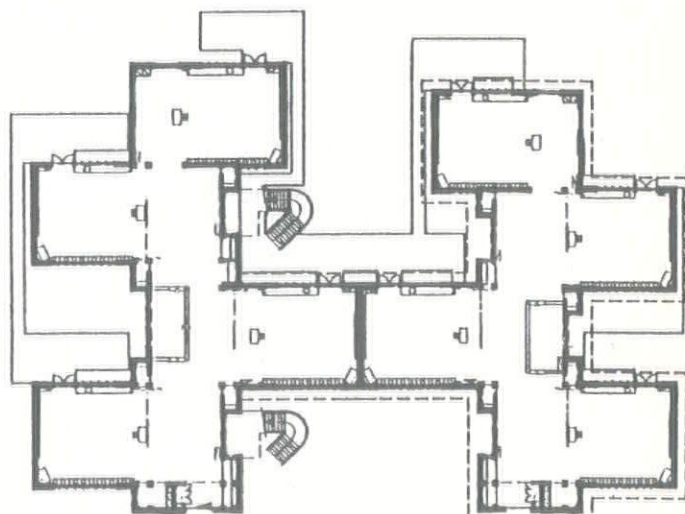
浪合学校・小学校低学年ゾーン：学年1クラスの小規模校。1～4年をまとめ、多様なコーナを持つオープンスペースと一体的に計画。



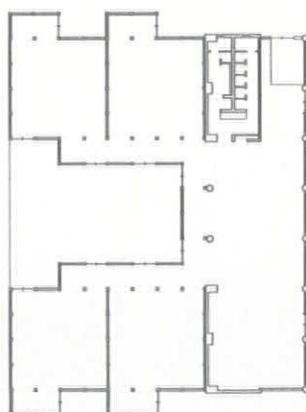
打瀬小学校 低学年棟
S=1:600



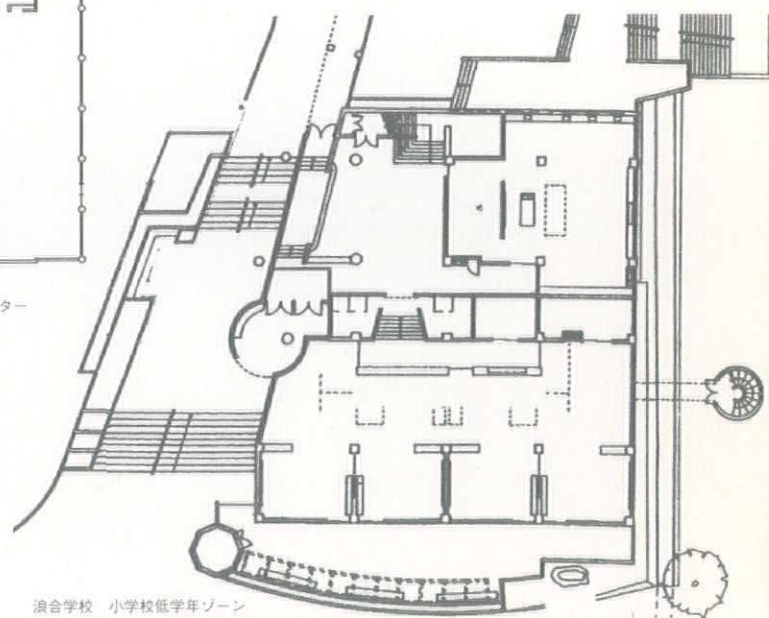
上野小学校
S=1:600



若葉台小学校 低学年棟
S=1:600



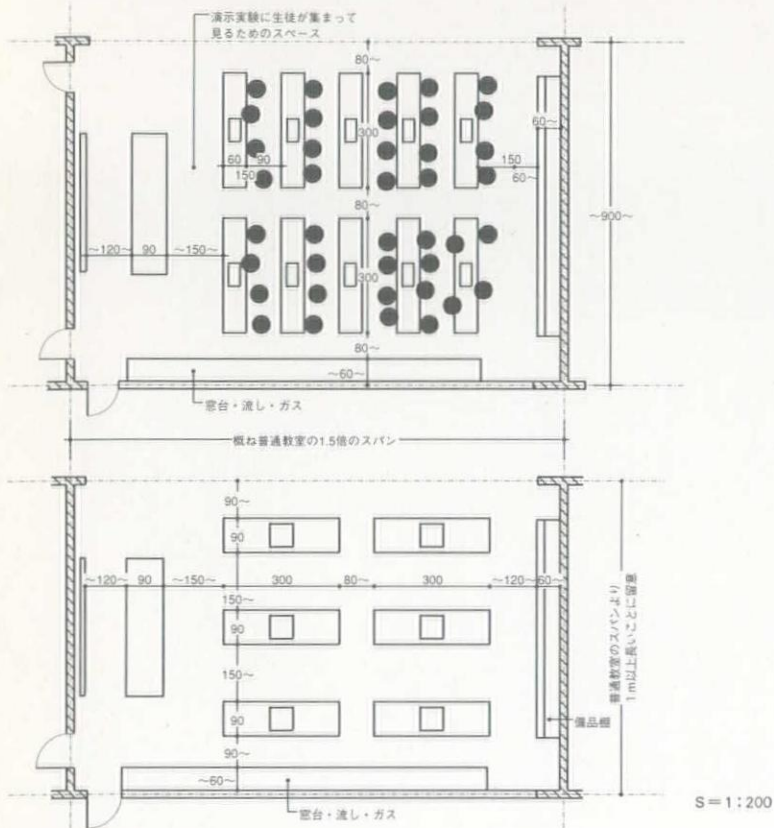
つくば東小学校 低学年クラスター
S=1:600



浪合学校 小学校低学年ゾーン
S=1:600

7……実験・実習スペースの廻りの構成とモジュール

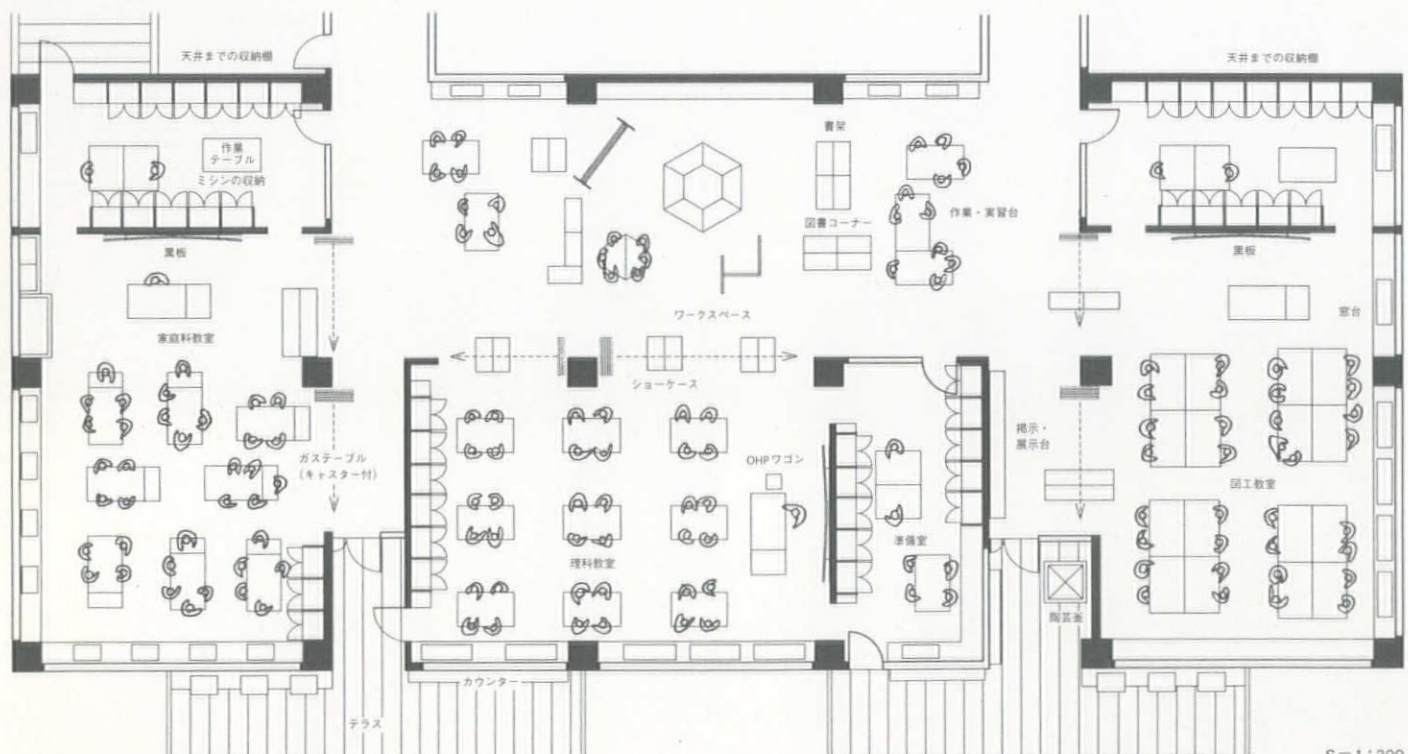
特別教室群・ 基本モジュールの求め方



実験・実習テーブルを配置すると、おおむね普通教室の1.5倍以上の面積が必要となる。奥行き寸法が9m程度以上必要になることに留意。テーブルを固定としないで、ガス、水道、流しを窓側にまとめるなど、フレキシビリティを高める考え方も大切。

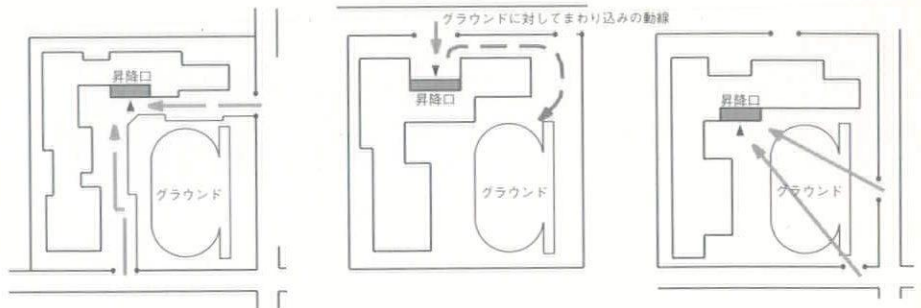
開かれた実習スペースの 構成モデル

特別教室は実習スペースであり、一般教科にも増して弾力的な学習集団の編成、多様な学習形態が試みられる可能性が大きい。開かれたワークスペースを中心に特別教室をまとめて配置し、教科相互の乗り入れも可能なように編成した計画モデル。



8…… アプローチ空間の設定と昇降口

アプローチ空間の設定



○：把握しながらアプローチできる

×：学校全体の様子がわからないまま昇降口に至る

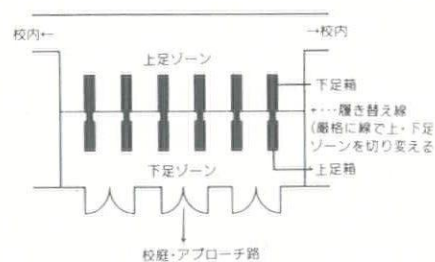
×：グラウンドを横切るアプローチは好ましくない

履き替えのシステムと昇降口

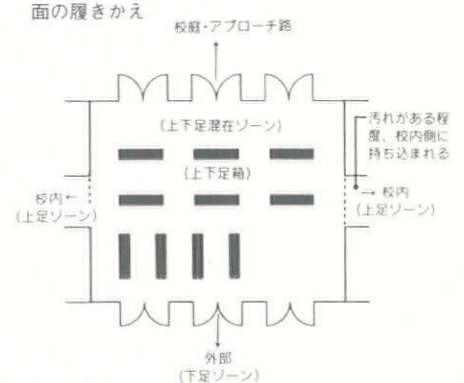
昇降口とは日本の学校の固有の空間である。汚れを校舎内に持ちこまないよういろいろな設計の工夫がなされてきた。都市部ではこうした心配も少なくなり、面での履き替えなど多様な可能性がある。

線の履きかえと面の履きかえ

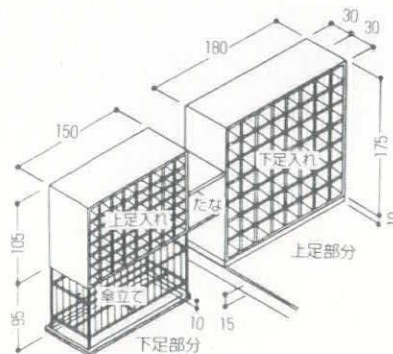
線の履きかえ



面の履きかえ

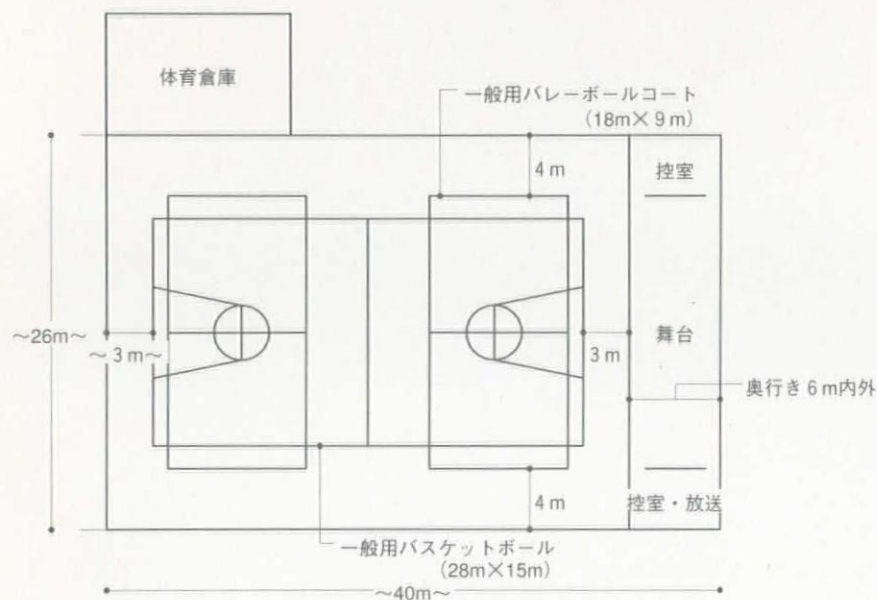


履きかえシステムと昇降口の設計



上足・下足入れ・傘立てユニット

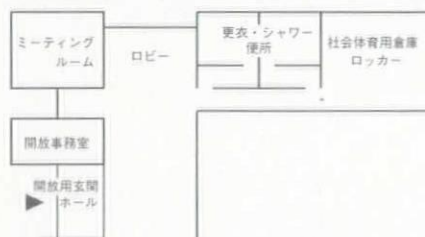
9…… 社会体育も考慮した小中学校の体育館：平面寸法の求め方



S=1:500

学校開放で最も頻度高く用いられるのが体育館であり、小・中学校であっても成人の社会体育を意識した構成が望まれる。一般用バレーボールコート2面が併置でき、正規の一般用バスケットボールコートがとれる大きさがアリーナの大きさの一応の目安となる。

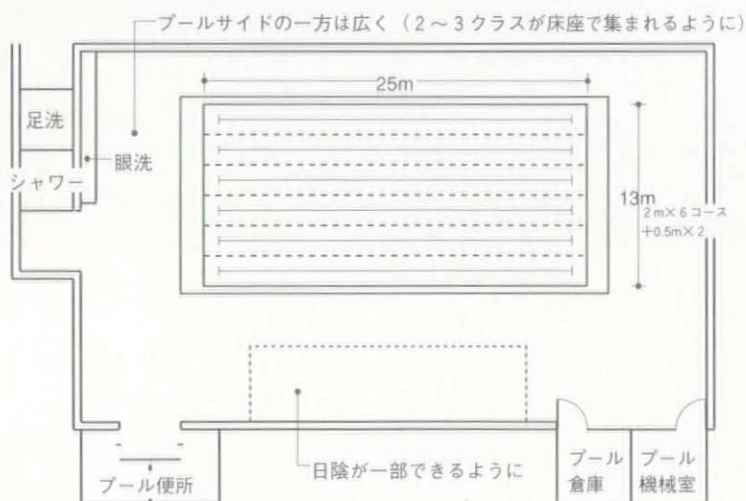
10…… クラブハウスの構成



S=1:500

地域利用の専用拠点を確保しようとするのが「クラブハウス」で、文部省の施設補助がある。ミーティングルーム、ロッカースペース、ラウンジ、更衣室などで構成する。外部から直接出入りしやすい配置が重要。

11…… プール (25m×6コースの場合)



S=1:500

SD9907

標準規模の学校では、25m×6コースが一般的。夏期にしか用いられないので、敷地の有効利用の観点からその配置場所を十分検討することが大切。ガラス張りの屋根を架けて屋内化すると、利用可能期間を伸ばすことができる。

12… 小学校の標準カリキュラム

2002年度からの完全週5日制の実施とあわせ、カリキュラムも大幅に改定される。年間35週の授業日数が標準となるので、右表の時間数を35で割ると週当たりの授業時間数が把握できる。

小学校の各教科、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間の年間標準授業時数

区分	各教科の授業時数									道徳の 授業時数	特別活動の 授業時数	総合的な 学習の時間 の授業時数	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画 工作	家庭	体育				
第1学年	272	-	114	-	102	68	68	-	90	34	34	-	782
第2学年	280	-	155	-	105	70	70	-	90	35	35	-	840
第3学年	235	70	150	70	-	60	60	-	90	35	35	105	910
第4学年	235	85	150	90	-	60	60	-	90	35	35	105	945
第5学年	180	90	150	95	-	50	50	60	90	35	35	110	945
第6学年	175	100	150	95	-	50	50	55	90	35	35	110	945

注) 1 この表の授業時数の1単位時間は、45分である。

2 特別活動の授業時数は、学級活動に充てる授業時数である。

* 年間35週が標準的な授業日。上記の年間時間数を35週で割ると、標準的な週当たりの授業時数が概算できる。

13… 公立小学校・文部省補助基準面積の求め方

新しい教育のニーズにあわせ、文部省による公立学校の施設補助基準面積も24年ぶりに大改訂がなされ、概ね18%程の増となった。この基準面積が、計画条件の策定や基本計画を行う上での事実上の目安となる。

校舎

学級数（特殊学級を除く）	面積の計算方法
1学級及び2学級	$769 + 279(N-1)$
3学級～5学級	$1,326 + 381(N-3)$
6学級～11学級	$2,468 + 236(N-6)$
12学級～17学級	$3,881 + 187(N-12)$
18学級以上	$5,000 + 173(N-18)$

注) 1 N…学級数（特殊学級を除く）

2 特殊学級を置く学校の必要面積は、上表によって計算された必要面積に特殊学級1学級につき168㎡を加えた面積とする。

3 多目的教室を設ける学校の必要面積は、学級数（特殊学級を含む）に応ずる必要面積（多目的教室を設けない場合）に1,085を乗じて得た面積とする。

体育館

1) 温暖地		単位:㎡
学級数（特殊学級を含む）	面積	
1学級～10学級	894	
11学級～15学級	919	
16学級以上	1,215	
2) 積雪寒冷地		単位:㎡
学級数（特殊学級を含む）	面積	
1学級～9学級	922	
10学級～11学級	1,092	
12学級～23学級	1,258	
24学級以上	1,552	

注) 1級、2級積雪寒冷地は、ともにこの表による。

14…中学校の標準カリキュラム

中学校の各教科、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間の年間標準授業時数

区分	各教科の授業時数									道徳の 授業時数	特別活動の 授業時数	総合的な 学習の時間 の授業時数	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	芸術	保健 体育	技術 家庭	外国語				
第1学年	140	105	105	105	45	45	90	70	105	35	35	0～ 30	980
第2学年	105	105	105	105	35	35	90	70	105	35	35	50～ 85	980
第3学年	105	85	105	80	35	35	90	35	105	35	35	105～ 165	980

注) 1 この表の授業時数の1単位時間は、50分である。

2 特別活動の授業時数は、学級活動に充てる授業時数である。

・ 年間35週が標準的な授業日。上記の年間時間数を35週で割ると、標準的な週当たりの授業時数が概算できる。

完全週5日制時代を迎え総授業時数が削減されることを受けて、カリキュラムの内容も精選されている。また、「総合的な学習の時間」が創設されることもあって、各教科の週当たり時間数はかなり縮小されているので、特別教室の室数算定には留意が必要。

15…公立中学校・文部省補助基準面積の求め方

校舎

学級数（特殊学級を除く）	面積の計算方法
1学級及び2学級	848+651(N-1)
3学級～5学級	2,150+344(N-3)
6学級～11学級	3,181+324(N-6)
12学級～17学級	5,129+160(N-12)
18学級以上	6,088+217(N-18)

注) 1 N…学級数（特殊学級を除く）

2 特殊学級を置く学校の必要面積は、上表によって計算された必要面積に特殊学級1学級につき168㎡を加えた面積とする。

3 多目的教室を設ける学校の必要面積は、学級数（特殊学級を含む）に応ずる必要面積（多目的教室を設けない場合）に1,085を乗じて得た面積とする。

施設補助基準は面積のみを規定しているのであって、どの教室を幾つ造らねばならないか、などの内容は規定していない。どのような内容の学校にするかはあくまでも設置者に委ねられている。校舎、体育館の他、クラブハウス、食堂、部室などについても別途の補助制度がある。

体育館

1) 温暖地	単位:㎡
学級数（特殊学級を含む）	面積
1学級～17学級	1,138
18学級以上	1,476
2) 積雪寒冷地	単位:㎡
学級数（特殊学級を含む）	面積
1学級～7学級	1,162
8学級～13学級	1,237
14学級～33学級	1,511
34学級以上	1,515

注) 1級、2級積雪寒冷地は、ともにこの表による。

デザイン・ヒント集

学校における場のデザインと子供達の風景

児童・生徒はその学習や生活の行動において思いがけない場を選び、思いがけない振る舞いをみせてくれることがある。建築家の用意したヒント性のある場が生き生きとした行動を導くこともある。当たり前前の空間としての教室や廊下などとは別に、こうしたアンジュレーションに富んだ場を用意していくことは豊かな生活空間を演出するうえでの大切な条件ともいえる。以下には、学校内の様々な場でおきる子供達の風景を紹介する。



打瀬小学校



浪合小学校



落合中学校



打瀬小学校 開かれた教育を象徴する「校門も塀もない学校」

アプローチ

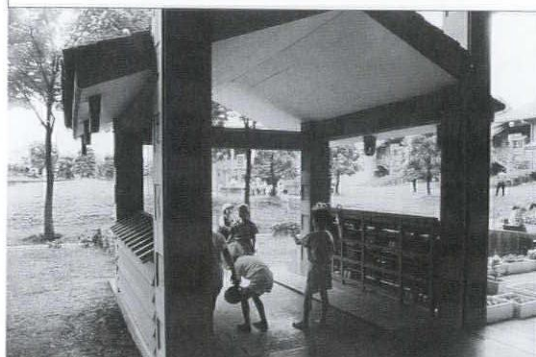
「学校」へのシーケンス

子供たちの日々の登校のために、また、外来者や地域の人々に対して魅力的なアプローチ空間は、学校全体をイメージさせる重要なイントロダクションである。

小さな昇降口

「玄関」のような自分たちの出入り口

全校生徒の下駄箱が並べられた「昇降口」は、次第に子供たちの身近な場所へと分散し、彼らの「玄関」となる。



笠原小学校 半屋外空間の小さな昇降口



打瀬小学校 低学年棟



打瀬小学校 中学年棟 中庭に面した昇降口

多様な活動の展開を可能にする半屋外空間
クラススペースやオープンスペースから連続的に広がる外部空間は、子供たちの生活空間のひとつ。時には、たまたまの場に、時にはお気に入りの学習の場に……。

テラス・ベランダ・ウッドデッキ



つくば東小学校 オープンスペースに連続したデッキ



桜中学校

打瀬小学校 低学年棟横のテラス



打瀬小学校 高学年棟

育英学院サレジオ小学校

育英学院サレジオ小学校



上野小学校 中央の広場の大階段

桜中学校

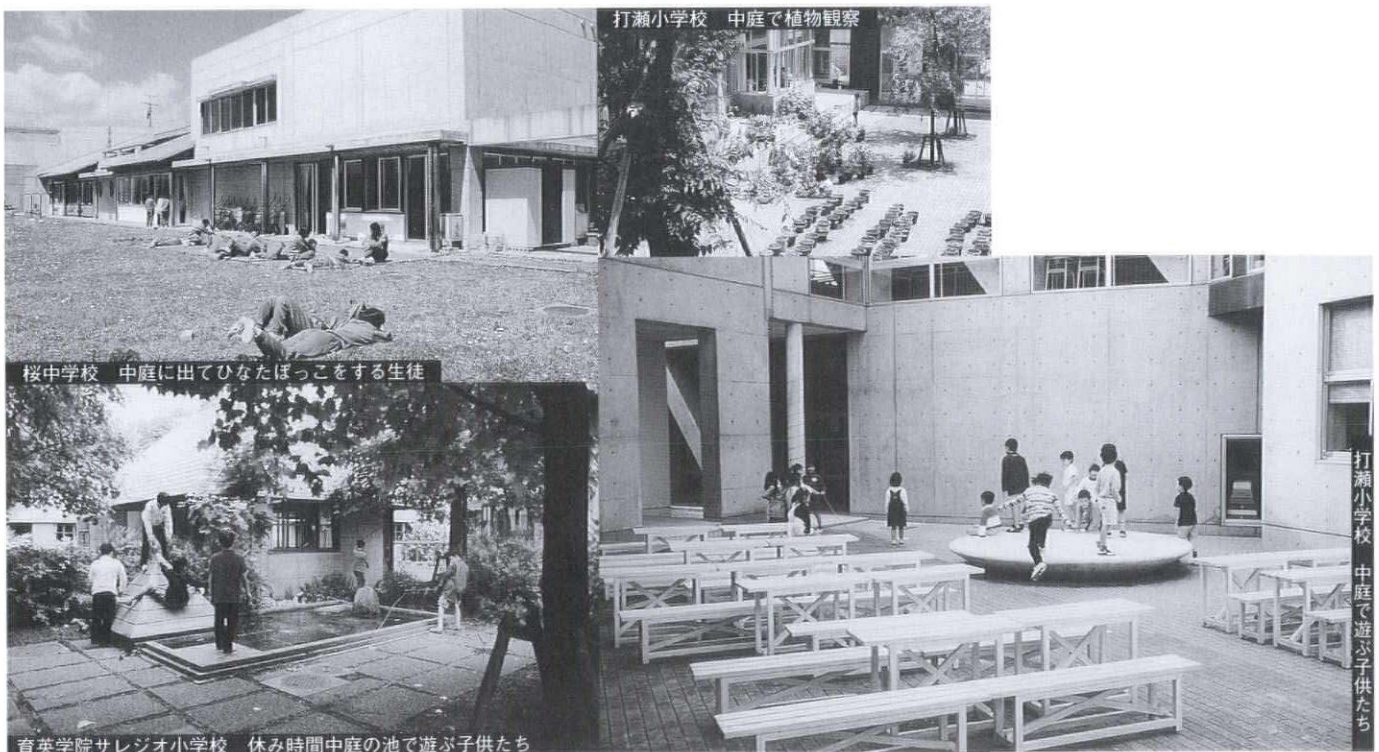
打瀬小学校 中学年棟

打瀬小学校 高学年棟

段差

時にはベンチ、時には遊び場、時には観客席

教室が見渡せる階段、部屋の隅の段差、廊下の脇のベンチ。周りの雰囲気に触れながら、一人になったり、友達とおしゃべりしたり出来る段差は子供にとって大切な場所。



打瀬小学校 中庭で植物観察

桜中学校 中庭に出てひなたぼっこをする生徒

育英学院サレジオ小学校 休み時間中庭の池で遊ぶ子供たち

打瀬小学校 中庭で遊ぶ子供たち

中庭

校舎廻りの落ち着いた外部空間

屋外でありながら室内空間のような落ち着いたイメージを持つ中庭は静かな遊びや一人でたたずむことの出来るゆったりとした空間であり、低学年の子供たちの遊び庭になったり、女の子たちのおしゃべりの場になったりする。校庭よりもプライバシーのもてる空間といえる。

アルコブ・小空間

子供のくつろぎ・交流のための仕掛け

子供のスケールにあった小空間は、従来の学校にはなかった「子供のための空間」である。子供たちは、家庭的なくつろぎや落ち着きをこのような場で得るのではないだろうか。

打瀬小学校 アリーナ横



打瀬小学校 交流広場



打瀬小学校 高学年棟



笠原小学校



打瀬小学校 図書室横



打瀬小学校 低学年棟

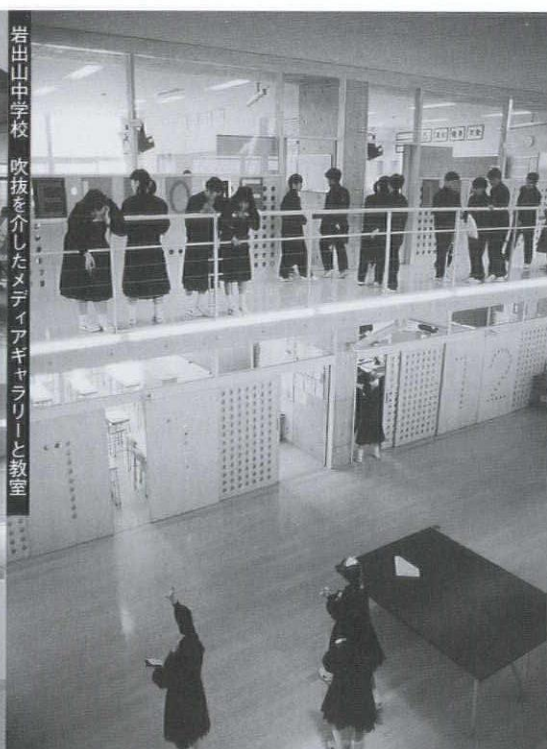
緒川小学校 多目的ホール



打瀬小学校 高学年棟



岩出山中学校 吹抜を介したメディアギャラリーと教室



桜中学校

吹抜空間

互いの雰囲気を共有する空間

吹抜空間は、互いの空間の雰囲気を感知あえる場であり、
単調な学校空間に大きな変化を与える空間となる。

ロフト

屋根裏部屋をイメージした生活的空間

屋根裏部屋はいつの時代も、大人たちには入りづらい、子供たちの夢が詰まった彼らだけの空間である。



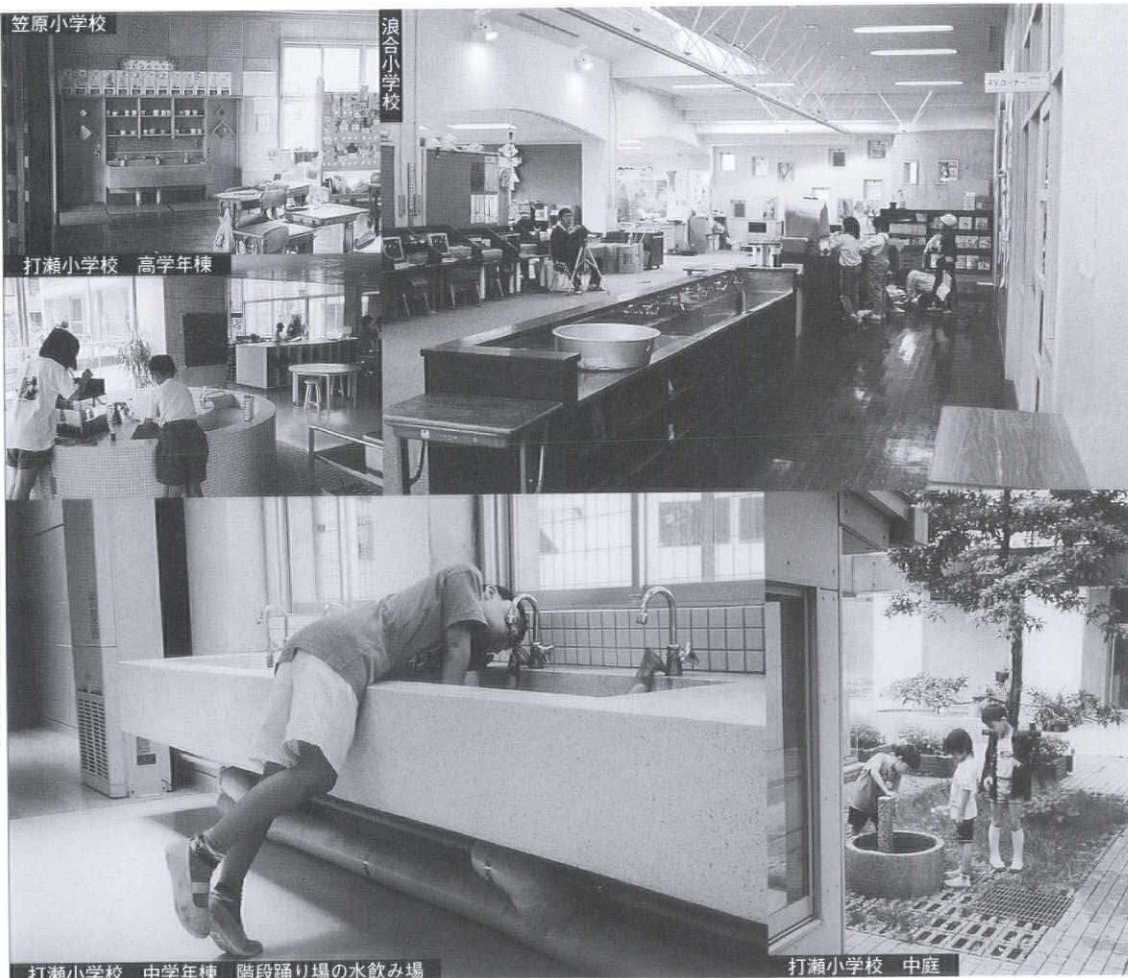
浪合小学校



桜中学校

水廻り
多様な活動に対応する身近な水廻り
近年では、実験・図画などの実習的な学習が教室やオープンスペース廻りで頻繁に行われるようになり、授業時間に水道を利用する頻度も高くなった。これに伴い、授業を円滑に進めるためにも子供たちの身近な場所に水廻りを用意する必要性が高まっている。

水廻り



笠原小学校

浪合小学校

打瀬小学校 高学年棟

打瀬小学校 中学年棟 階段踊り場の水飲み場

打瀬小学校 中庭

浪合小学校



緒川小学校 オープンスペースに設けられた図書コーナー



打瀬小学校 図書室



打瀬小学校 低学年棟

図書コーナー

居心地のいい読書空間

興味を持ったときにいつでも、本を手にとって読める身近な図書コーナーは、子供たちの好奇心を満たす重要な情報提供の場である。

メディア

身近な視聴覚学習教材

TV、VTR、OHPなどを手軽に利用できるよう身近な場所に設置することで、学習方法の可能性が広がり、子供たちの学習意欲を刺激する環境ができる。



岩出山中学校 教科教室の中央に設けられたメディアギャラリー

打瀬小学校 高学年棟



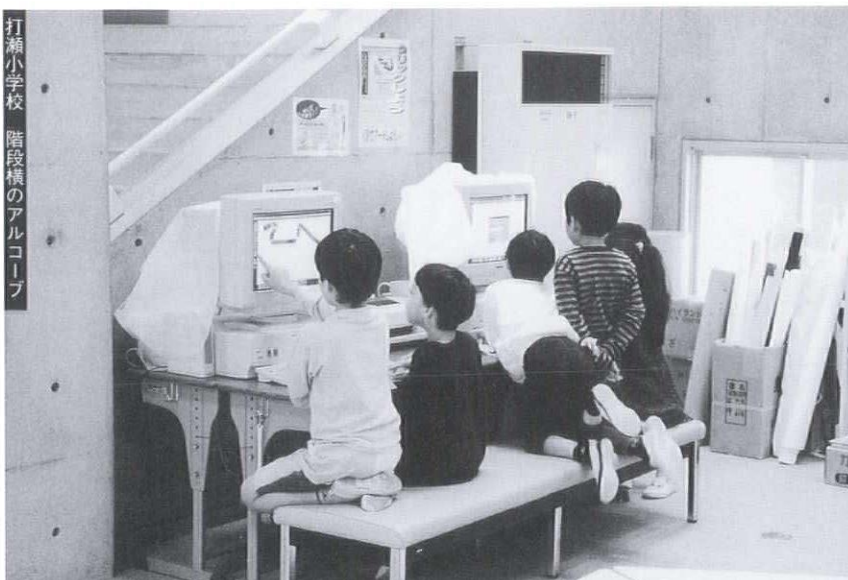
萱田小学校



コンピュータ

学習活動をサポートする情報システムの活用

コンピュータはもはや一室に囲って管理するものではなく、子供たちが気軽に利用できるよう、教室やオープンスペースに設置されている。



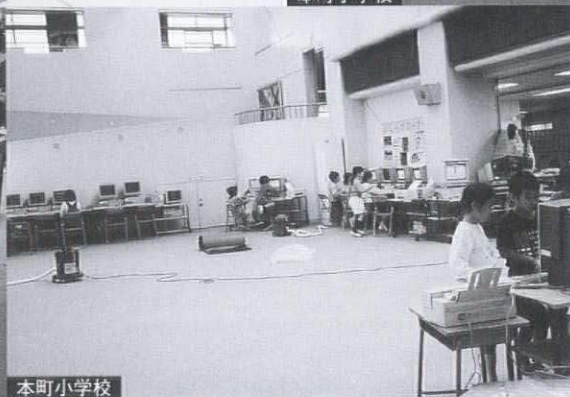
打瀬小学校 階段横のアルコブ



本町小学校



加藤学園



本町小学校



本町小学校

打瀬小学校 低学年棟

岩出山中学校 メディアコーナーに隣接した教科研究室

身近な教師コーナー

子供に身近な教師の作業スペース

子供たちの空間に隣接する「先生の場所」は子供たちに安心感を与え、お互いの存在を確認しあえる教師の作業空間である。

写真

東京都立大学上野研究室 pp.8-40、pp.57-104、
pp.113-135
彰国社写真部 pp.41-43
新建築写真部 p.50、pp.52-53、p.56
和木 通 pp.44-45
三島 毅（日経アーキテクチャ 92年3月2日号掲載）
pp.46-47
平井 広行 pp.48
岡田写真事務所 pp.49
銀装 p.51
大橋富夫 pp.54-55

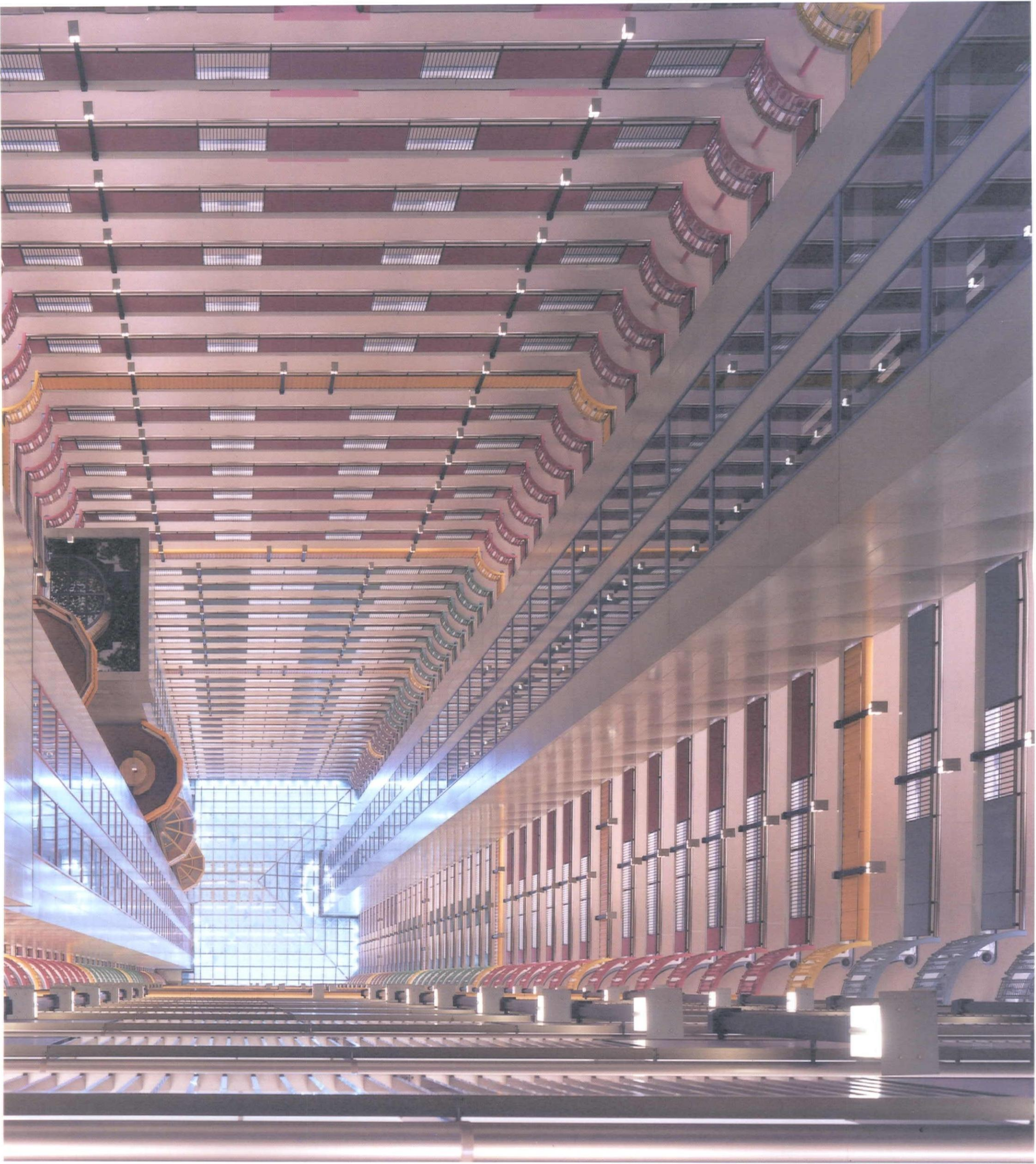
イラスト：伊藤正道 pp.8-40

著者略歴

上野 淳（うえの・じゅん）
1948年岐阜県生まれ。
77年東京都立大学大学院工学研究科博士課程修了。
現在同大学工学部大学院工学研究科建築学専攻教授。
1995年「生活者に立脚した地域公共施設の建築計画に関する
一連の研究」で日本建築学会賞（論文）受賞。
主な著書に
『新建築学体系29 学校の設計（共著）』（彰国社刊）、
『建築・都市計画のための調査方法・分析方法（共著）』
『建築・都市計画のための空間学（共著）』（井上書院刊）、
『SDSシリーズNO2：学校』（新日本法規出版刊）など。
作品に
〈鳩ヶ谷市立辻小学校〉（基本・実施設計）、
〈千葉市立打瀬小学校〉（基本・実施設計、指導・
コンサルティング）、
〈韓国檀国大学付属病院〉（基本計画）などがある。

倉斗綾子（くらかず・りょうこ）
1973年神奈川県生まれ。
96年東京都立大学工学部建築学科卒業後、
同大学大学院工学研究科建築学専攻入学。
現在同大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程

力安 拓（りきやす・たく）
1975年福岡県生まれ。
98年熊本大学工学部建築学科卒業。
98年東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻入学。
現在同大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程



photograph 2



The Entropic Forest Urban Infrastructure

photography Heiner Schilling text Hiroo Yamagata

連載 7

photograph 1

エントロピーの森：都市のインフラストラクチャー

写真ハイナー・シリング 文 山形浩生

『部屋。』

このからんとした入り口に着く頃には、もう頭の中はあのことだけ。これから始まるすごいアレ。考えるだけで、首の後ろから脊椎にうずくような震りが走り、手指の付け根からつま先まで、関節という関節がうずく。ドドロロのやつ。毎週水曜日。朝にクスリが届く。仕事が終わってそれを飲むと、夜な夜な草原を跳ねるウサギの夢なんぞを平和に見ている。やつはどこへやら。ものの数時間で息は荒く、目が血走り、鼓動がはやくなってくる。アレしり、考えられない。

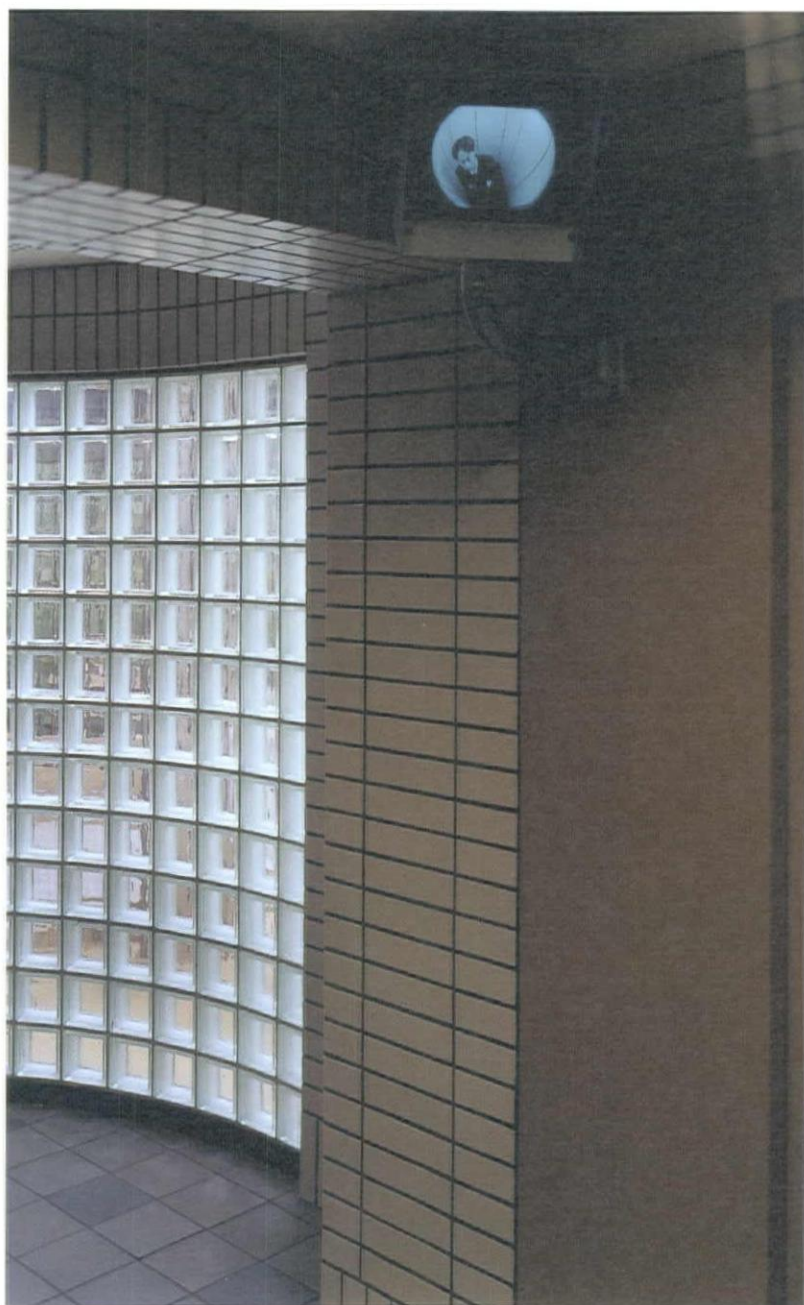
だからここへやってくる。

決して安いとこじゃないうけれど、さいわい半日から半額補助が出る。週一ならなんとかなる。でもいまは金どころじゃない。

唯一見かけの警備員も、やつの方は見ない。エレベーターにカードを差し込むと黙ってドアが開く。何の操作もない。乗り込んだエレベーターが勝手に止まり、下りて歩こうと開いたドアの前に出る。いつもこの緑の階で、いつもこの同じ部屋。オレンジの階はどうなってるんだろう。ほかの部屋はどうなってるんだろう。だけれど、いまのやつにはそんなことを気にしている余裕はない。5年間、もうほぼ毎週。考えることは何もない。

開いたドアの中は、むき出しのコンクリート壁が四方にあるだけ。天井には蛍光灯。窓もない。でもとまどうことなく、入って、戸を閉める。同時に明かりが消える。真っ暗な中、しばらく息をはさませて立っている。やがて、ゆっくりと手探りで壁に向かう。今日はどこだろう。数歩で手近な壁にたどりつく。それを撫でる。探す。最初はひたすらコンクリートの手触り。どこだ。どこだ。ゆっくり、ゆっくり指先に神経を集中しながら壁を探っていく。

あつた。この指先に触れるこの質感。毛皮。これだ。この感触。もうそれだけで背中がうずいて全身が総毛立つ。鳥肌もんの戦慄。そつと、それを逃がさないように、輪郭を確かめてゆく。するとだんだんそれより広がる。指先で触れる。手の平で、手の甲で触れる。なで回す。ちょっとした毛皮の固まり。だんだんぬくもりを帯びてくる。壁の平面だったのが、だんだん隆起してくる。それより脈打ちはじめる。細かい微



photograph 3

小組織も、指先に感じられるようになってくる。ああ、まちがいない。そこから手をはなさないようにしつつ、やつは少しずつ服を脱ぎ始める。手首でそれいふれ、腕、肩、胸でもふれてゆく。ああ、勃起した乳首が、柔らかな肉塊みたいな毛皮にふれる。腹。腰。もう全身を覆うくらいに広がっている。白いウサギの毛皮。壁の鼓動。自分の鼓動。なんだろうもうわからない。

ほとんど全身で、壁と交わりながらも、まだ探す。しばらくするうちに、それは向こうのほうへやってくる。壁のあそびを頼りに、からだを移動させる。いまやあそびが四方からせまり、部屋全体があそびつつ迫ってくる。

やがて、からだのどこよりも、裂け目を見つける。

ちょっとしたひびきりだ。でもふれた瞬間に、部屋全体がヒクつく。ああ、ここだ。毛皮のない、ぶるぶるの肉の裂け目。なま暖かい、湿潤な裂け目を、ゆっくり引き裂けようとする。部屋の息づかいが激しくなる。部屋が四方から、もろしだくように迫ってくる。指で、口で愛撫しつつ裂け目にゆっくりと没入する。まずは指から、そして腕が丸ごと中に入る。ちょっとした抵抗のあとで、逆に壁の方がそれをくわさこみ始める。中ではもつと粘液質のゴムみたいなうごめくな暖かい組織。それより、壁の毛皮といっしょになつて、もう全身がすさまじく部屋に覆いつくされる。どこまで自分分りもわからない。腕、肩、頭、そして胴体も脚も、全身がやがて裂け目に吸い込まれていく。ような気がするがもうわからない。うめいている。部屋が自分分りもわからない。

そして——いつしか頭の中が真っ白になつて、体液がいつせいに放出される。汗腺も、唾液腺も、睪丸も、すべて一滴残らず壁に搾りつくされる。

*

ふと目をさます。全裸だ。壁はそれがないコンクリートのまま。くらざわつてみても、すみずみまでただのコンクリート。なんの変化も起きない。ほんとにこれは起きたんだろう。でも、たれにも聞けない。

下りのエレベーターの中で、珍しく別の人と出くわした。目があつて、お互いにお互い視線をそらす。

バブやコーヒーショップがある 学校をつくってみたい。

上野 淳（うえの・じゅん）

1948年生まれ。

1977年東京都立大学工学部博士課程修了。

1993年東京都立大学教授。

1995年日本建築学会論文賞受賞。

1997年東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻教授、現在に至る。

学校の建築計画に関する著書を多数執筆すると同時に、鳩ヶ谷市立小学校、千葉市立打瀬小学校の基本・実施設計や、学校建築設計の指導・コンサルタンとして活躍する。



いくつかの学校づくりのお手伝いをしてきた。アドバイスをする場合などさまざまであったが、時折実際のプロジェクトに参加するのは勉強になった。この間、漠然とながら、やり残したこと、一度はトライしてみたいこと、などが蓄積してきている。想いつくまま記してみたい。

平屋建ての学校をつくってみたい

アメリカやイギリスの学校を随分多く見て廻ったが、小学校建築の多くは平屋建てであった。随分と伸び伸びとした環境である。屋外空間との繋がりもいい。日本では、まず3、4階建てが常識になっており、ここから発想が始まる。敷地が狭いからやむを得ないと言ってしまえばそれまでだが、しかし、学校規模が小さいときなど可能性は充分ある。ハイスайдライトやトップライトを採り、教室の間に中庭を挟むなど、豊かな環境を演出できる可能性が大きいと思う。子供の環境。低層の計画が普通の筈なのに。

バブやコーヒーショップがある学校をつくってみたい

これも一度でいいからと思っている。イギリスのコミュニティスクールにはバブがある。居酒屋は無理にしても、コーヒーショップくらいはいいじゃないかと思う。コーヒーを飲みに学校にちょっ

と立ち寄る、グランド開放のサッカーの後、友達と冷たいビールを一杯飲んでから帰る。そうすると、学校に行くのが楽しくなるし、コミュニティスクールももっと楽しくなるのに。

教室から黒板をなくしてみたい

黒板は一斉画一教育の象徴である。幅2間の緑色の黒板がどんとのさばっていることから教室のデザインが始まる。この呪縛から逃れられれば、いろいろ可能性が広がるのと思う。色を変えるだけでも、ホワイトボードに変えるだけでも、上下左右に動かせるようになるだけでも、かなり雰囲気は変わる。最近若い建築家が、動かせる黒板に挑戦しているのも頷けることではある。

学校に炬燵や畳やソファを持ち込む

学校の設計で、家具計画まで口を出すことはなかなか難しい。行政の仕組みがそれを許さないのである。さて提案することが許されたとしても、せいぜいオープンスペース用の学習家具に限られる。でも、児童・生徒がくつろいだり、ホットしたりする時のために、家庭にあるような家具を学校に持ち込めれば、随分雰囲気は和らぐとも思うのである。（上野淳）

地域とのコラボレーションが 必要不可欠だ。

飯沼秀晴（いぬま・ひではる）

1941年生まれ。

1968年東京大学大学院修士課程修了。

1970年アルコム人社、現在に至る。（取締役副代表）

主な担当作品に七戸町立七戸小学校、図書館情報大学、目黒区立宮前小学校、杉並区立第十小学校、稲城市立城山小学校などがあり、学校建築設計においても多くの実績がある。



生徒や父兄がこんな学校、あんな学校というイメージや希望を出し合い、それを具体的な計画に反映するワークショップによる学校づくりが盛んになってきた。画一化と標準化によって硬直してしまった学校づくりに風穴をあけ、地域に密着した、血の通ったものにする方法として期待したい。

長い間、学校は教育の専売特許を自認し、他の干渉を排除して聖域を守ってきた。しかし特定の価値観を押しつけたり、効率を第一とする自己完結型の学校づくりはすでに破綻しているのは明白である。いじめ、不登校、学級崩壊など次々と噴出した社会問題が雄弁にそのことを物語っている。広範かつ急激に進む情報化社会への移行は教育の地平を一気に広げ、価値観の多様化をもたらした。そんな中で学校は自ら改革解放を宣言し、地域との連携を深めることによって、新たな教育の可能性を模索し始めている。たとえば、地域社会での自発的な活動や体験を積極的に評価したり、社会人教師やボランティアによって、地域全体が教育を支える仕組みをつくったり、学校と地域、世界を通信ネットワークで結び、多くの人との交流を通じて教育を開かれたものにする、などである。

しかし、ひるがえって身の周りを観察すれば、

私たちの社会はそれに応える環境として十分に成熟しているとはいえない。教育を学校に任せっぱなしにし、問題が起ればすべて学校の責任にしてきたし、周りの豊かさや利便性を求めるのに急で、自分たちの地域の伝統や歴史・文化には関心を払わず、継承すべき努力を怠ってきた。その結果、改めて教育環境としての資質を問われれば、内心忤懣たる思いを抱かざるを得ないのが現状ではないだろうか。

学校と地域の新たな関係を作り出し、学校を含めた地域全体が、豊かでバラエティに富み、個性的な教育環境を提供する可能性のある手法としてワークショップに期待する。それは学校づくりのプロセスを大切に、学校と地域の関わりを契機となる「参加の風景」を現出し、体験させてくれるからである。

もちろんワークショップは万能ではない。それは計画の放棄を意味してはならないし、単なる通過儀礼であってならない。これからの学校づくりには地域とのコラボレーションが必要不可欠である。ワークショップは、それを引き出すためのツールであって、それ以上でも以下でもないのだから。（飯沼秀晴）

美しい色彩のユニットフロアー

Healthy Eleven[®] ヘルシーイレブン

11色のカラーでバリエーションも多彩



ヘルシーイレブンの特長

- 水はけがよい
- 弾力性に優れている
- 正方形のハニカム状
- 滑りにくく安全
- 水洗いでサッと清掃
- 耐久性抜群（10年）

プールサイド
特殊ポリエチレン樹脂のため、
足下の暑さを防止します。



渡り廊下
安全性と履き替え上での清潔さと
品格ある色調

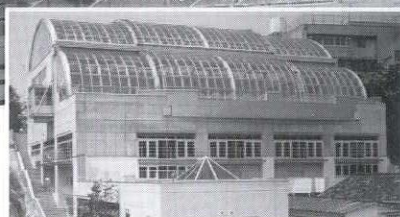
防災規格合格品

ヘルシーイレブンの主な用途

学校・保育幼稚園等関連 ——— 渡り廊下、昇降口、テラス、更衣室、プールサイド

 **住友ベークライト株式会社**

東京／〒140-0002 東京都品川区東品川二丁目5番8号 天王洲パークサイドビル
TEL (03)5462-4227
大阪／〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目6番32号 タイビル
TEL (06)6441-4346

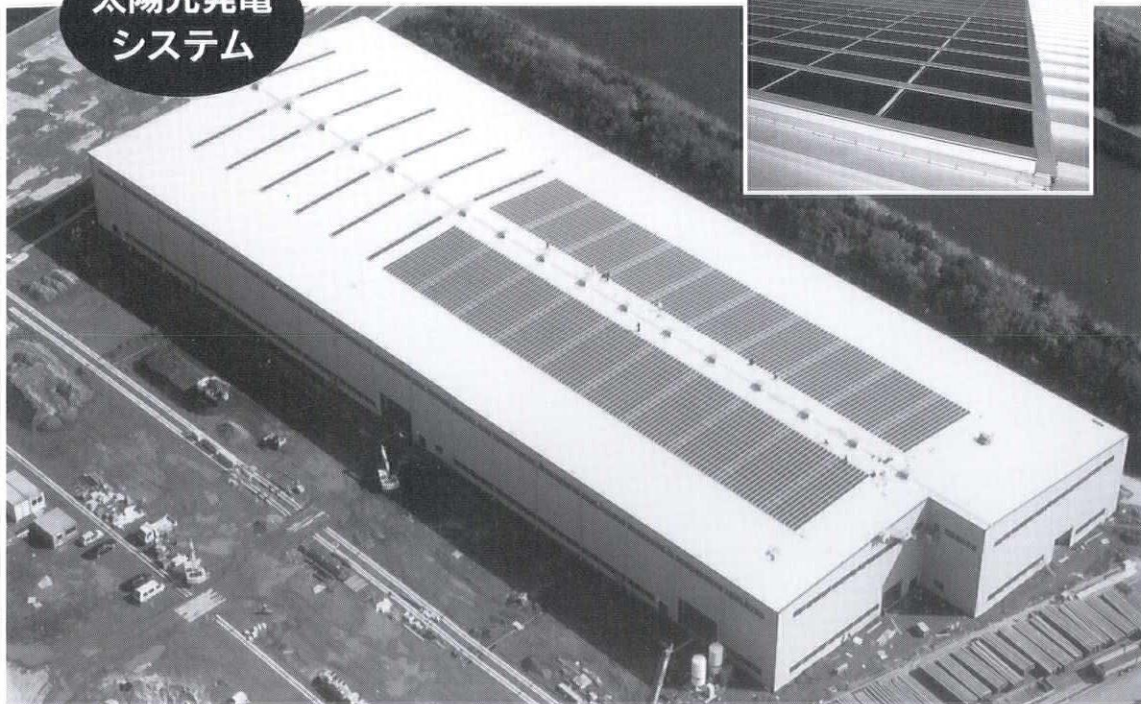


開閉式建築
システム

よく考えられているから、よく使われる。

既存のプールに設置したり、自由なデザインが可能な開閉式建築システムや、屋根そのものが発電する太陽光発電システムなど、ニーズを熟知した横河ブリッジのトータルエンジニアリングが好評です。

太陽光発電
システム



株式会社 横河ブリッジ

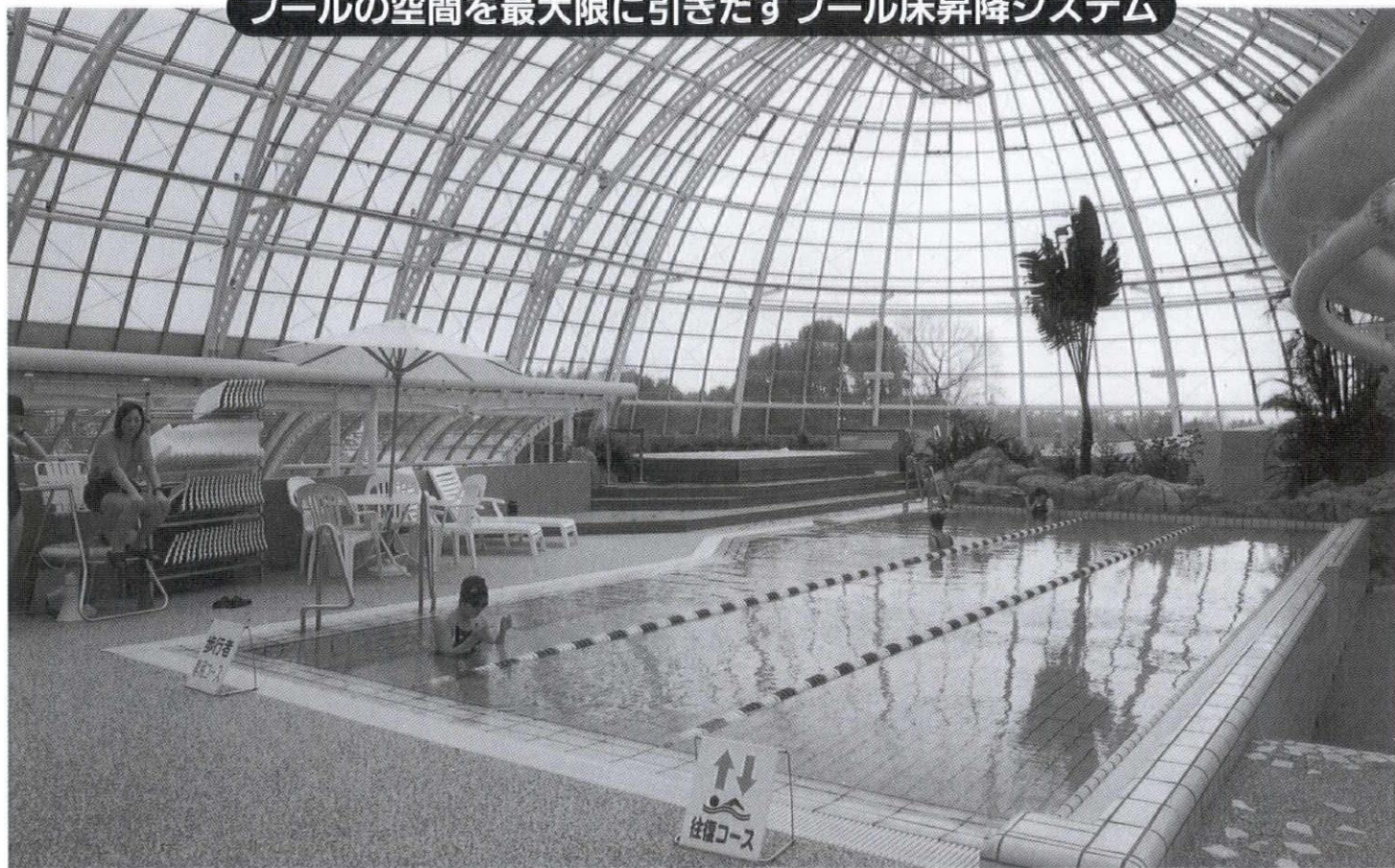
東京／〒108-0023 東京都港区芝浦 4-4-44 Tel.03-3453-4114 Fax.03-3453-4839

大阪／〒550-0003 大阪市西区京町堀1-6-2 Tel.06-6441-7520 Fax.06-6441-7530

<ホームページアドレス> <http://172.30.1.2/japanese/index.html/>

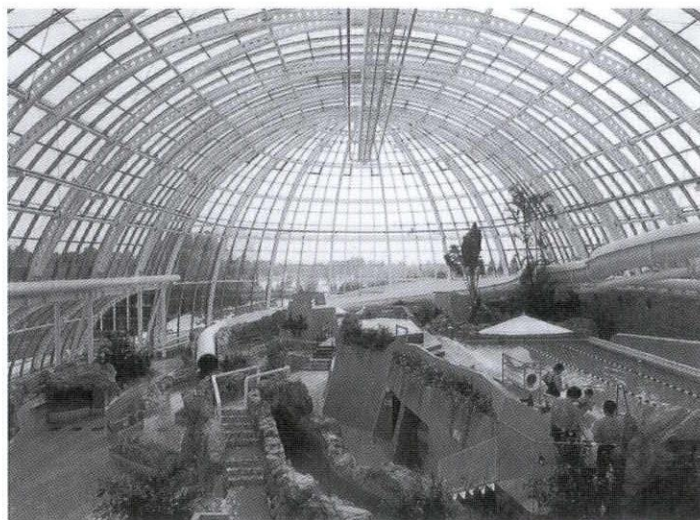
可動床プールシステム

プールの空間を最大限に引き出すプール床昇降システム



グリーンヒルズ津山ガラスハウス（岡山県）

プールの水深，自由自在
可能性を拡げるプールづくり



—— 世界で実証された技術！ ——

世界各地のオリンピックプールなどで使用されている**液圧シリンダー方式の可動床プール**が日本にも登場しました。

このシステムは，人に全く害を及ぼさず，あらゆるタイプのプールに採用可能。ポンプ台数が少ないため制御が単純，管理も楽といったことから今まで殆どトラブルもなく「安全性」と「メンテナンス」の面においては抜群の安定性を発揮しています。

また利用方法についても1つのプールで大人から幼児まであらゆるシチュエーションに応じた利用を可能とするとともに水深を0にすれば，演奏や踊りの舞台など多目的なフロアとして使用することもできます。

これが**世界1500ヶ所**の実績を誇る所以です。

エヌテック株式会社

本 社 〒144-0031 東京都大田区東蒲田1-23-10
TEL 03-5703-2221 FAX 03-5703-2300
関西事務所 〒604-0034 京都市中京区釜座通押小路下ル
下松屋町720-3
TEL 075-257-3664 FAX 075-257-3665

業務用ヨコ型ブラインド

モノタッチ25・35

新発売



下降操作がワンタッチ。
いままでにない
操作性を実現しました。

1本の操作コードで
スラットの昇降・開閉操作ができます。
しかも、下降操作はコードを
引くだけのワンタッチ。
緩速装置の働きで
静かに滑らかに下まで降ります。

立川ブラインド工業株式会社

開発営業部：〒151-0053 東京都渋谷区代々木4-30-7 TEL.03-3375-1681 FAX.03-5333-5180

天然木大型積層板

HPジムフローリング

体育館・エアロビクス施設等に

工期、工費が
大幅に節約できる

直貼工法用

重歩行用

HPハードウッドフローリング

キャンパス・15

ナラ3.0 m/m 挽材

キャンパス・15表面材には、無垢材の質感を
そのまま生かした、3.0m/mの挽材単板を採用。

教育施設や福祉施設にふさわしい、

堅牢度と耐久性に優れた重歩行用の床材（フローリング）です。



北海道パーケット工業株式会社

本社・工場	〒049-0111	北海道上磯郡上磯町七里浜7-3-1	TEL0138(49)5871 FAX0138(49)5875
東京支店	〒166-0012	東京都杉並区和田3-32-7	TEL03(3313)4181 FAX03(3313)4034
大阪支店	〒533-0013	大阪市東淀川区豊里5-28-3	TEL06(6327)1231 FAX06(6322)0910
仙台営業所	〒981-0932	宮城県仙台市青葉区木町9-5	TEL022(219)3621 FAX022(219)3624
札幌営業所	〒001-0035	札幌市北区北三十五条西10-1-3	TEL011(746)0711 FAX011(746)0713
水戸営業所	〒310-0852	茨城県水戸市笠原1312-1	TEL029(305)0311 FAX029(244)3061



古典バレエの演劇性の発見

フォーサイスやキリアンなら、大抵の人々は一度や二度観ているだろう。しかし古典バレエとなるとファンの層がまったく違って来る。モダン・ダンスは、近代の美術がそうであったのと同じように、物語を排除し（美術では具象と主題の排除がそれにあたる）、もっぱらダンスの形式を創作して身体に可能な抽象的なコンポジション詩的な意味を汲み出させるようにしてきた。しかしたまには古典バレエを観るのも楽しい。古典バレエは長い間に洗練された技法が確立しているから、たとえばパ・ド・ドゥをどこに入れ、どこで盛り上がりを作り出すかにコレオグラフィーの腕が見えるが、私でさえ、特定のダンサーを観に行くのだ。幸いこのところシルヴィ・ギエムが日本によく来る。彼女のずば抜けたダンスを観るのはひとつの快楽だ。

先頃、ギエムがイギリスのロイヤル・バレエと一緒に来日した。他の出し物はもう以前に観ているので『マノン』だけを観に行った。ロイヤル・バレエの場合は、もう亡くなってしまったケネス・マクミランの演出を観る興味もある。先年、『ロメオとジュリエット』を観たとき、バレエの演出の予想外の新鮮さに驚いた。古典の場合は物語性があるから、モダンより演劇的である。だから振り付けだけでなく、演出もまた興味を引く。

『ロメオとジュリエット』の場合、バレエのタブーを超えるようにも思われた。広場の場面、バルコニーの場面、そして最後の墓の中に至るまで、ある種の芝居を観ながら、しかも身体技は歩くこと、リフトすること、パ・ド・ドゥに至るまですべてダンスの作法でできているのだ。

そんな経験があったから、今度の『マノン』の場合も、さてマクミランがどんな演出を遺しているのか、そしてギエムがこの波瀾万丈の女をどのように踊るか、それが観たくて行ったようなものだった。『マノン』の原作はよく知られた18世紀のメロドラマ、舞台もパリから最後はアメリカのニューオリンズにまで飛ぶ。純愛の乙女ジュリエットと違って、娼婦になり、流刑に処され、最後はぼろぼろになって死んでいくのだ。率直に言って『ロメオとジュリエット』と較べると、より演劇的变化を必要とするバレエなのに、演劇的な演出としては『マノン』のマクミランはさほど冴えていたとは思えなかった。実際にはギエムのパ・ド・ドゥが第1幕で観客を堪能させるが、これだけの転落の物語だから、ギエムにも実は演劇性が要求されている。マノンを踊るダンサーには非常に幅広い変化をダンスという身体技法によって出せるかどうかが問題になる。しかしマクミランの演出は、筋に沿って見事なパ・ド・ドゥをいくつか配置することで見せているのだ。古典バレエにとっても、演劇的な流れは二次的なものではないかもしれない。

C u l t u r e C a f e

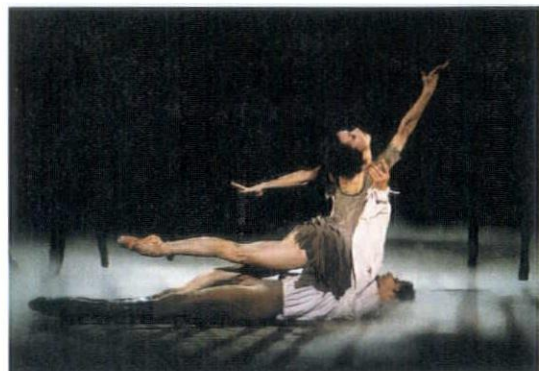
BUYO
今月の舞踊

英国ロイヤルバレエ団 『マノン』

於：NHKホール 4月23日
振付：ケネス・マクミラン
音楽：ジュール・マスネー
出演：シルヴィ・ギエム、ジョナサン・コーブ

多木浩二
たき・こうじ/評論家

多木浩二/たき・こうじ
評論家。東京大学文学部美学美術史学科卒業。元千葉大学教授。主な著書に『生きられた家』『眼の隠蔽』『シジフォスの笑い』など多数





「ほころび」の心地よい重奏

日曜の朝7時に寢床から這い出して、マチネの当日券売場に並ぶ。久々に奮闘して席を手にした。新国立劇場で上演されたブレヒト作、串田和美演出の『セツアンの善人』である。串田和美の芝居はシアターコクーンでの『上海パンスキング』さよなら公演以来であるが、あの時も並んで当日券を買った記憶がある。芝居の醍醐味をしっかりと満喫させてくれる信頼感のある演出のせいか、観客の動員ぶりは健在のようだ。もっとも観客の動員に関しては主演の松たか子の人気もあるだろうが。

情報ネットが充実してきた時代であって、当日券はわざわざ並んだ本人に一枚しか売らないというルール、つまりそれだけ真剣な観客を選別する厳しいシステムは、面倒である半面、フェアで気持ちがいい部分もある。床に座ったりしながら列をつくるお客も慣れた感じだし、お客をあしらう劇場側の対応もてきぱきとしていて、なかなか東京の演劇文化も捨てたものではないなあと少し感心した。そういう意味では、新国立劇場（中劇場）はちゃんと仕事をしている感じである。

芝居の方は、衣装のワダエミや、アコーディオン・サウンドのcobaなど、充実したスタッフが多方面から見応えをつくっていたが、とりわけ印象的だったのは、役者の顔ぶれが実に国際色豊かだったこと。そのせいで怪しげな節回しの日本語が極めて頻繁に舞台を飛び交っていた。アイスランド、セルビア、中国、ブラジル、スペイン、フランス、そして日本というさまざまな出身地の役者が出演している。おそらくは

ローマ字丸暗記の台詞だろう。場合によっては聞き取れない部分もある。しかし無理をして英語のミュージカルやドイツ語のオペラに付き合うことを考えるとほかに分かりやすいわけで、さほど苦にならない。それにこの演目はブレヒトの代表作のひとつで「寓話性」が高い、つまり多義的ではあるがストーリーそのものはシンプルなのでディテールをすっとばしても話の陰影は分かるのだ。

いずれにしても、この不可思議なイントネーションの日本語の語感が新しい劇中世界のリアリティを作っていて面白かった。実際のところ、さまざまな国の人と会話する場合、かなり語学が達者な人でも相手の意図する内容を100%理解することはできない。大まかに言えば、6、7割程度理解できていれば基本的なコミュニケーションに不都合は生じない。一方で言葉が完全に通じていても意志の疎通が充分ではないということもある。そういう不自由さを宿命的に抱えつつ不器用にぎくしゃくと編み上げられていくのが人間模様というもので、そうしたリアリティを、この多言語的日本語芝居はうまく浮かび上がらせている。

そういう視点は役者の演技だけでなく、衣装も、音楽も、舞台装置にも、意図的に導入されており、計算された「ほころび」を巧みに取り入れた手法が舞台上質な五感の和音を生み出していた。要するに緻密で流麗な完成度ではなく「異物感」や「ゆらぎ」の中に含まれている豊富な情報の水脈をしたたかに意識して作られた作品なのである。

主演の松たか子、そして助演の大森博の演技は、逆にそうした異物感の多い舞台に、明快な流れとリズムを生み出していて気持ちが良かった。

C u l t u r e C a f e

PLAY
今月の演劇

『セツアンの善人』

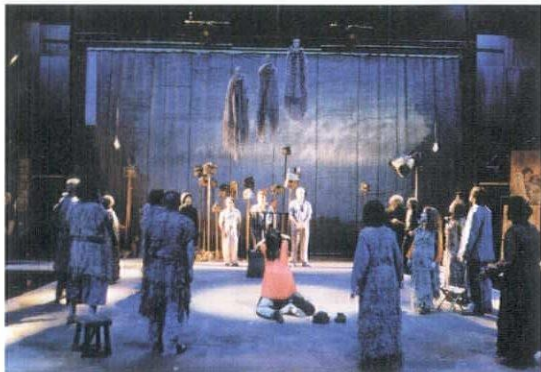
作：ハルトルト・ブレヒト
演出・美術・出演：串田和美
作曲：パウル・デッサウ
翻訳：松岡和子
出演：松たか子、高橋克典、他

於：新国立劇場中劇場 99年5月18日～6月6日

原 研哉

はら・けんや／グラフィック・デザイナー

1958年生まれ。1977～83年武蔵野美術大学及び同大学院でデザイン論を学ぶ。83年石岡瑛子デザイン室を経て日本デザインセンターに入社。93年同社内に原デザイン研究所を設立、商品デザインから空間デザインまでを幅広く横断する領域で活躍している。長野オリンピック、2005年国際博覧会など公的なプロジェクトにもアートディレクターとして参画。著書に随筆集『ポスターを盗んでください』（95年、新潮社刊）



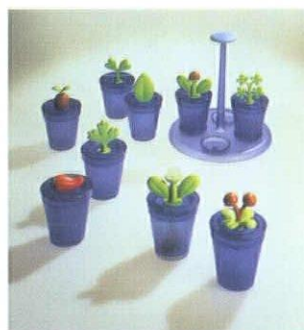
アルベルト・アレッシ氏は、今年1月に東京にオープンしたアレッシのフラッグシップ・ショップの視察を目的に来日。これにあわせてカッシーナ・インターデコール青山本店ではアレッシ社の製品開発展示が開催され(6/3~6/13)、日本では初めて、同社の経営理念を紹介するレクチャーの場が設けられた。レクチャー主催はカッシーナ・インターデコールグループ。

アレッシショップ：東京都港区北青山3-2-5 /
TEL: 03-5770-3500
カッシーナ・インターデコール青山本店：
東京都港区南青山2-12-14 /
TEL: 03-5474-9001

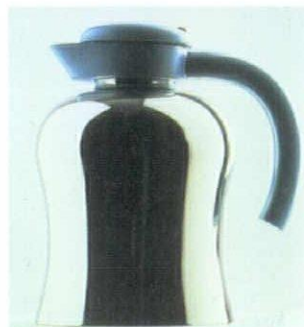
川上典子

アレッシの商品開発セオリー

インタビュアー：アルベルト・アレッシ



Happy Spices (SG09) / Stefano Giovannoni



ES02 Sherazade / Ettore Sottsass

*1: Family Follows Fictionの略で、従来のアレッシの試みよりエモーショナルな形態を探るべく1991年に始められた製品開発。ウィニコットの「トランジショナル・オブジェクト」とフランク・フォルナーの「エモーショナル・コードの理論」の具体化を試みたもの。

*2: 製品開発においてアルベルトを中心に進めているプロジェクトで、氏の説明によると「継続的かつ精神的・研究構造的創造を目指す、高次元プロジェクト」。

1921年にイタリア北部に誕生したアレッシ社。金属製品の加工を営むファミリーカンパニーは、やがて世界に名だたる企業へと飛躍を遂げていく。建築家とのコラボレーションが始まるのは創設者の息子のカルロ・アレッシ氏が社長に就いた1950年代。その長男で現社長のアルベルト・アレッシ氏は、1970年の入社以来、既に600に及ぶプロジェクトを手がけてきた開発の中心人物である。

6月、来日した同氏はアレッシ社を紹介するレクチャーを開催。アレッシを「古典的な意味でのメーカーでなく、応用芸術としての実験工房」と説明した。

——レクチャーで「皆が必需品を手にする現在、ニーズのためでなく、芸術的で詩的な夢を抱かせてくれる物の創造が大切」とおっしゃいました。御社の製品開発の過程をご説明下さい。

私自身は社会学や心理学の観点から考える方法が得意で、デザイナーの選択よりもまずテーマに応じた重要要素を考えます。例えば「F.F.Fシリーズ」¹で私が行った「メタプロジェクト」²の場合は人間に必要な繊細で感覚的なオブジェを目指し、「大人の玩具」を開発しようとしたもので、愛着、満足、恐怖、等々のキーワードを考えました。その上でこうしたキーワードをデザイナーに投げかけるのです。通常、プロトタイプの見直しは4点から行います。第一に美しさで、感覚的、記憶的、イマジネーションの3要素から成る審美性の評価です。第2が物と人とのコミュニケーションの面。第3が機能で、第4が価格。価格に関しては他社の同一製品との比較にあわせて同一価格の他商品との比較も行います。これらの検討は兄弟や技術者たちと点数制で行い、個人というより消費者の視点で判断します。開発には平均2年を費やしますが、ボツも多い。商品化の最終判断ですか？ 私の「胃」が下すんです(笑)。

——「F.F.F」シリーズは御社製品の購買層を拡大しました。キッチンだったり愛らしい品々はそうしたものを希求する世の潜在意識を受けとめてのことですか。

社会学者のダニエル・マフェゾーリが述べるように人々には二種類の振舞い、パラノイアとメタノイアがあります。パラノイアとは父親や教師のように、何が正しいか、どうすべきかを常に考え、世の出来事を規制しようとする。アレッシでは巨匠のデザイン群がこれに当てはまります。メタノイアは人々が自由に生きたいと願うもので、「F.F.F」のジョヴァンネーニのよ

うに、人々が好きな物を、最高のデザイン・クオリティで行おうとするものがこちらです。後者が目立って見えるのかもしれませんが、開発は均等です。今後も偏る予定はありません。

——レクチャーで「デザイナーには自分の欲しい物を創ってほしいが、自分のエゴでデザインを行ってほしくない」と話されました。また「スーパーでポピュラーなのが大切」とも。一般的に各々の二項目は対立し、実現は難しいと思われますが……。

スーパーであるためにはデザイナーの優れた着想が不可欠ですが、そのみではポピュラーにはなり得ず、完璧とは言えません。また、美的な面やエモーショナルな面でのクオリティも重要ですが、これはデザイナーから提示されない場合が多い。自然には成立し得ない両者の間には理想的な媒介者が不可欠なのです。

ボーダーラインのセオリーを説明しましょう。可能と不可能の間の境界線、ポピュラーとスーパーを巡るデザイナーと企業の綱引です。企業が強いと巷の製品のようにポピュラーのみで、デザイナーが強いとポピュラーの域に入り難い。そこでデザイナーを境界線まで引っ張り、1ミリだけアレッシ側に引く。企業の役割よりデザイナーが際立つのがこの1ミリなのです。デザイナーが意識しないよう徐々に、しかも彼らが自発的に境界線に向かっていくように引く配慮も重要です。このようにアーティストの創造力を活かしていくことが、次世紀には一層重要になると私は確信しています。

氏はまた自身の活動の根底にある重要な考えを語ってくれた。「私の知るアーティストや彫刻家の仕事には遊びの要素が含まれています。幼児が砂場で遊ぶようにナイーブで稚拙な方法ですが、科学者のようでもあり、解決を急がない。アイデアを練る時には物事は放りっぱなし。でも、目的意識が明快で心底楽しんで仕事をする。クリエイティブな仕事は子供のように行わなくてはならないのです」。

この考えに基づくからこそ、創造活動の重要要素であり、特に今日、求められるオリジナリティを持続けられるのだろう。ちなみに年間売上は134億円と、同社のセオリーは多くの人々の支持を得ているのだ。夢を抱く「ドリーム・ファクトリー」の活動が単なる夢物語で終わらないこと……その理由を探ることは、現代の物づくりを考える上でも意味あることになるに違いない。

(かわかみ・のりこ／ジャーナリスト)

第3回わくわくワークショップ全国交流大会in新潟

会期:

1999年5月21日～23日

会場:

新潟県大潟市

第3回わくわくワークショップ全国交流大会in大潟 建築チャネル「ケンチク・ケンケンガクガク」

市民参加型デザインの実際

ワークショップを行いながら市民参加型まちづくりを実践する人たちが800人以上も集まる全国大会が、新潟県大潟市で開かれた。この大会自体がワークショップで、オーディエンスは何らかの参加をすることになっている。小学校を探検したり、農業生産地を訪ねたり、川で水辺のまちづくりを考えたりするのだが、そのうちのひとつに「ケンチク・ケンケンガクガク」というプログラムが用意された。各地の建築家が市民参加型建築設計の実例を持ち寄り、市民や行政サイドの人も交えて、実際のところ何が問題となっているのか洗い出そうという趣旨だ。参加建築家は皆独自に実践を重ねた経験をもつ。なかでもアメリカのヘンリー・サノフは、設計プロセスに市民参加を盛り込むことで軒並み公共設計コンペの仕事を取ってしまう凄腕で、耳目を集めていた。

まずは、各建築家が自らの設計プロジェクトを発表。その一部を挙げてみよう。建築家、ノース・カロライナ州立大学デザイン学部教授のヘンリー・サノフは、建築の企画や設計に住民の意思を反映させることを目的としたプロセスチャートを準備し、アート・スクールの事例を紹介した。芦原太郎は、北山恒と共同設計した宮城県の〈白石第二小学校〉を紹介。彼らは白石市全般にわたる計画にも携わり、行政・住民・専門家を含んだまちづくり組織の提案も行っていた。今村雅樹は群馬県〈太田市総合ふれあいセンター〉の例。ここではダンスから味噌造りまで住民サークルが盛んで、ここからの意見は貴重なものとなったらしい。水野一郎は〈金沢市民芸術村〉。紡績工場跡地を市長が保存・再利用することを提案したことからはじまったプロジェクト。24時間開放する利用者自主管理型のプログラムが機能している。象設計集団で名護市庁舎を担当した経験を持つ内田文夫は、地域のアイデンティティをコンセプトの軸にしている。事例は熊本県五家荘の一地区にできた観光拠点となる複合施設〈久連子古代の里〉。集落の24戸全世帯が参加した。伊藤雅春は〈新飯野診療所〉で、施設配置やボリュームを実際の現場で確認しながら決めてゆくワークショップを行った。村田義郎は、山口県の公営住宅設計の際に、当初は非協力的だった住民との関係が徐々にほぐれてくるプロセスを紹介。延藤安弘は、熊本市のコーポラティブ住宅〈もやい住宅〉。延藤の役割はいわば楽団の指揮者。住民の意思と希望が見事にアッセンブルされたデザインを実現している。

これら8人の建築家が2人ずつ4チーム

に分かれ、後半で討論会が始まる。聴衆も4箇所に分かれ、ファシリテーターと呼ばれる進行役が設計プロセス・チャートに討論の経過を整理してゆく。このあたりがこの大会のワークショップたる所以だ。

よく「市民参加」で問題となるのは、現行の行政システムでは対応が難しいということだが、ここではそんなことは当たり前の前提として特に議論はされない。懸案は山積しているのだが、まず「市民は意匠に参加できるか?」という問題。デザインのコンセンサスを民主主義的に得るには限界がある。ならば設計者をクビにする権利を持つことでデザインに参加できないか? それなら建築家の職能とは何か? 「市民参加」の目的論になったが、実はその最大の目的はコミュニティづくりと良いプログラム作りであるという結論が水野×伊藤ユニットで出された。延藤×内田ユニットでも動機付けを明確にすることの重要性が確認された。ヒアリングを公開しプロセスを透明にすることで、市民とのやりとりがスムーズになったと説明する村田に対し、「市民は生活のプロ。建築家は設計のプロ」として互いを尊重し、設計に対する判断と決定はこちらの仕事と自らの立場を明確にするサノフ。このようにネゴシエーションの方法論も多少触れられたが、時間も予算も限られた「市民参加」をいかに合理的に進行するかということとは、もっと徹底して議論されるべきだろう。芦原×今村ユニットでは、彼らのこれまでの経験を元に、「市民参加」の最大の効果はまちづくりに対する市民、行政のモチベーションを高めるところにあると結論づける。

ここで登場した建築家は、「市民参加」プロジェクトに対し自らの試行を重ねて、ある結果を出してきた人たちである。全員に共通するのはいくつかの困難を独自に解決してきたということだ。しかし、これは継続されるのだろうか。いつまでも、出張旅費だけで設計料が飛んでしまったなどというてはいられない。まず、より合理的な手法を追求すべきだろう。サノフはうまくいっているようだ。しかしそれはアメリカの話。また「市民参加」の目的ははっきり認識されないでプロジェクトが始まる場合が多いようだ。行政システムを改善してゆく議論が薄いのも気のせいなのか。

しかし、少なくとも問題の断片を表出できたことは価値があった。40～50歳代の建築家が個別に提示した懸案は、次の世代でひとつのテーブルに載せられるべきものだろう。(敬称略) (S.T.)

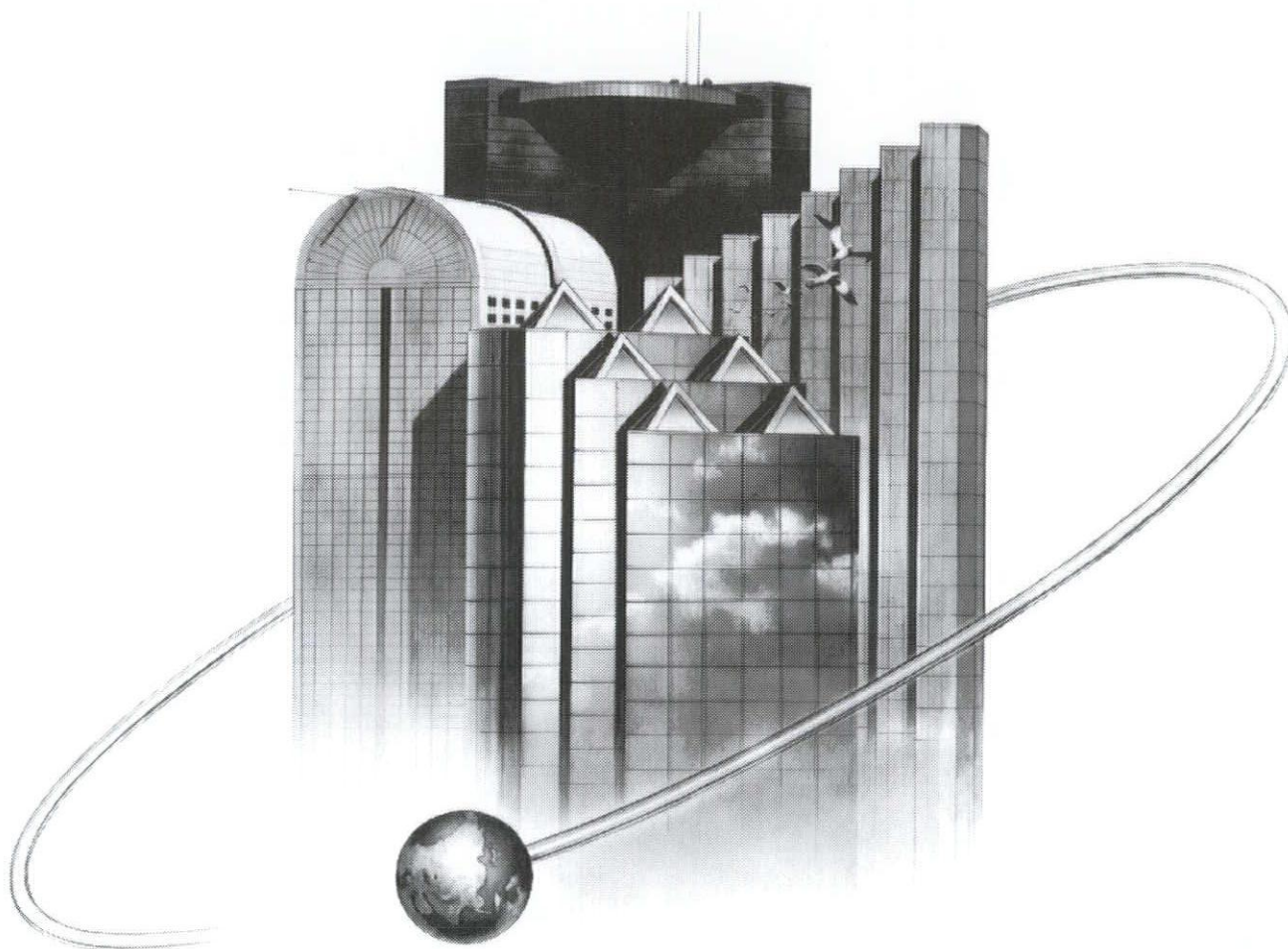


「ケンチク・ケンケンガクガク」会場



設計プロセスチャート

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

Book Review

書評

評者 越後島研

「当然で無意識」と「潜在的で無意識」



「ル・コルビュジェと日本」
高階秀爾・鈴木博之・十三宅理一・太田泰人＝編
A5判 256頁
鹿島出版会 2800円

ル・コルビュジェと日本との様々な関わりを読んで、実際の作品を例に論じられる模倣の具体的な在り方が、やはり興味深い。中でも刺激的なのは、建築家自身が自作への影響を語る言葉である。

磯崎新は中山邸（1964年）が第一案ではサヴォア邸に似ていたことを明かす。「面積も半分ぐらいなので大変無理」だったものの「いちばん最初のとっかかり」となっていた。四角い箱が「そっくり空中に持ち上げられ」「もちろんピロティは造ってあり」「スロープが中に入っています」と語り、「サヴォア邸のパターンを無意識に模倣しているということは、一目瞭然です」と「無意識」を強調する。

かつて富永譲は、主に1960年代日本での直写的な模倣例を論じ、当時、社会や技術や哲学については語られても（「後期コルビュジェ的意匠が目指されているという」）最も即物的な事実には一言も触れたものがないことに奇異な感じを受けた。「そうした形態モデルは、時代に深く浸透しすぎていたために各個人の意識にのぼらなかったのかもしれない」とした（『建築文化』1977年10月号）。磯崎は「ともあれ私たちの世代は、コルビュジェを様々に勉強することからはじめました。これは私の先生が丹下さんですから当然」だという。であれば前川、坂倉、吉坂らにとってはさらに当然で、ほとんど「無意識」の模倣となっていたのだろう。

サヴォア邸の模型を日々見据えつつ自らの様式を編み出したR.マイヤーや、ドミノをなぞった伊東と同様、富永も高度に、意識的にコルビュジェを真似てみせた。それゆえ「無意識のような」態度が余計「奇異」に写ったのだろう。しかし彼らのやや過剰な意図的模倣の時期を経て、今また別の「無意識」がみえている。

本書中で最も新しい実例の慶應大学藤沢キャンパス大学院棟（1994年）について、以前筆者はカーペンターセンターとの類似を指摘した（『建築雑誌』1378号）。その評を挙げて横文彦は「この建築をつくっていく過程において、私自身、ほとんど彼を意識してなかったと言えるのです。しかしこのように指摘されると、潜在意識のレベルで彼の建築が雲の映し出す影のように存在していなかったとはいえませんが」とする。問題は作者すら断言できない影響作用になる。1960年代の「形態は酷似しているが、当然すぎて語る必要もない」という「無意識」に対し、「形態の類似は弱く、作者も評者も確信し

難い」ような種類の「無意識」である。

今後何世紀間かコルビュジェの影響が続くにしても、むしろパラディオのような具体的規範ではありえない。若い岡部憲明は、篠原一男の白の家にコルビュジェをみる。あえて「不確かな影響」に注目する姿勢に向かっているだろう。横も東孝光自邸や篠原の東工大百年記念館にまでコルビュジェの影を嗅ぎ取る。そして「私は作家という立場からすれば、完璧に説明されたコルビュジェ論よりも、むしろこうした曖昧な関係に興味があるのです」と述べるのである。

我々の建築的想像力も、膨大な潜在的無意識の広がりによって養われている。風土や歴史も「雲の影」のように支配する。形態は不確かなうちに現れては成長し、言葉にできぬ決断をもって終わるが、結果は動かし難く、振り返れば偶然とは思えない。「無意識」が方向づけた過程でも、必然だったと思えば創作は終わりになる。確かに「完璧な説明」よりも、指摘されて初めて意識する「曖昧な手掛かり」の方が開かれ、飛躍と緊張をより豊かにはらんでいるともいえる。

筆者が先の横作品を批評した際の根拠は建物の形態だけである。本人すら不確かな影響がすでに語られているはずもない。横がハーバード在職中に建設された作品であった点のみを確認した。

「作者にとってさえ曖昧な影響を、あえてコルビュジェに帰してみることにどんな意義があるのか？」と問われれば、「ほとんど偶然のようにあらわれてくる形態を、より実り多く自覚する」ためだとしてもいう他はない。限りなく「無意識」に近い境界的な広がりははらむ多産な形態生成作用と、その放つ独自の創作的緊張を捉えたい。不確かな契機だけが覗かせる、容易には実感し難い創作行為の深淵をより豊かに意識するために、コルビュジェという窓は有効に違いない。

「結果に顕われた特徴」から「作者すら意識していない問題」を読み取る試みは「建築形態論」の典型でもある。建築の歴史も、一筋縄では行き難い特異な個性と、その示す飛躍や意外性の連鎖だろう。明瞭すぎる影響関係が証すものは乏しい。こうして読む方も創る方と同様に「想像力の冒険」の度合を強めてゆく。そんないわば誤読と紙一重の緊張をはらむ考察世界の蓄積だけが垣間みせる広がりが信じられる。本書からの示唆である。（えちごじま・けんいち／建築家）

情報とエネルギーの ネットワークをつくる 日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、
人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、
「私達の住む地球をまあるくつづける」。日立電線は、いま、
快適で豊かな暮らしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。
21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——
たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界で
ひとつの大きな役割を担っているもの——
それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 ☎東京(03)3216-1616

Books

新刊紹介

『待てばしはしない——東畑謙三の光跡』

布野修司＝監修

B6判 284頁

日刊建設工業新聞社 1800円

大手組織事務所の東畑建築事務所とその創業者、東畑謙三の光跡を辿ることで、モダンデザインの史的展開の新たな側面を切開する好著。

東畑謙三のデビューはスパニッシュ・ロマネスクの東方文化学院京都研究所（現京都大学人文科学研究所、1929年）である。京大での学生時代にはル・コルビュジエやT.ファン・ドゥースブルフの建築論にいち早く注目し、翻訳、紹介した。同世代の前川國男のようにアトリエ派の道を進むようにみえたが一転、事務所開設後は工場などの産業建築を主題とする。独自の道を歩む東畑は、戦中、戦後と業務を発展させ数百名規模の一大組織に育て上げる。この個性を形成する契機こそが独立直前の欧米渡航における米シカゴの衝撃、アルバート・カーンの自動車工場群であった。

ジャーナリズムで、歴史叙述のなかで華々しく脚光を浴びるのはアトリエを主宰する「スター建築家」とその「作品」であり、組織事務所とその建築家（経営者あるいは社員）への光は決して多くない。実際に建設される数とは比例しない。

本書は「組織事務所の建築家」という意欲的なシリーズの第一弾である。東畑謙三や事務所関係者の回顧録や座談会、論文・文献解題などで構成され、建築家、経営者、文化人といった東畑の多様な人間像が描かれる。建築言語としての「空間」「構成」が、東畑と義兄で哲学者の三木清との間で生まれたことなど興味深いエピソードも数多く盛り込まれている。「待てばしはしない」も東畑がよく口にしたフレーズである。

自らを「建築家」ではなく、「建築技術者」「構成技師」と位置づけていた東畑謙三の建築哲学は、20世紀デザインと建築家の本質を問う。



『世界からの提案・京都の未来 vol.1/2』

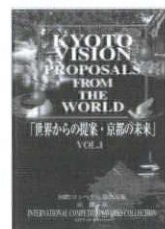
京都市総合企画局政策企画室＝企画・編集

A4判 452+1600頁

京都市 5000円（税込み、2冊組）

問い合わせ先＝柳原書店（tel: 075-241-4555）

97年開催の国際コンペ「21世紀・京都の未来」の記録をまとめた大書。入賞案をはじめ全応募案554点の掲載・解説、審査経過、シンポジウムなどで構成され、まちづくりのアイデアを満載する。



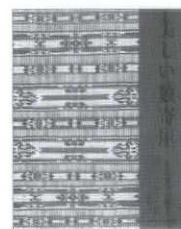
『美しい数寄屋——その雅びと透き』

二村和幸＝著

B5変形 114頁

丸善プラネット 3600円

伝統の創造的伝承を展開する建築家、二村和幸の20年間の軌跡を、茶室、住宅、店舗、ホテルなどの作品例で紹介しながら、数寄屋のエッセンスと手法を具体的に解説。図面では表現できない「間」を写真家、相原功のカメラワークが伝える。



『FAX IT!——FAXしようよ』

マイケル・バルタロス＝著

A4変形 8頁+100シート

クレオ 2500円

ポップなFAXシート集。デザインとイラストを手掛けたマイケル・バルタロスは、時計から美術館設計まで幅広く活躍するイラストレーター。「おめでとう」「ごめんなさい」といった100通りのシートでメッセージをより豊潤に伝える1冊。



オランダ若手建築家展 MECANOO, MVRDV, UN STUDIO

最近、注目を集めているオランダ建築界で、積極的に活動し、世界的に認知される3組の若手建築家の最新プロジェクトを紹介する。

会期：1999年6月12日(土)～7月25日(日)

時間：12：00～18：30 月曜日休館

会場：GAギャラリー

東京都渋谷区千駄ヶ谷3-12-14

入場料：500円(前売券、団体10名以上400円)

問い合わせ：GAギャラリー(若松)

Tel: 03-3403-1581 Fax: 03-3497-0649

ハーバード・デザイン・レビュー 若手アーキテクトによる展示会

ハーバード大学デザイン系大学院(GSD)卒業の若手日本人建築家による作品を図面、模型を中心に展示する。

会期：1999年7月13日(火)～8月1日(日)

時間：10：00～19：00

会場：ヒルサイドテラス F棟 ヒルサイドフォーラム(代官山)

問い合わせ：「ハーバード・デザイン・レビュー」

開催準備委員会(担当：小林正美)

Tel: 03-3418-7711 Fax: 03-3418-7800

第11回 高松宮殿下記念 世界文化賞受賞者決定

文化・芸術の発展に貢献した芸術家に感謝を捧げその業績を称える顕彰制度として、1989年に設立された世界文化賞の第11回目の受賞者が決定した。各部門受賞者は以下の通り。

建築部門：横文彦(日本)

絵画部門：アンゼルム・キーフアー(ドイツ)

彫刻部門：ルイーゼ・ブルジョア(アメリカ)

音楽部門：オスカー・ピーターソン(カナダ)

演劇/映像部門：ビナ・パウシュ(ドイツ)

問い合わせ：(財)日本美術協会

Tel: 03-5251-2245 Fax: 03-5251-2247

(株)ティーコム(担当：真野、鈴木)

Tel: 03-3578-3790 Fax: 03-3578-3799

丸善主催

第1回 土木・建築書特別展示即売会

会期：1999年7月1日(木)～7月31日(土)

会場：丸善 津田沼店

千葉県習志野市谷津7-7-1

問い合わせ：丸善津田沼店

Tel: 047-470-8311 Fax: 047-470-8317

日本の生活デザイン展 20世紀のモダニズムを探る

会期：1999年7月17日(土)～8月8日(日)

時間：10：30～18：30 水曜日休館

会場：パークタワーホール(リビングデザインセンターOZONE 3階)

東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー内

企画：JID・日本インテリアデザイナー協会

入場料：500円(学生以下無料)

問い合わせ：リビングデザインセンターOZONE事業推進部(木村)

Tel: 03-5322-6504 Fax: 03-5322-6501

高齢者世帯のための「楽しみ部屋」 コンクール作品募集

少子高齢化が進む中、子供が独立した高齢者世帯では、かつての子供部屋が低利用、未使用のまま放置される傾向が増加している。このような家に生じた空間的余裕を高齢者の楽しみのための部屋＝「楽しみ部屋」にリフォームし活用する提案、アイデアを募集する。

応募内容：「楽しみ部屋」の規模は6畳程度を想定し、改修工費は200万円以下を目安にし、次のいずれかを提出。(1) アイデアを2000字以内の文章で表現(A4版2枚、スケッチ併記等自由)。(2) 具体的な図面、スケッチ、パース、CG等で表現(A2版1枚、紙質・表現方法自由)。

応募締切：1999年7月31日(土)

問い合わせ：経済企画庁国民生活局 国民生活政策課(担当：萩原)

東京都千代田区霞ヶ関3-1-1

Tel: 03-3581-0385 Fax: 03-3581-0879

TOKYO CONTEMPORARY DESIGN EXHIBITION HAPPENING 作品募集

デザイナーが主体となり自らの作品を発表するための環境として、また現在進行形の刺激的なデザインを感じる場を創る目的で昨年からスタートしたイベントの第2回目。期間中、原宿・青山・渋谷・代官山エリアのショップやカフェ等の店舗内(約20～30カ所)に作品が展示される。

日程：1999年10月8日(金)～10月17日(日)

応募期間：1999年6月1日(火)～7月23日(金)

応募内容：インテリア・家具に関する作品を自由に表現。ただし、単なる作品の陳列、展示ではなく、スペースを生かした「空間表現」であること。

問い合わせ：HAPPENING事務局

東京都渋谷区神宮前6-9-1-B1 TRICO内

Tel: 03-3486-1790

デザインフォーラム 1999 公募展 作品募集

日本デザインコミッティー主催による、今回で12回目を迎える公募展への作品募集。

会期：1999年9月1日(水)～9月6日(月)

会場：松屋銀座8階大催場

募集内容：あらゆるデザイン分野(グラフィック、プロダクト、インテリア、エクステリア、テキスタイル、建築など)の作品。

作品規定：1997年9月(デザインフォーラム'97)以降に製作、または発表された作品。サイズ、重量規定あり。

応募締切：1999年7月23日(金)～7月25日(日)

発表：1999年8月4日(水)までに郵送で通知。

賞：金賞1点、銀賞2点、銅賞3点、佳作5点。

申込・問い合わせ：日本デザインコミッティー事務局(担当：土田、平坂)

東京都中央区銀座3-6-1 松屋北館4階

Tel: 03-3561-2572 Fax: 03-3561-6038

日本デザイン機構主催 シンポジウム

Design for the World——地球をデザインする

環境汚染、資源エネルギー、高齢化、高度情報化、都市化などの細分化した専門分野だけでは取り組むことの困難な今日に地球課題に対し、様々な専門を結びつけ創造的にチャレンジすることを目的に昨年創設された新たな国際組織、Design for the World(本部はバルセロナ)。この組織の役員を招聘し、地球を視野にした分野を越えたデザインプロジェクトの策定、行動計画などについて検討するシンポジウム。

日程：1999年7月5日(月)、7月6日(火)

会場：パレスホテル

参加費：10000円(2日間)

問い合わせ：日本デザイン機構 シンポジウム

「Design for the World '99東京」実行委員会

東京都港区虎ノ門1-2-18 虎ノ門興業ビル7階

Tel: 03-5521-1692 Fax: 03-5521-1693

お詫びと訂正

SD9905号P.112～113で紹介した、(株)ソニープラザで取り扱われているスケルトンタイプの商品は「Beans」ではなく、「Woopee」でした。訂正して、お詫び申し上げます。

mitsubishi
三菱電機

エネルギー効率に優れた
PMギヤレス巻上機を採用。

薄形制御盤を昇降路内に収納。
全階で多様な乗場意匠を実現。

昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制

新登場
ELEPAQ

三菱エレベーター／機械室レスタイプ

御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントラブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく (Efficient)

信頼性に優れ (Reliable)

快適な移動空間の創造 (Comfortable)

エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……三菱電機株式会社 〒107-6150 東京都港区赤坂5-2-20 (赤坂パークビルディング)

本社ビル事業部 TEL.(03)5573-3793

9908

特集

階段

Beyond Function

階段には上下の階を結ぶという機能を超えた何かがある。明快な役割を担っているからこそ、そこには逆に様々な想像力をかき立てる余白がある。何気なく入り込んだ人気のない静まり返った階段、柔らかな日差し差し込む階段、手摺にもたれてぼんやりと物思いにふける踊り場。そこには日常生活のエアポケットのような、そして何か詩的な空気を感じることができる。だからこそ、建築家の誰もがその空気を感じとり、階段とそれをめぐる空間にエネルギーを注ぎ込んできたのではないだろうか。

本特集では、近年の国内の作品をいくつかのキーワードで緩やかに分節しながら、階段をめぐる詩集のような形で紹介する。そこには、機能や形態を超えた様々な空気が満ち溢れている。

紹介作品＝

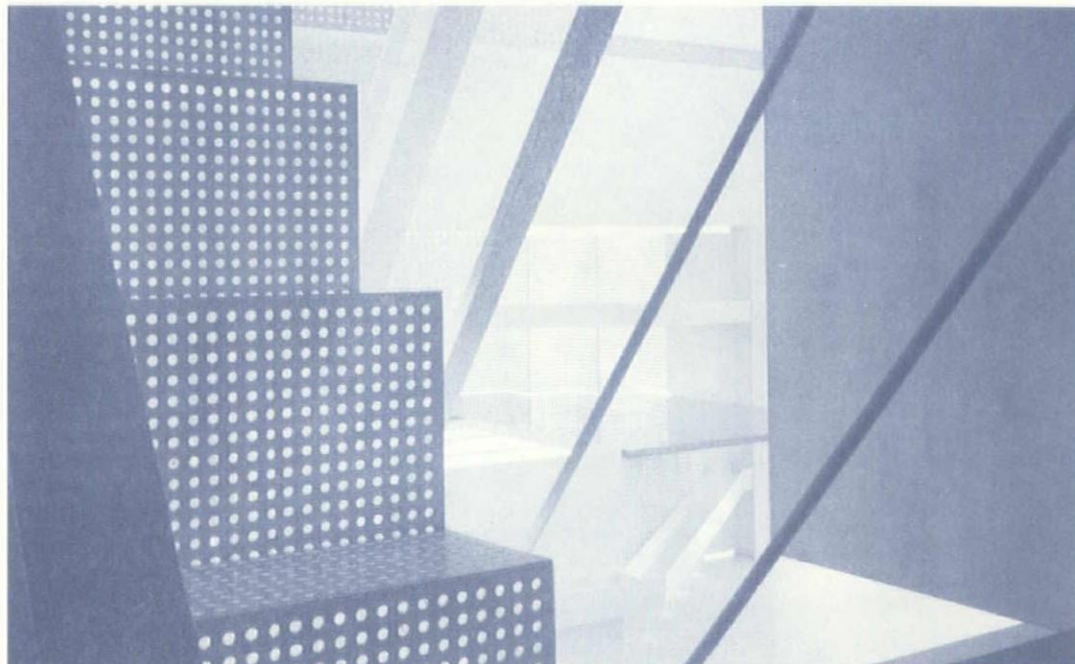
新津市美術館／横山正＋アルセッド建築研究所、岐阜の住宅 ホワイトステージ／宇野亨／(C+A)、東京海上東日本研修センター／KAJIMA DESIGN、木村邸／インテンショナルリーズ、F5／石田敏明、東京自転車健康保険組合会館／竹中工務店、White Echoes／米田明、中野邸／動物愛護病院ココロ／味噌岡伸太郎＋鈴木達雄、水／ガラス／隈研吾、中郷の家／枘田秀彦、梅ヶ丘の住宅／佐藤光彦、他

シネマの中の階段 文＝渡辺武信 階段をめぐるカメラ・アイ 文＋写真＝下村純一

連載：

エントロピーの森——都市のインフラストラクチャ8 写真＝ハイナー・シリング 文＝山形浩生
カルチャー・カフェ——今月の音楽・映画 文＝ピーター・バラカン、鶴沢隆

(White Echoes)
米田 明／アーキテクト



©奥村浩司

9905

特集

挑発するマテリアリティ

素材の進化とデザインの可能性

本特集は、国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」「技術」を分析する。さらに企業、デザイナーの素材への意識などを併せて紹介する。

●文＝金森修、竹原あき子、北村行正、太田浩史、丸橋浩、今井公太郎、三好隆之、曾我部昌史、横溝真、西山浩平

●事例紹介＝「マテリアリー・プロダクト54」

●ドキュメンタリー＝「ポリプロピレンの一生——素材生産の現場から」撮影＝鈴木豊

●企業インタビュー12＝素材のアプリケーション・デザイン——デザイナーが素材を応用するためのABC

●デザイナー5人へのインタビュー：「マテリアリティの冒険」撮影＝鈴木豊

●素材史年表、素材地図1999、他

連載：

海外レポート：ベルリン、ニューヨーク

エントロピーの森——都市のインフラストラクチャー5

写真＝ハイナー・シリング 文＝山形浩生

カルチャー・カフェ——今月の映画・音楽

文＝浜野保樹、服部のり子

特別定価＝2500円／本体2381円

9906

特集

小川晋一

Transbody/Super traffic

本特集では、地方都市・広島を拠点に活動を続ける小川晋一の13年間の仕事を、実作だけでなくプロジェクト案や展覧会への出品作品も紹介する。そこには、スチール、ガラス、コンクリートを主体とした端正で洗練された空間が感じとれる。

●作品＝キュビストの家、ミニマリストの家、イソベスタジオ&レジデンス、キッドミュージアム／玖珂町こどもの館、リストアーステーション、ハツタ山口、グラスハウス、ホワイトキューブ、エアーチェアー、アラベスク、徳山歯科医師会館、ながやレディースクリニック、A町総合センター、ザ・キューブ／グラスゴブプロジェクト、モダンアブストラクトの家、横浜港国際客船ターミナル国際建築設計競技案、スコットランド建築デザインセンター国際公開コンペ案、他。

●文＝鶴沢隆、岡河貢、アラン・ジョンストン、小川晋一

連載：

海外レポート：アルメール

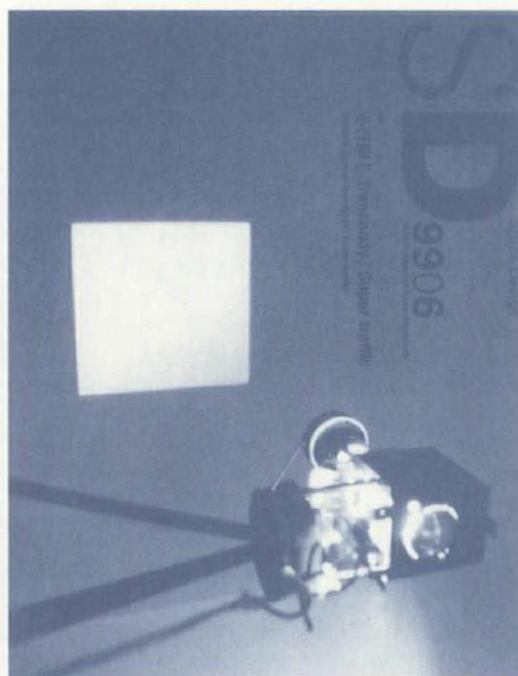
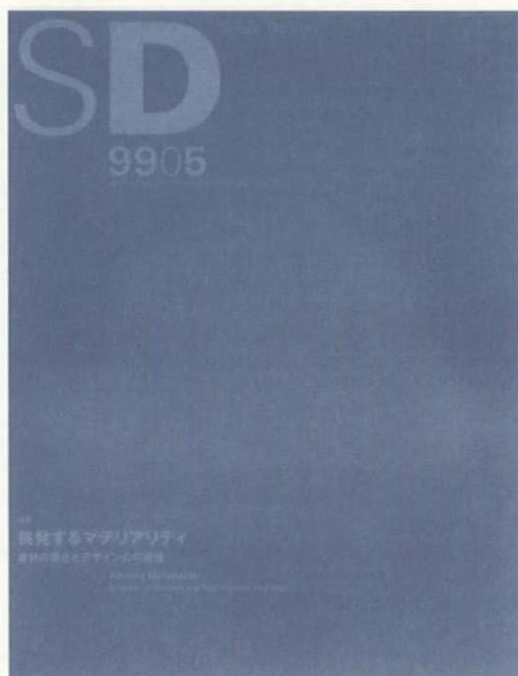
エントロピーの森——都市のインフラストラクチャー6

写真＝ハイナー・シリング 文＝山形浩生

カルチャー・カフェ——今月の映画・舞踊評

文＝鶴沢隆、尼ヶ崎彬

定価＝2000円／本体1905円



新刊案内



建築のイコノグラフィとエレクトロニクス

R. ヴェンチュリー著 安山宣之訳
A5判 296頁 定価(本体4,300円+税)

二冊の建築理論書で知られる著者が、80年代から90年代半ば、建築家として、その理念の検証と実現に向けてなされたあくなきたかひの全貌が綴られた書。真摯な姿勢、率直な筆致が、読者を深い感動に誘う。

[主要目次] 甘口と辛口ーあまり穏やかでない宣言/他 育んでくれたものーヴィンセント・スカリーと著作『シングル・スタイル』へのオマージュ、その回想と成果/アアルトから学ぶこと/他 ーから学ぶーナイーブな二人と日本/他 自作についてー25年後のギルドハウス/現代的設計活動への私的な方法と姿勢/他 振り返ってーウィンドウズ/ビジョン:そんなもの糞食らえだ/他



ル・コルビュジエと日本

高階秀爾・鈴木博之・三宅理一・太田泰人編
A5判 256頁 定価(本体2,800円+税)

本書は戦前から戦後にかけて日本の近代、現代の建築に大きな影響を与えたル・コルビュジエと日本の関係を様々な角度から述べたもの。20世紀の建築史に新たな視点を与えるものとなろう。

[主要目次] 序章ール・コルビュジエ・シンドローム 第1部 デザインと美術ール・コルビュジエのモダニズムとフランスにおける装飾芸術を巡る言説/他 第2部 近代建築史の文脈の中でール・コルビュジエと日本の建築家たち/他 第3部 日本の戦後建築とル・コルビュジエーキュービストがつくった芸術容器:国立西洋美術館におけるル・コルビュジエと日本の弟子たち/他



巨匠 フランク・ロイド・ライト

D. ラーキン、B. ファイファー編 大木順子訳
B5変形 240頁 定価(本体3,200円+税)

コルビュジエ、ミースとならぶ近代建築の巨匠であり、アメリカン・スピリッツの象徴である建築家フランク・ロイド・ライトの全貌を美しいカラー写真と平易な解説で紹介。没後40年を経た今日でも新鮮な感動を呼び起こす。

[主要目次] ホーム&スタジオ/ウィリアム・H. ウィンズロー邸/スーザン・ローレンス・ダナ邸/アーサー・M. ハートレイ邸/ワード・W. ウィリッツ邸/エドワード・E. ポイントン邸/フレデリック・C. ロビー邸/F.C. ボック邸/アーリン・バーンズドル邸/ジョン・ストラー邸/エドガー・J. カウフマン邸/ハーバート・ジェイコブス邸/ハーバート・F. ジョンソン邸/他



エコテック | 21世紀の建築

C. スレッサー著 難波和彦監訳
B4変形 192頁 定価(本体7,300円+税)

ハイテクを駆使した建築デザインの、ヨーロッパを中心とした最新事例のドキュメント。単なるファッションではなく、サステナブルでエコロジカルな環境を追求する、21世紀を志向する新しい建築をヴィジュアルに紹介。

[主要目次] 構造表現ーウェスタン・モーニング・ニュース本社/他 光の造形ーケンブリッジ大学法学部/他 エネルギー問題ーリヨン国際都市/他 都市への応答ーチャンネル4本社ビル 新交通施設ー関西国際空港/他 市民の象徴ーマルセーユ地方行政センター

21世紀の地域劇場

パブリックシアターの理念・空間・組織・運営への提案

清水裕之著
A5判 248頁 定価(本体3,700円+税)

本書は21世紀に求められる新たな地域と劇場との関係をパブリックシアターと位置づけ、そのあり方を探る。市民の手で創造する新たな舞台芸術への提案を地域、劇場との関係をふまえて述べるもの。劇場関係者必読の書。

[主要目次] 1. 劇場と空間 2. 劇場空間と劇場技術 3. 我が国の劇場・ホール近代化と地域の舞台芸術を支える社会システム 4. 公立文化施設の機能と計画プロセスの変化 5. パブリックシアターと地域の舞台芸術環境の計画と設計

マリオ・ボッタ | 構想と構築

M. ボッタ著 古谷誠章訳
B5変形 168頁 定価(本体2,700円+税)

自らの論理を語ることの少ない建築家ボッタがここでは単体の建築、都市的なプロジェクト、そして家具・照明器具などのデザインについて平明な語り口で述べており、魅力あふれるドローイングとともに彼の全貌を伝えている。

[主要目次] 序文ー千年の建築を目指して/ベネデット・グラヴァニョーロ 建設を巡る思考 都市建築のプロジェクトを通して オブジェそのふさわしい形 会場との対話

ルドルフ・シンドラー
カリフォルニアのモダンリビングD. ケバード著 末包伸吾訳
B5変形 184頁 定価(本体3,700円+税)

ウィーンでワグナー、ロースに、渡米してライトに師事した建築家シンドラーは、1900年代前半のカリフォルニアのモダンリビングを確立した。21世紀をむかえようとしている今アメリカでも再評価の気運が高まっている。

[主要目次] 1. 新旧の世界 2. アメリカでの終業 3. ライトへの師事 4. 機会:1920年代のカリフォルニア 5. 理論の実践 6. スタイルの創造 7. シンドラーの「デ・ステイル」 8. 恐怖 9. リビング・スペース 10. モダン対モデルヌ 11. ビジネス・コミッション 12. 木の使用 13. 最終期のシンドラー

安らぎと緑の公園づくり

ヒーリング・ランドスケープとホスピタリティ

三宅祥介・浅野房世共著
A5判 228頁 定価(本体3,200円+税)

生活に身近な緑空間が「いやし」の場となる意味合い、さらに公的介護者や高齢者にとって歩いて行ける公園とは何か。初めてのヒーリング・ランドスケープを、究極の癒し、具体例、ガイドライン、ホスピタリティで解説。

[主要目次] 1. 安らぎと緑とオープンスペース 2. 緑からヒーリングを得る 3. 究極の癒し、死への癒し 4. 緑とオープンスペースからの癒し 5. ヒーリング・ランドスケープの要素 6. 具体的事例 7. ヒーリング・ランドスケープ設計のためのガイドライン 8. ホスピタリティ/他

SD選書出版案内

〈各巻四六判・函入〉

建築思潮(建築家の建築論)

ユルバニスム

ル・コルビュジェ著 樋口 清訳 本体1,800円

私と日本建築

A.レーモンド著 三沢 浩訳 本体2,000円

建築をめざして

ル・コルビュジェ著 吉阪隆正訳 本体1,800円

輝く都市

ル・コルビュジェ著 坂倉準三訳 本体1,800円

住宅論

篠原一男著 本体1,800円

続住宅論

篠原一男著 本体1,800円

建築とは何か

B.タウト著 篠田英雄訳 本体1,800円

続建築とは何か

B.タウト著 篠田英雄訳 本体980円

モデュロールI

ル・コルビュジェ著 吉阪隆正訳 本体1,800円

モデュロールII

ル・コルビュジェ著 吉阪隆正訳 本体1,800円

人間の家

ル・コルビュジェ他著 西沢信弥訳 本体1,800円

街路の意味

竹山 実著 本体1,500円

オレゴン大学の実験

C.アレグザンダー著 宮本雅明訳 本体1,800円

三つの人間機構

ル・コルビュジェ著 山口知之訳 本体980円

四つの交通路

ル・コルビュジェ著 井田安弘訳 本体980円

ラスベガスー忘れられたシンボリズム

R.ヴェンチュリ他 石井和紘・伊藤公文訳 本体1,800円

東方への旅

ル・コルビュジェ著 石井 勉他訳 本体980円

住宅と宮殿

ル・コルビュジェ著 井田安弘訳 本体1,200円

エスプリ・ヌーヴォー (近代建築名鑑)

ル・コルビュジェ著 山口知之訳 本体1,200円

建築について(上)

F.L.ライト著 谷川睦子・谷川正己訳 本体1,800円

建築について(下)

F.L.ライト著 谷川睦子・谷川正己訳 本体1,200円

建築家の発想ー私の師匠たち

石井和紘著 本体1,800円

建築の多様性と対立性

R.ヴェンチュリ著 伊藤公文訳 本体1,800円

プレシジョン(上)

ル・コルビュジェ著 井田安弘・芝優子訳 本体1,500円

プレシジョン(下)

ル・コルビュジェ著 井田安弘・芝優子訳 本体1,500円

アルド・ロッシ自伝

A.ロッシ著 三宅理一訳 本体1,800円

ミース・ファン・デル・ローエ

D.スペース著 平野哲行訳 本体1,800円

表現主義の建築(上)

W.ベートン著 長谷川章訳 本体1,500円

表現主義の建築(下)

W.ベートン著 長谷川章訳 本体1,500円

カルロ・スカルパ

A.F.マルチアノ著 浜口オサミ訳 本体1,800円

住宅

コミュニティとプライバシー

S.シャマイエフ他著 岡田新一訳 本体1,800円

現代のコートハウス

D.マッキントッシュ著 北原理雄訳 本体980円

建築VS.ハウジング

M.ボウリー著 山下和正訳 本体980円

「いえ」と「まち」ー住居集合の論理

鈴木成文他著 本体1,800円

建築環境論

岩村和夫著 本体1,800円

都市・住宅論

東 孝光 本体1,800円

評論(現代建築)

近代建築

V.スカーリー著 長尾重武訳 本体1,500円

アメリカの建築とアーバニズム(上)

V.スカーリー著 香山寿夫訳 本体980円

アメリカの建築とアーバニズム(下)

V.スカーリー著 香山寿夫訳 本体980円

建築の現在

長谷川堯著 本体980円

アメリカ住宅論

V.スカーリーJr.著 長尾重武訳 本体980円

インターナショナル・スタイル

H.R.ヒチコック他著 武沢秀一訳 本体1,800円

ル・コルビュジェ

C.ジェンクス著 佐々木宏訳 本体1,800円

近代建築の失敗

P.ブレイク著 星野郁美訳 本体1,800円

イタリアの現代建築

V.グレゴッティ著 松井宏方訳 本体1,200円

建築論

実存・空間・建築

C.ノルベルグ=シュルツ著 加藤邦男訳 本体1,800円

空間としての建築(上)

B.ゼーヴィー著 栗田 勇訳 本体1,800円

空間としての建築(下)

B.ゼーヴィー著 栗田 勇訳 本体1,800円

建築空間 [尺度について]

P.ブドン著 中村貴志訳 本体980円

思想としての建築

栗田 勇著 本体980円

モラリティと建築

D.ワトキン著 榎本弘之訳 本体1,200円

古典建築の失われた意味

G.ハーシー著 白井秀和訳 本体1,800円

芸術としての建築

S.アバークロンビー著 白井秀和訳 本体1,800円

SD選書出版案内

〈各巻四六判・函入〉

デザイン

現代デザイン入門

勝見 勝著 本体1,800円

日本デザイン論

伊藤ていじ著 本体1,800円

道具考

栄久庵憲司著 本体1,500円

環境とデザイン

G.エックボ著 久保 貞訳 本体2,000円

日本美の意匠

水尾比呂志著 本体1,500円

建築鑑賞入門

W.W.コーディル他著 六鹿正治訳 本体1,800円

バウハウス —その建築造形理念

杉本俊多著 本体1,800円

水空間の演出

鈴木信宏著 本体1,800円

木のこころ —木匠回想記

G.ナカシマ著 神代雄一郎他訳 本体1,800円

水のデザイン

D.ベーミングハウス著 鈴木信宏訳 本体1,800円

環境照明のデザイン

石井幹子著 本体1,800円

屋外彫刻

M.A.ロビネット著 千葉成夫訳 本体1,800円

トーネット曲木家具

K.マック著 宿輪吉之典訳 本体1,500円

インテリアデザインとは何か

三輪正弘著 本体1,800円

椅子のデザイン小史 —様式からポストモダンへ

大廣保行著 本体1,800円

都市の道具

栄久庵祥二著 本体1,500円

日本の伝統工具

土田一郎著 本体1,800円

行動・文化とデザイン

清水忠男著 本体1,800円

環境デザインの思想

三輪正弘著 本体1,800円

ディスプレイデザイン

魚成祥一郎監修 本体1,800円

フラクタル造形

三井秀樹著 本体1,800円

建築家論

フランク・ロイド・ライト

谷川正己著 本体1,800円

アルヴァ・アアルト

武藤 章著 本体1,800円

ライトと日本

谷川正己著 本体1,800円

タリアセンへの道

谷川正己著 本体980円

アドルフ・ロース

伊藤哲夫著 本体1,200円

ブルネッレスキ —ルネサンス建築の開花

G.C.アルガン著 浅井朋子訳 本体1,500円

ジュゼッペ・テッラーニ

B.ゼーヴィ編 鶴沢 隆訳 本体1,500円

オットー・ワーグナー —ウィーン世紀末から近代へ

H.ゲルツェグー他 伊藤哲夫他訳 本体1,800円

ルイス・マンフォード

木原武一著 本体1,500円

オーギュスト・ペレ

吉田鋼市著 本体1,500円

アントニオ・ガウディ

鳥居徳敏著 本体1,800円

ボッロミーニ

G.C.アルガン著 長谷川正允訳 本体1,800円

ヴィオレ・ル・デュク

羽生修二著 本体1,800円

トニー・ガルニエ

吉田鋼市著 本体1,800円

パラディオへの招待

長尾重武著 本体1,800円

ウィリアム・モリス —近代デザインの原点

藤田治彦著 本体1,800円

エーロ・サーリネン

穂積信夫著 本体1,800円

美術・文化論

きもの文化史

河鱈実英著 本体1,800円

現代絵画の解剖

木村重信著 本体2,000円

芸術空間の系譜

高階秀爾著 本体1,800円

日本美の特質

吉村貞司著 本体1,800円

イタリアの美術

A.プラント著 中森義宗訳 本体2,000円

幻想の建築

坂崎乙郎著 本体1,500円

キュビズムへの道

D.H.カーンワイラー著 千足伸行訳 本体1,800円

空間の生命 —人間と建築

坂崎乙郎著 本体1,500円

部族社会の芸術家

M.W.スミス編 木村重信他訳 本体780円

光の死

H.ゼーデルマイヤ著 森 洋子訳 本体980円

西欧の芸術1ロマネスク 上

H.フォシヨン著 神沢栄三他訳 本体1,800円

西欧の芸術1ロマネスク 下

H.フォシヨン著 神沢栄三他訳 本体1,800円

西欧の芸術2ゴシック 上

H.フォシヨン著 神沢栄三他訳 本体1,800円

西欧の芸術2ゴシック 下

H.フォシヨン著 神沢栄三他訳 本体1,800円

鏡〔虚構の空間〕

由水常雄著 本体980円

さあ横になって食べよう —忘れられた生活様式

B.ルドフスキー著 多田道太郎監修・奥野卓司訳 本体1,800円

SD選書出版案内

〈各巻四六判・函入〉

日本建築史

江戸と江戸城

内藤 昌著 本体1,800円

新桂離宮論

内藤 昌著 本体2,000円

日本建築の空間

井上充夫著 本体1,800円

茶匠と建築

中村昌生著 本体1,800円

日本の近代建築(上) —その成立過程

稲垣栄三著 本体1,800円

日本の近代建築(下) —その成立過程

稲垣栄三著 本体1,500円

日本の空間構造

吉村貞司著 本体1,800円

間(ま) —日本建築の意匠

稲神代雄一郎著 本体2,400円

世界建築史

都市形成の歴史

A. コーン著 星野芳久訳 本体1,800円

天上の館

J. サマーソン著 鈴木博之訳 本体2,000円

北欧の建築

S.E. ラスマッセン著 吉田鉄郎訳 本体980円

ペルシア建築

A.U. ポープ著 石井 昭訳 本体1,500円

広場の造形

C. ジッテ著 大石敏雄訳 本体1,800円

西洋建築様式史(上)

F. バウムガルト著 杉本俊多訳 本体1,800円

西洋建築様式史(下)

F. バウムガルト著 杉本俊多訳 本体1,800円

劇場の構図

清水裕之著 本体1,800円

ヴェネツィア —都市のコンテクストを読む

陣内秀信著 本体1,800円

スペイン建築の特質

F. チュエッカ著 鳥居徳敏訳 本体1,500円

アメリカ建築の巨匠たち

P. ブレイク他著 小林克弘他訳 本体1,800円

環境・アメニティ・都市

明日の田園都市

E. ハワード著 長 素速訳 本体1,800円

プライド・オブ・プレイス

C. トラスト著 井出久登・正子訳 本体980円

アメリカ大都市の死と生

J. ジェコプス著 黒川紀章訳 本体1,800円

遊び場の計画

R. グットナー著 神谷五男・松代真理訳 本体1,800円

都市は「ふるさと」か

F. レンツロー・マイス著 武 基雄・伊藤哲夫訳 本体980円

人間のための都市

P. ベーターズ著 河合正一著 本体980円

都市憲章

磯村英一著 本体980円

イタリア都市再生の論理

陣内秀信著 本体1,800円

住環境の都市形態

P. バヌレ他著 佐藤方俊訳 本体1,800円

ふれあい空間のデザイン

清水忠男著 本体1,800円

心理学

空間と情緒

箱崎純一著 本体1,500円

デザインの認識

R. ソマー著 加藤常雄訳 本体980円

庭・ランドスケープ

日本の庭園

田中正大著 本体1,800円

ヨーロッパの造園

岡崎文彬著 本体1,800円

日本の公園

田中正大著 本体1,800円

都市の景観

G. カレン著 北原理雄訳 本体1,800円

街の景観

G. バーク著 長 素速・もも子訳 本体1,200円

「作庭記」からみた造園

飛田範夫著 本体1,800円

都市デザインの系譜

相田武文・土屋和男著 本体1,800円

サウンドスケープ —その思想と実践

鳥越けい子著 本体1,800円

風景のコスモロジー

吉村元男著 本体1,800円

庭園から都市へ —シーケンスの日本

材野博司著 本体1,800円

フィールドワーク

住居空間の人類学

石毛直道著 本体1,500円

京の町家

島村 昇他編 本体1,800円

住まいの原型I

泉 靖一編 本体1,500円

住まいの原型II

吉阪隆正他著 本体2,000円

キモノ・マインド

B. ルドフスキー著 新庄哲夫訳 本体2,000円

かいわい (日本の都市空間)

村野博司著 本体1,800円

建築家なしの建築

B. ルドフスキー著 渡辺武信訳 本体1,800円

情報

現代建築事典

W. ベートン編 浜口隆一他訳 本体1,900円

イギリス建築の新傾向

R. ランダウ著 鈴木博之著 本体980円



9803 Czech Cubist / Rondocubist Architecture:

A Reappreciation of the Revolution

Featuring extant Cubist and Rondocubist architecture in Prague; original photos. **Hisao Kohyama: Drawings and space:** introduces Hisao Kohyama's architectural space and handling of detail through the architect's own drawings. ¥2,000



9804 Versatile Architects of the New Generation:

Introduces the works and creative activities of young architects in their thirties to portray a sense of the times: INTENTIONALLIES, MIKAN, etc. **Desktop Community** ¥2,000



9805 The Cutting Edge in Space Design:

Introduces specific examples of collaboration between architects and designer artists: Kazuko Fujie, Kinpei Nakamura, Susumu Shingu, etc. **House for Frida Kahlo and Diego Rivera: Juan O'Gorman's Architecture and Mexican Modern** ¥2,000



9806 Landscape Creation Today:

The Challenges for Landscape Architects Introduces landscaping set apart from the natural environment and purposefully designed to serve society. Architects introduced are Yoji Sasaki, PLACEMEDIA, Hiroki Hasegawa, Toru Mitani, Makoto Noborisaka, N. Finley+M. chiba, Ken Smith, Kyathryn Gustafson, Douglas Reed, etc. ¥3,000



9807 Coelacanth Architects:

Traces their activities over twelve years, mainly through introduction of their works. Kibikougen Elementary School, Suijo Fire Station of Osaka City, Sotogaoka Exchange Forum, etc. Text: Hiroshi Hara, Yoshitake Doi. Interview: Riken Yamamoto ¥2,600



9808 Design Vocabularies of Light:

LPA Works 1990-1998

Introducing a selected list of 40 concepts from LPA's design vocabulary, this book is a bible of illumination lore for the overall study of space created by light. Text: Arata Isozaki, Kaoru Mende ¥2,500



9809 The Landscape of Detail:

Its Art and Techniques

Introduces the details of architectural works with photos and drawings. Hiroshi Miyazaki, Akira Watanabe, Takenaka Corporation, Yoshio Taniguchi, Kajima Design, Shinichi Ogawa, Waro kishi, Fumihiko Maki, Yoshihiko Iida. ¥2,300



9810 Office Environments for the Near Future:

Introduces recent developments in office environment design through specific examples. Works: Dentsu Interactive Solution Center, etc. Text: Ryusuke Naka, etc. **Machiya Restored: The Future of Central Kyoto and The Development of Machiya Restoration** ¥2,000



9811 135 Outstanding Works of Modern Design:

Introduces 135 coffee and tea services, glassware, and other utensils made of white ceramic or clear glass. Kasimir Malevich, Gertrud Vasegaard, Trude Pttri, Wilhelm Wagenfeld, Josef Hoffman, Peter Schlumbohm, etc. Text: Sori Yanagi, Angelo Mangiarotti, Shukuro Habara, etc. ¥3,000



9812 SD Review 1998

The 17th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. **Four Small Features: Charlotte Perriand, Designer's Catalogue of "Happening", Aalto's Space Composition, Shuhei Endo's Recent Works in Metal Sheet Structure** ¥2,000



9901 Sustainable and Ecological Design Today

Specific Projects that have achieved symbiosis with the environment provide a bird-eye view of recent trends and display the vision of the upcoming generation of architects. Emscher Park, Tokyo Gas "Earth Port", Setagaya-ku Fukazawa Symbiotic Housing, etc. ¥2,700



9902 The Dutch Model:

Architecture, Urban Design and Landscape

Explorations of Dutch cities and social systems in terms of five key words. OMA, MVRDV, West8, Koen van Velsen, mecanoo, Kees Christaense, Wiel Arets, Benthem Crouwel, etc. ¥2,000



9903 Spaces of Wood:

The Elements of Comfortable Architecture

Introduces uses of wood construction materials that suggest next-generation standards. Cho Umihiko, Intentionallies, Tatsuo Kawanishi, Kiyoshi Kasai, MIKAN, H. DESIGN ASSOCIATES, etc. ¥2,000



9904 Josep Maria Jujol i Gibert's Vision:

Introduces the legacy of Jujol's work through photographs and original drawings. **Donald Judd: Consistency of Space and Cognition** ¥2,000



9905 Alluring Materiality:

Evolution of Materials and Their Potential for Design

Takes up some examples of material and technical design from Japan and overseas and analyzes the applied methods and techniques hidden in the design. Also includes "A Chronology of Materials" and "The Map of Materials 1999." ¥2,500



9906 Sinichi Ogawa: Transbody / Super traffic:

Introduces 13 years of Sinichi Ogawa's achievements through Cubist House and Minimalist House and other completed works, plans, and works submitted to exhibitions. Text: Takashi Uzawa, Mitsugu Okagawa, Sinichi Ogawa, and others. ¥2,000

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2551

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107-8345, Japan
tel: 81-3-5561-2551

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to **Space Design**, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building, Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

N 日章工業株式会社

代表取締役社長 福田 三 丈

●本 社 〒101-0047 東京都千代田区内神田 3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000
●大 阪 支 店 ●横 浜 支 店 ●仙 台 支 店 ●広 島 出 張 所 ●福 岡 出 張 所

日立製作所電機特約店
日立化成工業特約店
日立機材特約店
日立建機特約店

旭化成建材代理店
新明和工業特約店
大和ハウス工業特約店
大昭和製紙特約店

施 設 商 品

エレベータ・エスカレータ
ホームエレベータ
機械駐車設備
ゴミ処理設備
バスユニット・流し台
洗面化粧台
集中浄化槽・パネルタンク

空調衛生電気設備工事
受変電・自家発電設備
空調機・ポンプ・送風機
監視防犯システム
節水バルブ・節水トイレ

建 材 商 品

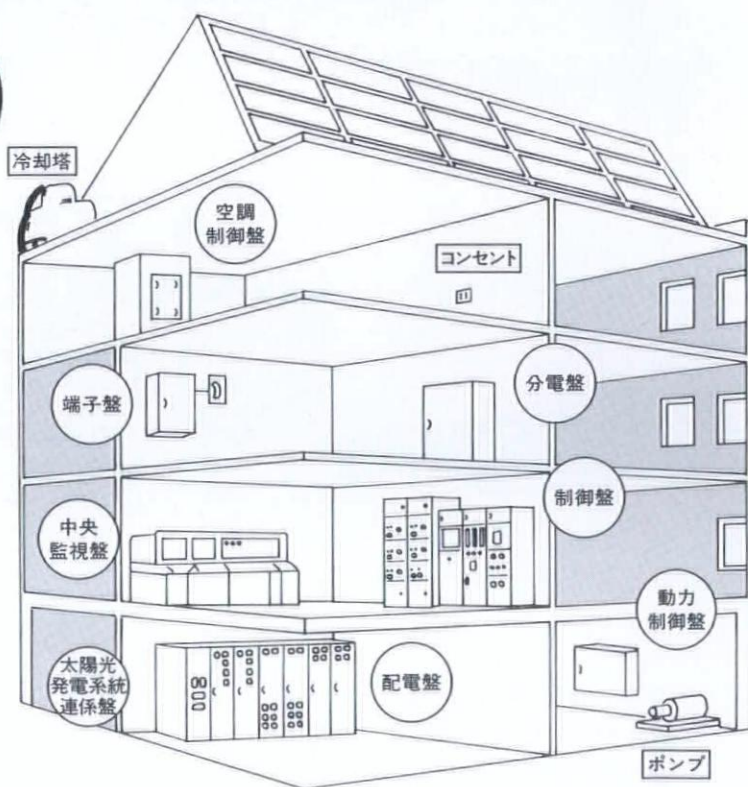
PHCパイプ・シテイガイ
イーゼット・現場造成杭
地盤改良
ヘーベル・グランデ
押出成形版・金属パネル
屋根・硝子工事
フリーアクセスフロア・OAフロア

クリーンルーム床工事
ハイベース・ハイスプリット
ユーボード・軽量鉄骨
プレハブ規格建築
大昭和ユニボード
九木ライトフォーム・シールド
クローラクレーン・耐火被覆

見えない電気を交通整理 それは 盤

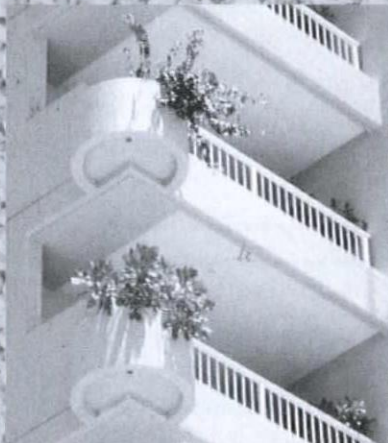
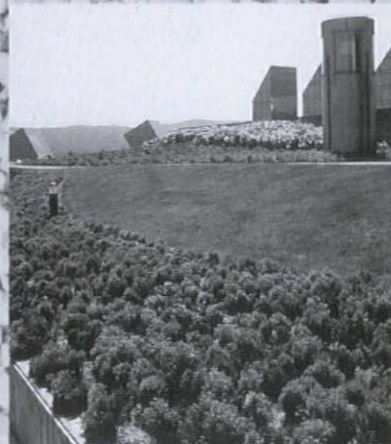
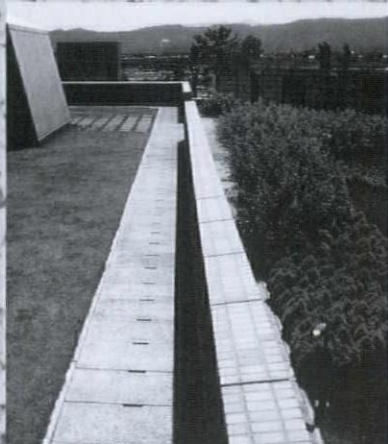
川崎電気株式会社

●本 社 / 山形県南陽市小岩沢225
●東京本社 / 東京都港区芝浦3-7-4





スタンダードへ。



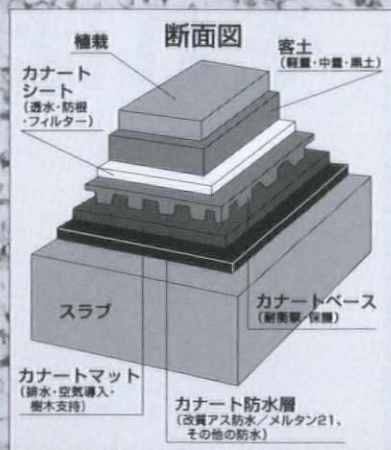
緑化を中心に、
潤いある都市空間づくりを。

快適な都市空間に、
自然の持つ潤いをプラスすることで、
私たちの空間はさらに豊かになります。
だから、緑化防水工法「カナート」。
インテリジェントと緑化を
高次元で融合させ、新しいスタイルの
空間演出を可能にしています。
そして、働く、暮らす全ての人々に、
生き生きとしたコミュニケーションを
提供していきます。
高度な建築技術でさらに広がる空間に、
緑を。未来の快適な都市空間づくりの
指針を「カナート」は示していきます。

カナート

緑化防水工法

- 信頼性を高めた防根・排水性。
- 快適性を向上した断熱・遮音効果。
- 従来の保護コンクリート施工は不要。
- あらゆる施工現場に対応する優れた防水力。
- 計画に合わせて選べる3種類の客土設定。
- 荷重の低減、工期の短縮、低予算等、
優れたコストパフォーマンスを実現。



日新工業株式会社



営業本部 TEL 103-0005 / 東京都中央区日本橋区松町9-2 TEL 03 (5644) 7211 (大代) <http://www.nisshinkogyo.co.jp>

横浜 TEL 045 (316) 7885 (代表)
千葉 TEL 043 (227) 9971 (代表)
春日部 TEL 048 (761) 1201 (代表)

大阪 TEL 06 (6533) 3191 (代表)
名古屋 TEL 052 (933) 4761 (代表)
福岡 TEL 092 (451) 1095 (代表)

札幌 TEL 011 (281) 6328 (代表)
仙台 TEL 022 (263) 0315 (代表)
広島 TEL 082 (294) 6006 (代表)

高松 TEL 087 (834) 0336 (代表)
金沢 TEL 076 (222) 3321 (代表)
本社 TEL 03 (3882) 2424 (大代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (6362) 6515

FAX06 (6362) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル 06 (6231) 4548

FAX06 (6227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (6379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

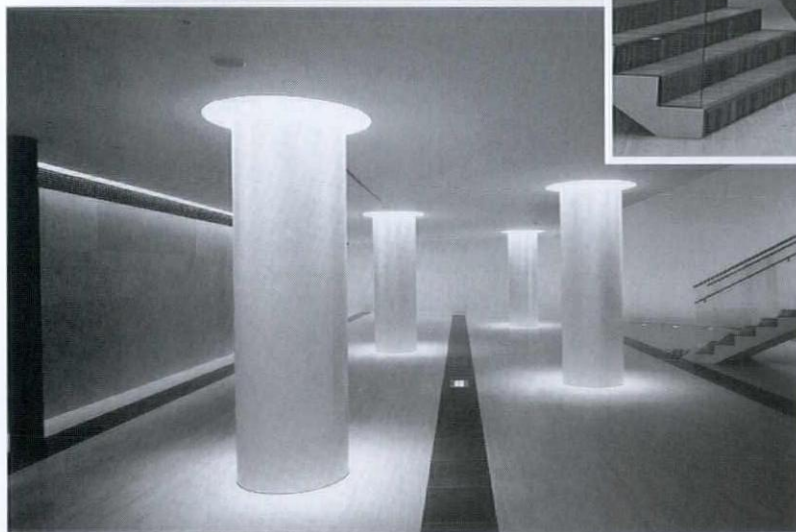
名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

エ	エヌテック(株)	144
カ	株関電工	A3
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
	川崎電気(株)	A13
コ	株弘電社	A9
サ	三機工業(株)	152
	三建設備工業(株)	A11
ス	住友ベークライト(株)	142
タ	立川ブラインド工業(株)	145
	高砂熱学工業(株)	表3
	大興物産(株)	A8
	タイダン(株)	A11
ト	東光電気工事(株)	A12
ニ	株西原衛生工業所	A10
	日章工業(株)	A13
	日新工業(株)	A14
ヒ	株日立製作所	表4
	日立電線(株)	154
フ	不二サッシ(株)	A1
ホ	ホテルイースト21東京	A7
	北海道パーケット工業(株)	145
マ	松下電器産業(株)	A2
ミ	三菱電機(株)	156
ヤ	矢崎総業(株)	表2
	山田照明(株)	A16
ヨ	株横河ブリッジ	143

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



グランシップ 静岡県コンベンションアーツセンター (静岡)
設計監理：磯崎 新アトリエ / 設備設計：森村設計



山田照明株式会社

本社/ショールーム 〒101-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11 TEL.03-3253-5161
横浜支社/ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34 TEL.022-267-1630 大坂支社 〒577-0006 東大阪市橋根 2-2-6 TEL.06-6745-6811 福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61 TEL.092-414-8531
札幌営業所 〒003-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL.011-811-2215 北関東営業所 〒370-0851 高崎市上中園町 51-1 TEL.0273-26-4111 名古屋営業所 〒461-0005 名古屋市東区東桜 1-10-9 TEL.052-963-8411
広島営業所 〒730-0805 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119 鹿児島営業所 〒990-0055 鹿児島市上荒田町 23-10 TEL.099-258-0031 宇都宮事務所 〒321-0571 宇都宮市海道町 B18-2 TEL.0286-60-1381